

平安京左京二条四坊十町

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊

2001年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

京都地方・簡易裁判所は市内中京区丸太町通柳馬場東入四町目に所在していますが、この敷地はかつての平安京の左京二条四坊十町の地に相当しています。この敷地内に所在する庁舎がこのたび改築されることになり、敷地内の埋蔵文化財の遺存状況を確認するための調査が実施されることになり、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託されました。平成9年(1997)10月に試掘調査に着手し平安時代から江戸時代までの遺構面がかなりの密度で積み重なっていることが明らかとなり、本調査においては、敷地の南西部と北部に2箇所の調査区を設定して、平成9年10月に第1調査区の調査に着手してより、平成11年(1999)1月に終了するまで、1年と4箇月を要しました。この調査の全容についての報告書を『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊』としてここに刊行いたします。

この地は早くに平安京造営以前に遡る遺物が出土しており、その後、平安京の造営初期から人が住んでいたことが出土土器から推測されます。平安時代後期には春日殿や大炊御門殿の邸宅が造られ住み継がれたことが記録から知られますが、遺構として多くの建物柱穴や祭祀遺構を検出し、遺物では土器類の出土量が増加し、瓦を使用した建物がこの頃から造立されるようになり、鉄や銅の建築金具の出土も増えています。中世には柵・塀、溝で区画され、西の万里小路に沿って町屋が形成されていた様子をうかがい知ることができ、土器類の種類も増加しています。応仁の乱後から戦国期末までこの地の遺構や遺物の量の減少傾向がみられます。次の近世には秀吉の京都改造が実施され町割りの変化がこの地にもみられ、大名の京都屋敷を囲んで、四周の通りに面して町屋が軒を連ねていたことが『洛中絵図』から知られ、調査で検出した柵・塀の仕切や倉、井戸、土壇などの遺構や多量の出土遺物からも裏付けられ、幕末にいたるまでの複雑な経過を明らかにしています。

この調査の実施ならびに本書の刊行については最高裁判所事務総局や京都地方裁判所関係者の方々の多大なご理解とご協力をいただきました。また、京都市埋蔵文化財調査センターをはじめ関係各方面の方々からもご指導ならびにご助言をいただきました。あわせてここに厚くお礼申し上げます。おわりに本書が平安京跡の埋蔵文化財の調査・研究ならびに普及の進展に寄与することを心から願う次第であります。

平成13年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成9年(1997)～平成11年(1999)にかけて実施した、京都地方・簡易裁判所庁舎改築工事に伴う発掘調査の報告書である。
- 2 本書で使用した地図は、京都市発行の都市計画基本図(1:2,500)「御所」・「三条大橋」を調整して使用した。
- 3 図中の方位・座標値は平面直角座標系VIによる。ただし単位(m)を省略した。標高はT.P.(東京湾平均海面高度)による。座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した。
- 4 遺構番号は、調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付した。
- 5 遺物番号は土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・骨角製品・動植物遺体の順に通し番号を付した。番号は本文・遺物観察表・図版・挿図に共通である。

目 次

第1章 調査の経緯

1 調査にいたる経緯	1
2 調査経過	1
(1) 試掘調査	1
(2) 発掘調査	2
3 整理・報告書作成の経緯	4

第2章 遺 跡

1 遺跡の位置と環境	7
2 周辺の調査	8

第3章 遺 構

1 層序と遺構の概要	11
(1) 層序	11
(2) 遺構の概要	12
2 1区の遺構	12
(1) 第1面の検出遺構	14
(2) 第2面の検出遺構	15
(3) 第3面の検出遺構	17
(4) 第4面の検出遺構	18
3 2区の遺構	19
(1) 第1面の検出遺構	19
(2) 第2面の検出遺構	22
(3) 第3面の検出遺構	23
(4) 第4面の検出遺構	27

第4章 遺物

1 遺物の概要	29
2 土器類	29
(1) 古墳時代～飛鳥時代	29
(2) 平安時代	30
(3) 鎌倉時代～室町時代	33
(4) 江戸時代	36
(5) その他の出土土器	39
3 瓦類	40
4 土製品	41
5 石製品	42
6 金属製品	44
(1) 銀製品	44
(2) 銅製品	44
(3) 鉄製品	46
7 骨角製品	47
8 木製品	48
9 動植物遺体	48
10 その他の出土遺物	49

第5章 まとめ

1 遺構の変遷	51
2 出土土器の検討	71
(1) 土器の器種構成の消長	71
(2) 土師器皿に関する若干の検討	75
3 宅地内埋納遺構について	76
(1) 井戸に関連した埋納遺構	77
(2) 宅地内の埋納遺構	79

図版目次

原色図版 1 遺物	1 2区土壙 1730 出土土器
	2 1区井戸 1421 出土土器
原色図版 2 遺物	1 2区土壙 1553 出土土器
	2 2区土壙 1849・2区土壙 1039 出土土器
原色図版 3 遺物	1 1区土壙 550 出土土器
	2 2区土壙 1442 出土土器
原色図版 4 遺物	1 2区土壙 1870 出土土器
	2 2区土壙 1176 出土土器
原色図版 5 遺物	1 2区土壙 1782 出土土器
	2 1区土壙 353 出土土器
原色図版 6 遺物	1 1区土壙 768 出土土器
	2 2区土壙 776 出土土器
原色図版 7 遺物	1 2区土壙 813 出土土器
	2 1区土壙 190 出土土器
原色図版 8 遺物	1 銅鏡(2区井戸 2098 出土)
	2 銅製飾金具(1区土壙 531・1区土壙 1211 出土)
図版 1 遺跡	1 調査地遠望(南東から)
	2 調査地遠望(北から)
図版 2 遺構	1 2区北壁断面(南から)
	2 1区西壁断面(北東から)
図版 3 遺構	1 1区第1面全景(北から)
	2 1区石垣 310(北西から)
図版 4 遺構	1 1区石室 216・石室 217(南西から)
	2 1区竈 301(東から)
	3 1区石室 419(東から)
図版 5 遺構	1 1区第2面全景(北から)
	2 1区柵 1769(西から)
	3 1区石室 630(南東から)
図版 6 遺構	1 1区石室 569(東から)
	2 1区石室 627(東から)
	3 1区井戸 853(北西から)

図版 7	遺構	1 1区土壙 660(東から)
		2 1区土壙 706(北東から)
		3 1区土壙 642(南西から)
図版 8	遺構	1 1区第3面全景(北から)
		2 1区柵 1771(北東から)
		3 1区土壙 1312(東から)
図版 9	遺構	1 1区土壙 1275(北から)
		2 1区土壙 1295(北から)
		3 1区井戸 1003(東から)
図版 10	遺構	1 1区第4面全景(北から)
		2 1区井戸 1421(北から)
		3 1区井戸 1421 土器出土状況(南から)
図版 11	遺構	1 2区第1面全景(南東から)
		2 2区柵 2565(北から)
		3 2区柵 2566(北から)
図版 12	遺構	1 2区建物 825 掘り下げ中(北から)
		2 2区建物 825 完掘状況(北から)
図版 13	遺構	1 2区建物 825 北東隅(南西から)
		2 2区建物 825 西壁(北東から)
		3 2区土壙 611(南西から)
図版 14	遺構	1 2区土壙 763(上)・土壙 831(下)(北から)
		2 2区建物 684(東から)
		3 2区柵 2567(左)・柵 2568(右)(西から)
		4 2区土壙 264(東から)
図版 15	遺構	1 2区井戸 829(東から)
		2 2区石室 812(西から)
		3 2区石室 223(東から)
		4 2区石室 830(北から)
図版 16	遺構	1 2区第2面全景(南東から)
		2 2区溝 1319(北から)
		3 2区土壙 1354(北から)
		4 2区土壙 1362(北から)
図版 17	遺構	1 2区第3面全景(南東から)
		2 2区柵 2572・柵 2573(東から)
図版 18	遺構	1 2区柵 2571(北から)

		2 2区土壙 1988(下)・土壙 2002(上)(西から)
		3 2区井戸 2098(南東から)
		4 2区井戸 1862(北東から)
図版 19	遺構	1 2区第4面全景(南東から)
		2 2区土壙 2437(南西から)
図版 20	遺物	2区土壙 1730 出土土器
図版 21	遺物	1区井戸 1421 出土土器
図版 22	遺物	2区土壙 1553 出土土器
図版 23	遺物	2区土壙 1849・2区土壙 1039 出土土器
図版 24	遺物	1区土壙 1361・2区土壙 1354・2区土壙 1362・1区土壙 550・ 2区土壙 1994 出土土器
図版 25	遺物	2区土壙 1442 出土土器
図版 26	遺物	2区土壙 1870 出土土器
図版 27	遺物	2区土壙 1176 出土土器
図版 28	遺物	2区土壙 1782 出土土器
図版 29	遺物	1区土壙 353 出土土器
図版 30	遺物	1区土壙 768 出土土器 1
図版 31	遺物	1区土壙 768 出土土器 2・2区土壙 776 出土土器 1
図版 32	遺物	2区土壙 776 出土土器 2
図版 33	遺物	2区土壙 813 出土土器 1
図版 34	遺物	2区土壙 813 出土土器 2・1区土壙 190 出土土器
図版 35	遺物	1 縄紋土器 2 弥生土器・土師器
図版 36	遺物	瓦 1
図版 37	遺物	瓦 2
図版 38	遺物	土製品 1(土錘・土馬・紡錘車・おはじき・土鈴・硯)
図版 39	遺物	土製品 2(埴塼・甗・鑄型)
図版 40	遺物	石製品 1(剥片石器・磨製石鏃・磨製石斧・紡錘車・勾玉・石 製銚具・印章・硯)
図版 41	遺物	石製品 2(砥石・石鍋・行火・石臼・石塔)
図版 42	遺物	金属製品 1(銀貨・銅銭・筭・耳搔・毛拔・煙管・香道具 ・蓋・椀・燭台)
図版 43	遺物	金属製品 2(錘・瓔珞・吊金具・環金具・釦・切羽・小柄)
図版 44	遺物	1 骨角製品(簪・櫛・櫛髷・棹秤・さいころ) 2 骨

3 貝殼

図版 45	遺跡	調査区配置図
図版 46	遺構	1 区第 1 面遺構平面図
図版 47	遺構	1 区第 2 面遺構平面図
図版 48	遺構	1 区第 3 面遺構平面図
図版 49	遺構	1 区第 4 面遺構平面図
図版 50	遺構	1 1 区石室 216 実測図 2 1 区石室 217 実測図 3 1 区石室 232 実測図 4 1 区石室 419 実測図 5 1 区石室 407 実測図 6 1 区石室 409 実測図
図版 51	遺構	1 1 区竈 301 実測図 2 1 区石室 229 実測図 3 1 区石室 431 実測図 4 1 区石室 430 実測図 5 1 区石垣 310 実測図
図版 52	遺構	1 1 区柵 1769 実測図 2 1 区柵 1770 実測図 3 1 区石室 569 実測図 4 1 区石室 503 実測図 5 1 区石室 833 実測図 6 1 区石室 449 実測図 7 1 区石室 669 実測図
図版 53	遺構	1 1 区石室 627・井戸 853 実測図 2 1 区石室 630 実測図
図版 54	遺構	1 1 区土壙 642 実測図 2 1 区土壙 666 実測図 3 1 区土壙 660 実測図 4 1 区土壙 706 実測図 5 1 区土壙 649・土壙 653 実測図 6 1 区土壙 824 実測図
図版 55	遺構	1 1 区柵 1771 実測図 2 1 区土壙 1312 実測図 3 1 区土壙 1275 実測図

図版 56	遺構	1 1 区土壙 1295 実測図
		2 1 区土壙 1299 実測図
		3 1 区井戸 1003 実測図
		4 1 区井戸 1316 実測図
図版 57	遺構	1 1 区土壙 1361 実測図
		2 1 区井戸 1384 実測図
		3 1 区井戸 1421 実測図
図版 58	遺構	2 区第 1 面遺構平面図 (西)
図版 59	遺構	2 区第 1 面遺構平面図 (東)
図版 60	遺構	2 区第 2 面遺構平面図 (西)
図版 61	遺構	2 区第 2 面遺構平面図 (東)
図版 62	遺構	2 区第 3 面遺構平面図 (西)
図版 63	遺構	2 区第 3 面遺構平面図 (東)
図版 64	遺構	2 区第 4 面遺構平面図 (西)
図版 65	遺構	2 区第 4 面遺構平面図 (東)
図版 66	遺構	2 区柵 2565 実測図
図版 67	遺構	2 区柵 2566 実測図
図版 68	遺構	2 区建物 825 実測図 (北半)
図版 69	遺構	2 区建物 825 実測図 (南半)
図版 70	遺構	1 2 区土壙 521 実測図
		2 2 区石室 805 実測図
		3 2 区土壙 611 実測図
図版 71	遺構	1 2 区土壙 742 実測図
		2 2 区土壙 763・土壙 831 実測図
		3 2 区建物 684 実測図
図版 72	遺構	1 2 区柵 2567 実測図
		2 2 区柵 2568 実測図
図版 73	遺構	1 2 区土壙 264 実測図
		2 2 区井戸 829 実測図
		3 2 区石室 812 実測図
図版 74	遺構	1 2 区土壙 1354 実測図
		2 2 区土壙 1362 実測図
		3 2 区石室 385 実測図
		4 2 区石室 830 実測図
		5 2 区石室 223 実測図

		6	2 区石室 381 実測図
		7	2 区井戸 1251 実測図
		8	2 区土壙 1124 実測図
図版 75	遺構		2 区柵 2569 実測図
図版 76	遺構		2 区柵 2571 実測図
図版 77	遺構	1	2 区柵 2572 実測図
		2	2 区柵 2573 実測図
図版 78	遺構	1	2 区井戸 2098 実測図
		2	2 区井戸 1862 実測図
		3	2 区土壙 1660 実測図
		4	2 区井戸 1704 実測図
図版 79	遺物		2 区土壙 1730・2 区土壙 1965・2 区土壙 2543 出土土器実測図
図版 80	遺物		1 区井戸 1421 出土土器実測図
図版 81	遺物		2 区土壙 2516 出土土器実測図
図版 82	遺物		2 区土壙 2020・2 区土壙 2471・2 区土壙 2474・2 区井戸 2097・ 1 区土壙 1435 出土土器実測図
図版 83	遺物		2 区土壙 1840・2 区土壙 1844・2 区土壙 1217 出土土器実測図
図版 84	遺物		2 区土壙 1553 出土土器実測図
図版 85	遺物		2 区土壙 1990・2 区土壙 1849・2 区土壙 1039・2 区土壙 1851 出 土土器実測図
図版 86	遺物		1 区土壙 1361・2 区土壙 1354・2 区土壙 1362・1 区土壙 550・ 1 区土壙 1477・2 区土壙 1994 出土土器実測図
図版 87	遺物		2 区土壙 940・2 区土壙 2023・2 区溝 1319 出土土器実測図
図版 88	遺物		2 区土壙 1442 出土土器実測図
図版 89	遺物		2 区土壙 1330 出土土器実測図
図版 90	遺物		2 区土壙 699・2 区土壙 1975・2 区土壙 1870 出土土器実測図
図版 91	遺物		2 区土壙 1176・2 区土壙 1922・2 区井戸 2098 出土土器実測図
図版 92	遺物		2 区土壙 1148・2 区土壙 136・2 区土壙 1782 出土土器実測図
図版 93	遺物		1 区土壙 353 出土土器実測図 1
図版 94	遺物		1 区土壙 353 出土土器実測図 2
図版 95	遺物		1 区土壙 768 出土土器実測図 1
図版 96	遺物		1 区土壙 768 出土土器実測図 2
図版 97	遺物		2 区土壙 776 出土土器実測図 1
図版 98	遺物		2 区土壙 776 出土土器実測図 2
図版 99	遺物		2 区土壙 813 出土土器実測図 1

図版 100	遺物	2区土壙 813 出土土器実測図 2
図版 101	遺物	1区土壙 190 出土土器実測図
図版 102	遺物	その他の出土土器拓本・実測図 1
図版 103	遺物	その他の出土土器実測図 2
図版 104	遺物	その他の出土土器実測図 3
図版 105	遺物	その他の出土土器実測図 4
図版 106	遺物	瓦拓本・実測図 1
図版 107	遺物	瓦拓本・実測図 2
図版 108	遺物	土製品実測図 1
図版 109	遺物	土製品実測図 2
図版 110	遺物	石製品拓本・実測図 1
図版 111	遺物	石製品実測図 2
図版 112	遺物	金属製品拓本・実測図 1
図版 113	遺物	金属製品実測図 2

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	1
図 2	調査風景	6
図 3	周辺調査地位置図	9
図 4	調査地基本土層図（上：2区北壁中央、下：1区西壁中央）	11
図 5	2区土壙 1988（下）・土壙 2002（上）実測図	25
図 6	2区土壙 2437 実測図	25
図 7	1区溝 1765・2区土壙 2562・2区土壙 2437・2区土壙 2558・ 2区土壙 2434 出土土器実測図	30
図 8	鉄製品実測図	47
図 9	骨角製品実測図	48
図 10	応仁の乱後の京都市街	53
図 11	『洛中絵図』に描かれた調査地周辺	54
図 12	平安京造営前の遺構概要図	56
図 13	I期の遺構概要図	57
図 14	II期の遺構概要図	58
図 15	III期の遺構概要図	59

図 16	IV期の遺構概要図	60
図 17	V期の遺構概要図	61
図 18	VI期の遺構概要図	62
図 19	VII期の遺構概要図	63
図 20	VIII期の遺構概要図	64
図 21	IX期の遺構概要図	65
図 22	X期の遺構概要図	66
図 23	XI期の遺構概要図	67
図 24	XII期の遺構概要図	68
図 25	XIII期の遺構概要図	69
図 26	XIV期の遺構概要図	70
図 27	井戸 1421 埋納遺構検出状況模式図	77
図 28	1区土壌 1361 出土土器	81

表 目 次

表 1	調査工程表	3
表 2	報告書作成工程表	5
表 3	検出遺構時期別対照表	13
表 4	出土土器構成表	73

付 表 目 次

付表 1	1区溝 1765 出土土器観察表	85
付表 2	2区土壌 2562 出土土器観察表	85
付表 3	2区土壌 2437 出土土器観察表	85
付表 4	2区土壌 2558 出土土器観察表	85
付表 5	2区土壌 2434 出土土器観察表	85
付表 6	2区土壌 1730 出土土器観察表	85
付表 7	2区土壌 1965 出土土器観察表	86
付表 8	2区土壌 2543 出土土器観察表	86
付表 9	1区井戸 1421 出土土器観察表	87
付表 10	2区土壌 2516 出土土器観察表	88
付表 11	2区土壌 2020 出土土器観察表	89

付表 12	2 区土壙 2471 出土土器觀察表	90
付表 13	2 区土壙 2474 出土土器觀察表	90
付表 14	2 区井戸 2097 出土土器觀察表	90
付表 15	1 区土壙 1435 出土土器觀察表	91
付表 16	2 区土壙 1840 出土土器觀察表	91
付表 17	2 区土壙 1844 出土土器觀察表	91
付表 18	2 区土壙 1217 出土土器觀察表	92
付表 19	2 区土壙 1553 出土土器觀察表	92
付表 20	2 区土壙 1990 出土土器觀察表	93
付表 21	2 区土壙 1849 出土土器觀察表	93
付表 22	2 区土壙 1039 出土土器觀察表	94
付表 23	2 区土壙 1851 出土土器觀察表	94
付表 24	1 区土壙 1361 出土土器觀察表	94
付表 25	2 区土壙 1354 出土土器觀察表	94
付表 26	2 区土壙 1362 出土土器觀察表	95
付表 27	1 区土壙 550 出土土器觀察表	95
付表 28	1 区土壙 1477 出土土器觀察表	95
付表 29	2 区土壙 1994 出土土器觀察表	95
付表 30	2 区土壙 940 出土土器觀察表	96
付表 31	2 区土壙 2023 出土土器觀察表	96
付表 32	2 区溝 1319 出土土器觀察表	97
付表 33	2 区土壙 1442 出土土器觀察表	97
付表 34	2 区土壙 1330 出土土器觀察表	98
付表 35	2 区土壙 699 出土土器觀察表	99
付表 36	2 区土壙 1975 出土土器觀察表	99
付表 37	2 区土壙 1870 出土土器觀察表	100
付表 38	2 区土壙 1176 出土土器觀察表	100
付表 39	2 区土壙 1922 出土土器觀察表	101
付表 40	2 区井戸 2098 出土土器觀察表	101
付表 41	2 区土壙 1148 出土土器觀察表	101
付表 42	2 区土壙 136 出土土器觀察表	102
付表 43	2 区土壙 1782 出土土器觀察表	102
付表 44	1 区土壙 353 出土土器觀察表	103
付表 45	1 区土壙 768 出土土器觀察表	105
付表 46	2 区土壙 776 出土土器觀察表	107

付表 47	2 区土壙 813 出土土器観察表	109
付表 48	1 区土壙 190 出土土器観察表	111
付表 49	その他の出土土器観察表	112
付表 50	瓦観察表	117
付表 51	土製品観察表	118
付表 52	石製品観察表	119
付表 53	銀製品観察表	120
付表 54	銅製品観察表	120
付表 55	鉄製品観察表	122
付表 56	骨角製品観察表	123
付表 57	動植物遺体観察表	123
付表 58	1 区溝 1765 出土遺物破片計数表	124
付表 59	2 区土壙 2562 出土遺物破片計数表	124
付表 60	2 区土壙 2437 出土遺物破片計数表	124
付表 61	2 区土壙 2558 出土遺物破片計数表	124
付表 62	2 区土壙 2434 出土遺物破片計数表	124
付表 63	2 区土壙 1730 出土遺物破片計数表	124
付表 64	1 区井戸 1421 出土遺物破片計数表	124
付表 65	2 区土壙 2516 出土遺物破片計数表	124
付表 66	2 区土壙 1965 出土遺物破片計数表	125
付表 67	2 区土壙 2543 出土遺物破片計数表	125
付表 68	2 区土壙 2020 出土遺物破片計数表	125
付表 69	2 区土壙 2471 出土遺物破片計数表	125
付表 70	2 区土壙 2474 出土遺物破片計数表	126
付表 71	2 区井戸 2097 出土遺物破片計数表	126
付表 72	1 区土壙 1435 出土遺物破片計数表	126
付表 73	2 区土壙 1840 出土遺物破片計数表	126
付表 74	2 区土壙 1844 出土遺物破片計数表	126
付表 75	2 区土壙 1217 出土遺物破片計数表	127
付表 76	2 区土壙 1553 出土遺物破片計数表	127
付表 77	2 区土壙 1990 出土遺物破片計数表	127
付表 78	2 区土壙 1849 出土遺物破片計数表	127
付表 79	2 区土壙 1039 出土遺物破片計数表	128
付表 80	2 区土壙 1851 出土遺物破片計数表	128
付表 81	1 区土壙 1361 出土遺物破片計数表	128

付表 82	2 区土壙 1354 出土遺物破片計数表	128
付表 83	2 区土壙 1362 出土遺物破片計数表	128
付表 84	1 区土壙 550 出土遺物破片計数表	128
付表 85	1 区土壙 1477 出土遺物破片計数表	129
付表 86	2 区土壙 1994 出土遺物破片計数表	129
付表 87	2 区土壙 940 出土遺物破片計数表	129
付表 88	2 区土壙 2023 出土遺物破片計数表	129
付表 89	2 区溝 1319 出土遺物破片計数表	130
付表 90	2 区土壙 1442 出土遺物破片計数表	130
付表 91	2 区土壙 1330 出土遺物破片計数表	131
付表 92	2 区土壙 699 出土遺物破片計数表	131
付表 93	2 区土壙 1975 出土遺物破片計数表	131
付表 94	2 区土壙 1870 出土遺物破片計数表	131
付表 95	2 区土壙 1176 出土遺物破片計数表	132
付表 96	2 区土壙 1922 出土遺物破片計数表	132
付表 97	2 区井戸 2098 出土遺物破片計数表	132
付表 98	2 区土壙 1148 出土遺物破片計数表	132
付表 99	2 区土壙 136 出土遺物破片計数表	132
付表 100	2 区土壙 1782 出土遺物破片計数表	133
付表 101	1 区土壙 353 出土遺物破片計数表	133
付表 102	1 区土壙 768 出土遺物破片計数表	134
付表 103	2 区土壙 776 出土遺物破片計数表	134
付表 104	2 区土壙 813 出土遺物破片計数表	135
付表 105	1 区土壙 190 出土遺物破片計数表	135
付表 106	2 区土壙 1217 土師器皿類口径分布表	136
付表 107	2 区土壙 1553 土師器皿類口径分布表	136
付表 108	2 区土壙 1851 土師器皿類口径分布表	136
付表 109	1 区土壙 550 土師器皿類口径分布表	137
付表 110	2 区土壙 940 土師器皿類口径分布表	137
付表 111	2 区土壙 2023 土師器皿類口径分布表	137
付表 112	2 区土壙 1442 土師器皿類口径分布表	138
付表 113	2 区土壙 1330 土師器皿類口径分布表	138
付表 114	2 区土壙 1975 土師器皿類口径分布表	138
付表 115	2 区土壙 1870 土師器皿類口径分布表	139
付表 116	2 区土壙 1176 土師器皿類口径分布表	139

付表 117	2 区土壙	1922	土師器皿類口径分布表	139
付表 118	2 区土壙	1148	土師器皿類口径分布表	140
付表 119	2 区土壙	136	土師器皿類口径分布表	140
付表 120	2 区土壙	1782	土師器皿類口径分布表	140
付表 121	1 区土壙	353	土師器皿類口径分布表	141
付表 122	1 区土壙	768	土師器皿類口径分布表	141
付表 123	2 区土壙	776	土師器皿類口径分布表	141
付表 124	2 区土壙	813	土師器皿類口径分布表	142
付表 125	1 区土壙	190	土師器皿類口径分布表	142

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

京都市中京区丸太町通柳馬場東入四町目に所在する京都地方・簡易裁判所の敷地内で、庁舎改築工事が計画された。当地は平安京左京および中世・近世の市街地にあたることから、京都市埋蔵文化財調査センターは最高裁判所事務総局に対して埋蔵文化財発掘調査の指導を行った。これを受けて、最高裁判所事務総局は財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査を委託した。

その後、最高裁判所事務総局・京都地方裁判所・当研究所による協議を重ねた。その結果、裁判所敷地内旧庁舎には地下室があり、埋蔵文化財の残存状況については不明なことから、試掘調査を実施し、その結果を基に調査計画を策定し発掘調査に取りかかることとなった。

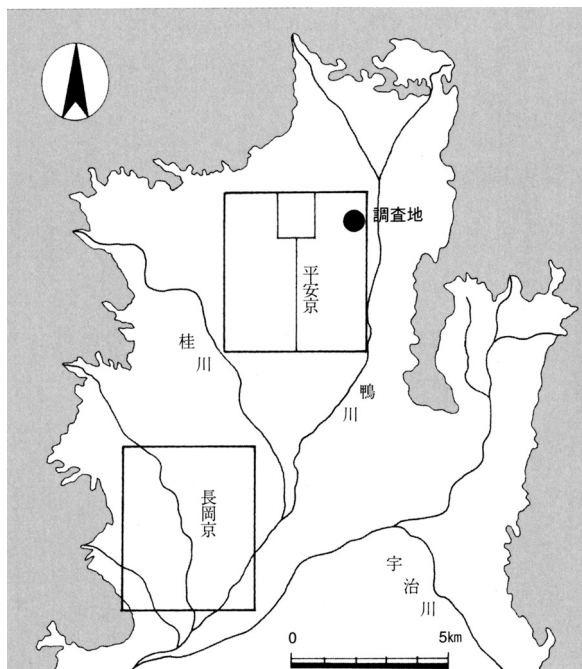


図1 調査位置図 (1:120,000)

2 調査経過

(1) 試掘調査

調査対象地内の旧庁舎地下室範囲の確認、ならびに遺構残存状況・調査遺構面数確認のため、平成9年(1997)10月1日から試掘調査を実施した。対象地内に3m×5mの試掘坑を8箇所設定し、掘削後観察・記録などを行った。

調査の結果、調査対象地中央部は地表下約5m、南部は地表下約3mまで攪乱により遺構が破壊されていた。その他は、部分的に攪乱があるものの、遺構は良好に残存していた。断面の土層観察では、地表下約1mで江戸時代の遺構面(遺物包含層を含む。以下同じ。)を1面、地表下約1.2～1.5mで室町時代～桃山時代の遺構面を2面、地表下約1.9mで平安時代～鎌倉時代の遺構面を1面、都合4面を確認した。

(2) 発掘調査

調査範囲 調査対象範囲は東西約 72m × 南北約 87m で、このうち試掘調査で明らかとなった中央部と南部の攪乱を除き、調査対象地南西部に 1 区、北部に 2 区の二つの調査区を設定した（図版 45）。

調査目的 発掘調査の目的は、①かなりの密度で重複した平安時代～江戸時代の遺構を各遺構面に分けて調査を行うこと。②万里小路・大炊御門大路に面した平安時代後期～江戸時代の町屋の状況を明らかにすること。③これまでの周辺の調査と併せて、当地一帯の土地利用状況の変遷を解明することである。

調査経過 発掘調査は、試掘調査による遺構残存状況ならびに車両進入路・排土置き場・写真撮影などを考慮し、1 区の調査終了後に 2 区の調査を開始することとした。なお、調査経過は表 1 に示した。

平成 9 年（1997）9 月から調査事務所の設置などの準備作業を行い、同年 10 月から 1 区の調査を開始した。第 1 面まで重機で掘削し、重機および人力で攪乱を掘り下げた後に、遺構検出を行った。遺構の重複が激しいため、重複の前後関係に留意しながら、遺構平面図を作成しつつ調査を進めた。遺構平面図は縮尺 1/20 を基本として手測りし、重複した遺構については、筆記具の色を変えて記録した。遺構調査の際には、遺構台帳に遺構ごとの所見を記載した。第 1 面での調査がほぼ終わった時点で全景写真を撮影した。その後、柱穴・井戸掘形の完掘作業や断ち割りなどの追加調査を行うとともに、次の面まで遺物包含層を掘り下げた。このような工程を 4 回繰り返して、四つの遺構面の調査が終了した。この後、下層遺構の確認や全体の断ち割り・断面実測を行い、1 区の調査を平成 10 年（1998）7 月 14 日に終了した。

平成 10 年 4 月、1 区第 3 面の調査中に 2 区の重機掘削を始め、第 1 面から調査を行った。2 区も 1 区と同様の調査方法で四つの遺構面の調査を実施し、平成 11 年（1999）1 月 26 日にすべての調査を完了した。

なお、調査中には平成 10 年 4 月 25 日に地元見学会、8 月 22 日に現地説明会を開催するとともに、現地出入口に随時調査速報を掲示し、調査成果の公開に努めた。

調査体制 調査にたずさわった職員は以下のとおりである。

所 長 川上 貢

調 査 課 長 鈴木久男

調 査 係 長 磯部 勝・本弥八郎

調査担当者 上村和直・山本雅和・太田吉男・小谷 裕・中村享子

基準点設置 辻 純一・宮原健吾

写 真 撮 影 村井伸也・幸明綾子

表 1 調査工程表

	1区					2区				備考
	調査準備 試掘調査	第1面	第2面	第3面	第4面	第1面	第2面	第3面	第4面	
1997年 9月 10月	調査準備 試掘調査	重機掘削								
11月		遺構検出 遺構調査 遺構実測								
12月										
1998年 1月		全景写真	遺構検出 遺構調査 遺構実測							
2月										
3月			全景写真	遺構検出 遺構調査 遺構実測						
4月						重機掘削				地元 見学会
5月			全景写真	遺構検出 遺構調査 遺構実測						
6月						遺構検出 遺構調査 遺構実測				
7月				全景写真 断面実測						
8月						全景写真				現地 説明会
9月							遺構検出 遺構調査 遺構実測			
10月							全景写真	遺構検出 遺構調査 遺構実測		
11月										
12月								全景写真	遺構検出 遺構調査 遺構実測	
1999年 1月									全景写真 断面実測	

3 整理・報告書作成の経緯

調査は約1年半を要し、古墳時代～江戸時代の遺構を検出するとともに、各時代における遺物が出土し多大な成果をあげた。このことから報告書を作成することとなった。

作成方針 報告書作成の方針は、①調査で明らかとなった当地域の古墳時代～江戸時代に至る遺構変遷および各時代での遺物出土状況を分かりやすく報告すること。②左京域における平安時代～江戸時代に至る遺物は、当研究所では整理・報告の前例が少なく、その公表を行うこと。③さらに、当地域の変遷を考える上で重要な遺構や、一括性の高い遺物をできるだけ掲載し、今後当地域周辺の調査・研究を行う上で活用できる報告書を作成することとした。

作業経過 調査終了後の1999年2月から整理作業に取りかかり、出土遺物(1661箱)の洗浄を6月末に終了した。2000年1月から本格的な報告書作成作業を開始した。なお、作業経過は表2に示した。

まず、調査時に作成した平面実測図・遺構実測図などを縮図・調整した。これと並行して洗浄した遺物は、調査段階で採集した単位で遺物内容を点検し、遺構の時期を判別した。さらに重要と考えられる遺構から出土した一括性の高い遺物を選別し、総破片数の数量化・接合・大きさの計測などの作業を行った。また、併せてその他の遺構から出土した遺物で、重要な個体を抽出した。その後、遺物の拓本作業・実測作業を行った。接合した遺物の内、図版に掲載するものは石膏復元・着色の後、写真撮影を行った。また、陶磁器類で紋様のあるものは、デジタル写真を利用した実測図を作成し、これを使用した。

遺物実測が終了した時点で、遺物図版・遺物観察表を作成した。併せて遺構の時期や相互の関係などの総合的な検討を行い、遺構図版を作成した。その後担当者によって原稿の執筆を分担して行った。

原稿と図版・挿図などが揃った時点で、所内関係者による回覧・校正を行った。その後調整をして入稿した。

作業期間は約10箇月間で、2000年11月末日に終了した。

作業体制 整理作業にたずさわった職員は以下のとおりである。

所 長 川上 貢

調 査 課 長 鈴木久男

調 査 係 長 本弥八郎

整理担当者 上村和直・山本雅和・太田吉男・小谷 裕

実測・拓本 上村和直・山本雅和・太田吉男・平尾政幸・山口 真・高橋 潔・近藤知子

製 図 上村和直

遺物復元 村上 勉・出水みゆき

写 真 撮 影 村井伸也・幸明綾子

保 存 処 理 卜田健司

表2 報告書作成工程表

	遺構実測図整理・調整	遺構検討	遺物整理	遺物拓本実測	遺物復元写真撮影	図版挿図作成	原稿作成	備考
2000年 2月			内容点検					
3月								報告書検討会①
4月		遺構検討	遺物接合					
5月						版下作成		報告書検討会②
6月			遺物観察表等作成		遺物復元			
7月						製図		
8月		遺構概要図作成					原稿作成	報告書検討会③
9月					写真撮影			所内回覧 遺物内覧会
10月								
11月							原稿編集調整	報告書検討会④ 印刷所入稿

原稿執筆・編集作業 原稿の執筆は以下の分担で行った。

上村和直 第1・2章、第5章3項

山本雅和 第3・4章、第5章1・2項

本書の編集は、鈴木久男の指導のもとに上村和直・山本雅和が協議を重ね、山本雅和が主としてあたった。

謝辞 発掘調査および報告書作成作業に際して、下記の方々の指導・協力をいただいた。記して感謝する次第である（五十音順、敬称略）。

久保智康（京都国立博物館）

中島和彦（奈良市教育委員会）

藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）

松井 章（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）

家根祥多（立命館大学）



図2 調査風景

第2章 遺 跡

1 遺跡の位置と環境

調査地の歴史的状況について、周辺の調査と文献史料により概観する。^{註1}

奈良時代以前 調査地周辺の標高は46.7mで、西の烏丸通付近が44.7m、東の河原町通付近が45.1mあり、調査地付近は北から南に下がる緩やかな扇状地に位置する。周辺地域では、これまで古墳時代～飛鳥時代の遺物が出土し、調査地南側の御所南小学校における調査では古墳時代～飛鳥時代の流路、烏丸丸太町交差点南西隅の調査では古墳時代前期・後期の竪穴住居を検出した。

平安時代 調査地は、平安京の条坊では左京二条四坊十町の西半部にあたる。十町は北を春日小路（現丸太町通）、西を万里小路（現柳馬場通）、南を大炊御門大路（現竹屋町通）、東を富小路（現富小路通と現麩屋町通の間）に囲まれる。平安時代前期～中期の当地に関する文献史料はなく、居住者は不明である。御所南小学校の調査では平安時代後期以降、遺構・遺物が増加し四分の一町規模の宅地が存在したことが明らかとなった。

平安時代後期、調査地西側の七町には左大臣藤原頼長の太炊御門高倉第があり、十町には大治元年（1126）に藤原基隆が白河法皇・鳥羽上皇らに造進した春日殿があったことが史料に記されている。春日殿に関する記録は比較的多く残され、次のような居住者の変遷を知ることができた。藤原基隆→大治元年（1126）白河法皇ら→大治五年（1130）焼失→藤原経宗→文治元年（1185）後鳥羽天皇の臨時里内裏→藤原経宗→後白河法皇→文治四年（1188）藤原兼実に貸与→後白河法皇→式子内親王→元久二年（1205）藤原頼実（経宗の子）→建保二年（1214）後鳥羽上皇である。この頃には、太炊御門殿と改称されていたらしい。承久の乱（1221）にあたっては、順徳上皇は一旦太炊御門殿へ遷幸してから佐渡へ配流されている。このように十町では、平安時代後期後半～鎌倉時代前半にかけての種々の契機に頻繁な造作が行われたことが判る。

鎌倉時代以降 周辺の調査では、鎌倉時代～室町時代の遺構・遺物が多く検出され、活発に利用されていた様子がうかがわれるが、当地に関する史料はなく、その状況は不明である。

室町時代中頃には、当地東側に管領畠山持国の邸宅があった。

桃山時代には豊臣秀吉の京都改造が行われ、富小路が現在の場所に造り替えられ、現在の地割りができ上がった。この頃、調査地の北側で内裏（土御門内裏）が拡大・整備され周辺に公家屋敷が集められ、調査地一帯には諸大名の京屋敷が営まれた。『洛中絵図』によると、江戸時代前期の当地は松平中務少輔の屋敷地となっていたことが判る。

江戸時代中期～後期にかけては松平家の屋敷は取り壊され一帯は町屋となり、『京町鑑』によると相馬弾正の屋敷が認められる。御所南小学校の調査では、桃山時代以降通りに面して町屋が並んだことが判っている。京都では明治時代以降に大名屋敷が学校・公共施設などになった例が多く、当地は明治初期に京都拘置所がおかれ、その後京都地方裁判所となり、現在に至る。

2 周辺の調査

これまで、調査地周辺では多くの発掘・立会調査などを実施しているが、ここでは調査地周辺の左京二条四坊および調査地西側の二条三坊東半での主要な調査の概要を述べる。

左京二条四坊 一町の発掘調査（御所内防火水槽、図 3-1）では、江戸時代の九条池の一部が検出された。^{註2}

三町西側中央部の発掘調査（現こどもみらい館、図 3-2）では、弥生時代後期～古墳時代の流路、平安時代前期～中期の東洞院大路路面および東側溝、鎌倉時代の井戸・土器溜、室町時代の溝・土壇・柱穴など、江戸時代の東洞院通・間之町通に面した町屋が検出された。遺構の検討から、江戸時代の町屋の規模・構造が明らかとなった。^{註3}

十五町・十町・七町・二町および二条三坊十五町の各北辺で立会調査（丸大町通南側関西電力埋設管、図 3-3）が行われた。十五町北辺で平安時代の春日小路路面および南側溝、十町北辺で古墳時代の包含層・万里小路路面・平安時代後期の瓦を多量に含む落込遺構、七町北辺で平安時代中期の大規模な土壇、二町北辺で高倉小路、二条三坊十五町北辺で室町時代の堀状遺構などが検出された。^{註4}

十一町北部の発掘調査（現御所南小学校、図 3-4）では、弥生時代～飛鳥時代の流路、平安時代前期～中期の大炊御門大路路面および南側溝・井戸・溝・土壇・柱穴、平安時代後期～鎌倉時代の大炊御門大路路面および南側溝・井戸・溝・土壇・柱穴、室町時代の溝・柵・土壇・柱穴、桃山時代～江戸時代の建物・石室・土壇などが検出された。遺構の検討から、平安時代後期～室町時代の四分一町規模の宅地や、江戸時代の大炊御門大路に面した町屋の変遷が明らかとなった。^{註5}

十一町南東部から十四町にかけての発掘調査（現農林水産省共済組合、図 3-5）では、古墳時代の流路、平安時代の富小路路面および両側溝・井戸・土壇・土器溜・柱穴、鎌倉時代～室町時代の土壇・柱穴、桃山時代～江戸時代の井戸・石組遺構・土壇・墓などが検出された。^{註6}

十三町南東部・十四町南東部の試掘・立会調査では、東京極大路が検出された。^{註7}

左京二条三坊 九町南東部の発掘調査（烏丸線内遺跡No. 78 地点、図 3-6）では、平安時代中期の土壇、平安時代後期の井戸、室町時代前期の土壇・柱穴、江戸時代の井戸・土壇・柱穴などが検出された。^{註8} 同町北西部の発掘調査（現アーバンライフ、図 3-7）では、平安時代前期～中期の中御門大路路面、室町時代の井戸・土壇、江戸時代の建物・井戸・石組遺構・土壇などが検出された。^{註9}

十町北東部の発掘調査（現東急ハーヴェスト、図 3-8）では、古墳時代の竪穴住居、平安時代中期～後期の溝・土壇、室町時代～桃山時代の土壇・柱穴、江戸時代の土蔵・土壇などが検出された。^{註10}

十二町東部の発掘調査（現京都新聞トラストビル、図 3-9）では、平安時代の井戸・溝・土壇、室町時代の烏丸小路西側溝などが検出された。^{註11}

十三町西辺部の発掘調査（烏丸線内遺跡 No. 63・60 地点、図 3-10）では、平安時代前期の溝、

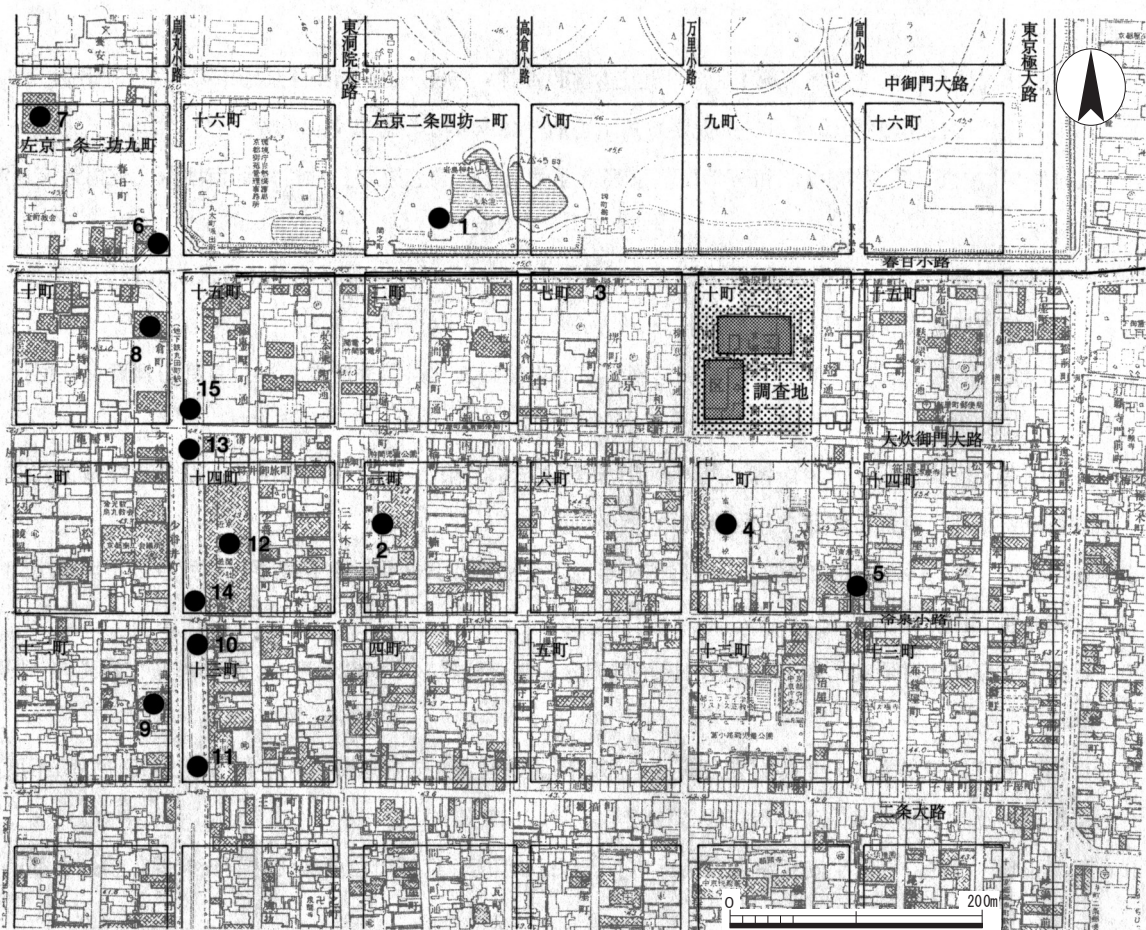


図3 周辺調査地位置図 (1:6,000)

平安時代中期の土壌、平安時代後期の井戸・土壌・柱穴、鎌倉時代～室町時代の土壌、江戸時代の井戸・石組遺構・土壌などが検出された^{註12}。南西部の発掘調査（烏丸線内遺跡 No. 29 地点、図 3-11）では、鎌倉時代の土壌、室町時代の柱穴、桃山時代～江戸時代の井戸・石組遺構・土壌などが検出された^{註13}。

十四町中央部の発掘調査（現京都新聞社社屋、図 3-12）では、平安時代前期～中期の土壌・柱穴、平安時代後期～鎌倉時代の溝などが検出された^{註14}。北西部の発掘調査（烏丸線内遺跡 No. 17・28・18 地点、図 3-13）では、平安時代前期・後期の包含層、室町時代の^{註15}大炊御門大路南側溝・土壌、桃山時代～江戸時代の井戸・石組遺構・土壌などが検出された^{註15}。南西部の発掘調査（烏丸線内遺跡 No. 59 地点、図 3-14）では、平安時代後期の土壌、鎌倉時代の土壌、室町時代の溝・土壌・柱穴、桃山時代～江戸時代の^{註16}甎組遺構・土壌・柱穴などが検出された^{註16}。

十五町西部の発掘調査（烏丸線内遺跡 No. 27 地点、図 3-15）では、平安時代後期の土壌、室町時代の土壌、桃山時代～江戸時代の井戸・石組遺構・土壌などが検出された^{註17}。

註

- 1 歴史的状況については京都市編『京都の歴史』学芸書林 1968～1976年・『京都市の地名』平凡社 1979年・(財)古代学協会編『平安京提要』角川書店 1994年などを参考にした。
- 2 久世康博「左京二条四坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年。
- 3 内田好昭・高正龍・堀内寛昭「平安京左京二条四坊1」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年。
- 4 堀内明博「左京二条三・四坊」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年。
- 5 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広「平安京左京二条四坊」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- 6 丸川義広・中村敦「左京二条四坊」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年。
- 7 京都市埋蔵文化財研究所編『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年。
- 8 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会編『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』1977～1981年度京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年。
- 9 百瀬正恒・本弥八郎「平安京左京二条三坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年。
- 10 山本雅和・磯部勝「平安京左京二条三坊」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- 11 京都市編『史料 京都の歴史 第2巻 考古』平凡社 1983年。
- 12 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会編『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』1976年度京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981年、および8に同じ。
- 13 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会編『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』1974, 75年度京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年。
- 14 大石良材・甲元眞之『少将井遺跡発掘調査報告 京都新聞社々屋増改築に伴う調査』平安博物館 1972年。
- 15 13に同じ。
- 16 12に同じ。
- 17 13に同じ。

第3章 遺構

1 層序と遺構の概要

(1) 層序 (図版2・図4)

調査地は、1区・2区とも基本的に同じ堆積状況を示しており、第1面～第4面の4段階に分けて調査した。その後、下層遺構の確認調査も行った。

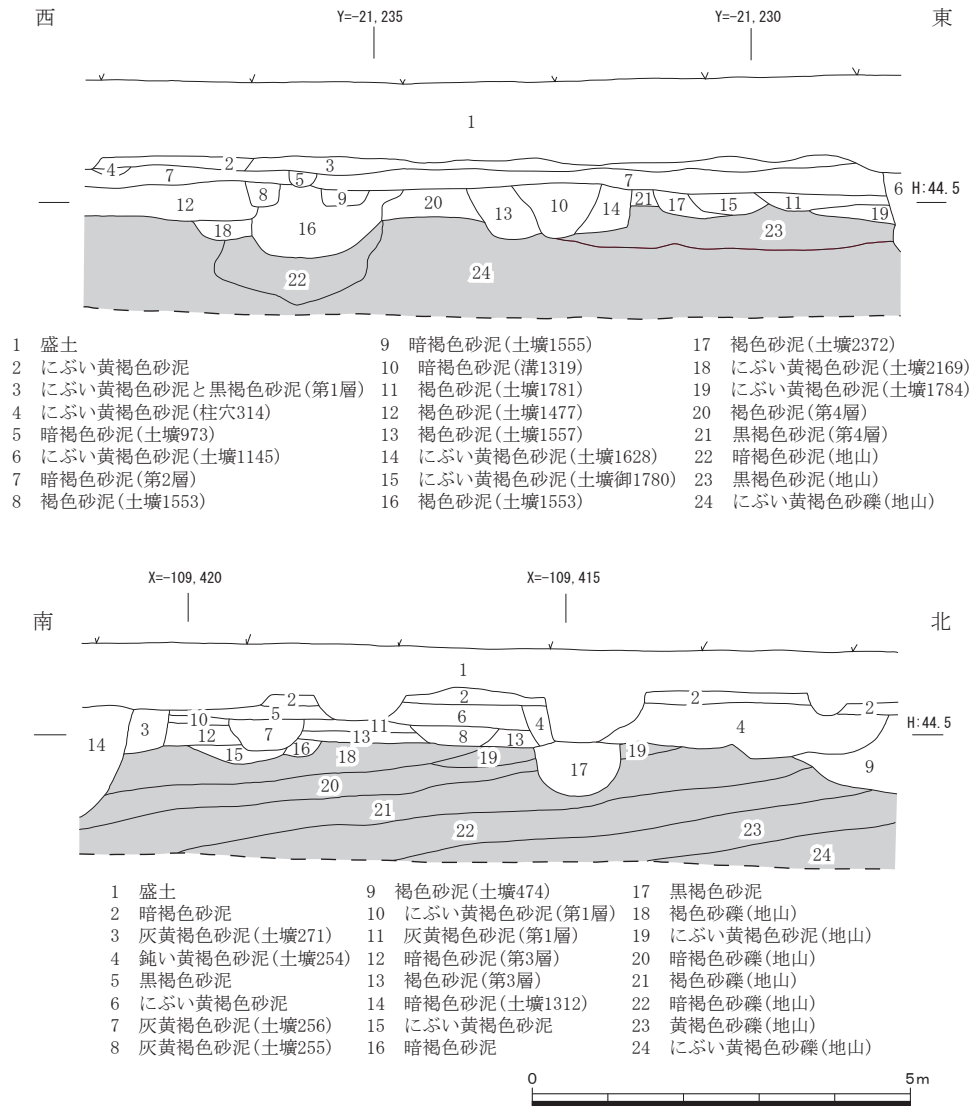


図4 調査地基本土層図(上:2区北壁中央、下:1区西壁中央)(1:100)

調査地の基本層序は、地表面から厚さ約 1m の裁判所建設時の盛土と、次の 5 層に分けることができる。

第 1 層は、厚さ約 20cm のにぶい黄褐色砂泥層などからなる整地層である。第 2 層は、厚さ約 15 ～ 25cm の灰褐色砂泥層・暗褐色砂泥層などからなる整地層である。第 3 層は、厚さ約 15 ～ 30cm の褐色砂泥層・灰黄褐色砂泥層などからなる整地層で、南側に向けて厚くなる。第 4 層は、厚さ約 10 ～ 30cm の褐色泥砂層・オリーブ褐色泥砂層などからなる整地層で、南側に向けて厚くなる。第 4 層の遺物包含量は第 1 層～第 3 層に比べ少ない。第 5 層は、直径数 cm ～ 10 数 cm の円礫を多量に含む砂礫層で、北側から南側に向かって傾斜する堆積状況を示す。遺物は出土しておらず地山である。第 1 層・第 4 層は調査地のほぼ全域に広がる整地層であるのに対し第 2 層・第 3 層は面的な広がりをもたない部分的な整地層である。

第 1 層の上面を第 1 面、第 2 層の上面を第 2 面、第 3 層の上面を第 3 面、第 4 層の上面を第 4 面とした。第 1 面は江戸時代中期～後期、第 2 面は室町時代後半～江戸時代前期、第 3 面は平安時代後期～室町時代前半、第 4 面は平安時代前期～中期の遺構が主体をなす。第 1 面の検出高は、2 区北端と 1 区南端では 2 区の方が約 30cm 高く、北側に高い地形である。第 3 層・第 4 層ともに南側が厚く、この比高差は下層ほど大きくなる。

(2) 遺構の概要

調査で検出した遺構は、1 区 1771 基、2 区 2573 基、総数 4344 基となる。

1 区・2 区とも各時期の遺構が複雑に重複する平安京左京域特有の状況を示し、第 1 面～第 4 面のそれぞれの調査では、目的とした時期の遺構の他に前後する時期の遺構を検出することも多かった。そこで、調査段階の検出状況にしたがって 1 区・2 区のそれぞれ第 1 面～第 4 面に分けて報告し、調査地の歴史的な変遷については第 5 章 1 項で総括する。

また、検出遺構は多数におよぶため、ここでは遺跡を理解する上で重要と判断した遺構、特殊な構造をもつ遺構、各時代を代表する遺物が出土した遺構を重点的に報告する。これらの遺構の時期は表 3 にまとめた。^{註1}

なお、各検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平安京・京都 I 期～Ⅳ期の編年案を準用する。^{註2}

2 1 区の遺構

南東部は既存建物に攪乱されていたため遺構はまったく残っていなかった。また、東部にはコンクリートの建物基礎が 10 基並び、排除が困難であったため残して調査を行った。

表3 検出遺構時期別対照表

		1区				2区			
		第1面	第2面	第3面	第4面	第1面	第2面	第3面	第4面
古墳時代 ～ 飛鳥時代					溝 1765				土壇 2434 土壇 2437 土壇 2558 土壇 2562
平安時代前・ 中期	I期							土壇 1730	
	II期				井戸 1421			土壇 1965 土壇 2020	土壇 2471 土壇 2516 土壇 2543
	III期				土壇 1435			土壇 2020 井戸 2097	土壇 2471 土壇 2474
平安時代後期・ 鎌倉時代	IV期						土壇 1217	土壇 1553 土壇 1660 土壇 1840 土壇 184 井戸 2093	
	V期		土壇 649				土壇 1039	土壇 1660 土壇 1849 土壇 1851 土壇 1990	
	VI期		土壇 550 土壇 642 土壇 649 土壇 653 土壇 706 土壇 824	土壇 1275 土壇 1295 土壇 1299 井戸 1316	土壇 1361 土壇 1477		土壇 1354 土壇 1362	井戸 1704 土壇 1851 土壇 1994	
室町時代	VII期		土壇 660 土壇 666 土壇 824 柵 1770	柵 1771			土壇 940 溝 1319 土壇 1330 柵 2569	土壇 1442 井戸 1862 土壇 1988 土壇 2002 土壇 2023 柵 2571 柵 2572 柵 2573	
	VIII期			柵 1771		土壇 699	土壇 1124 柵 2569	土壇 1870 土壇 1975 柵 2571 柵 2572	
	IX期			柵 1771	井戸 1384 溝 1667	土壇 136 溝 242	土壇 1148 土壇 1176 柵 2569 柵 2570	土壇 1922 井戸 2098	
	X期					土壇 136 溝 242	柵 2569	土壇 1782	
江戸時代	XI期	石室 216 石室 217 石室 229 石室 232 竈 301 石垣 310 土壇 353 土間 450	石室 449 石室 503 石室 569 石室 627 石室 630 土壇 768 石室 833 井戸 853 柵 1769 柵 1770	井戸 1003 土壇 1312		石室 223 溝 242 土壇 264 土壇 289 石室 381 石室 385 土壇 521 土壇 611 建物 684 土壇 742 土壇 763 土壇 776 石室 805 石室 812 土壇 813 建物 825 井戸 829 石室 830 土壇 831 柵 2565 柵 2566 柵 2567 柵 2568	土壇 1230 井戸 1251		
	XII期	土壇 190 石室 407 土間 450	石室 503 石室 627 石室 833 井戸 853	井戸 1003		溝 242 土壇 289 土壇 521 土壇 611 建物 684 石室 812 井戸 829 石室 830 柵 2565 柵 2566			
	XIII期～	石室 407 石室 409 石室 419 石室 430 石室 431	石室 669						

(1) 第1面の検出遺構(図版3・46)

石室216(図版4・50) 北西部北壁際で検出した。掘形は南北約1.3m、東西約1.5mの楕円形で、深さは約1.0mである。底に黒褐色砂泥と灰黄褐色砂泥を約0.1mの厚さに入れた後、大きさ10数cmの川原石を敷き詰め、その上に同じ大きさの川原石を小口面を内側に向けて円形に積み上げる。内径は約0.8mで、上部はわずかに広がる。埋土はオリーブ褐色砂泥で、川原石を多く含んでいた。これは石積みの上半部が崩れた可能性を示す。XI期の遺物が出土した。

石室217(図版4・50) 石室216の東側に位置する。掘形は北側が調査区外にあるが、直径約1.8mの円形に復元できる。深さは約1.3mである。石室216と異なり、底部中央をさらに深く掘りくぼめた後、大きさ10数cmの川原石を小口面を内側に向けて円形に積み上げる。内径は約0.9mで、上部はわずかに広がる。掘形には同じ大きさの川原石を多量に含んでいた。埋土は褐色砂泥で、川原石を多く含み、石室216と同様に石積みの上半部が崩れた可能性がある。XI期の遺物が出土した。

石室232(図版50) 北西部で検出した。掘形はほぼ円形で、南北約1.3m、東西約1.4m、深さ約0.8mである。底に灰黄褐色砂礫を約0.1mの厚さに入れた後、大きさ10数cm～30cmの川原石を円形に積み上げる。大きな石は長側面を内側に向ける。内径は約0.7mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、少量の川原石を含んでいた。XI期の遺物が出土した。

石室419(図版4・50) 中央部南寄りで検出した。掘形は南北約1.2m、東西約1.4mの隅丸長方形で、深さは約0.6mである。底部中央を少し掘りくぼめた後、大きさ10数cm～30cmの川原石を小振りの石は小口面、大振りの石は長側面を内側に向け方形に積み上げる。内法は南北約0.6m、東西約0.8mである。埋土は褐灰色砂泥で、Ⅷ期の遺物が出土した。

石室407(図版50) 南東部で検出した。掘形はほぼ円形で、南北約1.5m、東西約1.6m、深さ約0.7mである。底に褐灰色砂泥と黄褐色細砂を約0.1mの厚さに入れた後、大きさ約20cmの川原石を小口面を内側に向けて円形に積み上げる。内径は約0.8mで、東側の一部が崩れる。埋土は黒褐色砂泥で、中に炭や焼けた壁土・漆喰を含んでいた。Ⅻ期～Ⅹ期の遺物が出土した。

石室409(図版50) 南東部で検出した。北半分の多くを攪乱され残存状況は悪い。掘形は直径約1.2mの円形に復元できる。深さは約0.3mである。底部から大きさ約20～30cmのやや大型の川原石を円形に積み上げる。内径は約0.8mと推定できる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅹ期の遺物が出土した。

石室229(図版51) 北西部で検出した。掘形は直径約1.1mの円形で、深さは約0.6mである。底部から大きさ10数cmの川原石を小口面を内側に向けて円形に積み上げる。内径は約0.7mで、上部はわずかに広がる。西側の一部は崩れる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、少量の川原石を含んでいた。XI期の遺物が出土した。

石室431(図版51) 中央部南寄りで検出した。掘形は直径約1.3mの円形で、深さは約0.8mである。底に暗褐色砂泥と褐色粘質泥砂を約0.1mの厚さに入れた後、大きさ約20～30cmのやや大型の川原石や花崗岩の割石を長側面を内側に向けて円形に積み上げる。内径は約0.6mであ

る。埋土は褐灰色砂泥で、Ⅷ期の遺物が出土した。

石室 430(図版 51) 中央部南寄りで検出した。北半分と東側の一部は攪乱されるが、掘形は直径約 1.3m の円形に復元できる。深さは約 0.6m である。底に暗褐色砂泥と灰黄褐色砂泥を約 0.3m の厚さに入れた後中央部を掘り下げ、大きさ約 20～30cm のやや大型の川原石や花崗岩の割石を円形に積み上げる。内径は約 0.7m に復元できる。埋土は灰褐色砂泥で、Ⅷ期の遺物が出土した。

竈 301(図版 4・51) 南西部で検出した。東半分は攪乱される。一辺約 1.1m の隅丸方形の掘形中央に、内径約 0.8m の竈を構築していたと推定できる。残存する深さは約 0.2m である。赤橙色に焼け締まった壁面の内部には、白色の灰が堆積していた。残存状況から焚き口は東向きであったと推定できる。Ⅺ期の遺物が出土した。

石垣 310(図版 3・51) 南西部で検出した。残存長約 6.6m、残存高約 0.4m の北面する石垣である。大きさ約 30～40cm の大型の川原石を 2 段以上積み上げ、隙間には 10 数 cm の川原石を詰める。北側は一段低く 10 数 cm の川原石を並べる。Ⅺ期の遺物が出土した。

土間 450 西部から中央部にかけて検出した。黄褐色粘土を最大約 14cm の厚さで貼り付ける。攪乱されたため、平面形は不整形で範囲は明瞭でない。Ⅺ期～Ⅻ期に成立したと推定できる。

土壇 353 中央部北寄りで検出した。平面形は南北約 2.9m、東西約 5.1m の楕円形で、深さは約 2.1m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、Ⅺ期中段階の遺物がまとまって出土した。

土壇 190 南東部の東壁際で検出したため、東側は調査区外にある。南北約 2.1m、東西 0.7m 以上の不整形な平面形で、深さは約 0.2m である。当初は攪乱として掘り下げたので埋土の記録を取っていない。底部付近からⅫ期新段階の遺物が出土した。

(2) 第 2 面の検出遺構(図版 5・47)

柵 1769(図版 5・52) 西部中央で検出した東西方向の柵である。東側は攪乱され、西側は調査区外にのびる。検出した柱穴は 5 基で、残存分の長さは約 3.5m である。柱穴は直径約 0.6～0.7m、深さ約 0.3～0.7m で、そのうち 4 基には大きさ約 30～50cm の平坦な石が据えられる^{註 4}。柱穴の間隔は約 0.7～0.9m である。Ⅺ期の遺物が出土した。

柵 1770(図版 52) 中央部南寄りで検出した南北方向の柵である。北側・南側は攪乱される。検出した柱穴は 4 基で、残存分の長さは約 4.6m である。中央の攪乱部分にはさらに 2 基の柱穴があったと推定できる。柱穴は直径約 0.4～0.6m、深さ約 0.2～0.4m で、いずれも大きさ約 30～40cm の平坦な石が据えてある。柱穴の間隔は不揃いである。柱穴の時期については、北半の 2 基の柱穴からはⅪ期、南半の 2 基の柱穴からはⅦ期の遺物が出土しており、同じ場所での造り替えが行われた可能性がある。

石室 569(図版 6・52) 中央部で検出した。東側が攪乱されるが、掘形は南北約 1.5m、東西 1.8m 以上の隅丸方形に復元できる。深さは約 1.2m である。大きさ約 20～30cm のやや大型の川原石を、小口面を内側に向けてほぼ垂直に方形に積み上げる。内法は南北約 0.8m、東西 1.5m 以上に復元できる。埋土は灰黄褐色砂泥で、川原石を多量に含んでいた。Ⅺ期の遺物が出土した。

石室 503(図版 52) 北西部で検出した。掘形は南北約 1.5m、東西約 1.3m のやや不整形な円形で、深さは約 0.8m である。底部から大きさ 10 数 cm の川原石を小口面を内側に向けて円形に積み上げる。内径は約 0.8m である。埋土は褐灰色砂泥で、川原石を多量に含んでいた。出土遺物は少なかったが、XI期～XII期の遺構と推定できる。

石室 833(図版 52) 中央部南寄りで検出した。掘形は南北約 0.9m、東西約 0.8m の方形で、深さは約 0.4m である。掘形に密着して大きさ 10 数 cm の川原石を方形に積み上げるが、欠損部分が目立つ。内法は南北約 0.6m、東西約 0.5m に復元できる。埋土は暗灰黄色砂泥である。出土遺物は少なかったが、XI期～XII期の遺構と推定できる。

石室 449(図版 52) 西部中央で検出した。東側が攪乱されるが、掘形は南北約 1.1m、東西 0.9m 以上の隅丸方形に復元できる。深さは約 0.4m である。底部から大きさ約 20cm の川原石を小口面を内側に向けて方形に積み上げる。内法は南北約 0.5m、東西は西辺の石が抜き取られたため不明である。埋土は灰黄褐色砂泥で、XI期の遺物が出土した。

石室 669(図版 52) 北部中央で検出した。東側が攪乱されるが、掘形は南北約 1.6m、東西約 1.9m の方形に復元できる。深さは約 0.8m である。大きさ約 30～40cm の大型の川原石を、小口面を内側に向けてほぼ垂直に積み上げる。内法は南北約 0.8m、東西 0.8m 以上の方形に復元できる。埋土は灰黄褐色砂泥で、大きさ約 20～40cm の川原石を含んでいた。XIII期の遺物が出土した。

石室 627・井戸 853(図版 6・53) 南西部で検出した。両遺構は重複し、先行する石組みの井戸 853 を解体し、石材を再利用して石室 627 に造り替えたものである。

石室 627 の掘形は南北約 1.9m、東西約 2.5m の隅丸方形で、深さは約 1.1m である。大きさ約 30～40cm の大型の川原石や花崗岩の割石をやや不整形な方形に積み上げる。内法は南北約 0.6m、東西約 1.0m である。埋土は暗褐色砂泥である。

石室 627 の底部で井戸 853 を検出した。掘形は南北約 1.9m、東西約 2.5m の楕円形で、深さは石室 627 検出面から約 1.7m である。大きさ約 30～40cm の大型の川原石や花崗岩の割石を円形に積み上げる。内径は約 0.7m である。下方の 2 のみが残存した。

石室 627 埋土・井戸 853 埋土それぞれからXI期～XII期の遺物が出土し、造り替えの時期は確定できない。

石室 630(図版 5・53) 南西部で検出した。攪乱により北辺と西辺の一部が残る。掘形は南北 1.3m 以上、東西約 4.4m の隅丸方形に復元できる。深さは約 0.9m である。大きさ約 20～40cm の川原石を小口面を内側に向けて方形に積み上げ、北辺下段には 10 数個の川原石を並べる。内法は東西約 3.0m で、南北は不明である。埋土は褐色砂泥で、XI期の遺物が出土した。

土壇 642(図版 7・54) 北東部北壁際で検出したため、北側は調査区外にある。平面形は南北 1.3m 以上、東西約 4.9m の方形で、深さは約 0.7m である。上面に大きさ約 5～10 数 cm の川原石を粗く平坦に敷く。埋土は暗褐色砂泥で、VI期の遺物が出土した。

土壇 666(図版 54) 北東部で検出した。南西側が攪乱されるが、平面形は直径約 0.8m の円形に復元できる。深さは約 0.2m である。大きさ約 5～10cm の川原石を粗く平坦に敷く。埋土は褐

色砂泥で、VII期の遺物が出土した。

土壙 660(図版7・54) 北東部で検出した。東側が攪乱されるが、平面形は南北約2.1m、東西約4.3mの不整形な楕円形に復元できる。深さは約0.5mである。中央部の南北約1.5m、東西約3.0mの範囲に大きさ約5～10数cmの多量の川原石を密に敷き詰める。埋土は暗褐色砂泥で、VII期の遺物が出土した。

土壙 706(図版7・54) 東部中央で検出した。攪乱され残存状況は悪いが、平面形は南北約2.1m、東西約1.8mのほぼ円形に復元できる。深さは約0.2mである。大きさ約5～20cmの川原石を粗く平坦に敷く。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、VI期の遺物が出土した。

土壙 649(図版54) 北東部北壁際で検出し、北側は調査区外にある。平面形は南北0.6m以上、東西約1.5mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。大きさ約5～10数cmの川原石を粗く平坦に敷く。埋土は暗褐色砂泥で、V期～VI期の遺物が出土した。

土壙 653(図版54) 北東部隅で検出し、北側・東側は調査区外にある。土壙649の東側に接する。平面形は不明であるが、深さは約0.3mである。大きさ約5～10数cmの川原石を粗く平坦に敷く。埋土は黒褐色砂泥で、VI期の遺物が出土した。

土壙 824(図版54) 南西部隅で検出し南側・西側は調査区外にある。北側・東側も攪乱されるので平面形は不明であるが、深さは約0.9mである。大きさ10数cmの川原石を詰める。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、VI期～VII期の遺物が出土した。

土壙 550 西部中央で検出した。南北約1.5m、東西約2.3mの不整形な平面形で、深さは約0.7mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、VI期中段階の遺物が出土した。

土壙 768 中央部南寄りで検出した。平面形は南北約3.7m、東西約4.2mの隅丸方形で、深さは約2.2mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、XI期中段階の遺物がまとまって出土した。

(3) 第3面の検出遺構(図版8・48)

柵 1771(図版8・55) 東部中央壁際で検出した南北方向の柵である。北側・東側・南側は攪乱される。検出した柱穴は7基で、残存分の長さは約6.7mである。北側と南側の石の上面で約0.5mの高低差がある。柱穴は直径約0.3～0.8m、深さ約0.3～0.5mで、そのうち4基には大きさ約30～40cmの平坦な石が据えてある。柱穴の間隔は残存部分で約0.8mである。柱穴からの出土遺物にはVII期～IX期のものがあり、時期の限定は難しい。

土壙 1312(図版8・55) 西部中央壁際で検出したため、西側は調査区外となる。掘形は南北約2.2m、東西2.4m以上の隅丸方形に復元できる。深さは約0.6mである。東西両側に大きさ約20～40cmの川原石をほぼ垂直に積み上げ、裏込めに10数cmの川原石を多量に詰める。石積みの間隔は約0.6～0.7mである。今回の調査では他に類例のない特異な遺構である。XI期の遺物が出土した。

土壙 1275(図版9・55) 東部中央で検出した。周囲が攪乱されたため、平面形は不明であるが、南北3.5m以上、東西3.5m以上と推定できる。深さは約0.3mである。埋土は褐色砂泥で、瓦を

多量に含んでいた。VI期古段階～中段階の遺物が出土した。

土壙 1295(図版 9・56) 東部中央で検出した。平面形は南北約 1.3m、東西約 1.0m の隅丸方形で、深さは約 0.8m である。下半分しか図化できていないが、内部には大きさ約 5～10 数 cm の川原石を密に詰める。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、VI期の遺物が出土した。

土壙 1299(図版 56) 東部中央で検出した。平面形は南北約 1.6m、東西約 0.5m の長円形で、深さは約 0.3m である。大きさ約 5～10 数 cm の川原石を粗く敷く。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、VI期の遺物が出土した。

井戸 1003(図版 9・56) 西部中央で検出した石組みの井戸である。掘形は直径約 2.5m の円形で、深さは約 2.7m である。石組みは最下部が残るだけで、大きさ約 20～40cm の川原石を方形に積み上げる。内法は一辺約 0.5m である。底部中央を掘り下げ、曲物を据えたと推定できる。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、大きさ 10cm 未満の礫を多量に含んでいた。XI期～XII期の遺物が出土した。

井戸 1316(図版 56) 北部中央で検出した。井戸枠は残存しないが、埋土の状況から木組みの井戸であったと推定できる。掘形は一辺約 1.9m の隅丸方形で、深さは約 2.2m である。VI期の遺物が出土した。

(4) 第 4 面の検出遺構 (図版 10・49)

土壙 1361(図版 57・86) 北西部で検出した。平面形は直径約 0.3m の長円形で、深さは 0.2m である。中央には土師器小型皿 (324～328) が 5 個体以上重ねられていた。埋土は黄褐色砂泥で、VI期古段階～中段階の遺物が出土した。

井戸 1384(図版 57) 北西部で検出した石組みの井戸である。掘形は南北約 1.9m、東西約 2.2m のほぼ円形で、深さは約 2.2m である。石組みは最下部が残存し、大きさ約 20～30cm のやや大型の川原石を小口面を内側に向けて積み上げる。内径は約 0.7m である。底部中央には直径約 0.4m、深さ約 0.2m の穴を掘りくぼめ、曲物を据えたと推定できる。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、IX期の遺物が出土した。

井戸 1421(図版 10・21・57・80・図 27) 中央部で検出した大型の井戸である。北西側が攪乱されるが、掘形は南北約 3.4m、東西約 4.0m の隅丸方形に復元できる。深さは約 2.6m である。井戸枠は残存していないため正確な構造は不明だが、掘形と枠内埋土の状況から南北約 1.1m、東西約 1.0m の方形木枠であったと推定できる。井戸の埋土や掘形からは、II期古段階の遺物が多量に出土した。井戸枠北西隅の直下にあたる部分には、土師器碗 (53・54) が 2 枚重ねの状態に埋納されていた。下側の個体の底部外面には「在」の墨書がある。この土器のすぐ下には直径約 0.6m、深さ約 0.1m の浅いくぼみに完形の須恵器杯蓋 (68) が埋納されていた。3 点の土器は井戸を構築する際に行われた祭祀に関わる遺物と推定できる。

溝 1667 東部中央で検出した東西方向の溝である。西側が攪乱されるが、長さ 11.6m 以上、幅約 0.6m、深さは約 0.5m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、IX期の遺物が出土した。

土壙 1435 西部中央で検出した。南側と北東側は攪乱されるが、平面形は南北約 1.9m、東西約 2.3m の楕円形に復元できる。深さは約 1.3m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅲ期中段階の遺物が出土した。

土壙 1477 南西部西壁際で検出したため、大部分は調査区外である。南北 1.7m 以上、東西 0.4m 以上で平面形は不明である。深さは 0.8m 以上ある。埋土は灰黄褐色砂泥で、Ⅵ期中段階の遺物が出土した。

溝 1765 東部で検出した南北方向の溝である。平面形は不整形で、検出分の長さは約 30.0m 最大幅は約 3.2m、深さは約 0.4～0.5m である。埋土はにぶい黄褐色粘質砂泥で、7 世紀の遺物が出土した。

3 2 区の遺構

東部は攪乱が著しく、低く落ち込んでいる。中央部南寄りにも大きな攪乱がある。

(1) 第 1 面の検出遺構 (図版 11・58・59)

柵 2565(図版 11・66) 西部で検出した南北方向の柵である。北側・南側とも調査区外にのびる。検出した柱穴は 25 基で、検出分の長さは約 28.8m で、北側でやや東に振る。柱穴は直径約 0.3～0.5m、深さ約 0.1～0.3m で、そのうち 16 基に大きさ 10 数 cm～40cm の平坦な石が据えてある。北側と南側の石の上面で約 0.4m の高低差がある。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東・西方向に少しずれる柱穴もある。Ⅺ期～Ⅻ期の遺物が出土した。

柵 2566(図版 11・67) 東部で検出した南北方向の柵である。北側は調査区外にのびる。南側は攪乱されるが、柵 2565 と同様に調査区外にのびると推定できる。検出した柱穴は 16 基で、残存分の長さは約 16.7m である。柵 2565 と同様に北側でやや東に振る。柱穴は直径約 0.2～0.4m、深さ約 0.1～0.3m で、そのうち 13 基に大きさ 10 数 cm～30cm の平坦な石が据えてある。北側と南側の高低差はほとんどない。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東・西方向に少しずれる柱穴もある。Ⅺ期～Ⅻ期の遺物が出土した。

建物 825(図版 12・13・68・69) 中央部東寄りで検出した、方形に地面を掘りくぼめて周囲に瓦を立て並べた遺構である。掘形は南北 13.9m 以上、東西約 4.5m、深さ 0.2m 以上の規模が推定できる。ただし南側部分で立った状態の平瓦を検出しており、ここを南端と仮定すると南北の規模は約 14.2m となる。

瓦を据えるための溝の痕跡はない。瓦は小口面を下にして凹面を内側に向け、多いところでは 3 重に重ねている。大部分は平瓦で、丸瓦は北東隅だけで認められた。また、わずかに甃を含む。すべての瓦は上端が欠損しており、遺構全体が削平を受けたことが判る。しかし埋土中や周辺の遺構から瓦片があまり出土していないことから、本来の掘形の深さは、瓦一枚分の約 0.3m であったと推定できる。埋土はほぼ水平に堆積する。掘形内側には直径約 0.3～0.4m の柱穴が数基あり、大きさ約 0.3m の平坦な石を据えたものもあることから、床が造られていたと考えられる。ただ

し柱穴は南半分に集中するため、床があったのは南半分のみで、北半分は土間であった可能性もある。XI期に属すると推定できる。

土壙 521(図版 70) 中央部で検出した。平面形は直径約 0.9m の円形で、深さは約 0.2m である。内部には大きさ約 5 ～ 10 数 cm の川原石を詰める。埋土は暗褐色砂泥で、XI期～XII期の遺物が出土した。

石室 805(図版 70) 南部中央の攪乱の底部で検出した。掘形は直径約 2.0m の円形で、深さは検出面から約 0.3m である。底部中央をさらに直径約 1.1m、深さ約 0.2m 掘りくぼめ、側面には大きさ約 20cm の川原石を積み上げた痕跡が残る。埋土は暗褐色砂泥で、大きさ約 10cm の礫を多く含む。XI期に属すると推定できる。

土壙 611(図版 13・70) 中央部で検出した。緩やかに屈曲する溝状の土壙で、底部は南西方向に傾斜し、幅も広くなる。南西側が攪乱されるが、長さ 7.0m 以上、幅約 2.0 ～ 2.3m、検出面から最も深いところで深さ約 0.8m である。側面には大きさ約 30 ～ 40cm の大型の石を垂直に積み上げる。東側は建物 825 の一部を破壊するので、建物 825 より新しいことが判る。埋土は褐色砂泥層で、XI期～XII期の遺物が出土した。

溝 242 北部中央で検出した南北方向の溝である。南側は攪乱され北側は調査区外へのびる。北側でやや西へ振る。断面形は浅いU字形で、長さ 12.5m 以上、幅は約 0.7 ～ 1.0m、深さは約 0.2m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、南側に大きさ約 5 ～ 10cm の川原石が集中していた。IX期～XII期の遺物が出土しており、造り替えがあったと考えられる。

土壙 289 北部中央で検出した。北東側が攪乱されるが、平面形は南北 4.3m 以上、東西 2.5m 以上の隅丸方形に復元できる。深さは約 0.1m である。埋土は褐色泥砂で、南半分には赤橙色の焼土が薄く広がり、南側には大きさ数 cm ～ 30cm の石が散乱する。XI期～XII期の遺物が出土した。土壙 289 は全体が土間であり、焼土部分に竈が構築されていたと推定できる。

土壙 742(図版 71) 東部中央で検出した。平面形は直径約 1.3m の円形で、深さは約 0.6m である。内部には大きさ約 5 ～ 10 数 cm の川原石を詰める。埋土は黒褐色砂泥で、XI期の遺物が出土した。

土壙 763(図版 14・71) 南東部で検出した。土壙 831 と重複するが、土壙 763 の方が新しい。平面形は南北約 1.2m、東西約 1.3m の隅丸方形で、深さは約 0.3m である。内部には大きさ約 5 ～ 20cm の川原石を密に詰める。埋土は黒褐色砂泥で、XI期の遺物が出土した。

土壙 831(図版 14・71) 南東部で検出した。土壙 763 と重複する。西側が攪乱されるが、平面形は南北約 1.8m、東西約 1.4m の楕円形に復元できる。深さは約 0.9m である。内部には大きさ約 5 ～ 10 数 cm の川原石を密に詰める。埋土は暗灰黄褐色砂泥で、XI期の遺物が出土した。

建物 684(図版 14・71) 東部中央で検出した。南東側が大きく攪乱されるが、「口」字形に幅約 0.7m の溝がめぐる平面形を復元できる。規模は東西約 5.6m、南北 2.4m 以上になる。溝の深さは約 0.3m で、大きさ約 5 ～ 10cm 前後の川原石を密に詰める。土蔵の基礎である。埋土は褐色砂泥で、XI期～XII期の遺物が出土した。

柵 2567(図版 14・72) 北西部で検出した東西方向の柵である。東側は柵 2565 につながり、

西側は調査区外にのびると推定できる。検出した柱穴は5基で、残存分の長さは約10.9mである。柱穴は直径約0.3～0.6m、深さ約0.2mで、そのうち2基には大きさ約40cmの平坦な石が据えてある。XI期の遺物が出土した。

柵 2568(図版14・72) 北西部で検出した柵2567と平行する東西方向の柵である。東側は柵2565につながり、西側は調査区外にのびると推定できる。検出した柱穴は6基で、残存分の長さは約11.0mである。5基の柱穴には大きさ約20～50cmの平坦な石が据えてある。XI期の遺物が出土した。

土壙 264(図版14・73・104) 西部中央で検出した。南側が攪乱されるが、掘形は直径約0.8mの円形に復元できる。深さは検出面から約0.4mで、据え付けられた瓦器甕(1126)の下半部が残り、内側には甕の上半部の破片が落ち込む。甕はほぼ完形に復元できた。掘形の埋土は黄褐色砂泥で、内容物は認められない。XI期の遺物が出土した。

井戸 829(図版15・73) 西部中央の攪乱の底部で検出した。南側の一部が攪乱されるが、掘形は南北約2.5m、東西約2.3mの方形に復元できる。深さは検出面から約1.0mである。大きさ約20～50cmの大型の川原石を小口面を内側に向けて方形に積み上げる。石材の中には石臼を転用したものもある。内法は一辺約1.3mで、上部はわずかに広がる。底部に直径約40cmの曲物底板が残存する。方形の石組井戸は類例が少ない。埋土は灰黄褐色砂泥で、XI期～XII期の遺物が出土した。

石室 812(図版15・73) 北西部で検出した。南西側が攪乱されるが、掘形は南北約2.3m、東西約5.1mの隅丸方形に復元できる。深さは約1.0mである。大きさ約20～40cmの川原石を小口面を内側に向けて方形に積み上げる。内法は南北約1.0m、東西約4.3mで、上部はわずかに広がる。埋土は黒褐色泥砂で、XI期～XII期の遺物が出土した。

石室 385(図版74) 南西部で検出した。南西側が攪乱されるが、掘形は直径約1.2mの円形に復元できる。深さは約0.5mである。大きさ10数cmの川原石を小口面を内側に向けて円形に積み上げる。積み方はやや乱雑である。内径は約0.5mで、上部はわずかに広がる。埋土は灰黄褐色砂泥で、XI期の遺物が出土した。

石室 830(図版15・74) 西部中央で検出した。北側が攪乱されるが、掘形は南北1.5m以上、東西約1.2mの隅丸方形に復元できる。深さは約0.5mである。大きさ10数cmの川原石を乱雑に方形に積み上げる。内法は南北1.0m以上、東西約0.6mである。埋土は暗灰黄色砂泥で、XI期～XII期の遺物が出土した。

石室 223(図版15・74) 北西部で検出した。南側が攪乱されるが、掘形は直径約1.4mの円形に復元できる。深さは約0.5mである。大きさ10cm前後の川原石を乱雑に方形に積み上げる。内法は南北約0.4m、東西約0.7mで、南側は少し崩れる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、XI期の遺物が出土した。

石室 381(図版74) 南西部で検出した。北西側が攪乱されるが、掘形は南北約1.6m、東西約1.1mの隅丸方形に復元できる。深さは約0.3mである。掘形の南側に大きさ10数cmの川原石を

小口面を内側に向けて方形に積み上げる。内法は南北約 0.4m、東西約 0.7m で、上部はわずかに広がる。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、XI期の遺物が出土した。

土壙 699 中央部で検出した。北西側が攪乱される。南北 1.2m 以上、東西 1.2m 以上で平面形は不明である。深さは約 1.0m である。埋土は褐色砂泥で、VIII期古段階の遺物が出土した。

土壙 776 南西部で検出した。平面形は一辺約 2.1m の方形で、深さは約 2.0m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。XI期中段階の多様な遺物がまとまって出土した。

土壙 813 西部中央で検出した。平面形は南北約 5.0m、東西約 2.9m の楕円形で、深さは約 1.5m である。埋土は暗褐色砂泥で、XI期新段階の遺物がまとまって出土した。

土壙 136 東部中央で検出した。南北約 3.8m、東西約 5.0m の不整形な平面形で、深さは約 2.0m である。当初は攪乱として掘り下げたので埋土の記録を取っていない。底部からIX期新段階～X期古段階の遺物が出土した。

(2) 第 2 面の検出遺構 (図版 16・60・61)

柵 2569(図版 75) 西部の第 1 面の柵 2565 にほぼ重なる位置で検出した南北方向の柵である。北側は調査区外にのびる。南側は攪乱されるが、調査区外にのびると推定できる。検出した柱穴は 14 基で、残存分の長さは約 25.2m である。柵 2565 と同様に北側でやや東に振るが、振れは小さい。柱穴は直径約 0.4～0.5m、深さ約 0.2～0.3m で、そのうち 12 基に大きさ約 20～40cm の平坦な石が据えてある。北側と南側の石の上面で約 0.3m の高低差がある。柱穴の間隔は不揃いな部分があり、東・西方向に少しずれる柱穴があり、重複した状況を示している。柱穴からはV期～X期の遺物が出土し、時期の確定は難しいが、少なくともVII期に成立し、同じ位置で造り替えが行われたと考える。

柵 2570 東部第 1 面柵 2566 のやや西側で検出した南北方向の柵である。北側・南側は調査区外にのびるが、攪乱され全体が分かりにくい。検出した柱穴は 14 基で、残存分の長さは約 25.0m である。柵 2566 と異なりほぼ南北方向に並ぶ。南側の柱穴では掘形を確認できなかった。柱穴は直径約 0.4～0.6m、深さ約 0.2～0.3m で、そのうち 9 基に大きさ約 20～30cm の平坦な石が据えてある。北側と南側の石の上面で約 0.5m の高低差がある。柱穴の間隔は不揃いである。柱穴からはIX期～XII期の遺物が多く出土した。XI期には柵 2566 があるので、それ以降の遺物は混入したと推定できる。

土壙 1354(図版 16・24・74・86) 北部中央で検出した。次に述べる土壙 1362 と対になる土壙である。北側は攪乱されるが、平面形は直径約 0.4m のほぼ円形に復元できる。中央部に完形の瓦器壺(329)が 1 個体、口縁部を上に向けた状態で据えてある。壺の中には土以外は認められなかった。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、銅銭一枚を含むVI期の遺物が少量出土した。

土壙 1362(図版 16・24・74・86) 北部中央西寄りで検出した。土壙 1354 の西側約 12.7m に位置する。直径約 0.3m の円形で、中央部に完形の瓦器壺(330)が 1 個体、口縁部を上に向けた状態で据えてある。壺の中には土以外は認められなかった。埋土は暗褐色砂泥で、瓦器壺以外は

ほとんど遺物を含んでいなかった。

井戸 1251(図版 74) 東部中央の攪乱の底部で検出した。掘形は直径約 2.5m の円形で、深さは検出面から約 1.6m である。大きさ約 30～50cm の大型の川原石を円形に積み上げる。内径は約 1.4m である。残存したのは 2 段のみで、西側は崩れる。埋土は暗褐色砂泥で、XI 期の遺物が出土した。

土壙 1124(図版 74) 南部中央で検出した。北側が攪乱されるが、平面形は南北 2.5m 以上、東西約 2.2m の楕円形に復元できる。深さは約 0.2m である。大きさ約 5～20cm の川原石を粗く敷く。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、VIII 期の遺物が出土した。

溝 1319(図版 16) 中央部で検出した南北方向の溝である。3 箇所大きく攪乱され、北側は調査区外にのびる。断面形は U 字形で、長さ 18.0m 以上、幅は約 1.1～1.3m、深さは約 0.4～0.6m である。北側と南側では底部の高低差がほとんどない。埋土は暗褐色砂泥で、水が流れた痕跡は認められなかった。埋土中には土師器の細片が密集した部分がある。VII 期中段階～新段階の遺物が出土した。

土壙 1217 中央部東寄りで検出した。北側と西側の一部が攪乱されるが、平面形は南北約 3.6m、東西約 2.9m の隅丸方形に復元できる。深さは約 0.8m である。埋土は灰黄褐色砂泥で、IV 期新段階の遺物が出土した。

土壙 1039 西部中央で検出した。東側と西側は攪乱されるが、南北約 4.6m、東西約 4.7m の不整形な平面形の土壙と推定できる。深さは約 0.3m である。埋土は黒褐色砂泥で、V 期古段階～新段階の遺物が出土した。

土壙 940 中央部西寄りで検出した。北側と南東側は攪乱されるが、平面形は南北 3.0m 以上、東西約 4.4m の方形に復元できる。深さは約 0.4m である。埋土はオリーブ褐色砂泥で、VII 期古段階の遺物が出土した。

土壙 1330 南東部で柵 2566 の下層で検出した。南北約 4.8m、東西約 2.9m の不整形な平面形で、深さは約 1.7m である。埋土は黄褐色砂泥で、VII 期新段階の遺物がまとまって出土した。

土壙 1176 中央部で検出した。西側が攪乱されるが、平面形は南北約 1.8m、東西 3.0m 以上の楕円形に復元できる。深さは約 0.5m である。埋土は黒褐色砂泥で、部分的に大きさ 10 数 cm の礫を含んでいた。IX 期古段階の遺物が出土した。

土壙 1148 北部中央北壁際で検出した。北側は調査区外にある。平面形は南北 4.0m 以上、東西約 6.7m の楕円形で、深さは約 0.4m である。埋土は黒褐色砂泥で、IX 期新段階の遺物が出土した。

土壙 1230(図版 44) 北東部で柵 2570 のすぐ東側で検出した。平面形は南北約 5.5m、東西約 3.9m の方形で、深さは約 1.0m である。埋土は褐色砂泥で、XI 期中段階の土器類とともに貝殻・骨類(1337～1346)が廃棄されていた。

(3) 第 3 面の検出遺構(図版 17・62・63)

柵 2571(図版 18・76) 東部の第 2 面の柵 2570 にほぼ重なる位置で検出した南北方向の柵で

ある。部分的に攪乱されるが、北側・南側とも調査区外にのびる。検出した柱穴は24基で、検出分の長さは約27.8mである。柵2566と異なりほぼ南北方向である。北側と南側の柱穴底部で約0.7mもの高低差がある。柱穴は直径約0.4～0.5m、深さ約0.1～0.2mで、そのうち22基に大きさ約30cmの平坦な石が据えてある。柱穴の間隔は約1.2mである。柱穴からはV期～XI期の遺物が出土し時期の確定は難しいが、少なくともVII期に成立したと考えられる。

柵 2572(図版17・77) 中央部で検出した東西方向の柵である。著しく攪乱されたため、東側と西側は不明であるが、中央部で柵2573と交差する。検出した柱穴は6基で、残存分の長さは約9.4mである。柱穴は直径約0.2～0.8m、深さ約0.2～0.4mで、いずれも大きさ約10～20cmの平坦な石が据えてある。柱穴の間隔は約1.0mである。VII期～VIII期の遺物が出土した。

柵 2573(図版17・77) 中央部で検出した南北方向の柵で、北側で柵2572と交差する。細長い溝の底部に平坦な石が不揃いな間隔で5基並ぶ。溝の長さは約12.0m、幅は約0.6m、深さは約0.4mである。石の大きさは10数cm～30cmである。VII期の遺物が出土した。

井戸 2098(原色図版8・図版18・78・112) 東部中央の攪乱の底部で検出した石組みの井戸である。掘形は直径約2.5mの円形で、深さは検出面から約1.2mである。大きさ約30～40cmの大型の川原石を、小口面を内側に向けてほぼ垂直に円形に積み上げる。内径は約1.3mである。底部の中央をさらに約0.8m掘り下げ、方形の木枠を2段に組む。木枠はともに横板組で下段は一辺約0.7m、上段は一辺約0.9mである。埋土は褐色砂泥で、銅鏡(1257)・筭(1258)を含むIX期新段階の遺物が出土した。

井戸 1862(図版18・78) 中央部で検出した石組みの井戸である。掘形は直径約2.0mの円形である。壁面が不安定なため、掘り下げは検出面から深さ1.8mにとどめた。他の井戸の例から深さは検出面から約3mと推定できる。大きさ約30～40cmの川原石を小口面を内側に向けて積み上げる。内径は約1.2mで、上部はわずかに広がる。埋土は褐色砂泥と褐色砂で、VII期の遺物が出土した。

井戸 1704(図版78) 南西部の攪乱の底部で検出した石組みの井戸である。北側が攪乱されるが、掘形は直径約3.5mの円形に復元できる。深さは検出面から約1.5mである。大きさ10数cm～40cmの川原石を小口面を内側に向け、乱雑に円形に積み上げる。内径は底部で約0.5mで、上部は大きく広がる。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、掘形にはVI期新段階の土器類とともに火を受けた瓦を多量に含んでいた。

井戸 2097 中央部東寄りで検出した。掘形は南北約3.5m、東西約2.8mの楕円形で、深さは約2.4mである。井戸枠は残存しないが、埋土の状況から木組みの井戸と推定した。掘形埋土は褐色砂泥で、III期中段階の遺物が出土した。

井戸 2093 南西部で検出した。掘形は南北約2.4m、東西約1.9mの楕円形で、やや規模が小さい。深さは約1.7mである。底部中央をさらに直径約0.4m、深さ約0.2m掘り下げ、曲物を据えたと推定できる。埋土は暗褐色砂泥で、IV期新段階の遺物が出土した。

土壙 1660(図版78) 中央部で検出した。西側と北東側が攪乱されるが、平面形は南北約3.7m、

東西2.0m以上の楕円形に復元できる。深さは約0.2mである。大きさ5～20cmの川原石を粗く敷く。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、IV期～V期の遺物が出土した。

土壙 1988(図版 18・図 5) 北部中央で検出した。平面形は南北約 2.1m、東西約 1.0m の隅丸方形で、深さは約 0.3m である。底部には大きさ約 30～40cm の平坦な石を 3 個並べる。埋土は暗灰黄色砂泥で、VII期の遺物が出土した。

土壙 2002(図版 18・図 5) 北部中央で検出した。土壙 1988 の約 3.5m 東に位置する。平面形は南北約 1.9m、東西約 1.1m の隅丸方形で、深さは約 0.3m である。底部には大きさ約 30～40cm の平坦な石を 3 個並べる。埋土は褐色泥砂で、V～VI期の遺物が出土した。土壙 1988 と土壙 2002 は検出位置や遺構の形態から一対のものと考えられるため、VII期の遺構と判断できる。

土壙 1730 西部中央で検出した。北側と南側が大きく攪乱される。南北 1.7m 以上、東西約 2.2m で平面形は不明である。深さは約 1.4m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、I 期新段階の遺物が出土した。

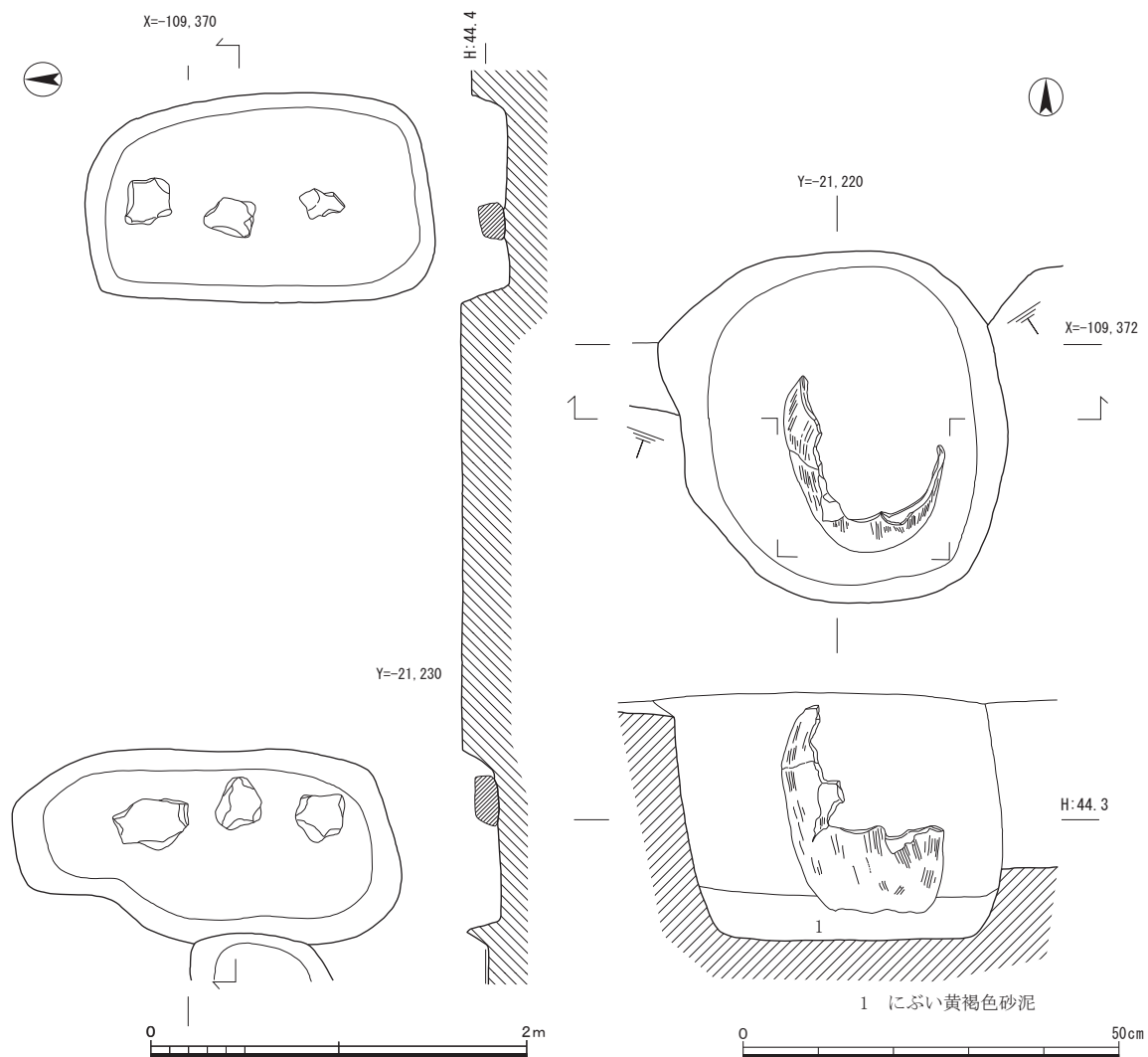


図5 2区土壙(下)・土壙2002(上)実測図(1:40) 図6 2区土壙2437実測図(1:10)

土壙 1965 中央部南東寄りで検出した。北西側は攪乱される。南北 3.0m 以上、東西 3.0m 以上の不整形な平面形で、深さは約 0.6m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅱ期中段階～新段階の遺物が出土した。

土壙 2020 中央部東寄りで検出した。南側は井戸 2097 によって攪乱されるが、平面形は南北 2.0m 以上、東西約 2.6m の楕円形に復元できる。深さは約 0.6m である。埋土は褐色砂泥で、Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階の遺物が出土した。

土壙 1840 北東部で検出した。西側は土壙 1844 によって大きく攪乱される。南北 3.1m 以上、東西 0.4m 以上で平面形は不明である。深さは 0.5m 以上である。埋土は暗褐色砂泥で、Ⅳ期古段階の遺物が出土した。

土壙 1844 中央部北東寄りで検出した。西側は攪乱されるが、平面形は直径約 3.6m のほぼ円形に復元できる。深さは約 0.6m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅳ期中段階～新段階の遺物が出土した。

土壙 1553 北部中央北壁際で検出したため、北側は調査区外である。平面形は南北 1.9m 以上、東西約 2.4m の楕円形に復元できる。深さは約 0.9m である。埋土は褐色砂泥で、Ⅳ期新段階の遺物がまとまって出土した。

土壙 1849 中央部東寄りで検出した。北側は攪乱されるが、平面形は南北 1.7m 以上、東西約 1.5m の方形に復元できる。深さは約 0.2m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅴ期古段階～中段階の遺物が出土した。

土壙 1990 中央部東寄りで検出した。南北約 2.2m、東西約 2.0m の不整形な平面形で、深さは約 0.3m である。埋土は暗褐色砂泥で、Ⅴ期古段階～中段階の遺物が出土した。

土壙 1851 中央部東寄りで検出した。東側は攪乱されるが、平面形は南北約 2.5m、東西 2.5m 以上の楕円形に復元できる。深さは約 0.3m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅴ期新段階～Ⅵ期古段階の遺物が出土した。

土壙 1994 南部中央で検出した。北側と東側が攪乱される。南北 2.0m 以上、東西 1.9m 以上で平面形は不明である。深さは約 0.2m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅵ期中段階～新段階の遺物が出土した。

土壙 2023 中央部の土壙 1870 の底部で検出した。北側・南側は攪乱されるが、平面形は南北 1.8m 以上、東西約 0.9m の長円形で、深さは約 0.4m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅶ期中段階の遺物が出土した。

土壙 1442 中央部北西寄りで検出した。北側と南側が攪乱されるが、平面形は南北 2.2m 以上、東西約 1.6m の楕円形に復元できる。深さは約 0.2m である。埋土は褐色砂泥と黄褐色砂泥で、Ⅶ期新段階の土器がまとまって出土した。

土壙 1870 中央部で検出した。攪乱が著しい。南北 2.7m 以上、東西 3.7m 以上で、平面形は不明である。深さは約 0.3m である。埋土は黄褐色砂泥で、Ⅷ期中段階～新段階の遺物が出土した。

土壙 1975 南部中央で検出した。南北約 2.4m、東西約 3.0m の不整形な平面形で、深さは約 0.8m

である。埋土は褐色砂泥で、川原石を多数含んでいた。Ⅷ期新段階の遺物が出土した。

土壙 1922 中央部で検出した。平面形は南北約 0.7m、東西約 1.5m の方形で、深さは約 0.6m である。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅸ期中段階～新段階の遺物が出土した。

土壙 1782 北部中央で検出した。平面形は南北約 2.3m、東西約 1.9m の楕円形で、深さは約 0.6m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅹ期古段階の遺物が出土した。

(4) 第 4 面の検出遺構 (図版 19・64・65)

土壙 2558 中央部北東寄りで検出した。土壙 2437・土壙 2434 の下部に広がる。南北約 1.2m、東西約 2.0m の不整形な平面形で、深さは約 0.4m である。埋土は褐色砂泥で、6 世紀の遺物がわずかに出土した。

土壙 2437(図版 19・図 6) 中央部北東寄りで検出した。南側が攪乱されるが、平面形は南北約 0.5m、東西約 0.4m のほぼ円形に復元できる。深さは検出面から約 0.3m である。中央には北側にやや傾けた状態で土師器の長胴甕(10)が据えてあり、土器棺墓と考えられる。中には土が詰まる。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。出土した遺物は長胴甕のみで、6 世紀末～7 世紀前半に属する。

土壙 2434 中央部北東寄りで検出した。土壙 2437 のすぐ北西に位置する。平面形は南北約 0.2m、東西約 0.3m の楕円形で、深さは約 0.2m である。埋土は褐色砂泥で、7 世紀の遺物がわずかに出土した。

土壙 2562 北西部北壁際で検出した。北側は調査区外にある。南北 9.3m 以上、東西約 4.7m の不整形な平面形で、深さ約 0.3m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、7 世紀の遺物が出土した。

土壙 2516 南東部南壁際で検出した。南側は調査区外にあるが、平面形は南北 3.6m 以上、東西約 3.8m の楕円形に復元できる。深さは約 1.2m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅱ期古段階の遺物がまとまって出土した。

土壙 2543 中央部北東寄りで検出した。南側は攪乱されるが、平面形は南北 2.5m 以上、東西約 2.2m の楕円形に復元できる。深さは約 0.3m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅱ期新段階の遺物が出土した。

土壙 2471 中央部南寄りで検出した。北西側は大きく攪乱される。南北 3.2m 以上、東西 4.6m 以上で、平面形は不明である。深さは約 0.2m である。埋土は黄褐色砂泥で、Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階の遺物が出土した。

土壙 2474 中央部南東寄りで検出した。攪乱が著しい。規模は南北 6.0m 以上、東西 7.0m 以上で平面形は不明である。深さは約 0.2m である。埋土は黄褐色砂泥で、Ⅲ期中段階の遺物が少量出土した。

註

- 1 遺構の中には複数の時期にまたがるものも含まれている。これらは必ずしも長期間にわたって 継続するものではなく、特に溝・柵は造り替えが行われた結果と考えている。
- 2 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- 3 本書では、土壌内部に壁状に石を積み上げた遺構を平面形・深さ・規模に関わりなく石室（いしむろ）と呼称する。機能は便所・水溜・地下式収納施設などが考えられている。なお、石組みの井戸との区別は、底面の検出高と曲物・木枠の痕跡により判断した。豊田裕章「関西における石積み土壌の諸問題」『関西近世考古学研究』II 関西近世考古学研究会 1992年などを参照した。
- 4 今回の調査で検出した柱穴には、①埋土に柱根の痕跡を残す掘立柱構造を示すもの、②柱穴底部に平坦な石を据えるもの、③平坦な石のみを据えるものがある。③は②の埋土が失われたものと考えられる。また②は石の存在を除けば①と同じ構造である。したがって、検出した柱穴はすべて掘立柱構造であったと判断することができる。

第4章 遺物

1 遺物の概要

調査では1区・2区併せて整理用コンテナに1661箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・骨角製品・木製品・動植物遺体などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が占め、次いで瓦類が多く、その他の種類は比較的少ない。^{註1}

調査では、第1面～第4面のそれぞれの遺構面で遺物を採集したが、遺構相互の重複が激しかったため、新しい時期の遺構埋土に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。

以下では、時代の古いものから順に、遺物の概要を述べる。なお個々の遺物の詳細については巻末の遺物観察表（付表1～57）に掲載した。

2 土器類

土器類は出土遺物の大部分を占め、時代ごとの変化が著しい。ここでは古墳時代～飛鳥時代、平安時代、鎌倉時代～室町時代、江戸時代に大別して、各時代を代表する遺構から出土した土器を紹介する。時代別の出土量では、平安時代が約2割、鎌倉時代～室町時代が約3割、江戸時代が約5割を占め、飛鳥時代以前はわずかである。なお、巻末に遺構ごとの出土遺物破片計数表（付表58～105）・土師器皿類口径分布表（付表106～125）を掲載した。^{註2}

(1) 古墳時代～飛鳥時代

1区溝 1765（図7-1・2、付表1・58） 古墳時代～飛鳥時代の土器類は、いずれも小破片で器種は土師器と須恵器に限られる。土師器は甕が多い。色調は橙色から淡褐色を呈する。須恵器は杯類(2)と壺・甕類がほぼ同量である。壺蓋(1)もある。7世紀に属する。

2区土壙 2562（図7-3～9、付表2・59） 土師器では甕の破片が多い。須恵器杯類では立ち上がり部をもつ杯身(3)が一定量を占める一方で、高台をもつ杯身(8)も含まれる。7世紀に属する。

2区土壙 2437（図7-10、付表3・60） 土器棺として用いられた土師器長胴甕(10)が1個体出土した。口縁部と底部・体部の縦半分が欠損する。色調はにぶい黄橙色、焼成は良好、胎土は雲母や砂粒を中量含む。6世紀末～7世紀前半に属する。

2区土壙 2558（図7-11、付表4・61） 土師器高杯(11)は破片が1箇所にとまって出土した。6世紀に属すると推定できる。

2区土壙 2434（図7-12、付表5・62） 土師器鍋(12)以外はすべて小破片である。7世紀に属すると推定できる。

(2) 平安時代

2区土壙 1730（原色図版1、図版20・79-13～27、付表6・63） 出土土器には大きな破片が多く、

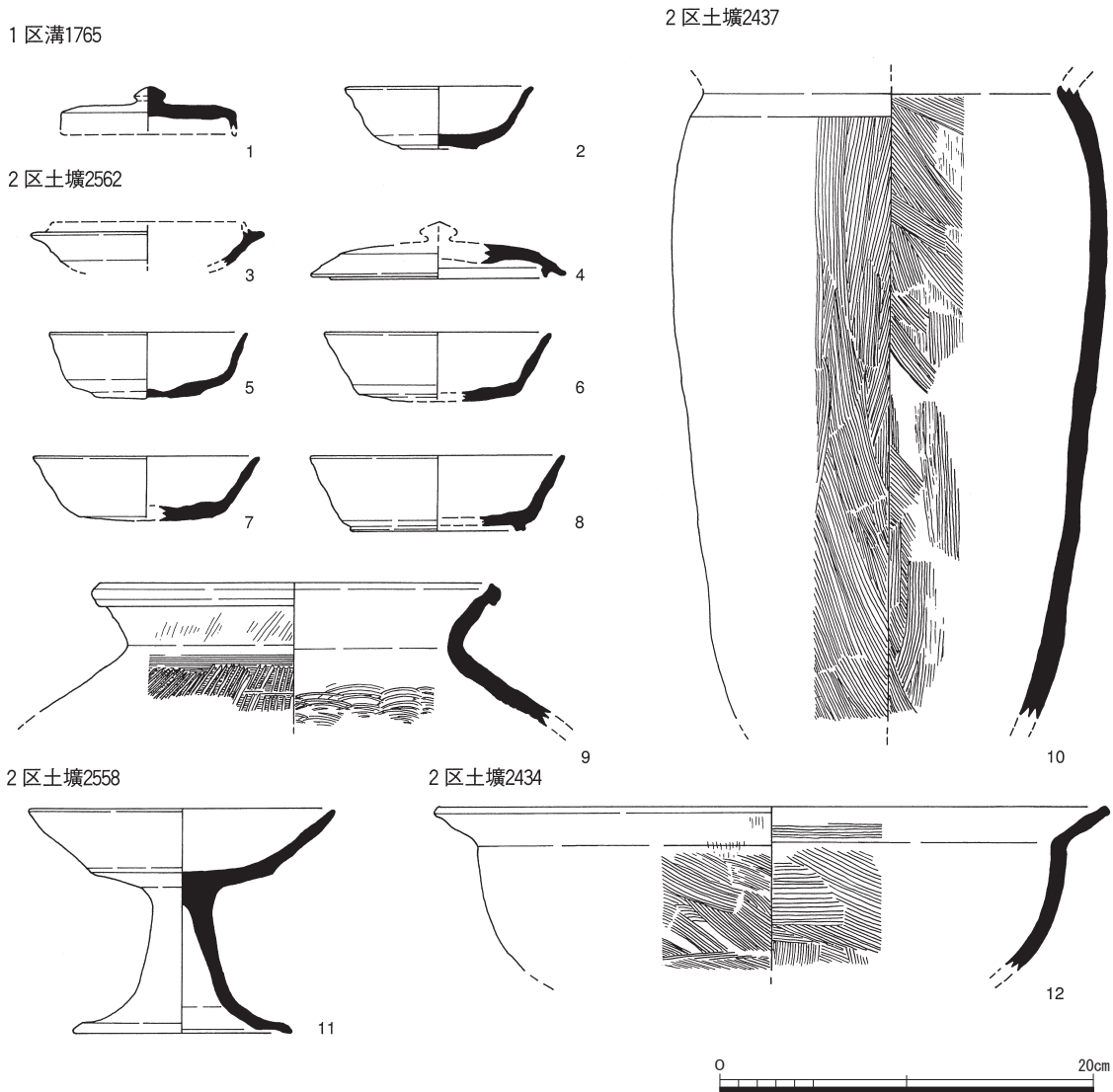


図7 1区溝1765・2区土壙2562・2区土壙2437・2区土壙2558・2区土壙2434出土土器実測図(1:4)

完形に復元できた個体が多い。土師器・須恵器が器種構成の大部分を占める。土師器は椀(13・14)・杯(15・16・21)・皿(17～20)の区別が明らかで、外面にケズリを施すもの(14～16・18)とナデで仕上げるもの(13・17・19・20)があり、前者よりも後者の割合が多い。色調は黄灰色～褐色で、焼成がやや軟質の個体もある。I期新段階に属する。^{註3}

1区井戸1421(原色図版1、図版21・80-53～87、付表9・64) 井戸の構築に関わる祭祀に伴って埋納された3個体の土器(53・54・68)は完形である。これら以外にも比較的大きな破片が出土した。また、井戸枠内と掘形の出土遺物の間には時期差が認められないため一括する。器種構成では黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器が一定の割合を占めるが、土師器、次いで須恵器の割合が多い。土師器では杯の小型化がすすむことにより、椀との区別がやや不明瞭となり、外面にケズリを施す技法もほとんど用いられなくなる。須恵器杯類も小型化がすすむ。黒色土器は黄橙色から黄褐色の色調を示し、胎土には多量の雲母を含む。丁寧な調整が行われる。灰釉陶器・緑釉陶器も成形・調整・施釉が丁寧に行われる。灰釉陶器は猿投産、緑釉陶器は洛北産である。II期古

段階に属し、なかでも古相の特徴をよく示す。

2区土壙 2516(図版 81-88 ~ 120、付表 10・65) 器種構成は井戸 1421 とほぼ同様である。土師器では杯と椀の区別が不明瞭になり、外面にケズリを施す技法は一部を除いて用いられなくなる。黒色土器では外面調整が簡略化される個体が増える(98・99)。須恵器では杯類の小型化がすすみ、杯蓋のつまみはなくなる(100・101)。灰釉陶器は猿投産、緑釉陶器は洛北産で、耳皿も少量含まれる。青磁壺は越州窯系の製品である。井戸 1421 出土土器と比較してやや新しい要素が増えるので、Ⅱ期古段階の新相に属する。また、承和二年(835)初鑄の承和昌寶が9枚共伴し、年代の上限の参考になる。

2区土壙 1965(図版 79-28 ~ 37、付表 7・66) 土師器椀・皿類では口縁端部の外反が目立つようになる(28 ~ 30)。灰釉陶器は猿投産、緑釉陶器には洛北産に加えて洛西産がある。Ⅱ期中段階から新段階に属する。

2区土壙 2543(図版 79-38 ~ 52、付表 8・67) 土師器椀・皿類には器壁が薄くなる個体が見られるようになる(41)。また、口縁端部の外反が目立つ個体が多い。黒色土器では内面のミガキが簡略化される個体がある(45)。須恵器では体部の丸みが目立つようになる(46 ~ 48)。Ⅱ期新段階に属する。

2区土壙 2020(図版 82-121 ~ 128、付表 11・68) 器種構成では黒色土器の割合が減少する。また須恵器でも杯類の割合が減少する。土師器には形態・技法に大きな変化はないが、黒色土器は椀の器高が低くなり、浅い形態を取る(124)。Ⅱ期新段階～Ⅲ期古段階に属する。

2区土壙 2471(図版 82-129 ~ 136、付表 12・69) 土師器椀・皿類は器高が低くなり、杯と皿の区別が不明瞭となる。また、器壁が薄くなる個体が多く、口縁端部の外反も大きくなる(129 ~ 131)。Ⅲ期古段階に属する。

2区土壙 2474(図版 82-137 ~ 144、付表 13・70) 器種構成では黒色土器の割合がさらに減少する。土師器では椀・皿類の器高がさらに低くなる(137・138)。灰釉陶器・緑釉陶器は調整技法が簡略化されるが、図示した香炉(144)は丁寧に造られており、やや古い特徴を示している。Ⅲ期中段階に属する。

2区井戸 2097(図版 82-145 ~ 152、付表 14・71) 出土土器は井戸枠内よりも掘形に多く含まれていた。土師器椀・皿類は器壁がきわめて薄く、2 ~ 3mm程度の厚さとなる。また、口縁端部の外反がさらに強くなると同時に、内上方への肥厚もすすみ、全体的に強く屈曲した形態を示すようになる(145)。高杯はほとんどみられない(146)。Ⅲ期中段階に属する。

1区土壙 1435(図版 82-153 ~ 159、付表 15・72) 土師器椀・皿類は小型化がすすみ、器高が浅く器壁が薄い。また口縁端部が強く屈曲するなど、Ⅲ期の典型的な特徴を示す(153 ~ 155)。黒色土器は調整の簡略化がすすみ、この段階には微量となる(157)。青磁椀は越州窯系の製品である。Ⅲ期中段階に属する。

2区土壙 1840(図版 83-160 ~ 174、付表 16・73) 器種構成では土師器の割合が増加するのに対して、須恵器の割合が減少する。また、緑釉陶器がこの段階頃には少なくなる一方で、中国

産の磁器(173・174)が増加するようになる。土師器では小型皿の器壁が厚くなる(160～165)。大型皿は口縁端部が小さく外反する器形が大部分を占める。口縁部の横ナデは強く2段階に施されることが多く、痕跡が口縁部外面に凹凸となって明瞭に観察できる(166～169)。図示していないが、同様の形態・技法で製作された小型皿も少量存在する。色調・焼成・胎土には変化がない。白色土器(170)は白色～乳白色を呈する精良な胎土、ロクロによる成形調整、無施釉・低火度焼成を特徴とする。IV期古段階に属する。

2区土壙 1844(図版 83-175～184、付表 17・74) 器種構成では須恵器杯類が含まれなくなる一方で、瓦器椀が出現する。土師器では口縁部が外反する小型皿が増加する(181)。また、口縁端部が強く屈曲する小型皿の器壁がさらに厚くなる(175～180)。端部が内傾して受け皿形の皿へ変化する傾向を示す個体もある(178)。IV期中段階～新段階に属する。

2区土壙 1217(図版 83-185～207、付表 18・75・106) 土師器は口縁端部が強く屈曲する小型皿(185～192)、口縁部が外反する小型皿(193～196)、大型皿(197～200)の組み合わせとなり、少量ながら特大型の深い皿もある(201・202)。口縁端部が強く屈曲する小型皿は、口縁部が外反する小型皿よりも口径が小さい。いずれの器形も浅い黄橙色を中心とする色調を示すが、一部に白色の精良な胎土で製作した個体がある(200・202)。これらの胎土は白色土器(203・204)の胎土に近い。須恵器鉢は東播磨産の製品が増加する。また、灰釉陶器は施釉される個体が減少し無釉化がすすむ。無釉化したものは以下では「灰釉系陶器」と呼称する。IV期の新段階に属する。

2区土壙 1553(原色図版 2、図版 22・84-208～264、付表 19・76・107) 出土土器は時期的にまとまりがよく、完形に近い状態に復元できた個体が多いことから、一括投棄されたと推定できる。器種構成では土師器の割合がさらに増大する一方で、白色土器・中国製白磁の割合が目立つ。土師器には口縁部が強く屈曲する小型皿(209～216・238～240)、口縁部が外反する小型皿(217～226・241～246)、大型皿(227～234・247)、特大型皿(235～237)がある。口縁部が強く屈曲する小型皿の割合は減少する。また、それぞれの器形で白色の精良な胎土で製作した個体が含まれる(238～247)。これらと黄橙色系の色調の土師器皿には形態・手法・口径の相違はない。白色土器の器形は多様で椀(251・252)・皿(248～250)・盤(254)・高杯(253)・壺(255・256)がある。また、中国製白磁にも類例の少ない器形が含まれる(258・260)。楠葉型瓦器椀(257)は初期(Ⅰ-2期)の特徴を示している^{註4}。IV期新段階に属する。

2区土壙 1990(図版 85-265～279、付表 20・77) 土師器では口縁端部が強く屈曲する小型皿がさらに減少し、受け皿形の小型皿が出現する。受け皿形の小型皿はIV期の口縁部が強く屈曲する小型皿から変化した器形である。また、小型皿・大型皿でIV期では外反する口縁部が内湾するようになる。V期古段階に属する。

2区土壙 1849(原色図版 2、図版 23・85-280～290、付表 21・78) 土師器は口縁部が強く屈曲する小型皿がなくなり、受け皿形の小型皿、口縁部が内湾する小型皿(280～287)・大型皿(280～287)の組み合わせとなる。V期古段階～中段階に属する。

2区土壙 1039(原色図版2、図版23・85-291～304、付表22・79) 受け皿形の小型皿が徐々に増加する(291・292)。小型皿では器高がやや低くなり、口縁端部の横ナデを1段階で仕上げる個体がある(294～296)。大型皿では器高の低い個体が増える(299・300)。また、底部から口縁部への屈曲が強い個体も現われる(298)。瓦器椀(303・304)は大和型の古い特徴(Ⅱ-B期)を示している。V期の中段階～新段階に属する。

2区土壙 1851(図版85-305～323、付表23・80・108) 器種構成ではⅦ期以降急増する白色の胎土で製作される皿が少量含まれていることが注目できる。土師器では受け皿形の小型皿(305～308)の割合が増加する。小型皿は器高が低く、口縁部のナデが1段階の個体が増加する(309～318)。大型皿では底部から口縁部への屈曲が強い個体が増える(321・322)。いずれの器形も小型化がすすんでおり、V期新段階～Ⅵ期古段階に属する。

(3) 鎌倉時代～室町時代

1区土壙 1361(図版24・86・図28-324～328、付表24・81) 1区土壙1361からは土師器小型皿が出土した。皿の器壁はやや薄く、器高も低い。口縁部のナデを2段階に施すものが2個(325・327)、残りは1段階である(324・326・328)。少量の土師器から判断することは難しいが、Ⅵ期古段階～中段階に属する。

2区土壙 1354(図版24・86-329、付表25・82) 瓦器壺の他に土師器皿や瓦が出土したが、いずれも細片である。瓦器壺は扁平で歪みが強く、調整も粗雑である。類例は少ないが、Ⅵ期に属すると推定できる。

2区土壙 1362(図版24・86-330、付表26・83) 瓦器壺と土師器皿の細片のみが出土した。瓦器壺は土壙1354出土の壺と比較して、形態が異なり、丁寧な手法で造られる。土壙1354と同じ性格の遺構であることから、Ⅵ期に属すると推定できる。

1区土壙 550(原色図版3、図版24・86-331～352、付表27・84・109) 器種構成では瓦器鍋・釜類と焼締陶器甕類の出現が注目できる。^{註5}「焼締陶器」の呼称は表面が赤褐色を中心とする色調で、施釉していない陶器を総称して用いる。瓦器と焼締陶器は徐々に器種構成の割合を増加させる。土師器ではV期にみられた口縁部の内湾傾向が全体に弱くなる。土師器甕(344)は減少し、土器の煮沸具は瓦器の鍋・釜類に交替して行く。青磁椀(352)は龍泉窯系の製品である。Ⅵ期古段階に属する。

1区土壙 1477(図版86-353～366、付表28・85) 土師器では全体に小型化がすすみ、小型皿では口縁部の横ナデが1段階の個体が大部分を占める(355～357)。大型皿では口縁部の内湾傾向を残す個体も器高が低くなる(361～363)。底部から口縁部が強く屈曲する個体では口縁部がまっすぐ外上方に広がり、口縁部の横ナデも1段階が主流となる(364～366)。Ⅵ期中段階に属する。

2区土壙 1994(図版24・86-367～380、付表29・86) 土師器では白色の胎土で製作した皿が増加する。受け皿形の皿(367・368)はこの器形では大きな部類になり、厚手で調整も丁寧である。

色調は橙色、良質な胎土である。受け皿形の皿の割合が徐々に減少する中、このような傾向は特異である。小型皿では口径の小型化がさらにすすみ、口縁部のナデはほとんどの個体が1段階となる。Ⅵ期中段階～新段階に属する。

2区土壙 940(図版 87-381～401、付表 30・87・110) 器種構成では白色の精良な胎土で製作した土師器皿が急増することが大きな変化として捉えられる。従来の土師器とは色調が明瞭に異なり、形態にも相違が大きい。以下では従来の土師器の系譜につながる橙褐色の土師器を「赤色系土師器」、この時期に増加する白色の土師器を「白色系土師器」と呼称する。赤色系土師器には小型皿(381～385)・大型皿(391～394)があり、受け皿形の皿はなくなる。小型皿は器高が低い扁平な形態を取り、やや歪みが目立つ個体もある。大型皿では小型化がすすみ、口縁部の内湾傾向を残す個体もわずかに含まれるが(391)、多くは外反するようになる(392～394)。白色系土師器皿は白色から微妙に黄色・橙色を帯びた乳白色の色調を示す。焼成は良好、胎土はわずかに砂粒や細かい雲母を含み精良である。器形には小型皿(386～390)と大型皿(395～398)がある。赤色系土師器に比べると大型・小型とも器高が高いという形態の違いがある。また、手法の手順は共通するが、白色系土師器の方が調整が全体的に丁寧であることに違いがある。また、白色土器がほとんどなくなることも器種構成の変化として指摘できる。Ⅶ期古段階に属する。

2区土壙 2023(図版 87-402～425、付表 31・88・111) 土師器では白色系土師器の割合が増加する。白色系土師器皿類には受け皿形の皿(416)があるが類例は少ない。小型皿では底部中央がオサエにより強く突出しいわゆる「ヘソ皿」と呼ばれる形態の個体が増加する(409～411)。大型皿には口径がやや小さいものも含まれる(417～419)。また、器壁が薄いために口縁端部が微妙な屈曲を示す個体もある(422・423)。灰釉系陶器の椀(425)は美濃産の特徴を示す。Ⅶ期中段階～新段階に属する。

2区溝 1319(図版 87-426～449、付表 32・89) 土師器皿を中心に多量の土器が出土した。器種構成では施釉陶器が含まれることが注目できる。黄緑色の灰釉を施した瀬戸産の四耳壺がある。灰釉陶器・緑釉陶器も広義の施釉陶器ではあるが、以下では、いわゆる古瀬戸以降、意図的に施釉した陶器を施釉陶器と呼称する。土師器では赤色系土師器の大型皿の口縁部上半の外反が強くなる(436～439)。白色系土師器の大型皿は、土壙 2023 出土土器に比べると厚手の個体が多いため、口縁端部のナデによる屈曲は目立たない(440～443)。瓦器は椀(446～447)・輪花椀(444・445)とも小型化がすすみ、内面のミガキが粗くなる。446は和泉型(Ⅳ-3期)、447は楠葉型(Ⅳ-1期)の特徴を示す。また、445の底部内面には細かい暗紋で葉脈状の紋様が描かれる。類例はみあたらない。青磁椀は龍泉窯系の製品である(449)。Ⅶ期新段階に属する。

2区土壙 1442(原色図版 3、図版 25・88-450～508、付表 33・90・112) 出土土器は時期的にまとまりがよく、完形に近い状態に復元できた個体が多い。赤色系土師器は小型皿(450～454)・大型皿(474～485)ともに小型化がすすむ。赤色系土師器の大型皿の中には底部外面に板の圧痕を残す個体があり(477・478)、成形から乾燥までの工程で行われた作業の痕跡を示している。白色系土師器の割合は増加し耳皿(455)・受け皿形の皿(456・457)・小型皿(458～473)・

大型皿(486～497)がある。耳皿は相対する口縁部の2箇所を内側に強く折り曲げた器形である。受け皿形の皿は口縁部の内傾が少し弱い。これらは類例の少ない器形であるが、胎土の特徴は他の白色系土師器と一致する。小型皿には底部が平坦な個体(458～461・470～473)と底部中央を突出させる個体(462～469)がある。前者にはさらに浅い形態(458～461)と深い形態(470～473)がある。大型皿は小型化がすすむ。瓦器碗(504)は楠葉型(Ⅳ-3期)の特徴を示す。Ⅶ期新段階に属する。

2区土壙 1330(図版 89-509～564、付表 34・91・113) 出土土器は時期的にまとまりがよく完形に近い状態に復元できた個体が多い。土師器では赤色系土師器の割合が白色系土師器に比して少ない。赤色系土師器の大型皿は底部中央がやや厚くなる一方、底部から口縁部の境が窪んで薄くなる傾向があり、口縁部上半の外反も強い(534～537)。白色系土師器は全体的に器壁が薄い。小型皿の多くは強弱はあるものの底部中央が突出する形態を示す(514～531)。大型皿では底部から口縁部への屈曲が緩やかな個体に口径・器高が比較的小さいものが多く、強い個体に大型のものが多い傾向にある(538～557)。中には口縁部下半の外面に爪で押えたような圧痕が一周している個体があり(542)、製作段階における何らかの技法の痕跡と推定できる。また、瀬戸内地方からの搬入品が含まれている(512・513)。白色土器には少量の皿(511)と高杯(558)がある。瓦器には碗(559・560)、鍋・釜類(561～563)がある。碗は高台が形骸化し調整の簡略化がすすむ。560は楠葉型の末期の特徴(Ⅳ-1期)を示す。561は把手の付く鍋で、把手は同時期の他の遺構から出土した類例から復元した。562・563は炭素の吸着が少なく、黄橙色の色調を示す。緑釉の合子(564)は中国南部の窯の製品と推定できる。土壙 1442 出土土器と同じくⅦ期新段階に属するが、器種構成や土師器皿にやや新しい特徴を示す。

2区土壙 699(図版 90-565～582、付表 35・92) 器種構成では白色土器がこの段階以降完全になくなる。赤色系土師器の大型皿は口縁部上半の横ナデが強くなり、外面に小さい稜がめぐる個体がある(576・578)。白色系土師器は小型皿・大型皿ともに小型化がすすむ。Ⅷ期古段階に属する。

2区土壙 1975(図版 90-583～601、付表 36・93・114) 器種構成では瓦器碗がなくなり、鍋・釜類と火鉢が中心となる。赤色系土師器の小型皿は大型皿に準じて、底部中央付近が厚く、口縁部の境が窪んで薄くなる傾向がある(583～587)。口縁部が強くと外反する個体もある(583・585・587)。大型皿では口縁部外面の横ナデによる稜が鋭い(594～596)。593は大和産のいわゆる「赤土器」^{註6}である。白色系土師器は器壁の厚い個体が多い。Ⅷ期中段階に属する。

2区土壙 1870(原色図版 4、図版 26・90-602～625、付表 37・94・115) 土師器では白色系土師器の色調の変化が指摘できる。白色に近い色調を示していた胎土が橙色を帯びようになり、一部の底部破片では赤色系土師器との区別がつきにくいものがある。瓦器の火鉢(622)は大和産である。焼締陶器は出土量が増加し甕には備前産(623)や常滑産(624)がある。施釉陶器の壺(625)は中国製品を模倣した瀬戸産の四耳壺である。施釉陶器では瀬戸産の褐釉の天目茶碗が出土した。Ⅷ期中段階～新段階に属する。

2区土壙 1176(原色図版4、図版27・91-626～660、付表38・95・116) 器種構成では赤色系土師器の割合が減少し、さらに小型化がすすむ(626・644～647)。一方、白色系土師器では色調・器形の構成・形態に大きな変化が起こる。まず、色調では従来の白色を中心とした色調から橙色が強くなり、浅い黄橙色や淡い橙色を示すようになる。これは土壙1870出土土器にも先駆的に現われており、色調の橙色化がさらにすすむ。また、器形は小型皿(626～635)・中型皿(636～643・648～651)・大型皿(652～660)に分けられ、いずれも器壁が厚くなる。大型皿は直径15cm以上で、Ⅷ期までの大型皿と比較して隔絶して大きく、口径に比して器高が低いので、全体的に扁平な形態を示す。また、底部から口縁部の屈曲部分のナデが強いため底部側に低い粘土の盛り上がりができる。中型皿はⅧ期までの大型皿の口径に相当し、中にはⅧ期の特徴をもつ個体(648～651)も含まれるが、数は少ない。多くの中型皿は大型皿と共通する特徴・手法をもつ(636～643)。小型皿には底部が平坦な個体(631～635)と底部中央が突出する個体(627～630)がある。中型皿と同様、Ⅷ期の特徴をもつ個体(627・628)が含まれるが、多くは大型・中型の中心的な皿と同様の新しい形態である。Ⅷ期の特徴を残しつつ、白色系土師器皿に大きな変化がみられるので、Ⅸ期古段階に属する。

2区土壙 1922(図版91-661～686、付表39・96・117) 白色系土師器の皿では土壙1176出土土器に含まれていたⅧ期の特徴を示す個体はほとんどみられない。直径20cm以上の個体がある一方で、全体的に器高が低くなり、より扁平な形態を示す。Ⅸ期中段階～新段階に属する。

2区井戸 2098(図版91-687～694、付表40・97) 井戸の埋土からまとまって出土した。しかし、出土状況からは意図的に埋納された様子は看取できなかった。Ⅸ期新段階に属する。

2区土壙 1148(図版92-695～719、付表41・98・118) 器種構成ではきわめて少量であるが、施釉陶器が安定して一定の割合を占めるようになる。また、中国製の青花碗が一片含まれている。赤色系土師器には目立った変化はない。白色系土師器では器高がさらに低くなる。小型皿や中型皿ではやや形態の異なる個体も含まれる(704・715・716)。Ⅸ期新段階に属する。

2区土壙 136(図版92-720～735、付表42・99・119) 白色系土師器の皿は小型化がすすむ。小型皿では底部中央を突出させる個体は少ない(720)。Ⅸ期新段階～Ⅹ期古段階に属する。

2区土壙 1782(原色図版5、図版28・92-736～775、付表43・100・120) 白色系土師器は、大型皿の扁平化が著しい。また、この段階では類例の少ない小型の耳皿(736～738)や受け皿形の皿(739～746)がある。Ⅹ期古段階に属する。

(4) 江戸時代

江戸時代になると土器の出土量が飛躍的に増大する。ところが、遺跡の中では上層に位置するため、特に明治時代以降の攪乱を強く受け、江戸時代中期以降の土器については良好な一括資料を得ることができなかった。

1区土壙 353(原色図版5、図版29・93・94-776～841、付表44・101・121) 器種構成にきわめて大きな変化が起こる。Ⅹ期古段階まで出土土器の大部分を占めていた土師器皿類の割合が

減少し、代わって焼締陶器・施釉陶器・磁器の割合が増加する。土師器には皿類(776～801)、鍋(802)、釜、小型壺がある。皿類は小型皿(776～781)・中型皿(782～789)・大型皿(790～801)に分けられる。小型皿は赤色系土師器皿が変化した器形で、口径・器高とも著しく縮小した。中型皿は白色系土師器の中型皿が変化した器形で、口径が縮小し、器壁が厚くなる。製作手法には変化がない。大型皿は白色系土師器の大型皿が変化した器形で、口径が縮小する。製作手法には変化がないが、屈曲部分内面の横ナデは強く、圏線状のくぼみとなる。これらの皿類はいずれも褐色から黄橙色の色調を示し胎土には少量の雲母や砂粒を含む。中には口縁端部に煤が付着することから、灯明皿として使用された個体もある(791・794)。鍋にはやや深いもの(802)とやや浅いものがある。瓦器では火鉢の割合が増加するとともに、灯火具(803)が出現する。また、甕類が少量含まれる。大和産が多い。焼締陶器は器形が多様となり量も増える。鉢には信楽産(804)と丹波産(805)の播鉢がある。使用により播り目が磨滅した個体も多い(805)。盤は丹波産がある(806)。壺は備前産(807・808)・丹波産(809)・信楽産(810)がある。甕は常滑産と備前産がある。810は高温で焼成したため胎土に含まれる長石がガラス状に熔融し、外面に自然釉が流れるようにかかる。焼締陶器の産地では信楽・丹波が大部分を占め、他の産地は少ない。施釉陶器は器形・技法に大きな変化が起こる。器形には大小の椀(811～821)・皿(822～824)・大小の鉢(825～828)・盤(829)・蓋(830)・壺(831～833)がある。瀬戸美濃産(812・815～824・830・831)と唐津産(811・813・814・825～829・832)があり、瀬戸美濃産の割合がやや多い。瀬戸美濃産の施釉陶器はわずかに黄色を帯びた白色の胎土を特徴とし黄瀬戸(815)や織部(820・821・830)の意匠で製作した個体がある。819は部分的に緑釉を施す類例の少ない意匠である。830は香合の蓋である。

831は茶入れで丁寧に造られ焼成も良好である。一方、唐津産の施釉陶器は赤褐色の粗い胎土に灰釉を施す。褐釉で紋様を描く個体も多い(814・827)。丹波産の施釉壺(833)は類例が少ない。磁器はすべて輸入品で肥前産はまだ含まれていない。朝鮮半島産の白磁(834)、景德鎮窯系の青花(835～837)、漳州窯系の青花(838・839)がある。焼塩壺(840・841)も出土した。今回出土した江戸時代の土器の中では最も古い、XI期中段階古相に属する。

1区土壙768(原色図版6、図版30・31・95・96-842～894、付表45・102・122) 土師器皿類はわずかに小型化がすすむ(843～854)。鍋にはやや深いもの(855)とやや浅いもの(856)がある。釜は体部外面にタタキの痕跡が残るので、大和産と推定できる(857)。瓦器には釜(858)・火鉢(859～861)・灯火具(862・863)があり、大和産の特徴を示す。焼締陶器には鉢(864・865)・盤・壺・甕がある。鉢には丹波産(864)・信楽産・備前産(865)の播鉢がある。盤は丹波産、壺は備前産がある。この遺構出土の焼締陶器では備前産の占める割合が大きい。施釉陶器には大小の椀(867～879)・皿(880～882)・大小の鉢(883～891)・壺(892)・灯火具(893・894)などがある。瀬戸美濃産(873～879・881・882・889～891・893・894)と唐津産(867～872・880・883～888・892)があり、唐津産の割合がやや多い。椀には京都産の軟質施釉陶器の破片が2点ある。また、892の壺は高取産の可能性もある。893は灯火具の蓋、894は杯部中央の孔に釘を差し込み、

燭台として使用したと考えられる。磁器はすべて中国産で景德鎮窯系と漳州窯系の製品がほぼ同量ある。XI期中段階に属するが、土壌 353 よりやや新しい特徴を示す。

2区土壌 776(原色図版 6、図版 31・32・97・98-895～958、付表 46・103・123) 出土土器は完形に近い状態でまとまって出土した。土製品・石製品・金属製品にも多様な遺物があり、今回の調査の中で江戸時代前期の特徴を最もよく現わしている一括遺物である。器種構成では瓦器・磁器の割合がやや高い特徴がある。土師器皿類には小型皿(899～904)・中型皿(905～908)・大型皿(909～916)に加えて特大型皿(917・918)がある。特大型皿は、大型皿に比べるとやや器壁が厚い。小型の壺(895～898)はいわゆる「つぼつぼ」と呼ばれる器形で、VI期～VIII期の白色系土師器にみられた精良な胎土を用いる。また、きわめて精良な白い胎土で造られた皿(921)がある。低火度釉を施す陶器の素地である。瓦器には蓋(922)・火鉢(923・926)・灯火具(924)の他、十能や甕がある。922は火鉢の蓋、923は香炉であろう。瓦器の大部分は大和産であるが、923の花弁の印紋などは類例がなく、別の産地の製品である可能性がある。焼締陶器には鉢・盤・壺がある。播鉢は信楽産・丹波産(927)・備前産、盤は丹波産、壺は備前産・信楽産(928)がある。信楽産の壺・甕類の割合が多い。施釉陶器には大小の椀(933～941)・大小の皿(941～946)・大小の鉢(947～954)などがある。瀬戸美濃産(933～935・938～941・943～946・953・954)は椀・皿が多く、唐津産(936・937・942・947～952)は鉢が多い。また、京都産の軟質施釉陶器壺(955)がある。磁器では肥前産の椀が含まれる(956・957)。以下では肥前産の磁器を「伊万里」と呼称する。しかしながら、磁器の大部分は引き続き中国産が占め、景德鎮窯系・漳州窯系の青花がほぼ同量出土した。くすんだ黄緑色の色調を示す青磁椀(958)は中国南部もしくは東南アジアの産地で製作したものであろう。XI期中段階に属し土壌 768 とほぼ同時期である。

2区土壌 813(原色図版 7、図版 33・34・99・100-959～1022、付表 47・104・124) 器種構成では磁器の割合が増加している。土師器では皿類にわずかに小型化がすすむ(959～977)。鍋には口縁端部に平坦な面を造る個体(981)があり、新しい特徴を示している。焼締陶器の鉢には丹波産(985)・信楽産(984)の播鉢があり、口縁端部の形態が変化するとともに、播目の間隔が密になる。焼締陶器の産地では信楽・丹波が多く、備前の割合は少ない。施釉陶器には大小の椀(993～1003)・皿(1004～1009)・大小の鉢(1010～1018)・壺(1019・1020)などがある。瀬戸美濃産(994・995・998～1003・1005～1009・1013・1015～1020)は椀・皿の大部分を占め、唐津産(993・996・997・1004・1010～1012・1014)は鉢が多い。1009は御深井の意匠の皿である。磁器は伊万里の割合が増加するが、まだ多くを中国産が占める。景德鎮窯系の青花(986・991・992)が漳州窯系の青花(987～990)よりやや多い。XI期新段階に属する。

1区土壌 190(原色図版 7、図版 34・101-1023～1059、付表 48・105・125) 器種構成では磁器の割合がさらに増加する。土師器では大型皿の屈曲部内面のくぼみが工具を用いて加工した明瞭な沈線になる(1033～1036)。鍋は浅くなり、口縁端部は下方に尖りようになる(1037)。また、短く直立する口縁部を備えた器形も出現する(1038)。焼締陶器では丹波・備前産の製品も含まれるが、信楽産が多くを占める。施釉陶器では灯明皿が現われる(1046・1047)。また、瀬戸美

濃産・唐津産 (1042・1048) に加えて、いわゆる京焼風の施釉陶器が含まれる (1043～1047・1049)。磁器は大部分が伊万里となる (1050～1059)。XII期新段階に属する。

(5) その他の出土土器

上記の遺構出土土器以外で、重要と判断した土器をここに掲載する。古墳時代以前の土器は一部を除いて第4層もしくはより新しい時代の遺構から出土した。

縄紋時代 (図版 35・102-1060～1067、付表 49) 縄紋土器はすべて破片で、1区・2区の各所から出土した。浅鉢 (1061) と深鉢 (1062～1067) がある。いずれも縄紋時代晩期の土器で、1061～1065 は篠原式新段階、1066・1067 は口酒井式の新しい段階に属する。^{註7} 1062・1063 はやや古い要素を備えるので篠原式中段階にまでさかのぼる可能性もある。なお、類例がない皿形の土器 (1060) がある。色調はにぶい橙色を示し焼成は良好、胎土には多量の雲母と砂粒を含む。全体的に歪みが目立つ。X期の遺構から出土した。縄紋時代に属するか不明の土器であるが、ここに掲載しておく。

弥生時代～古墳時代初頭 (図版 35・102-1068～1086、付表 49) 弥生土器の多くも小さな破片で、1区・2区の各所から出土した。庄内式併行期の土器もここにまとめる。器形には壺 (1068～1072)・甕 (1073～1081)・高杯 (1082～1085)・器台 (1086) がある。甕は地域色がよく現われ、1075・1076 は畿内系、1073・1074・1077～1079 は近江系の特徴を備える。また、1080・1081 は小破片ながら東海系のいわゆる「S字状口縁」の甕の口縁部と肩部の破片である。時期的には1070・1073～1076・1084 が弥生時代中期、1068・1072・1078・1082・1083 が弥生時代後期、それ以外の土器が弥生時代後期～庄内式併行期に属する。

古墳時代 (図版 103-1087～1095、付表 49) 古墳時代の土器には土師器と須恵器があり、2区土壇 2437・2区土壇 2558 出土土器 (10・11) 以外は、1区・2区の各所から出土した。土師器には高杯と甕があるが、小破片のため図化していない。須恵器には杯蓋 (1087・1088)・杯身 (1089・1090)・高杯 (1091)・鉢 (1092)・壺・甕 (1093～1095) がある。1087 は TK208 型式、1088 は TK47 型式、1089・1090 は TK10 型式、1091 は TK208 型式～TK47 型式に属する。^{註8} 1092～1095 は古墳時代後期に属すると考えるが、器形・調整の特徴のみから時期を限定することは難しい。

平安時代 (図版 103-1096～1100、付表 49) 平安時代の土器は二彩陶器 (1096)・緑釉陶器 (1097・1098)・磁器 (1099・1100) を掲載した。1096 は火舎足部の破片である。二彩陶器は他に椀・小型壺の口縁部の破片が1点ずつ出土した。いずれもI期に属する。1097 は香炉で2区土壇 2474 出土の香炉 (144) より新しい特徴を有する。1098 は甑でI期に属すると推定した。1099 は磁州窯系の壺の破片で、鉄釉をかけた後、様式化した蓮弁紋を掻き落とし技法で描き、緑釉を施す。二次焼成を受け表面が損傷する。1100 は青白磁の壺で蓮弁を陰刻で表現する。ともに中国宋代の製品である。

鎌倉時代～室町時代 (図版 103・104-1101～1111・1133、付表 49) 鎌倉時代～室町時代の土

器は土師器(1102)・白色土器(1101)・瓦器(1103～1105)・灰釉系陶器(1106～1108)・焼締陶器(1133)・施釉陶器(1109～1111)を掲載した。1101はⅧ期の遺構から出土した。1102は赤色系土師器と同じ胎土で造られる。1103は最も小さい瓦器の小型釜で、Ⅷ期の遺構から出土した。1104は和泉型の特徴を示す瓦器椀(Ⅲ-2期)で、焼成後記号が陰刻される。1105は外面に赤漆と黒漆による装飾がある火鉢で、剥落が著しく紋様の復元は不可能だが、瓦器の装飾法の一つとして紹介した。1106は入れ子の皿である。1107は内面に細かく針葉樹状の紋様を描く椀である。1108は2区土壌1849出土の鉢(290)よりも新しい特徴を示す。1109～1111はいずれも瀬戸産の灰釉を施す施釉陶器である。1109は小型壺でⅧ期の遺構から出土した。1110は平椀でⅨ期の遺構から出土した。1111は鉢でⅦ期の遺構から出土した。1133は備前産の大型甕でⅦ期中段階の遺構から出土した。2個体以上の破片が混在していたので、図示した上半部と下半部は別個体の可能性も残る。

江戸時代(図版104・105-1112～1132・1134～1152、付表49) 江戸時代の土器は土師器(1112～1121)・瓦器(1122～1126)・焼締陶器(1127～1132)・施釉陶器(1134～1146)・磁器(1147～1152)を掲載した。1115のみⅤ期に属し、他はすべてⅪ期～Ⅻ期の遺構から出土した。土師器には焼成後種々の加工装飾が施される(1112～1116・1119・1120)。1117は1118と同じ遺構から出土した。胎土は小型壺と同一であり、小型壺の蓋の可能性もある。1122・1123は火消し壺として用いられたものであろう。1126は2区第1面で検出した土壌264に据え付けられた大型甕で、1124とともに大和産である。焼締陶器にはヘラ記号を施す個体もある。1127は信楽産の水指、1128は信楽産の盤、1130・1131は備前産の小型壺である。1129は丹波産の盤で口縁部を折り曲げて十二弁の花弁を表現している。1132は信楽産の播鉢で口縁部外面に墨書がある。1134～1140は瀬戸美濃産の施釉陶器である。1134は白色釉の椀、1135は鼠志野の鉢、1136は志野の鉢、1137は織部の鉢、1138は織部の茶椀、1139・1140は織部の皿である。1141～1146は唐津産の施釉陶器である。1141は水指の蓋、1142は茶椀、1143は深い鉢、1144は茶入れ、1145は壺、1146は大型鉢である。1147～1149は伊万里の磁器で、1147は壺、1148は釉裏紅で紋様を描いた皿、1149は青磁の皿である。1148は朝鮮産または中国産の可能性もある。1150～1152はいずれも漳州窯系の磁器である。

3 瓦類

瓦(図版36・37・106・107-1153～1181、付表50) 瓦は、1区第3面土壌1275や2区第3面土壌1442からまとまって出土した。

1区土壌1275出土瓦は軒瓦8種36点で、他に丸瓦・平瓦が出土した。軒丸瓦は巴紋(1153～1158)で、軒平瓦は剣頭紋系(1159・1160)である。すべて京都産である。時期は伴出した土器からⅥ期に属する。

2区土壌1442出土瓦は軒瓦13種82点で、他に丸瓦・平瓦が出土した。軒丸瓦は蓮華紋(1167～1169)と巴紋(1170～1174)で、軒平瓦は剣頭紋系(1175～1179)である。すべて京都産であ

る。時期は伴出した土器からⅦ期新段階に属する。大覚寺御所跡Ⅱ期瓦群と同範軒瓦があり、同時期に比定できる。^{註9}

2区建物825出土瓦は丸瓦(1180)・平瓦(1181)がある。いずれも建物825に使用した瓦である。調整は丁寧で、燻して黒色化する。

1161～1164は金箔瓦である。軒丸瓦には鳥紋(1161)・桐紋(1162)があり、軒平瓦は唐草紋(1163・1164)である。瓦当面に金箔を押し込んだものであるが、金箔の残りは非常に悪い。

1165・1166は滴水瓦である。軒丸瓦・軒平瓦ともに巴紋である。

Ⅷ期以降の遺構から出土する瓦は、ほとんどが棧瓦で瓦葺の建物が普及したことを反映する。火災の痕跡を示す焼け歪んだ瓦も多い。

甗 瓦の他に甗が出土したが、いずれも小破片のため図示していない。最も古いものはⅥ期の遺構から出土し、全体としてはⅦ期とⅪ期の遺構からの出土が目立つ。甗には①四角形または二等辺三角形をした板状のもの、②1箇所もしくは2箇所に孔を開けた煉瓦状のもの、③円筒を分割した形状のものがある。①は建物の床面に敷いたと考える。②は何らかの構築物の素材に用いられたと考える。③はⅧ期～Ⅹ期のもので漆喰とともに井戸の構築材に使われていた。

4 土製品

土錘(図版38・108-1182～1185、付表51) 様々な大きさの個体が4個体出土した(1182～1185)。いずれもⅥ期～Ⅶ期の土壌から出土したが、形態の変化に乏しいものなので時期を限定することは難しい。

土馬(図版38・108-1186～1189、付表51) 4個体のいずれもが破片である(1186～1189)。1186・1189はⅡ期古段階の井戸・土壌、1187は第4層から出土した。一方、1188はⅨ期の土壌から出土した。他の3点と比べて小型で、調整が粗雑である。

紡錘車(図版38・108-1190～1192、付表51) 3個体を確認した(1190～1192)。1190はやや粗い粘土を用いて成形する。1191はⅠ期の土師器皿、1192はⅨ期の土師器皿を加工する。1190はⅤ期～Ⅶ期の柱穴、1191はⅡ期の土壌、1192は第1層から出土した。

おはじき(図版38・108-1193～1206、付表51) おはじきは土師器皿を丸く加工して製作した個体が多い(1193～1204)。1204は典型的な例で、Ⅸ期～Ⅹ期の白色系土師器皿を丸く打ち欠き側面を削って仕上げる。1区土壌569からはおはじきが34点以上まとまって出土した。掲載したものはその一部である(1193～1203)。1201が赤色系土師器皿で、それ以外はすべてⅨ期の白色系土師器皿を加工する。文字を陰刻する3点(1193～1195)の他に片面に「+」の記号を陰刻する個体が19点あった。記号の方向は一定していない。陰刻がない個体も12点あり、使用法を反映していると推察できる。おはじきには唐津産施釉陶器碗や信楽産播鉢を加工した個体もある(1205)。瓦を丁寧に丸く削った個体(1206)は、大きいので蹴る・打つという使用法が考えられる。いずれもⅪ期以降に属する。

土鈴(図版38・108-1207～1209、付表51) 様々な大きさの個体が多数出土した(1207・

1208)。いずれも良好な胎土を用いる。完形で出土した個体がなかったため中の玉が欠落していた。土製の丸い玉は土鈴の玉であろう(1209)。いずれもXI期以降に属する。

土人形 破損した破片が多かったため図示していない。狐・魚・亀・人物像・仏像などがある。XI期以降に属する。

硯(図版 38・108-1210～1214、付表 51) 土製の硯には黒色土器製・須恵器製(1210～1212)・灰釉陶器製(1213・1214)がある。いずれも風字硯である。1212・1213はⅢ期の井戸、1214は第4面から出土した。他の2点は新しい時期の遺構から出土したが、特徴から平安時代に属すると推定できる。他にXI期の瓦質の硯が1点出土した。

鞆(図版 39・109-1215・1216、付表 51) 多数の羽口の破片が出土した。先端には鉄滓が付着する個体があり、調査地で鉄製品の製作が行われたことが判る(1215・1216)。図示した2点はVI期の土壌から出土したものである。IV期に初現があり、XI期～XII期に増加する。

鑄型(図版 39・109-1217～1225、付表 51) 2区第1面東部で検出したXI期～XII期の土壌・井戸から集中して出土した。完形に復元できなかつたが、個々の破片の形状から馬蹄形の鏡鑄型であったことが判る(1217～1225)。大きさからみて五～六寸の鏡を鑄造したと推定できる。粗土部分の表面の沈線は真土を付着しやすくするため、真土の厚さは約2mmである。しかし、多くは真土が剥落し、粗土部分しか残っていないため紋様などは不明である。いずれもXI期以降に属する。御所南小学校の調査でも同時期の鏡の鑄型が出土している^{註10}。

取瓶(図版 109-1226・1227、付表 51) 土師器皿を転用したものが出土した(1226・1227)。いずれも熱を受けて強く歪み胎土は須恵質に変質する。1226はⅦ期～Ⅷ期の白色系土師器の大型皿を2枚重ねる。Ⅸ期の土壌から出土した。1227はXI期の土師器の小型皿を用いる。XI期の土壌から出土した。

埴塼(図版 39・109-1228、付表 51) 大型の埴塼はほとんどが細かく割れていた。全容が判る個体は小型の埴塼1のみでXI期～XII期の土壌から出土した(1228)。VI期の土壌からの出土例が2点あるが、大部分はXI期以降に属する。

5 石製品

剥片石器(図版 40・110-1229、付表 52) 灰色の安山岩系の石材の剥片を横長に用いた小型の打製石器である。刃部には細かい刃こぼれが多い。第4層から出土したが、縄紋時代に属すると推定できる。

磨製石鏃(図版 40・110-1230、付表 52) 暗青灰色の粘板岩を丁寧に研磨した大型の石鏃である。先端部と基部の一部を欠損し、刃部には刃こぼれが多い。Ⅶ期の土壌から出土したが、弥生時代に属すると推定できる。

磨製石斧(図版 40・110-1231、付表 52) 明緑灰色の硬質の石材を用いた小型の蛤刃石斧である。刃部には刃こぼれがある。XI期～XII期の土壌から出土したが、弥生時代に属する。

紡錘車(図版 40・110-1232、付表 52) 灰褐色の滑石製である。成形・調整はやや粗雑である。

XI期～XII期の土壌から出土したが、古墳時代に属すると推定できる。

勾玉（図版40・110-1233、付表52） 淡い黄色から灰色の石材を用いる。完形で表面には風化によるひび割れが目立つ。VII期の土壌から出土したが、古墳時代に属すると推定できる。

石製銚具（図版40・110-1234～1236、付表52） 丸軋（1234）はやや淡い緑色がかった半透明の硬質の石材を用いる。薄い脈が観察でき、石理に沿って割られたと推定できる。表面・側面は光沢を放っている。潜穴は全体で3箇所^{註11}に復元できる。巡方（1235）は白色と黒色のまだら紋様の蛇紋岩を用いる。濃い緑灰色の硬質の碧玉片（1236）は、3面に擦り切りの加工痕が残り、他の3面は自然面のままである。加工の方向はいずれも石理に斜交する。製作段階の残欠である。3点とも新しい時期の遺構から出土したが、特徴から平安時代前期に属すると推定できる。

印章（図版40・110-1237、付表52） 淡い赤橙色の粘板岩を方形の薄い板状に加工した後、表面に篆書で4文字を刻む。XI期に属する。

砥石（図版41・110-1238～1240、付表52） 様々な大きさ・形態の砥石が多数出土した。石材は粘板岩（1238・1239）が大部分で、わずかに凝灰岩（1240）・結晶片岩を用いたものがある。使用痕の特徴から、①緩やかに内湾する平坦面を造るもの（1238・1239）、②鋭い溝を刻むもの、③断面「U」字形の深い溝を造るもの（1240）に分けられる。①は刃物の刃部を研ぐ、②は鑿などの鋭い刃物の先端を尖らせる、③は玉類の研磨に用いたと推定できる。①が最も多く②・③は少ない。また、石製の硯や瓦を砥石に転用する例もみられた（1245）。V期に初現があり、XI期に急増する。

硯（図版40・110-1241～1248、付表52） 石製の硯は土製の硯よりも多く出土した。石材は粘板岩・頁岩を用いる。形態は方形（1243・1245・1247・1248）を基本とし、装飾的な加工を行う個体もある（1244・1246）。1243は出土例の中では最も古く、IV期新段階の土壌から出土した。また、1244はVII期に属する。XI期に出土例が急増する（1245～1248）。

硯の残欠と考えられる石片も出土した（1241・1242）。黒色の頁岩で側面に擦り切りの切断痕を残している。切断面には緩やかな円弧を描く加工痕が残ることから、吊り下げた工具を前後に振り子運動させて切断作業を行ったと推定できる。1241は成形段階で破損したもの、1242は成形時に切り落とされた残欠である。調査地で硯の加工が行われた可能性を示唆する遺物である。

石鍋（図版41・111-1249、付表52） いずれも滑石を用いる（1249）。V期に初現があり、VI期・VII期の出土例が多い。他にXI期の遺構からの出土が認められるが、混入品と推定できる。

行火（図版41・111-1250、付表52） 灰緑色の凝灰岩を用いる（1250）。鋭い工具による加工痕が明瞭に残る。XI期に属する。

石臼（図版41・111-1251～1253、付表52） 出土量は少なく、いずれも破片である（1251～1253）。石材は花崗岩や閃緑岩を用いる。1251・1252は中心の孔と摺面がわずかに鈍角を造るので上臼と推定できる。1253は下臼の受け部で、表面は丁寧に研磨され、茶臼と推定できる。XI期以降の出土例が大部分で、井戸や石室の石材に転用されていた例もある。

石塔（図版41・111-1254～1256、付表52） いずれも花崗岩を用いる（1254～1256）。1254

は反花の一部、1255 は五輪塔の火輪、1256 は天輪・風輪である。いずれもXI期以降の遺構から出土した。石垣の石材に転用されていた例もある(1255)。

その他の石製品には凝灰岩片や水晶の原石が出土した。凝灰岩片には加工痕が残る個体があり、建築部材に用いられたと推定できる。

6 金属製品

金属製品には、銀製品・銅製品・鉄製品がある。鉄製品が最も多く、銀製品は銀貨のみである。

(1) 銀製品

銀貨 (図版 42・112-1261、付表 53) 豆板銀である。表面は緑青で覆われる。約 5 g。

(2) 銅製品

多様な種類が出土した。用途不明の製品が多く、ここでは全体的な形態が判り、用途もある程度推定できる個体を限定して掲載した。II期から少量ずつ出土したが、XI期以降に出土量が急増する。中には製作時よりかなり新しい時期の遺構から出土する例もある。

鏡 (原色図版 8・図版 112-1257、付表 54) 瑞花鴛鴦紋鏡である。二つの破片に割れ、一部欠損する。鏡面には光沢が残る。周縁の幅は細く、界圏の内側に段差がある。三重県四天王寺に所在する承保四年(1077)に完成した薬師如来像への納入品に類例があり、11世紀後半に製作された製品が伝世したと考えられる。^{註12} 2区井戸 2098の埋土から出土した。

筭 (図版 42・112-1258、付表 54) 鏡とともに出土した。薄手で簡素な造りである。室町時代の製品の特徴を備える。

耳搔 (図版 42・112-1259、付表 54) 小型の耳搔である。紐を通す孔が加工してあるので結束して携帯したと推定できる。XI期の土壌から出土した。

毛抜 (図版 42・112-1260、付表 54) 小型の毛抜である。紐を通す孔が加工してあるので結束して携帯したと推定できる。XI期の土壌から出土した。

銅銭 (図版 42・112-1262～1264、付表 54) 銅銭は多数出土した。銭銘は、皇朝十二銭の神功開寶・承和昌寶、中国銭の開元通寶・政和通寶・聖宋元寶・元豊通寶・皇宋通寶・淳化通寶、江戸時代の寛永通寶を確認した。2区土壌 2516から出土した承和昌寶が最も古い時期に属し、XI期の遺構からの出土例が最も多い。無文銭は非常に薄く、中央には不整形な方形の孔が開いている(1262～1264)。VII期新段階～VIII期古段階の土師器皿と共伴して出土した。無文銭としては京都では最も古い時期の例となる。

煙管 (図版 42・112-1265～1269、付表 54) 雁首(1265・1266)、吸口(1267～1269)とも多数出土した。薄い銅板を丸めて接合し細かい装飾をもつ個体もある(1265・1269)。いずれもXI期以降に属する。

香道具 (図版 42・112-1270～1277、付表 54) 火箸(1271～1275)、灰ならし(1277)がある。火箸は9点以上あり、簡素な装飾が施される。1273・1274は同じ土壌から出土した一対である。

灰ならしは先端に扇形の金具を接合する。火箸・灰ならしに類似する個体(1270・1276)があり、香道具として用いられた可能性がある。いずれもXI期以降に属する。

把手(図版112-1278・1279、付表54) 4点出土した(1278・1279)。1279を除き、器物の把手としては華奢な造りである。いずれもXI期以降に属する。

蓋(図版42・112-1280、付表54) 錆のため紋様は不鮮明だが、牡丹と推定できる。華やかな装飾が加えられており、化粧道具の可能性が高い。XI期～XII期の土壌から出土した。

椀(図版42・112-1281、付表54) 小破片で底部は欠損する。底部は平坦でなく、屈曲して別の形態を取る可能性がある。XI期の土壌から出土した。

皿(図版42・112-1282、付表54) 用途は不明だが、突出部の孔に柄が付けば杓であったと考えられる。XII期の土壌から出土した。

燭台(図版42・112-1283、付表54) 欠損部分が多いが、床飾りか仏壇に用いられたと推定できる。XI期以降に属すると推定できる。

錘(図版43・113-1284・1285、付表54) 笠形(1284)と方柱形(1285)がある。1284は重さが約86gあるので2両の棹秤の錘と推定できる。VI期の土壌から出土したが、形態の特徴から平安時代に属すると推定できる。^{註13}1285は重さが約53gで、同型の個体が他に1点ある。江戸時代の棹秤の錘で、出土遺構の時期とも一致する。

軸鼻(図版113-1288・1289、付表54) 巻物の軸鼻(1288)と掛軸の軸鼻(1289)がある。1288はVI期の土壌から出土した。1289は炭化した軸が残り、火災を受けたことが判る。XI期に属する。

鈴(図版113-1290、付表54) 下半部が欠損する破片である。IX期～X期の土壌から出土した。

針金(図版113-1291・1292、付表54) 巻き付けた形態を示す個体がある(1291・1292)。1291の残存長は約28cm、1292の残存長は約42cmである。いずれもXI期～XII期に属する。

瓔珞(図版43・113-1293・1297、付表54) 小破片だが、部分的に鍍金が残っており相互に結合するための孔が穿たれる(1294～1297)。結合に用いた針金もある(1293)。大きさや形態から天蓋の瓔珞であった可能性がある。1293のみVII期古段階の土壌から出土した他はIX期以降の遺構から出土したが、加工の特徴は中世的な要素を備える。

吊金具(図版43・113-1298～1302、付表54) 多様な形態がある(1298～1302)。1298は両端とも鋭く尖る。1299はL字形の釘である。1302は小型の自在金具である。1300・1301も鉤状の加工がある。いずれもXI期以降に属する。

環金具(図版43・113-1303・1304、付表54) 二種の形態がある(1303・1304)。1303は二枚割式環金具で表に露出する環状の部分に鍍金が施される。先端が開いていないので未使用の可能性もある。1304の先端は釘状に尖る。建物や建具に付ける引っ掛け金具として用いられたものである。XI期に属する。

飾金具(原色図版8、図版113-1305～1307、付表54) 唐草紋の表現は古い特徴をもつが、2個一組の魚々子鑿を使用している。XI期に属する。

金具(図版113-1308～1315、付表54) いずれも欠損や変形が目立つ(1308～1315)。1308

～1314は櫃などの木製の箱に用いた金具で、1313はやや大型の箱用、1314は角部に用いた。また、1312は裏面に木質が付着し、孔には環金具が打ち込まれていたと推定できる。1315は大型で厚く、建物の化粧金具であろう。火災にあったため損傷が著しい。1310のみⅣ期の土壌から出土した他はⅪ期～Ⅻ期に属する。

引手金具（図版 113-1316、付表 54） 建具の引手に用いる金具の一つである。加工は粗雑である。Ⅺ期に属する。

鋤（図版 43・113-1317・1318、付表 54） 2点出土した（1317・1318）。1317は脇差か腰刀、1318はやや小さいので短刀の鋤と考える。いずれもⅪ期～Ⅻ期に属する。

切羽（図版 43・113-1319・1320、付表 54） 3点出土した（1319～1320）。いずれもⅪ期～Ⅻ期に属する。

小柄（図版 43・113-1321～1323、付表 54） 6点出土した（1321～1323）。1322・1323は先端に鉄錆が付着しているため、刀部が装着されたことが判る。一方、1321は鉄錆がないので、刀飾り用とも考えられる。いずれもⅪ期～Ⅻ期に属する。

不明銅製品（図版 113-1386、付表 54） 銅板を折り曲げて加工する。Ⅺ期の土壌から出土した。

玉（図版 113-1387、付表 54） 中実の玉である。Ⅺ期～Ⅻ期の井戸から出土した。

銅滓 わずかな量だが、銅滓が出土した。Ⅵ期・Ⅶ期に一例ずつあり、他はⅪ期以降に属する。

(3) 鉄製品

多数出土したが、錆による損傷が激しく、原形が判る個体はほとんどない。図示したものは極一部である。Ⅺ期以降の出土例がほとんどを占める。

鎌（図 8-1324、付表 55） 先端が欠損するが、ほぼ完形である。茎には目釘孔が穿たれる。Ⅺ期～Ⅻ期に属する。

包丁（図 8-1325・1326、付表 55） 先端が刀状に尖る。Ⅺ期～Ⅻ期に属する。

毛抜（図 8-1327、付表 55） 大型の毛抜である。Ⅺ期～Ⅻ期に属する。

環金具（図 8-1328、付表 55） 大型。用途は不明。Ⅺ期～Ⅻ期に属する。

鉄銭（図 8-1329、付表 55） 錆のため銭銘の判読はできないが、形態から鉄銭の可能性が高い。Ⅺ期に属する。

鍋 円盤状の鉄板が数点出土した。鍋・釜などの容器の底部と考えられる。いずれもⅪ期～Ⅻ期の遺構から出土した。

釘 多量に出土した。大小はあるが、形態は先端が尖った方柱形である。Ⅱ期古段階に初現があり、Ⅴ期～Ⅵ期にかけて増加しⅪ期に急増する。

鉄滓 多量に出土した。大きな塊はほとんどない。Ⅴ期に初現があり、Ⅺ期に急増する。

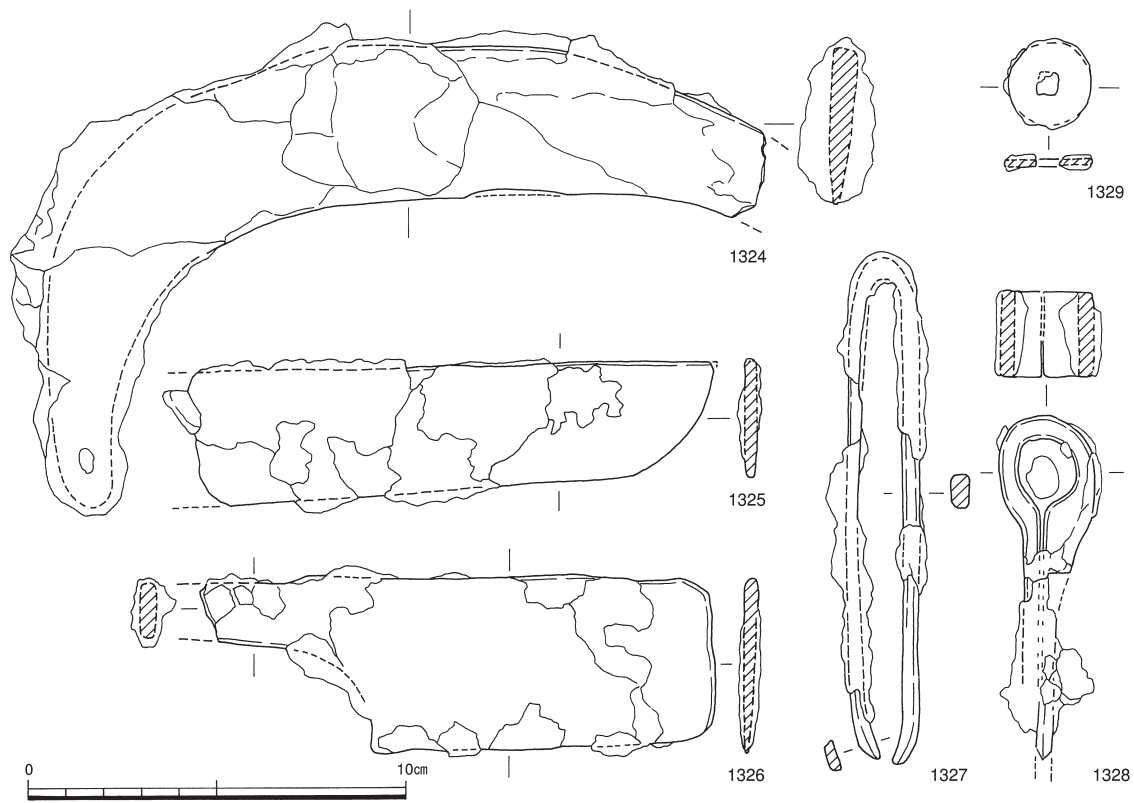


図8 鉄製品実測図(1:2)

7 骨角製品

骨角製品は、きわめて少なく、いずれもXI期以降の遺構から出土した。

簪(図版44、図9-1330、付表56) 骨を丁寧に加工して装飾を加える。XI期～XII期に属する。

櫛(図版44、図9-1331、付表56) 骨製である。欠損部分が多く全容はよく判らない。XIV期の土壌から出土したが、XI期～XII期に属する可能性もある。

櫛払(図版44、図9-1332・1333、付表56) 骨製である。欠損部分が多く全容はよく判らない。刷毛の部分も残っていない。XI期～XII期に属する可能性が高い。^{註14}

棹秤(図版44、図9-1334・1335、付表56) 骨製の棹で三方に上目・前目・元目の目盛りの星を入れる。XI期～XII期に属する。

さいころ(図版44、図9-1336、付表56) 骨製で完形である。目のくぼみは円錐形で、くぼみの中心には小さな穴がある。XI期～XII期に属する。

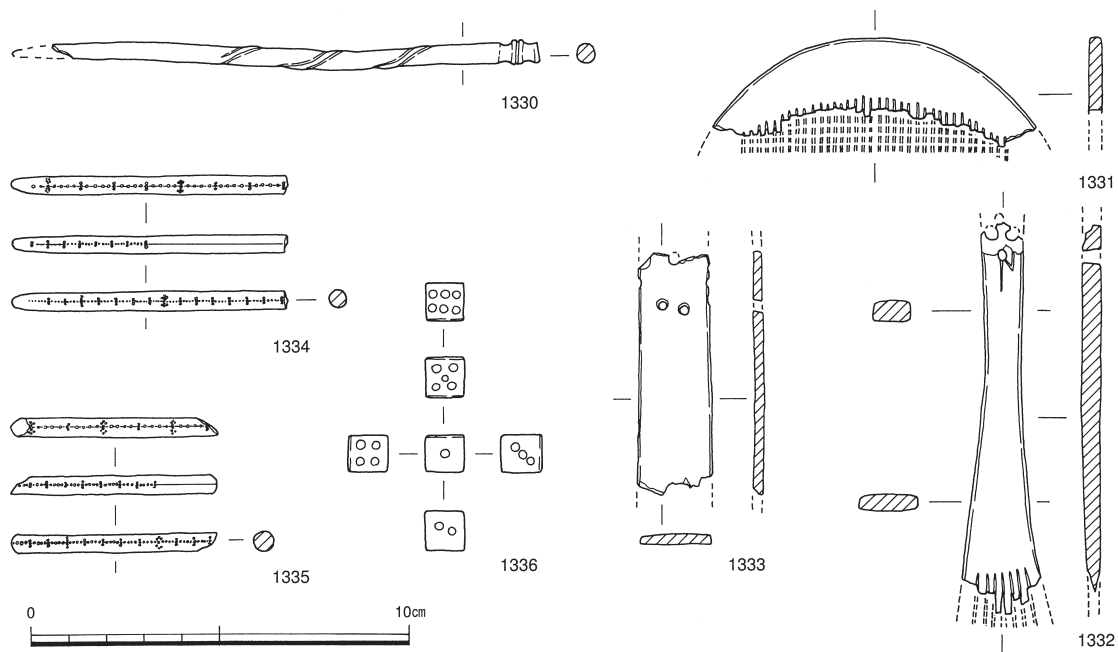


図9 骨格製品実測図 (1:2)

8 木製品

木製品はきわめて少ない。井戸枠の板材や曲物片が数点残存していたが、取り上げることができなかった。材質も不明である。

この他には、漆椀がXI期の土壌から出土した。木地が腐食して漆膜のみとなっていた。赤色漆椀・黒色漆椀の断片と考える。小片のため紋様の詳細は不明である。

9 動植物遺体

動物遺体 (図版 44-1337 ~ 1346、付表 57) 動物遺体には動物の骨と貝殻がある。動物の骨ではVI期の1区土壌 685 からウマの歯が出土した。それ以外の動物の骨はすべてXI期以降の遺構から出土した。大部分は鳥類・魚類の骨で、2区土壌 1230 からはガンカモ科カモ類・ガン類、カメなどの骨が出土した (1337 ~ 1341)。多くの骨には刃物による切断痕が残り、食用に供したと推定できる。貝殻はVI期以降わずかな数量が出土し、XI期以降飛躍的に出土遺構、出土量が増加する。2区土壌 1230 からはアカガイ・ハイガイ・ハマグリ・アカニシ・サザエが出土した (1342 ~ 1346)。すべて食用の貝である。

植物遺体 植物遺体は木製品と同様にほとんど残っていなかった。Ⅷ期の遺構でモモの種を確認したにとどまる。

10 その他の出土遺物

上記以外の出土遺物として焼土と木炭について触れておく。焼土や木炭が出土することは火災の痕跡および竈などの施設の存在を示している。

焼土は橙色～黄橙色の色調を示し大きなもので握り拳程度の大きさがあり、スサに用いられた植物体の痕跡も観察できる。しかし大部分は直径 1cm 以下の細粒に砕けて出土した。出土する時期はⅡ期～Ⅲ期・Ⅴ期～Ⅹ期・Ⅺ期以降の 3 時期がある。Ⅱ期～Ⅲ期は量が少なく細粒である。Ⅴ期～Ⅹ期も細粒がほとんどでⅥ期～Ⅶ期の出土例が多い。Ⅺ期以降はⅪ期に出土量が集中し、大きな破片も多い。

木炭は細片で、樹種の同定は行っていない。出土する時期はⅤ期～Ⅸ期とⅪ期以降の 2 時期がある。前者ではⅥ期の出土例が多い。後者ではⅪ期に出土量が集中する。

註

- 1 破片数の数量化は接合作業前の段階で行った。計測した遺物は出土遺物全体の約 1/6 で、土器類 226,794 片、その他の遺物 19,093 片、合計 245,887 片の数値を得た。したがって、出土遺物の総破片数は概算ながら土器類約 139 万片、その他の遺物約 12 万片、合計約 151 万片と推定できる。
- 2 土師器皿類口径分布表は次の基準をもとに作成した。
 - ①口縁全周の 1/4 以上が残存する個体を対象とし、歪みの著しい個体は除外した。
 - ②復元口縁直径を 0.5cm 単位で計測した。
 - ③ 30 個体以上が計測できた遺構を掲載した。
- 3 出土土器の編年は平安京・京都Ⅰ期～Ⅻ期の編年案を準用した。
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年。
- 4 瓦器碗の分類・編年に関しては、次の文献によった。
尾上 実・森島康雄・近江俊秀「瓦器碗」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1996 年、森島康雄「畿内産瓦器碗の並行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会 1992 年。
- 5 体部破片では鍋と釜の区別は困難である。外面に鏝があるものを釜、ないものを鍋と呼称する。
- 6 稲垣晋也「赤土器・白土器」『大和文化研究』大和文化研究会 8-2 1963 年、森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要 1986 年』奈良市教育委員会 1987 年。
- 7 家根祥多氏のご教示による。家根祥多「篠原式の提唱」『縄紋晩期前葉 - 中葉の広域編年』北海道大学文学部 1994 年。
- 8 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966 年。
- 9 上原真人「瓦類」『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告・大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査』舊嵯峨御所大覚寺 1997 年。

- 10 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広「平安京左京二条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- 11 森田 勉「滑石製容器」『佛教藝術』148号 毎日新聞社 1983年、木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IX 中世土器研究会 1993年。
- 12 久保智康『日本の美術 394 中世・近世の鏡』至文堂 1999年。
- 13 中島皆夫「長岡京の銅製鍾」『第2回 京都府埋蔵文化財研究会』京都府埋蔵文化財研究会丹波ブロック 1994年。
- 14 久保和士「櫛払」『葦火』46号 大阪市文化財協会 1993年。

第5章 ま と め

1 遺構の変遷

平安京造営前（図 12） 今回の調査で出土した最も古い遺物は縄紋時代晩期の土器群である。新しい時期の包含層や遺構からの出土であったが、いずれも京都盆地周辺に多く出土する土器型式である。剥片石器もこの時代に属すると考えられる。弥生土器・土師器・須恵器も新しい時期の包含層や遺構から出土し、特に弥生時代中期～庄内式併行期に属するものが多い。その中には他地域の特徴を備えた個体もある。土器以外にも磨製石鏃・磨製石斧・勾玉・紡錘車が出土し、特に石斧の石材は京都盆地周辺から産出しないものであり、土器も含めて遠隔地との関係をうかがわせる。

今回の調査で検出した最も古い遺構は、古墳時代後期の土壌である。そのうち 2 区土壌 2437 は長胴甕を埋置した土器棺墓であった。飛鳥時代にも 1 区溝 1765 や 2 区土壌 2562 などがあり、継続して生活が営まれていたことが明らかである。調査地周辺ではこれまでも古墳時代～飛鳥時代の遺構が確認されている。古墳時代前期の遺構としては、烏丸丸太町交差点南西角の調査の堅穴住居^{註3}、こどもみらい館の調査の流路^{註4}がある。いずれも庄内式併行期の土器がまとまって出土した。古墳時代後期～飛鳥時代の遺構としては、烏丸丸太町交差点南西角の調査の堅穴住居と土器棺墓^{註5}、御所南小学校の調査の流路^{註6}がある。今回の調査成果も含めると、この地に古墳時代～飛鳥時代の集落があったことは確実で、「烏丸丸太町遺跡」を提唱したい。遺構検出地点や遺物包含層の分布から、北側は下立売通付近、西側は室町通付近、南側は夷川通付近、東側は富小路通付近の範囲に広がると推定できる。

平安時代前期～中期（図 13～15） 平安時代には遺構が増加する。平安京造営前の集落が営まれていた微高地は造営に際して削られてしまい、低い部分は埋め立てられたと推定できる。1 区溝 1765 もこの段階で最終的に埋められたと考える。1 区・2 区で検出した第 4 層は平安京造営にあたっての整地層と考えられ、北から南へ緩やかに傾斜した平坦な土地が造られている。

今回の調査では調査区の関係で条坊関連の遺構を検出することはできなかったが、調査地は平安京左京二条四坊十町にあたり、北側を春日小路、西側を万里小路、南側を大炊御門大路、東側を富小路に囲まれていた。平安時代前期・中期の居住者に関する記録はない。しかしながら、2 区土壌 1730 からは平安時代前期前半（Ⅰ期新段階）の土師器・須恵器がまとまって出土し、また、同時期の柱穴を検出していることから、平安京造営当初から調査地に建物が存在していたことが判る。柱穴がわずかししか検出できないのは攪乱によるものである。

平安時代前期後半（Ⅱ期）になると遺構の数が増え、1 区井戸 1421・2 区土壌 2516 のように遺構が大型化し遺物の出土量も増加する。柱穴の検出が少なく建物の復元はできないが、調査地は平安京東端に近い二条大路の北側に位置し有力な王臣家の邸宅があった可能性がある。1 区井戸 1421 の埋納された土器は、井戸を造るときの祭祀に用いられたと考えられる。

平安時代中期前半（Ⅲ期）の段階になると遺構の数は減少し、遺物の出土量もかなり減少する。しかし2区井戸2097の存在から引き続き居住者がいたことは確実である。調査では平安時代前期・中期の瓦が散発的に少量出土した。

平安時代後期～鎌倉時代（図16～18） 平安時代中期後半（Ⅳ期）になると、調査地では遺構が急増し遺物の出土量も増え、以前にも増して活況を示すようになる。柱穴は2区北部中央に多く集まり、規模や配置の復元はできないが、ここに建物があったことは確実である。十町の中では、中心のやや北西寄りに位置することになる。一方、十町南西部にあたる1区ではこの時期の柱穴を検出しておらず、建物はなかった可能性が高い。建物は十町の中心付近にまとまり、空閑地をかなり残した建物配置であったと推定でき、一町規模の邸宅があった可能性が考えられる。十町には、大治元年（1126）に藤原基隆^{註7}が白河法皇・鳥羽上皇らに造進した春日殿（大炊御門殿）があったことが文献に記されている^{註8}。今回の調査でⅣ期の建物の存在を明らかにしたことは、春日殿に先立つ殿舎が造営されていたことを示している。また、出土遺物では2区土壌1553からⅣ期新段階の白色土器や中国製の白磁がまとまって出土したことが注目できる。白色土器は貴族の儀式に用いられたとの指摘があり^{註9}、十町の居住者の階層や建物の性格を示唆している。

さて、春日殿・大炊御門殿の時期は平安時代後期～鎌倉時代前半（Ⅴ期～Ⅵ期）に相当する。調査成果による遺構・遺物の状況をみると、Ⅴ期ではⅣ期よりも遺構の数がかなり増加し、Ⅵ期にはさらにこの傾向がすすむ。Ⅴ期・Ⅵ期とも柱穴は2区北部中央に多く検出し、引き続きこの場所を中心として建物が建てられていたと推定できる。Ⅳ期にはなかった1区万里小路寄りに柱穴が出現、増加したことも見逃せない。瓦器壺を埋納した2区土壌1354・土壌1362は柱穴の集中する部分に位置したことから建物に関わる祭祀遺構と考えられる。土師器の小型皿を重ねて埋納した1区土壌1361も関連性をもつ。また、1区土壌1275や2区井戸1704掘形から多数の瓦が出土し、破片数では軒丸瓦・軒平瓦が丸瓦・平瓦に対して5～10%の割合で含まれていた。春日殿・大炊御門殿の殿舎の棟に用いられていたと推測できる^{註10}。その他にも、鉄釘・銅金具・轆・鉄滓・銅滓などがⅤ期～Ⅵ期に増加し、殿舎造営の痕跡を示している。

建保二年（1212）、新造の大炊御門殿に後鳥羽上皇が遷御する際に、僧侶や陰陽師らによって様々な祭儀が執り行われたことが『勘仲記』に詳しく記される^{註11}。調査で検出した3基の埋納遺構はいずれもⅥ期に属するので、この時の祭祀に関わる遺構である可能性が高い。

また、新造の大炊御門殿は旧来の東札を改め、西対・中門廊を備えた西札の御所であったことが指摘されている^{註12}。1区万里小路寄りの柱穴の中には西対・中門廊の整備に伴うものが含まれていると考えられる。

しかし、1区万里小路寄りの柱穴については町屋の出現と結びつける解釈も可能である。平安時代後期頃より路面に面した部分に町屋が建てられ、築地塀を崩し屋敷地が食い込んで行くことが指摘されている^{註13}。十町でも万里小路に面して町屋が建てられ始めた可能性は否定できない。大炊御門殿が新造される以前、一時居住した藤原兼実が建物が狭いことに驚いたことを記してお^{註14}り、このことと対応させると大変興味深い。室町時代の状況と考え合わせると、邸宅の整備と町

屋による蚕食が繰り返された状況が推測できよう。

室町時代（図 19～22） 鎌倉時代後半～室町時代前半（Ⅶ期・Ⅷ期）の段階になると、居住者に関する記録は再びなくなってしまふ。柱穴の分布が2区北部中央に集まる状況は継続するが、溝 1319 がその中央を分断するので大型建物の存在は考えられない。大炊御門殿に伴う建物は、Ⅵ期までに廃絶したのであろう。2区井戸 1704 出土の瓦や磁州窯系の壺には二次焼成による損傷を受けた個体があり、Ⅵ期新段階頃に火災の被害を受けたと考えられる。

一方、調査区各所に多数の柱穴が分布しており、この段階では土地利用が活発となったことが判る。十町の東西中心近くに位置する2区柵 2571 を始め、1区柵 1770・1771 や2区溝 1319・柵 2569・2572・2573 が成立する。これらはいずれも区画施設であったと推定できる。各戸の建物の間口や奥行きを復元することは困難であるが、2区柵 2569 が敷地裏側の区画であったとすると、万里小路に沿って戸口を開いた奥行き約 31m の敷地に町屋が建ち並んでいた様子が想像できる。春日小路や大炊御門大路についても同様の状況になっていたと考えられる。井戸は少なく、一戸ごとに備わっていたとは考え難い。塵芥処理壙と考えられる土壌が一町の中心部に多く分布し、町屋の敷地裏側にある空閑地に穴を掘ってゴミを捨てることが日常的に行われたことを示している。その他川原石を平らに敷いた浅い土壌や、密に詰め込んだ土壌があり、前者の機能は不明であるが、後者は排水処理壙と推定できる。建物に付属する施設であらう。

室町時代後半（Ⅸ期・Ⅹ期）の段階になると、区画施設と推定できる2区柵 2571 を造り替えた柵 2570 や1区溝 1667、2区溝 242 が新たに成立する。2区柵 2569 も造り替えられながら同じ場所を踏襲している。しかし全体的には遺構の数が少なくなり、出土遺物の量も減少する。Ⅸ期はまさしく応仁の乱（1467～1477年）にまたがる時期にあたる。応仁の乱の影響は、京都全体の調査成果を総合して考えるべき問題である。しかしこの時期に調査地において遺構が減少することから、それが少なからざる影響を与えた可能性が指摘できよう。遺構・遺物が減少する傾向はその後すすみ、調査地ではⅩ期古段階

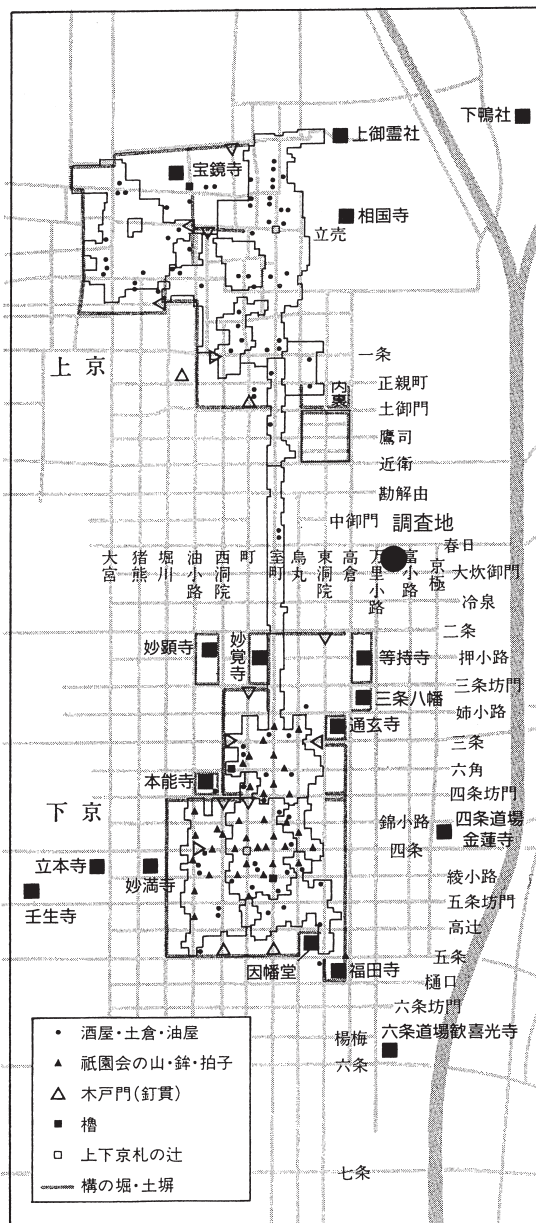


図 10 応仁の乱後の京都市街（註 20 を一部改変）

を最後に遺構が途切れXI期中段階まで断絶する。

X期中段階は天文法華一揆（1532～1536年）の時期にあたり、この段階に調査地が断絶することは示唆的である。応仁の乱後、豊臣秀吉による「京都の改造」まで京都の市街地中心部は上京と下京の町組にまとまることが指摘されている。調査地はこの上京と下京の町組の外側に位置する（図10）。上京・下京の外側でもⅨ期・X期に相当する遺構が分布したことはすでに考古学的に指摘されているが、少なくとも天文法華一揆から次に述べる「天正地割」の施行までの実年代でおよそ60～70年の間、調査地ではまったく遺構はない。

江戸時代（図23～26）江戸時代前期（XI期・XII期）の段階になると、調査地の様相は急激に変貌し遺構数・遺物量ともに激増する。こうした調査地の変貌を理解するために調査地を取り巻く状況を先に説明しておきたい。

江戸時代前期、寛永～万治年間の頃の京都の町を描いた絵図に『洛中絵図』がある。調査地の部分をみると、丸太町通、柳馬場通、竹屋町通、富小路通に囲まれた南北に長い街区の中に「松平中務少輔」と記される屋敷があった様子が描かれている（図11）。平安京では40丈（約120m）の方形の街区が、長方形の街区に変更されている。これは豊臣秀吉が実施した「天正地割」によるものである。天正地割とは平安京以来の方形街区の東西中央に南北道路を通して、南北に長い長方形の街区を造り出す施策である。富小路は平安京の小路名称であるが、現在の富小路通はこ

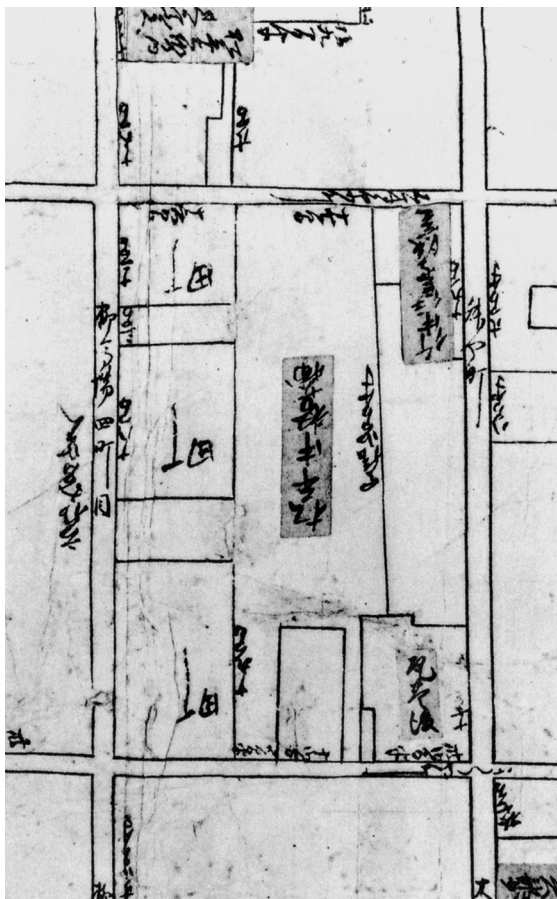


図11 『洛中絵図』に描かれた調査地周辺(註22から)

の時に本来の位置から西へ約30mほど移動した位置に新たに造られ、調査地周辺にも長方形街区が形成された。1区・2区で検出した第2層は基本的にX期までの遺物しか含んでおらず、地割りの変更と同時に行われた整地層と考えられる。また、松平中務少輔とは、蒲生氏郷の孫、蒲生忠知のことで、彼は慶長18年（1613）に中務少輔になり、寛永11年（1634）に死去している。これはXI期中段階に相当する時期にあたり、調査地に彼の屋敷があったことが判明した。

XI期の遺構では、2区柵2565と2区柵2566が重要である。この二つの南北方向柵の位置は『洛中絵図』に描かれた松平中務少輔屋敷の区画に一致し、それぞれ屋敷の西側と東側を区画する塀であったことが判る。したがって、2区柵2565と2区柵2566に挟まれた範囲が屋敷の部分、柵2565の西側、柵2566の東側は「町」と記入された町屋部分となる。この塀は1区では検出できなかったが、絵図のとおり南北にの

びていたものと推定できる。なお、2区柵 2565 は2区柵 2569 と同じ場所に位置するが、2区柵 2566 は2区柵 2570 よりも東側に場所を移している。これは2区柵 2570 の区画がⅩ期に一旦消失していたためと考えられる。武家屋敷と町屋を区画する柵は御所南小学校の調査でも確認している。^{註25}

屋敷内の遺構には、東側の塀に沿って2区建物 825 がある。建物 825 は各地の類例から蔵と考えられ、^{註26}武家屋敷にふさわしい遺構といえる。また、2区土壌 289 は竈の可能性のあることから、ここに台所があったと考えられる。屋敷内では柱穴を検出したが、数が少なく建物を復元することはできない。土壌も数が少なく散在することから調査区は屋敷内では空地となっていたと推定できる。

屋敷の西側では、2区柵 2565 に取り付く柵 2567・柵 2568 がある。これらは『洛中絵図』に描かれた柳馬場通から屋敷へ通じる通路の北側・南側塀である。1区柵 1769 も同様の通路の塀である。それ以外の遺構では、2区柵 2565 の西側に並んで大型・小型石室や井戸・土壌を検出した一方、柱穴は少なかった。大型の石室は地下式収蔵施設、小型の石室は便所であったと考えられる。2区土壌 264 も甕を据えた便所であろう。^{註27}おそらく柳馬場通に面して町屋が建ち並び、裏手にあたる部分に井戸・収納施設・便所・塵芥処理壙を設けたと推定できる。1区竈 301 は屋内施設であり、1区西端に位置することもこの推定を裏付ける。したがって、1区の南部で検出した土壌・石室は竹屋町通に面して建ち並んでいた町屋に伴う施設、1区石垣 310 は竹屋町通に面した建物裏側の区画と考えられる。

屋敷の東側では、攪乱により西側ほど遺構はよく判らない。西側と同様に2区柵 2566 の東側に並んで井戸や大型の塵芥処理壙が並ぶ。2区土壌 1230 からは貝殻や鳥骨も出土した。東側では他に土蔵である2区建物 684 や、排水処理穴の可能性のある2区土壌 763・831 もある。これらは富小路通に面した町屋の裏側にあたる。

御所南小学校の調査では、柳馬場通、竹屋町通、富小路通に面して建ち並ぶ町屋の様子が判明し、調査地でも同様の景観が成立していたことがうかがえる。^{註28}

出土遺物ではこの段階で鉄釘や鉄滓が急増し、屋敷や町屋が造られていた当時の活況が反映される。土器類は多種多様となり、茶道具・香道具・刀装具・飾金具なども多数出土した。これらの中には屋敷内での生活を荘厳にし、儀式・遊興に使用されたものが含まれている。土製のおはじきや土人形・土鈴などの玩具も出土している。また、居住者の生業に関連しては鏡の鋳型が出土したことが注目できる。鏡の鋳型は柵 2566 の東側の土壌に集中しており、富小路通に面した町屋で鏡の鋳造が行われたことは確実である。御所南小学校の調査でも多量の鏡鋳型が出土し、両者の間に密接な関係があったことがうかがえる。^{註29}また、少数ながら硯の加工途中の残欠も出土し硯の製作が行われたと考えられる。

Ⅹ期になると遺構の状況が判りにくくなる。屋敷の中では2区建物 825 を壊して、2区土壌 611 が造られ、変転があったと考えられるが詳細は判らない。蒲生家は蒲生忠知の死後に廃絶したので、屋敷は取り壊されてしまった可能性が高い。一方、町屋側では引き続き遺物が多量に出

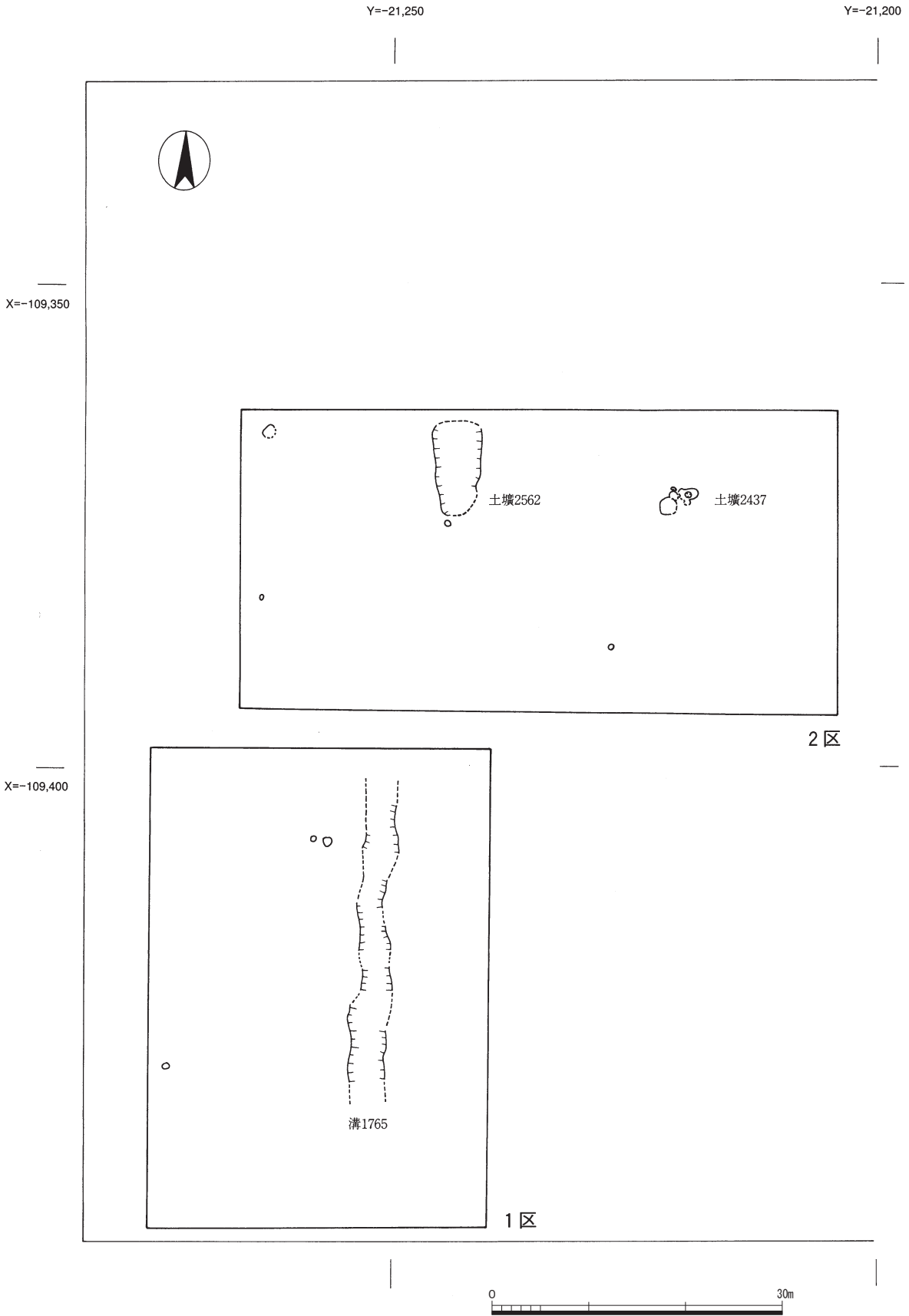


図12 平安京造営前の遺構概要図 (1:600)

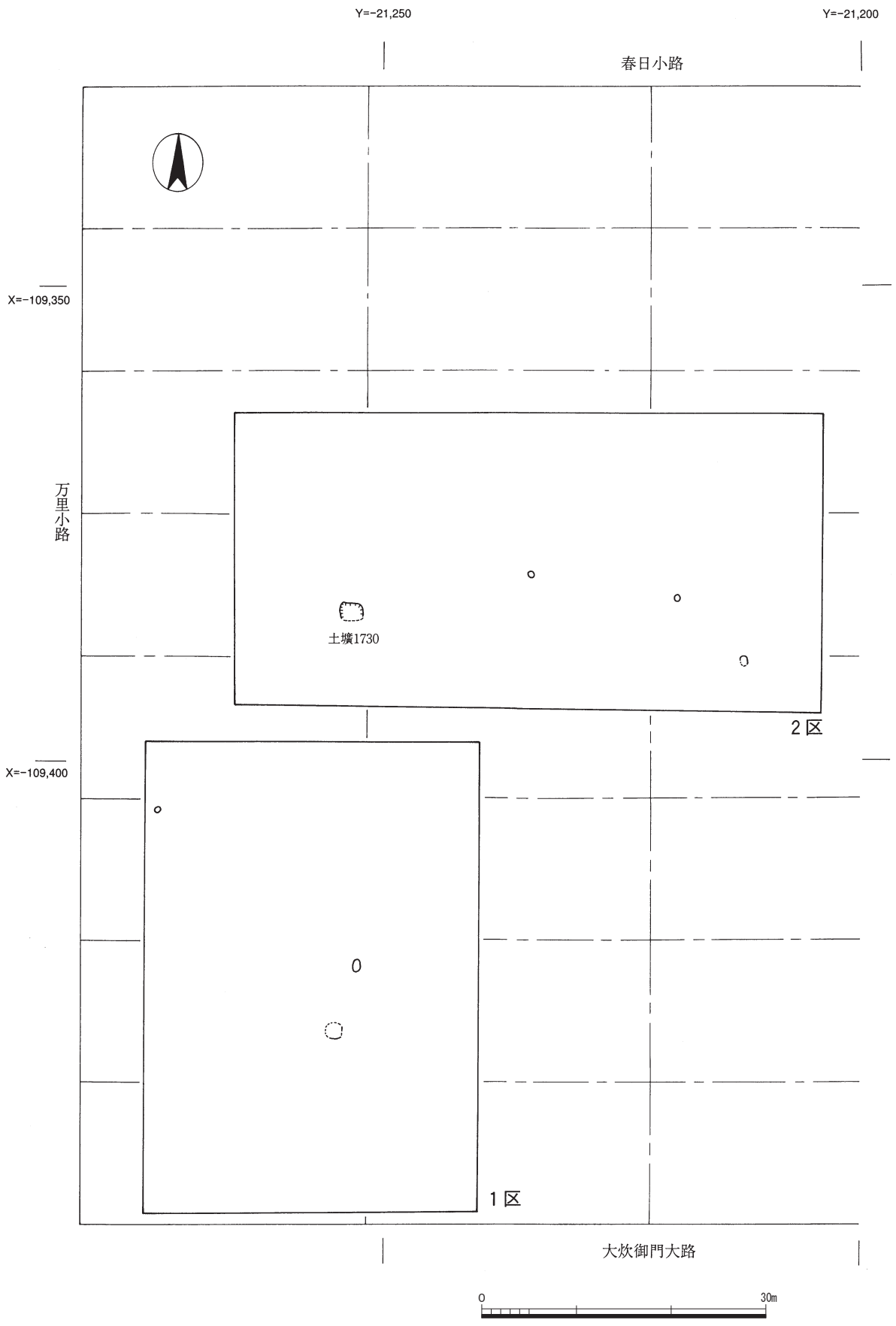


図 13 I 期の遺構概要図 (1:600)

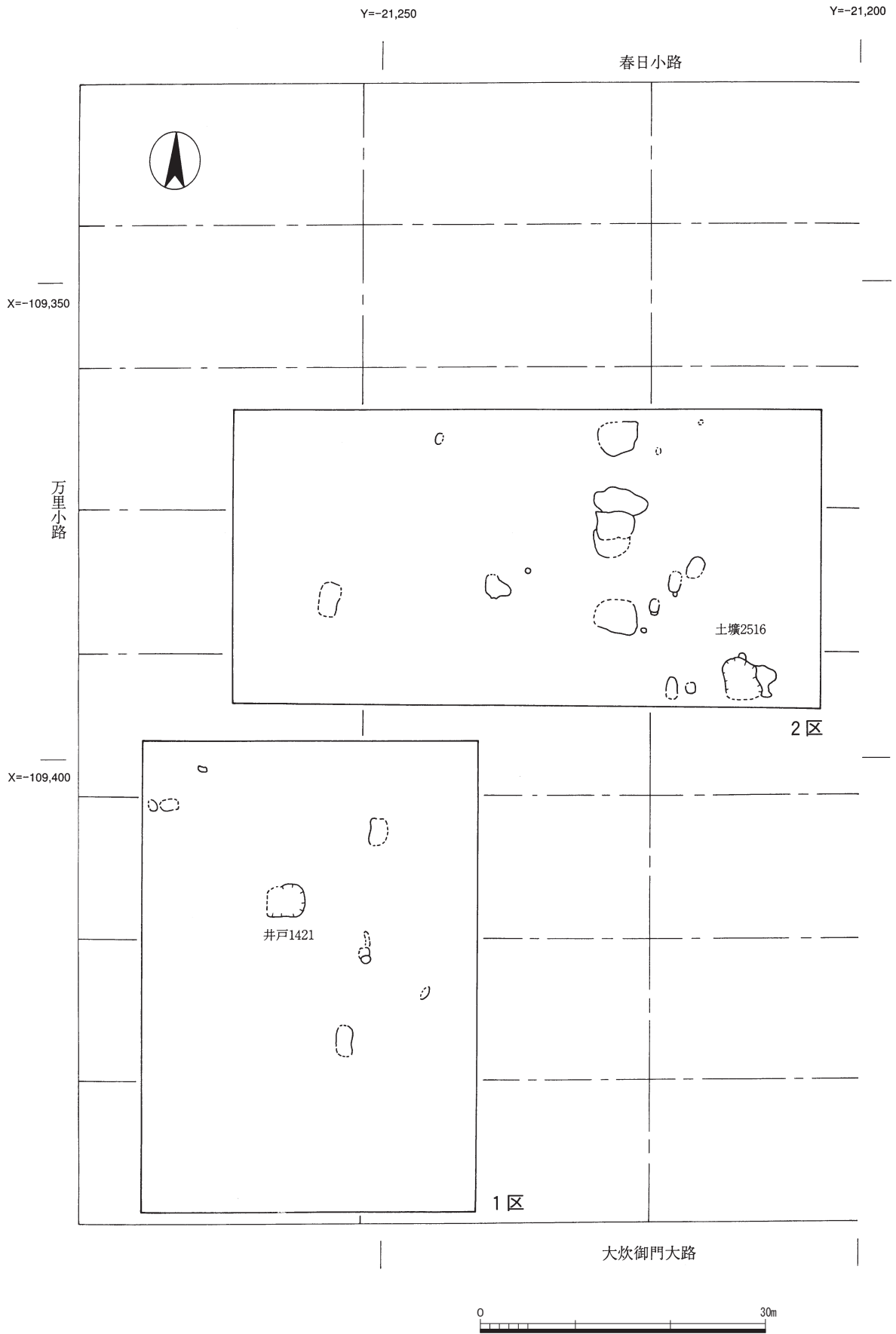


図 14 II期の遺構概要図 (1:600)

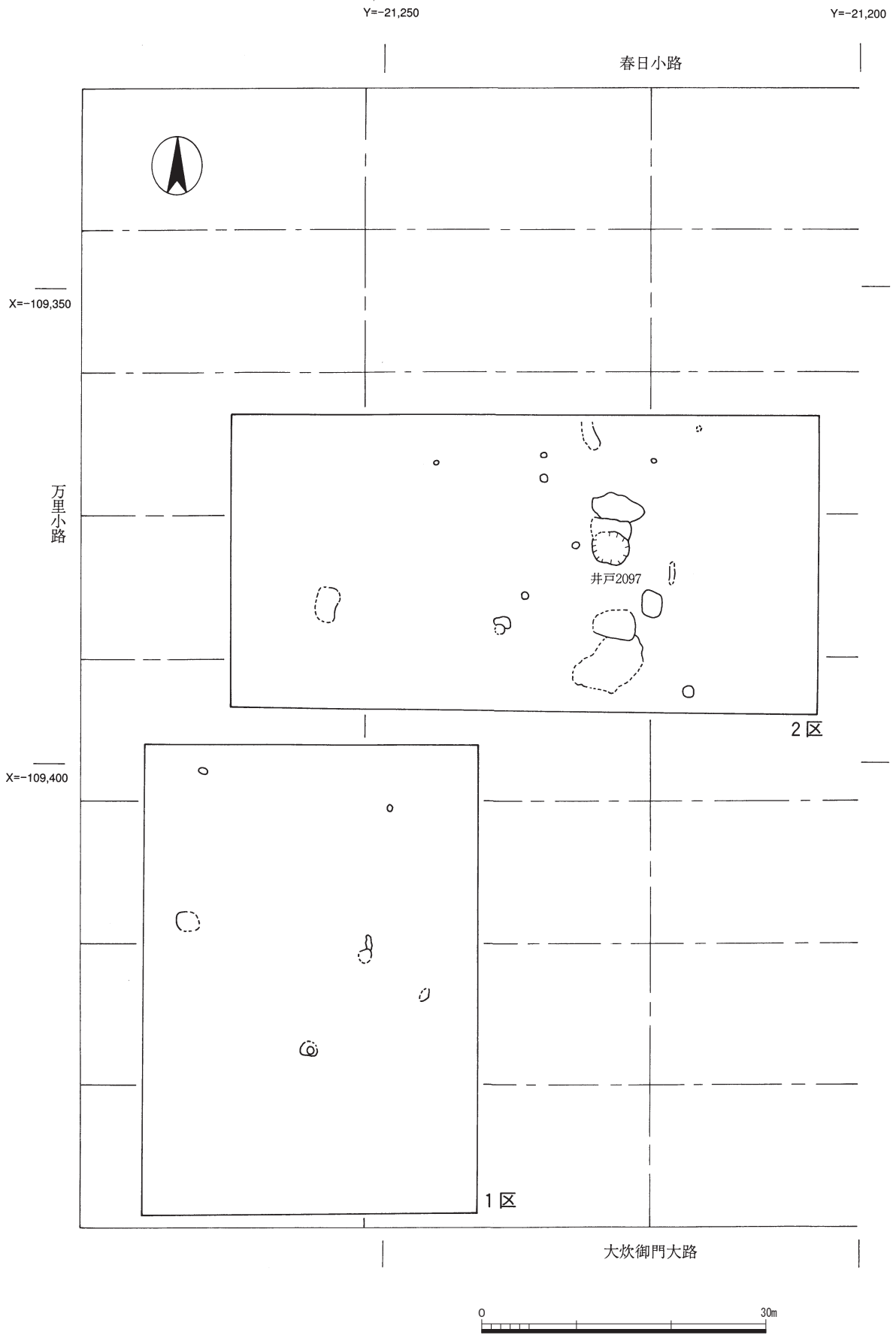


図 15 III期の遺構概要図 (1:600)

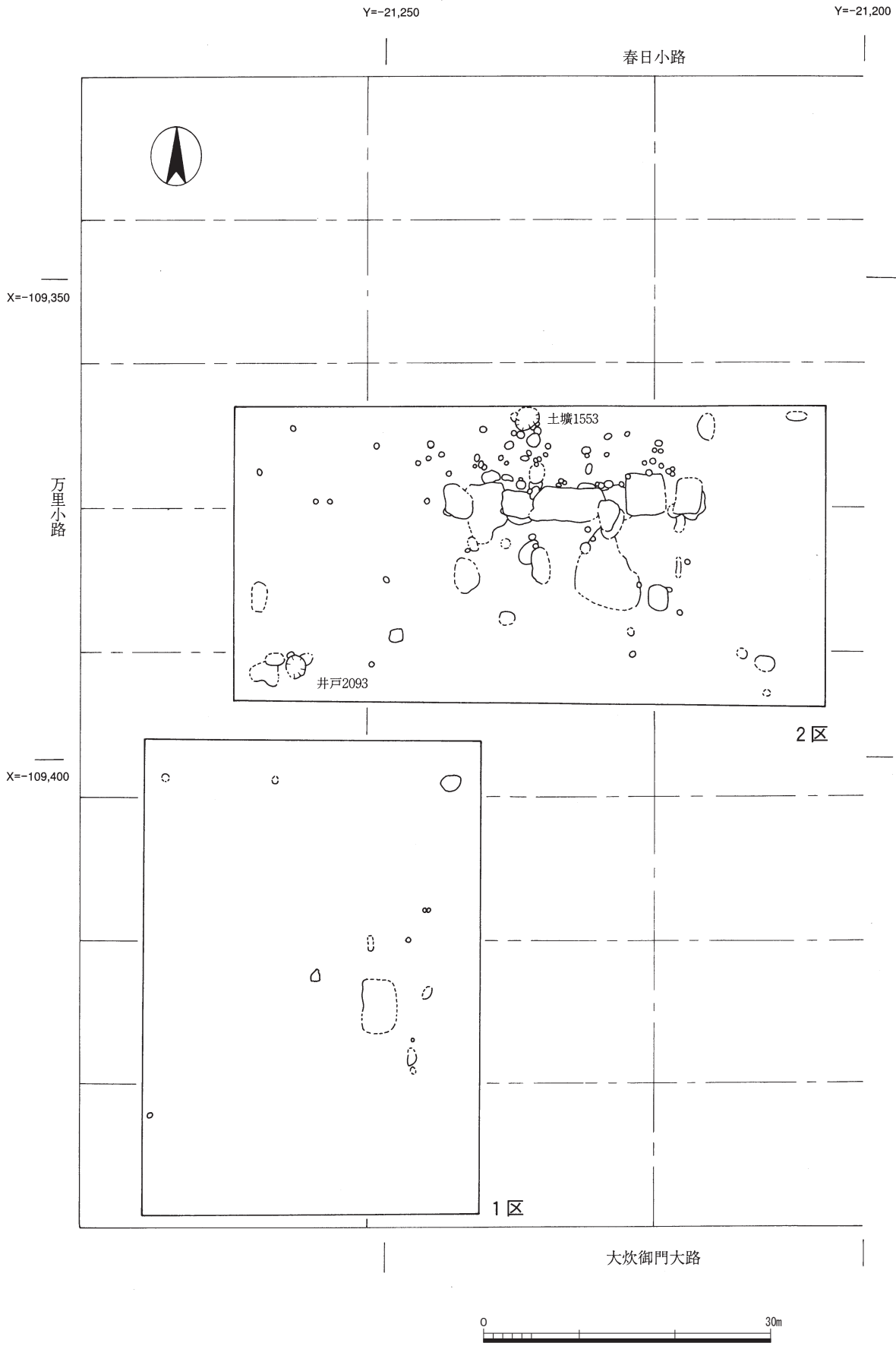


図 16 IV期の遺構概要図 (1:600)

Y=-21,250

Y=-21,200

春日小路

X=-109,350

万里小路

X=-109,400

2区

1区

大炊御門大路



図17 V期の遺構概要図(1:600)

Y=-21,250

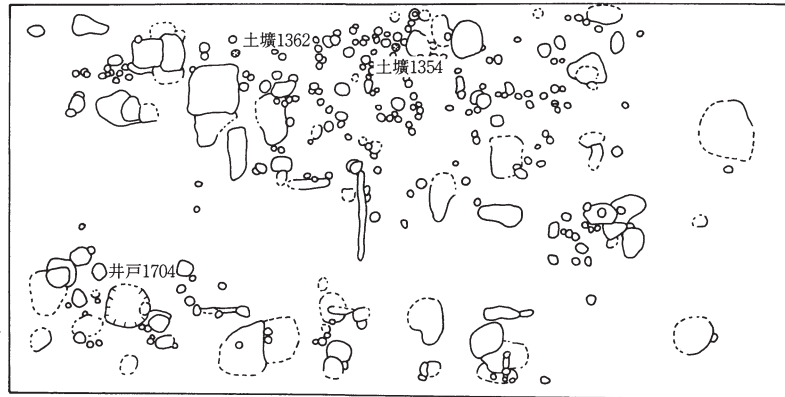
Y=-21,200

春日小路



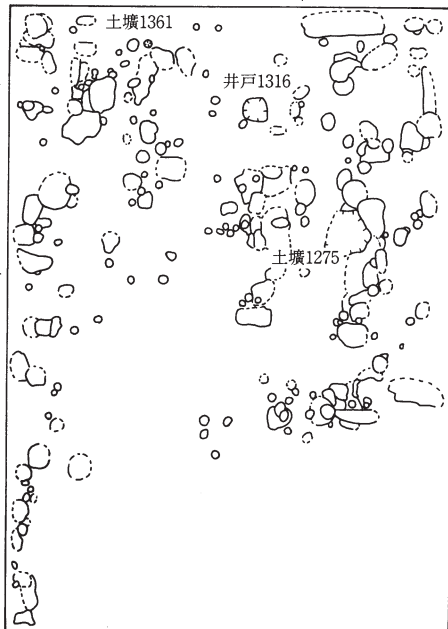
X=-109,350

万里小路



2区

X=-109,400



1区

大炊御門大路



図 18 VI期の遺構概要図 (1:600)

Y=-21,250

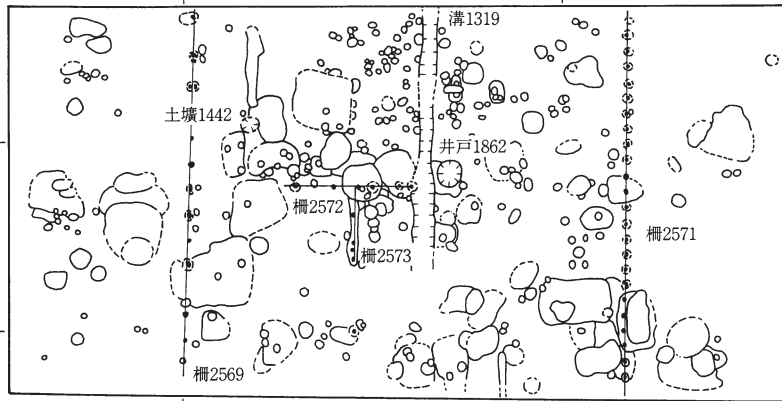
Y=-21,200

春日小路



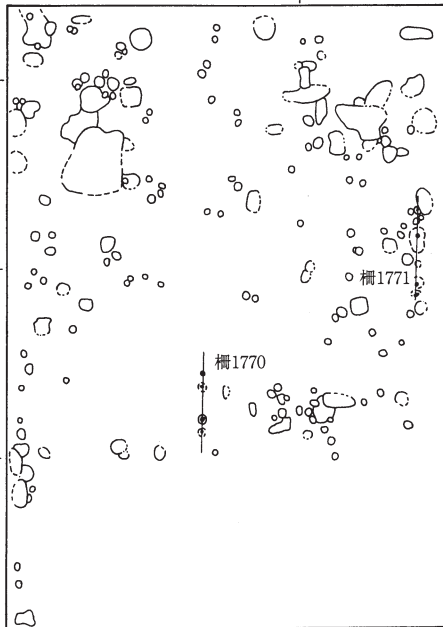
X=-109,350

万里小路



2区

X=-109,400



1区

大炊御門大路



図19 VII期の遺構概要(1:600)

Y=-21,250

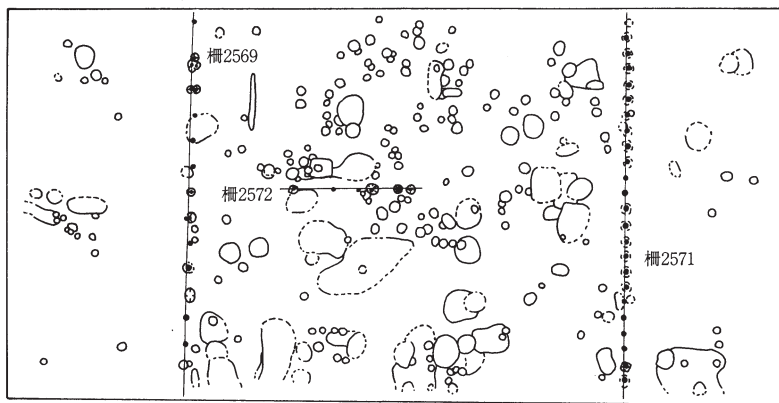
Y=-21,200

春日小路



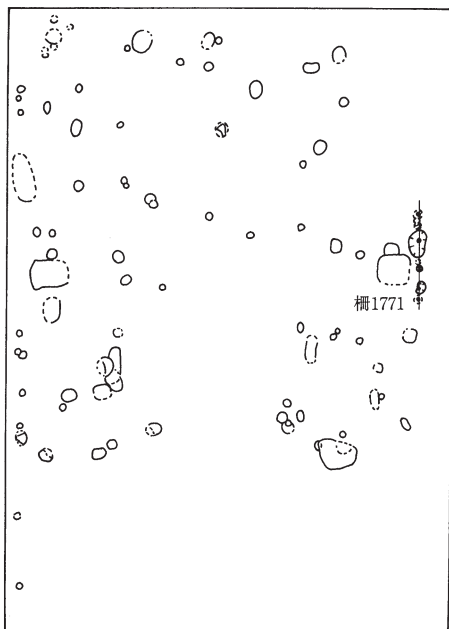
X=-109,350

万里小路



2区

X=-109,400



1区

大炊御門大路



図 20 VIII期の遺構概要図 (1:600)

Y=-21,250

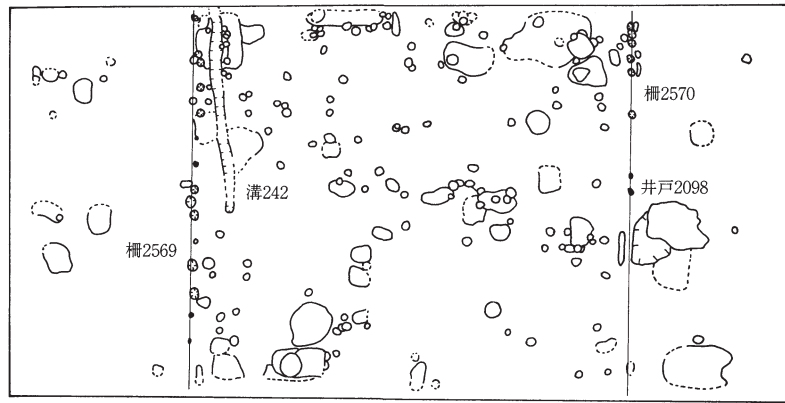
Y=-21,200

春日小路



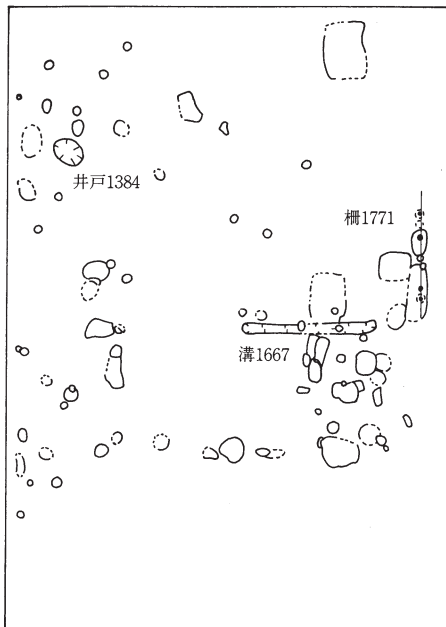
X=-109,350

万里小路



2区

X=-109,400



1区

大炊御門大路



図 21 IX期の遺構概要図 (1:600)

Y=-21,250

Y=-21,200

春日小路

X=-109,350

万里小路

X=-109,400

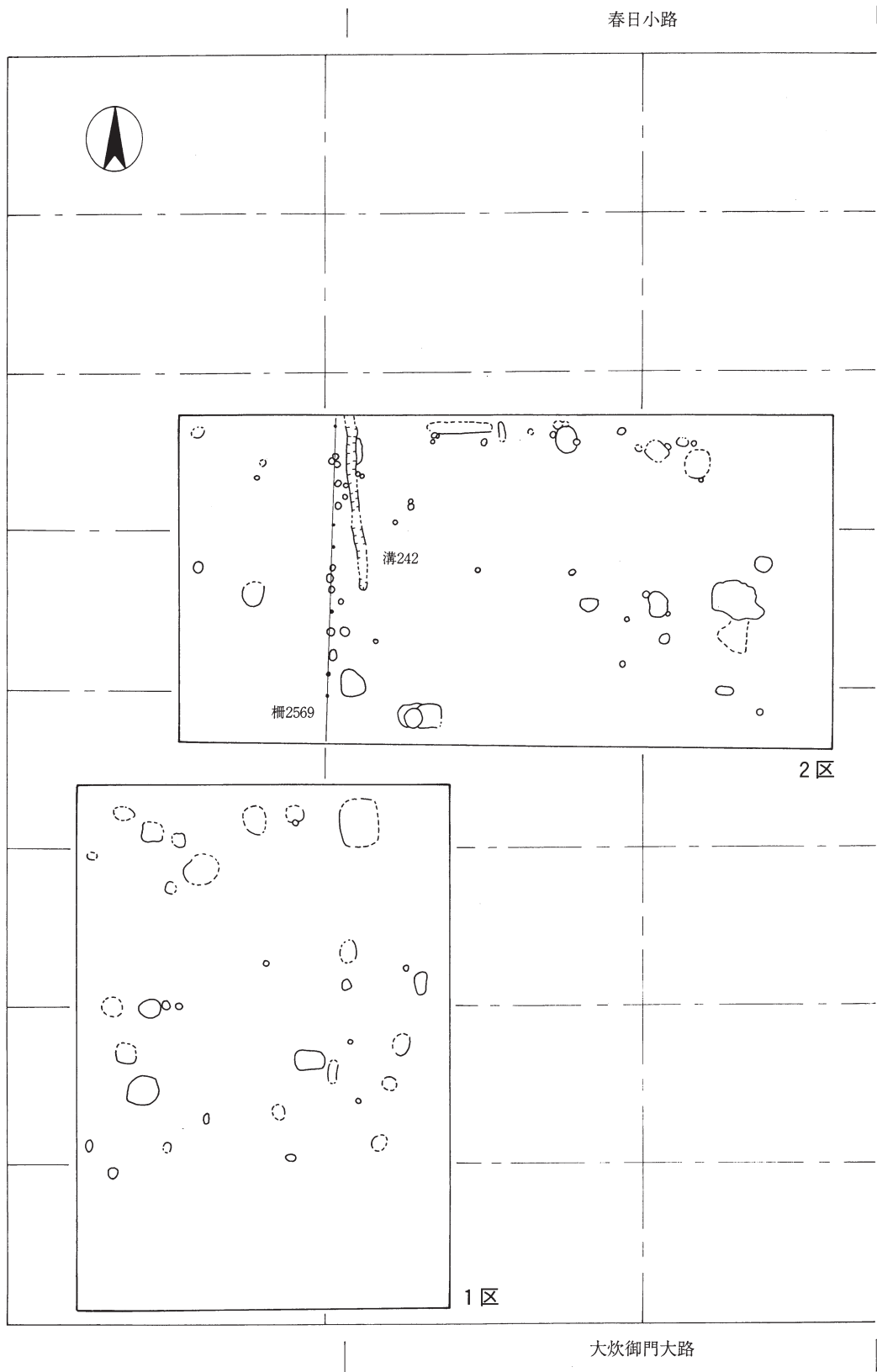
2区

1区

大炊御門大路

0 30m

図 22 X期の遺構概要図 (1:600)



Y=-21,250

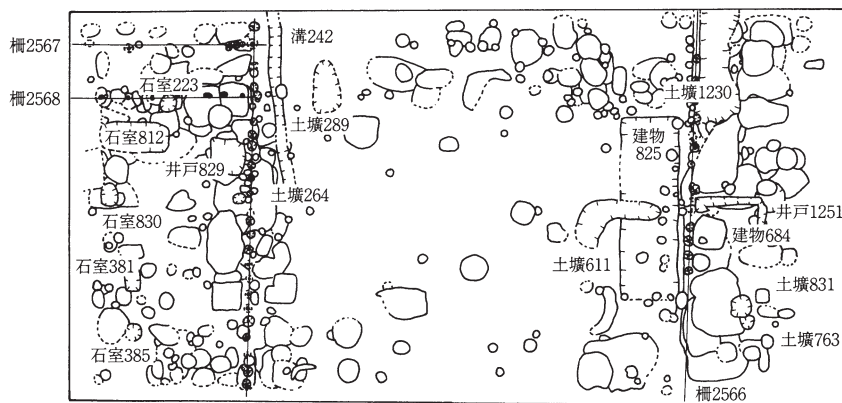
Y=-21,200

丸太町通



X=-109,350

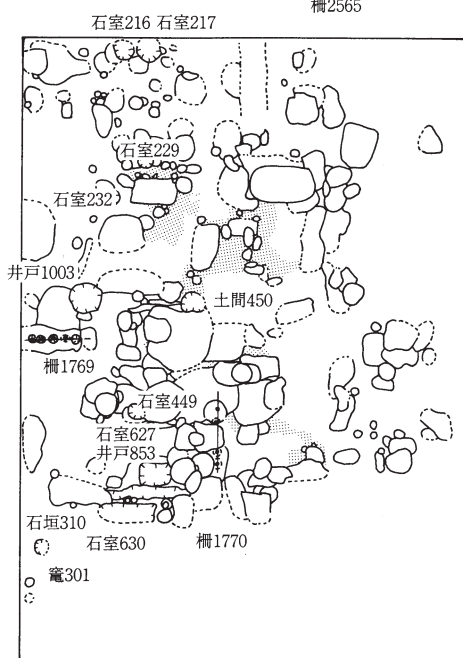
柳馬場通



柵2565

2区

X=-109,400



1区

竹屋町通



図 23 XI期の遺構概要図 (1:600)

Y=-21,250

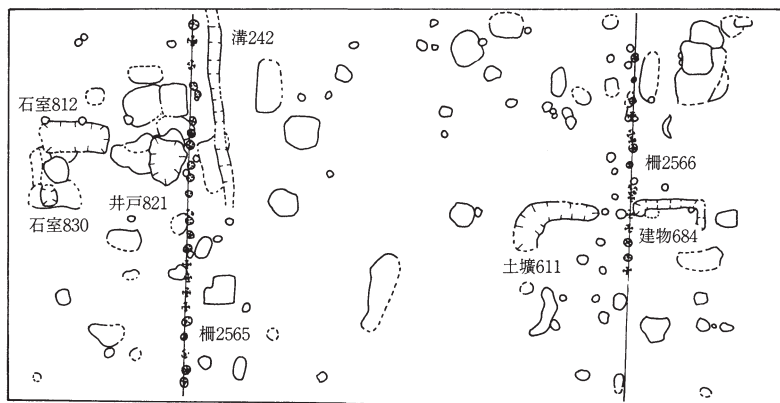
Y=-21,200

丸太町通



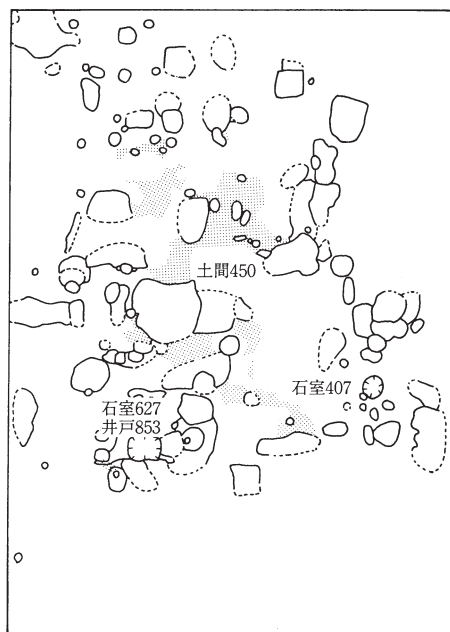
X=-109,350

柳馬場通



2区

X=-109,400



1区

竹屋町通



図24 XII期の遺構概要図(1:600)

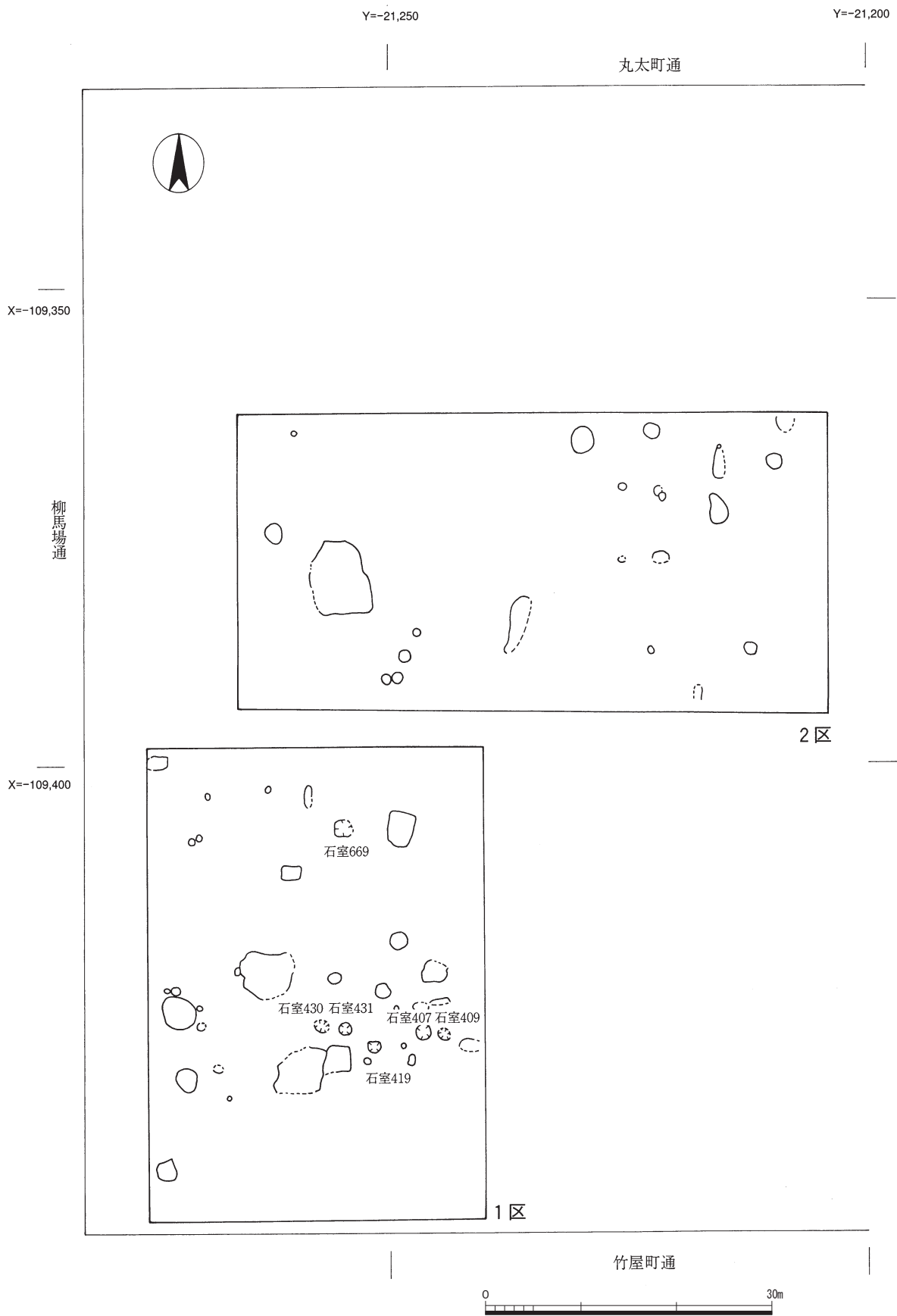


図 25 XIII期の遺構概要図 (1:600)

Y=-21,250

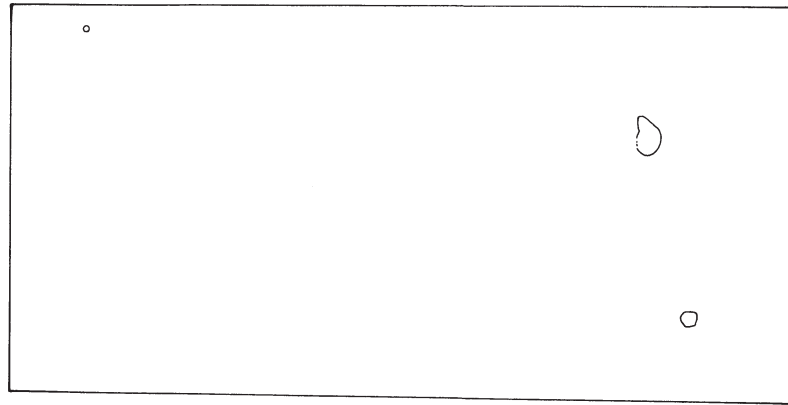
Y=-21,200

丸太町通



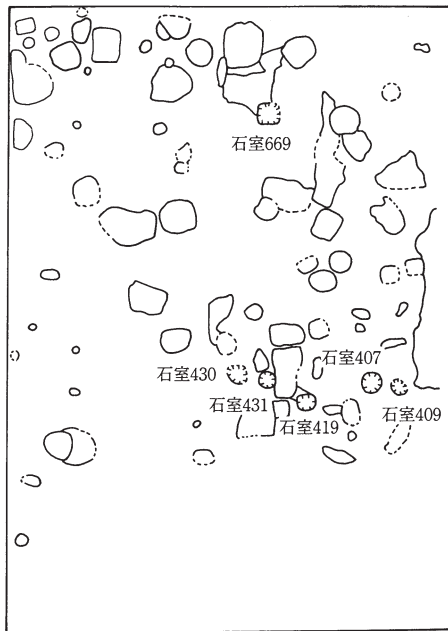
X=-109,350

柳馬場通



2区

X=-109,400



1区

竹屋町通



図 26 Ⅳ期の遺構概要図 (1:600)

土し、活況を示している。

江戸時代中期～後期（Ⅲ期・Ⅳ期）の段階では、近代以降に攪乱された部分が多く調査地の状況がますます分かりにくくなる。1区の西部や南部では井戸や便所が並ぶことから、竹屋町通に面して戸口を開けた町屋が建ち並んでいたことが判る。また、棧瓦の出土量が増えることから瓦葺きの建物が普及したことも判る。この頃には、現在の近隣の町並みと同様の景観が広がっていたことであろう。

2 出土土器の検討

(1) 土器の器種構成の消長

ここでは土器群の様式的理解に向けた基礎資料の一つとして、出土した土器類の消長の概要を述べ、表4にまとめておく。^{註30}

土師器 I期からXI期まで土器類の大多数を占め、最も普遍性の高い器種である。I期～III期では、須恵器の割合が比較的大きい2区土壌2020・2474を除き、ほぼ60%程度で推移する。IV期になると割合が増大し、VI期～X期では90%以上、遺構によっては99%を越え、圧倒的多数を占めるようになる。ところが、XI期になると約20%減少し、XII期の1区土壌190では全体の約54%になる。

I期の器形には椀・杯・皿・高杯・甕などがあるが、高杯・甕は徐々に減少し、高杯はIV期頃、甕はVI期頃にみられなくなる。また、椀・杯・皿は器形の小型化がすすむことにともなって区別が不明瞭となり、IV期頃には小型皿・口縁部が強く屈曲する小型皿・大型皿に大別できる。IV期新段階～VI期には受け皿形の小型皿が加わる。皿類はIV期以降、口縁部の形態を変化させながら小型化の傾向がすすむ一方、VI期には白色系土師器が出現する。VII期以降になると赤色系土師器は小型化の傾向がさらにすすむとともに、白色系土師器と比較して割合が減少する。ただし、VIII期中段階2区土壌1975やVIII期中段階～新段階2区土壌1870の例のように赤色系土師器がかなりの割合を占める場合もあり、単純に交替がなされるわけではない。一方、白色系土師器はVII期以降増加し、土師器の中心を占めるようになる。この器形もVI期～VIII期に小型化の傾向がすすみ、一旦、IX期に扁平な大口径の大型皿が現われるが、やはりその後も小型化の傾向は継続する。産地はすべてが京都産と断定でき、他地域からの搬入品は数点しか含まれていない。

白色土器 II期古段階から含まれており、IV期～V期にやや増加する傾向がある。VI期以降は器種構成の0.5%以下ではあるが、わずかに含まれる。白色土器はVI期には確実に存在するが、消滅については不明な点が多い。これは器種構成に占める割合が小さく小破片が多いため、混入品との区別が困難なことによる。今回の調査では比較的大きな破片が含まれていたためVII期新段階まで数量化したが、混入品である可能性も残る。

器形は椀・皿・高杯が中心で、V期以降は小型化の傾向がすすむ。なお、IV期新段階2区土壌1553では盤や壺を含み、器種構成でも3.2%を占め、特異な状況を示している。

黒色土器 II期古段階～III期中段階に含まれる。II期新段階2区土壌2543で割合が大きいが、

これ以外では器種構成の約2～4%で推移する。器形は椀・杯・甕が中心で、器形にかかわらず成形・調整が簡略化される傾向がすすむ。

瓦器 IV期中段階に現われ、以後継続して含まれる。IV期～IX期では平均すると器種構成の約1%を占め、XI期以降には割合が増加する。器形は椀・鍋・釜・火鉢が中心で、XI期頃には灯火具・蓋・甕も加わる。椀はIV期中段階～VIII期古段階に含まれ徐々に小型化し、成形・調整が簡略化される傾向がすすむ。楠葉型・和泉型・大和型が確認でき、楠葉型の割合が大きく、大和型は極少数である。鍋・釜はVI期古段階に現われ、増加しながらIX期まで含まれる。いわゆる京都型の鍋・^{註31}釜が主で、小型の三足釜や把手付片口鍋も少量ながら出土した。これらは小破片が多く、器形の変化はよく判らない。火鉢はVI期中段階に現われ徐々に増加する。大和産がほとんどを占める。甕も大和産である。^{註32}

須恵器 I期～V期では土師器に次いで器種構成の多くを占めるが、徐々に割合は減少し、VII期以降は1%未満となる。II期新段階～III期古段階2区土壌2020や、III期中段階2区土壌2474で割合が大きいのは、壺・甕類の破片が多く含まれるためである。器形は杯・蓋・椀・鉢・壺・甕が中心である。杯・蓋・椀はI期～II期では須恵器の約50%を占めるが徐々に減少し、V期・VI期以降は鉢と甕の組み合わせとなる。鉢は京都産から東播磨産へと産地が変化する。しかし他の器形については産地は不明である。

焼締陶器 VI期新段階に含まれるようになり、徐々に増加する。器形はVI期～X期はすべて甕で、常滑産・備前産がある。XI期以降はさらに増加し、器種構成の約10%を占める。器形では甕の他に盤・鉢・壺などが加わる。産地は常滑産・備前産が減少し、信楽産・丹波産が増加する。なお、XI期にベトナム産の焼締陶器が1点ある。

灰釉陶器・灰釉系陶器 灰釉陶器はI期から含まれており、IV期までは器種構成の約2～10%を占めている。器形は椀・皿・壺が中心であるが、椀・皿は徐々に小型化とともに成形・調整の簡略化がすすむ傾向にある。簡略化は特に施釉技法に著しく、IV期～V期では口縁部や内面の一部に薄く釉がかかる程度となり、灰釉系陶器に移行する。ほとんどが猿投産である。

灰釉系陶器はIV期～V期にみられるようになる。器種構成に占める割合は3%以下で徐々に減少する。器形は椀・鉢が中心で入子の皿・椀も少量含まれる。小破片が多く、産地は不明であるが、美濃産の特徴を示す個体が含まれる。

緑釉陶器 I期～III期に含まれており、器種構成の約1～7%を占める。器形は椀・皿が大部分で火舎・甕・香炉なども少量含まれる。産地は当初は京都洛北産が多く、後に洛西産が増加する。近江産・美濃産の特徴を備えた個体もある。また、極少量であるが、二彩陶器が出土した。

施釉陶器 VIII期頃から含まれるようになる。X期までは器種構成の1%以下に過ぎない。VIII期中段階～新段階2区土壌1870で割合が大きいのは四耳壺がほぼ一個体分出土したためである。器形は椀・皿・鉢・壺がある。ほとんどが灰釉で、褐釉は極少量である。すべて瀬戸産である。XI期になると割合が急増し、10%以上を占めるようになる。器形は椀・皿・鉢・盤・壺など多様で、様々な形態・意匠が取られるようになる。産地は唐津産が増加し、瀬戸・美濃産とほぼ同量

表4 出土土器構成表

時期	遺構	破片総数	土師器	白色土器	黒色土器	瓦器	須恵器	焼締陶器	灰釉陶器	灰釉系陶器	緑釉陶器	施釉陶器	磁器
I	新	2区1730	240	72.5			25.0		2.5				
		1区1421	1254	65.6		2.4	26.5		1.9		3.6		
II	古	2区2516	1040	55.3	0.7	3.6	26.1		7.4		6.9		
		2区1965	692	59.6		2.3	27.3		6.9		3.9		
	新	2区2543	400	61.5	2.3	16.2	13.0		6.0		1.0		
III	古	2区2020	848	41.0	0.8	4.1	38.0		9.6		6.5		
		2区2471	405	63.7		3.2	25.7		4.9		2.5		
	2区2474	287	31.7		1.8	58.5		3.8		4.2			
	中	2区2097	460	43.3	0.2	0.9	35.6		9.6		10.4		
	新	1区1435	114	68.4		1.7	21.1		3.5		4.4		0.9
IV	古	2区1840	111	73.0	1.8		9.0		4.5				11.7
		2区1844	412	71.0	2.0		0.7	19.5		5.3			1.5
	新	2区1217	1788	80.3	1.0		0.3	11.4		4.0			3.0
	2区1553	3362	91.6	3.2		0.2	2.6		0.5				1.9
V	古	2区1990	574	96.7			-	1.6		0.7			1.0
		2区1849	693	89.6	0.4		-	5.1		2.7			2.2
	中	2区1039	440	88.4	1.6		3.0		1.1				1.1
	新	2区1851	17645	99.4			-	0.4		0.1			0.1
VI	古	1区550	1699	95.3	0.4		0.5	2.3	0.2	0.1			1.2
		1区1477	4115	99.6			0.2	0.1					0.1
	中	2区1994	418	91.6	0.5		1.2	5.0		0.5			1.2
VII	古	2区940	1337	92.4	0.1		3.7	1.6	1.0				1.2
		2区2023	4172	98.7			0.7	-		0.4			0.2
	新	2区1319	10431	98.4	0.1		0.8	0.3	0.1	0.1			0.2
	2区1442	6931	97.0	0.2		1.3	0.6	0.5	0.1	0.1			0.3
2区1330	3674	97.7	0.3		1.0	0.4	0.1	0.1				0.4	
VIII	古	2区699	5976	99.0			0.6	0.1	0.2				0.1
		2区1975	3144	96.2			1.1	0.4	1.9	0.1		0.1	0.2
	中	2区1870	1202	90.1			3.0	0.8	1.8			4.0	0.3
IX	古	2区1176	696	94.1			0.5		4.3			1.0	0.1
		2区1922	899	99.6			0.4						
	新	2区2098	365	97.0			0.3	0.5	1.4			0.3	0.5
	2区1148	2715	96.5			1.3	0.5	1.1			0.4	0.2	
X	古	2区136	1530	98.2			1.1		0.1			0.5	0.1
		2区1782	10209	99.5			0.5						
XI	古	1区353	3773	78.3			1.7		5.9		12.4		1.7
		1区768	3061	74.3			5.4		4.1		14.9		1.3
	中	2区776	2306	61.2			9.7		9.0		15.7		4.4
	新	2区813	3875	82.3			2.3		3.2		7.6		4.6
XII	古	1区190	1104	54.7			2.8		10.9		12.9		18.7

数値は%

となる。また、わずかながら京都産の軟質施釉陶器も含まれる。

磁器 Ⅲ期に現われ、以後、継続して含まれている。Ⅲ期～Ⅹ期では、Ⅳ期古段階の土壌 1840 を除けば、平均すると器種構成の約 1% で推移するが、Ⅺ期になると増加しⅫ期に急増する。器形はⅩ期までは椀・皿・壺が中心で、Ⅺ期以降は椀・皿がほとんどを占める。Ⅹ期まではすべて中国産で、青磁・白磁が継続して含まれる。青磁はⅤ期～Ⅵ期頃に越州窯系から龍泉窯系の製品に変化する。青白磁はⅥ期～Ⅷ期に多い。青花はⅨ期新段階 2 区土壌 1148 で景德鎮窯系の製品を確認することができた。Ⅺ期では景德鎮窯系と漳州窯系の製品がほぼ同量含まれている。その他に褐釉の盤・壺、磁州窯系の壺も少量含まれる。伊万里はⅪ期中段階に現われるが、Ⅺ期の間は中国産磁器に比較して割合が少ない。ところが、Ⅻ期には磁器のほとんどを伊万里の椀・皿が占めるようになり、中国産は含まれなくなる。

用途による器種構成の消長 器種の消長と重複するところもあるが、用途による器種構成の消長をまとめておく。

供膳具では、すべての時期を通して土師器の椀・杯・皿が最も大きい割合を占めている。Ⅰ期～Ⅱ期では遺構ごとの偏差があるものの、白色土器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が一定の割合を占めているが、Ⅳ期頃には減少する。Ⅵ期～Ⅹ期では土師器皿がほとんどを占め、わずかに白色土器・瓦器・施釉陶器・磁器の椀・皿が含まれる。Ⅺ期～Ⅻ期では土師器皿が減少するのに対して、施釉陶器の椀・皿・鉢が 10～20% を占めるようになり、また、磁器の椀・皿も徐々に増加する。

調理具では、Ⅳ期に東播磨産の須恵器鉢が出現し、器種構成の中の割合は少ないが、継続して含まれる。内面が使用により磨滅した個体が多く、こね鉢として用いられたことが判る。Ⅺ期～Ⅻ期は播目を加工した焼締陶器の鉢が増加する。信楽産・丹波産が多く、他に少量の備前産が含まれる。

煮沸具では、Ⅰ期～Ⅴ期では土師器甕が 90% 以上を占め、残りを黒色土器甕が補う。Ⅲ期以降は出土量が減少する。瓦器の鍋・釜はⅥ期に出現し、徐々に土師器甕と交替しⅧ期以降は 100% を占める。Ⅺ期～Ⅻ期では出土量が増加し、土師器の鍋・釜が 100% を占める。

貯蔵具では、Ⅰ期～Ⅵ期では須恵器の壺・甕が大部分を占め、灰釉陶器・灰釉系陶器の壺がこれに次いで多い。白色土器・緑釉陶器・磁器の壺の割合は少ない。焼締陶器の甕はⅥ期に出現し、徐々に増加してⅧ期には須恵器の甕と交替する。常滑産・備前産が多くを占める。Ⅶ期～Ⅹ期では施釉陶器・磁器の壺も少量含まれる。Ⅺ期～Ⅻ期では信楽産・丹波産・備前産の壺・甕に加えて、瓦器の壺・甕、施釉陶器・磁器の壺も一定の割合を占める。

土師器皿と他の器種との併行関係 以上のように器種・用途ごとに出土土器類の消長をまとめることができた。同一遺構出土の土師器皿と他の器種の型式的特点を比較すると、型式変化の併行関係が認められるのは瓦器椀のみで、他の器種では多くの場合土師器皿に比べて古い型式的特点を備えていることが判る。図版に掲載した中でもⅢ期中段階 2 区土壌 2474 の緑釉陶器香炉 (144)・Ⅳ期新段階 2 区土壌 1217 の灰釉陶器椀 (206)・Ⅷ期新段階 2 区土壌 1870 の焼締陶器甕

(623・624)・施釉陶器壺(625)・XI期新段階の2区土壙813の施釉陶器鉢(1013)などをあげることができる。これは土師器の生産から廃棄までの間隔が短いのに対し、他の器種の使用期間が土師器皿よりも長かったことを示している。特に調査地で遺構が途絶えていた時期に相当する大窯Ⅲ期に生産された施釉陶器がXI期の遺構から出土していることは、当時の施釉陶器の所有状況に示唆を与える。

(2) 土師器皿に関する若干の検討

中世の土師器皿の使用法 ここでは出土土器の大多数を占める土師器皿に関して、今回の調査で得られた知見のいくつかを紹介する。

管見のおよぶ限り中世の土師器皿の使用法については、次の指摘がある。^{註34}

- ①祭祀に伴う埋納儀礼に用いられた。
- ②饗宴などの儀式に使い捨ての食器として用いられた。
- ③日常的な食器として用いられた。
- ④灯明皿として用いられた。

今回の調査において、①に関連する遺構で確実に土師器の埋納が認められる遺構は、次項で述べる1区井戸1421・土壙1361の2基である。いずれも口縁部を上に向けて複数個体の場合は重ねて埋納が行われていた。他にも完形もしくは近い状態の土師器皿が多数まとまって出土した遺構はあるが、出土状況がかなり乱雑でこれらとは明らかに異なっている。埋納儀礼に用いられた例はきわめて限定されると考える。

完形もしくは近い状態の土師器皿が多数まとまって出土する例は、②の場合である可能性が高い。IV期新段階2区土壙1553出土土器は白色土器や白磁の割合が大きく、遺構からも一町規模の邸宅が営まれた時期に該当することから、儀式で用いられた土器が廃棄されたと考えられる。最も土師器皿が多く出土するⅦ期～Ⅹ期は、大炊御門殿が廃絶し町屋が建ち並んでいた時期であった。Ⅶ期新段階2区土壙1442・1330、Ⅸ期新段階2区土壙1922などの遺構があり、儀式の主体者は町屋に生活した人々であった可能性が考えられる。^{註35}

しかし、まとまった状態で出土する土師器皿は全体のわずかに過ぎず、大部分の土師器皿は細片で出土し、接合作業を行っても完形には復元できない。これからすると中世の土師器皿の多くは日常的に用いられたと考えることが妥当である。日常的に使用に耐えられなくなった個体から捨てられたのであり、使用痕が顕著に残っていないのは廃棄までの期間が短かったためと考えられる。^{註36}そこで問題となるのは③の場合と④の場合の使用法の違いである。今回の調査では口縁部に煤が付着し、確実に灯明皿として使用された痕跡を残す土師器皿がⅦ期で確認できた。しかし、煤が口縁部に付着する土師器皿はⅩ期までは非常に少なく、灯明皿としての利用頻度が高くなるのはⅪ期以降であった。したがって、中世の土師器皿は、①・②・④の特別な場合を除き、ほとんどが日常的な食器として用いられたと考えられる。

白色土器と白色系土師器 白色土器は平安京・中世京都を特徴づける遺物の一つである。^{註37}今回

の調査でもⅡ期～Ⅶ期の遺構から白色土器が少量ながら出土した。

白色土器に関しては高橋照彦氏が従来の研究を総括し、文献資料に記される「栗栖野様器」が白色土器を示していること、白色土器が「土器」^{註38}よりも格の高い儀式で用いられる食器であったこと、「白土器」^{註39}の出現には白色土器からの技術導入があったことなど、重要な論点を指摘した。^{註40}

白色土器が儀式に用いられた例として、先述した2区土壙 1553 出土土器があげられる。平安京および近郊では、白色土器が一括して多量に出土する例が知られており、^{註41}2区土壙 1553 の例もやや時期が新しくなるが、器種構成や出土状況がこれらに準じる傾向を示している。

さて、2区土壙 1553 出土の土師器の中には胎土・色調が白色土器と類似し、器形・手法が橙褐色の土師器と共通する一群の土師器が多数含まれていた。以下これらを「白色胎土の土師器」と呼称する。白色胎土の土師器は器種構成での割合が約 6.5% を占め、白色土器と合わせると全体の約 10% となる。両者は色調からみてきわめて密接な関係にあったと推定できる。

白色系土師器の成立に関しては、小森俊寛氏が白色系土師器は橙褐色の土師器から分化・成立したこと、Ⅴ期新段階に白色胎土の土師器が存在していること、Ⅵ期中段階に白色系土師器は口径に比して深い形態に定型化することを指摘した。^{註42}また、近隣に白色土器の生産地があったと考えられている、^{註43}南ノ庄田瓦窯の発掘調査では、平方幸雄氏により白色土器と白色系土師器の補完的な関係が指摘された。^{註44}

2区土壙 1553 出土の白色胎土の土師器は、橙褐色の土師器と白色系土師器の関係がすでにⅣ期新段階に始まっていることを示している。白色系土師器の成立に橙褐色の土師器や白色土器が影響を与えていたとすると、それはⅤ期新段階～Ⅵ期に急速にすすんだのではなく、少なくともⅣ期新段階に接点が萌芽的に現われ、Ⅴ期を通じて関係が継続したと推定できる。注意すればこの間の類例は増加するであろう。今回の調査でも2区土壙 1553 の他に、Ⅴ期新段階～Ⅵ期古段階2区土壙 1851 から少量の白色胎土の土師器小型皿が出土している。白色系土師器の成立は、白色土器の消滅やⅦ期以降に基調となる器種構成の成立に関わる重要な問題であり、更なる検討が必要である。

3 宅地内埋納遺構について

平安京内での発掘調査では、埋納を目的として穴を掘ったり、柱穴・井戸掘形などに、原則として完形の土器を意図的に埋納した遺構がこれまで多数検出されている。これを「埋納遺構」と呼称する。^{註45}これらの遺構は、祭祀に関連したもの、胞衣に関連したものに大きく分けられる。ここでは、祭祀に関連した1区井戸 1421・1区土壙 1361・2区土壙 1354・1362 を取り上げ、若干の検討を行う。

(1) 井戸に関連した埋納遺構（図版 10・57、図 27）

遺構の概要 1区井戸 1421 は1区中央部で検出した井戸で、井戸枠は四隅に支柱痕跡が残り、北西隅の支柱痕跡下で土師器椀（53・54）の口縁部を上に向け、2枚重ねて据えた埋納遺構を検出した。下の土師器椀（53）底部には「在」の墨書がある。この土器の下で、さらに直径 0.6m、深

さ 0.1m の浅い円形の土壌があり、中央に須恵器蓋 (68) の口縁部を上に向けて据えた埋納遺構を検出した。埋納した蓋・椀内から内容物は検出できず、また伴出遺物はなかった。井戸の造営時期は、井戸枠内および掘形から出土した土師器から平安時代前期後半 (Ⅱ期古段階) と推定できる。

遺構・遺物の検討 井戸 1421 の位置は十町域の南西部にあたり、四行八門の境界にはあたらない。同時期の遺構としては、1区・2区ともに土壌・柱穴などがあり、十町は宅地として利用した様子うかがえる (図 13)。ただ、同時期の遺構は少なく建物配置との関係は不明である。

井戸支柱痕跡下で検出した二つの遺構では、出土した器物が完形であること、また、口縁部を上に向けて整然と据えられたことから、意図的な埋納が行われたことが判る。この行為は、掘形を掘削して、井戸枠を構築する前に執行されている。遺構の位置と執行時点から考え、埋納行為は井戸造営の際、土地や水の神に対して器物を供献・奉納する祭祀と捉えることができ、井戸の設営に関する鎮め、井戸施設や水の保持などを目的とした鎮祭行為と理解できる。^{註46}

井戸 1421 出土土師器椀の墨書「在」については不明な点が多い。ただ、高槻市嶋上郡衙跡検出の平安時代中期の井戸枠内底部で、「天座大神王」・「十二神王」・「水神王」などと墨書した土師器皿が出土している。^{註47} また、平安京右京二条三坊十六町で検出した平安時代前期の井戸 (SE401) の底部付近で、「宅水宅水干水干」などと墨書した土師器皿が出土している。^{註48} これらの文字については、井戸使用時の井戸鎮めのため謹請すべき諸神の名前であるとされ、^{註49} 「在」の墨書もこのような諸神の名称と

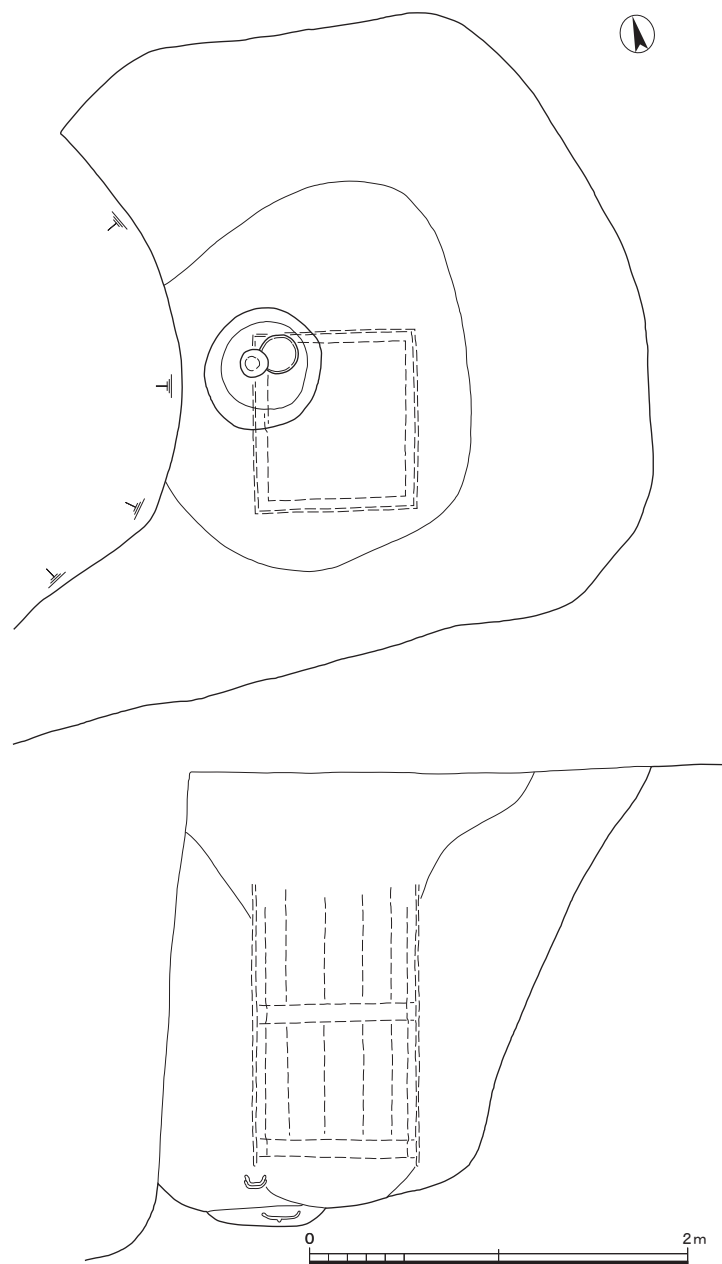


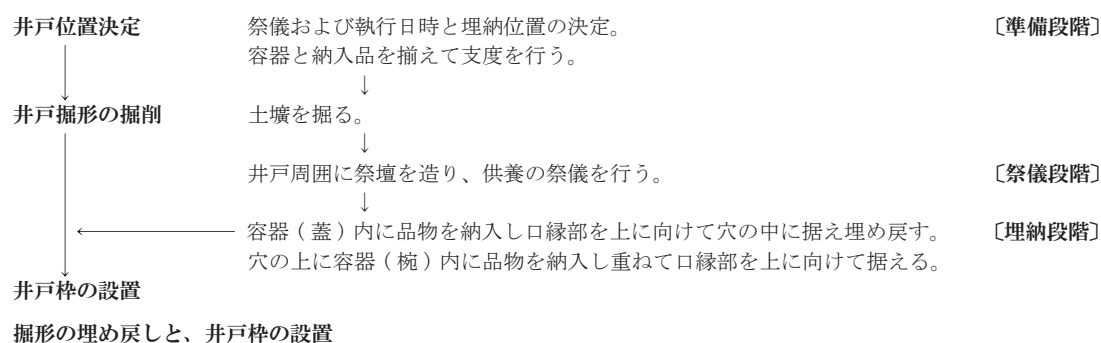
図27 井戸1421埋納遺構検出状況模式図(1:40)

関連した文字である可能性もあろう。

井戸に関連した祭祀 井戸から出土した祭祀関連遺物は、掘形などに入るもの、井戸枠内底部に入るもの、井戸枠内埋土上部に入るものがあり、それぞれ井戸造営時の祭祀、井戸使用開始時の祭祀、井戸廃絶時の祭祀と考えられている。ところが、祭祀関連遺物の出土状況の詳細な検討が行われていない場合が多く、祭祀に伴うかどうか不明な場合が多い。井戸掘形などに器物が入る場合、埋土中に破片として混入したものと、意識的に埋納したものとを吟味する必要があり、前者の場合は井戸掘削時の祭祀ではなく、周辺に埋蔵されていた遺物が混入した可能性が高い。後者の場合は井戸を造営する際に器物を埋納したと推定でき、本例は後者にあたる。

井戸祭祀の復元 埋納遺構の検出状況から、鎮祭の手順を具体的に復元する。

造営中の井戸と祭祀の場所が離れるとは考えがたいことから、鎮祭執行場所は埋納施設の隣接地と想定できる。遺構には椀・蓋が容器として埋納される。内容物は確認できなかったが、穀類・菜類・香類や粥などの有機物を納入した可能性が高い。実際に平安京の埋納遺構では穀類またはその痕跡が確認された例もある。また、木製などの有機質のものが蓋として利用されたことが想定できる。祭祀の執行時点は宅地を班給されて住民が住み始める前後、井戸や建物などの諸施設の施工中と推定できる。これを整理すると下のようになる。



都城での類似遺構 井戸の掘形などに器物を埋納し、井戸造営に関連したと確認できた遺構は、平城京左京二条二坊十四坪 SE40、平城京右京八条二坊十二坪 SE407 と平安京の本報告例の計3箇所しか検出されておらず、藤原京・長岡京では確認されていない。

平城京左京二条二坊十四坪では、坪南西部でSE40を検出した。井戸は主屋SB36の西側にあたる。SE40（掘形径2.4m、深2.8m）は、掘形底に濾過施設の木炭層があり、層中に万年通寶1、ガラス玉1を埋納する。時期は奈良時代末である。平城京右京八条二坊十二坪では、南東部でSE407を検出した。SE407（掘形1.9m×2m）は、掘形埋土内に須恵器小壺を口縁部を上に向けて埋納する。納入物や蓋は検出できなかった。時期は奈良時代中頃（平城Ⅲ）である。

関連する史料 『延喜式』神祇三 臨時祭条には「御井祭」がみられる。これは神祇祭祀ではあるが、鎮祭の性格をもつと推定されている。

御井祭 絹一疋。五色薄絁各四尺。絲一絢。綿一屯。倭文二尺。木綿八両。麻一斤。布一端。庸布一段。鋏二口。米。酒各二斗。稻四束。赤小豆二合。東鯪一斤。堅魚二斤。腊四斤。海藻三斤。鹽三升。醴二口。瓮一口。坏二口。匏二柄。裘葉薦一枚。櫛四把。輿籠一脚。食薦二枚。明

衣料調布二丈。夫二人。

『小右記』長元元年(1028)十一月七日条には「今日令掘堂井、(中略)以陰陽属為利令散供井鳥、」とあり、井戸の祭祀が陰陽道によっていることが判る。また、『兵範記』保元三年(1158)八月二日の条には「高倉殿鎮祭事等」として宅地の祭祀である土公祭と並んで「次井靈祭、有鶏、政所儲之、」とあり、平安時代後期には陰陽道で行われた宅鎮の土公祭に付随して井戸の鎮祭が執行され、「井靈祭」と称されたことが判る。

井戸埋納遺構の性格 井戸に関連した祭祀は、施工時・使用時・廃絶時など様々な場面で行われたと推定できるが、今回検出した遺構は井戸施工中の鎮祭として執行され、井戸や関連施設を鎮めるために行われたと推定できる。都城での類例は少ないが、時期的には奈良時代・平安時代前期の遺構が確認できる。平安時代前期での祭祀の名称は明らかではないが、平安時代中期には「御井祭」、後期以降には「井靈祭」と呼称されたものであろう。いずれにしても、今回検出した埋納遺構は、井戸施工時の祭祀を具体的に明らかにした初めての例として特筆できよう。

(2) 宅地内の埋納遺構(図版 16・57・74・図 28)

遺構の概要 1区土壙 1361 は、土壙中央に土師器皿 3 枚を口縁部を上に向けて重ねて据える。他に皿 2 枚が伴出する。2区土壙 1354 は、土壙の中央に瓦器壺(329)を口縁部を上に向けて据える。土壙内埋土から銭貨一枚が出土し、壺の伴出遺物である可能性が高い。2区土壙 1362 は、土壙の中央に瓦器壺(330)を口縁部を上に向けて据える。伴出遺物はない。時期は、いずれも共伴した土師器から鎌倉時代(VI期)である。

遺構・遺物の検討 土壙 1354・1362 は東西に 12.7m 離れて位置する。位置は東西方向で、真北にほぼ直行する。これらの遺構から約 93m 南西に土壙 1361 が位置する。これらの遺構の位置は十町内の四行八門の境界にはあたらない。

同時期の遺構としては、1区・2区ともに柱穴・土壙・井戸などの遺構を多数検出したが、宅地の地割りに関しては不明な点が多い。ただ、前項で述べたように一町占地で町域中央部に柱穴などの遺構が集中していたとすれば、建物集中地域の中に位置したと想定できる。しかし、建物の復元ができないため、これらの遺構が建物の隅や内部に位置したものか、特定の建物とは別に宅地内の空間に関連したものであるかは不明である。

土壙 1354・1362 出土瓦器壺はほぼ同大で類似し、一般にみられるものではなく特殊な器形である。これに対し土壙 1361 の土師器は一般的なものである。これらの土壙内に入った器はいずれも完形であること、また、いずれも口縁部を上に向けて整然と据えられていたことから、意図的な埋納が行われたことが判る。この行為は、宅地内の空間を使用する時点または建物などの施設が完成した時点で執行されたと推定できる。遺構の位置と執行時点から考え、宅地を利用する際に土地の神などに対して行われた、器物を供献・奉納する祭祀と捉えることができ、宅地内の鎮めや宅地内諸施設の保持などを目的とした鎮祭行為と理解できる。^{註54}

都城での類似遺構 宅地内に位置し宅地空間全域に関連した埋納遺構は各都城で検出され、藤

原京左京・右京各 1 箇所、平城京左京 11 箇所・右京 13 箇所、長岡京左京 6 箇所、平安京左京 6 箇所・右京 8 箇所、計 46 箇所検出されている。平安京では、左京一条三坊九町^{註55}、左京二条三坊九町^{註57}、左京四条四坊五町^{註58}、左京八条三坊二町^{註59}、右京一条三坊九町^{註60}、右京二条三坊一町^{註61}、右京二条三坊九町^{註62}、右京二条三坊十六町^{註63}、右京四条二坊十六町^{註64}、右京五条二坊五町^{註65}などで検出されている。

これらの遺構の位置は、坪・町内の隅部や中心部などが比較的多い。さらに、坪の南北・東西の中心推定線や 1/4 推定線に位置する遺構や、町の間・門境界付近に位置した遺構が多くみられる。複数の遺構が近接したものには、平城京左京八条三坊六坪（土壇二つが南北に 3m 離れる）・右京二条三坊六坪（土壇二つが東西に 3.9m 離れる）・右京八条一坊十三坪（土壇二つが南北に 2.2m 離れる）・同十四坪（土壇二つが斜方向に 1m 離れる、土壇二つが南北に 0.5m 離れる）、長岡京左京七条一坊九町（土壇三つが接して集中する）、平安京右京四条二坊十六町（土壇二つが南北に 10m 離れる）があり、それぞれの土壇形態や埋納容器が共通した場合が多く、数箇所セットで埋納行為が行われたと推定できる。

関連した史料 宅地内の鎮祭に関しては、平安時代中期以降多くの史料が散見できる。『九歴』天徳元年（957）八月十七日条には「令陰陽頭保憲、鎮坊城家」とある。『御堂関白記』長和五年（1016）八月十九日条には「土御門造作初、巳時行向、依件事、為土公等郊金光明経講、三僧從此依初修善」とある。『水左記』永保元年（1081）十一月廿二日条には「此日陰陽頭道言鎮土御門北対、七十二星西嶽真人、件鎮置天井上云々、又有土公祭、」とある。『中右記』承德二年（1098）二月廿三日条には、一条新堂の供養の祭に「属仁和寺甲斐阿闍梨寛智、聊令埋薬於新堂中央間地、是小眞言鎮也、五寶、五香、五薬、五穀、入小壺被掘埋歟、儲浄衣奉布施、此口地前年依立本堂、仰陰陽師被鎮地了、仍今度口致小眞言鎮許也、（後略）」とある。『兵範記』仁平三年（1153）十一月十九日条には「（前略）晚頭陰陽頭賀茂憲榮朝臣^{衣冠}来臨、隨身宅鎮物具等、先母屋四角打札、次西嶽真人鎮瓶、并七十二星鎮札櫃等、安母屋天井上北面并塗籠内等、懸灯楼所所、掌灯、戌刻成了、」とある。

平安時代中期には、『中右記』・『兵範記』などに記されたように、陰陽師によって宅地内で「鎮瓶」・「鎮札櫃」などの「鎮物具」を用いた「宅鎮」が執行されていた。宅鎮の位置は宅地の四方や中央、各辺の門などであり、調査で検出された埋納遺構の位置とほぼ対応する。調査では宅地内の一隅しか確認されていない例が多いが、四隅で行われた可能性が高い。

宅地内祭祀遺構の性格 今回検出した遺構は、宅地内空間の鎮めと、施設・建物などを鎮めるためと推定でき、施設・建物竣工後に執行したものと推定できる。平安京内では、これまで平安時代中期頃までの埋納遺構は確認されているが、今回の遺構のように鎌倉時代のものは初出であり注目できる。

このような鎮祭は、平安時代中期には「鎮祭」・「宅鎮」と呼ばれ、その後「鎮土公祭」・「土公祭」などになる。また、平安時代後期には「地鎮」という言葉が出現する。平安時代中期以降陰陽師が関わり、埋納もその教義に則って執行された可能性が高い。ただ、『兵範記』などによ

れば平安時代後期にはすでに鎮札（呪符）などの鎮物具が使用され、今回のような埋納遺構の鎮祭とどう関係するかが今後の課題といえよう。



図 28 1区土壙136出土土器

註

- 1 『縄文土器大観 後期・晩期・続縄文』小学館 1989年、家根祥多「篠原式の提唱」『縄文晩期前葉－中葉の広域編年』北海道大学文学部 1994年。
- 2 日本の地質『近畿地方』編集委員会編『日本の地質6 近畿地方』共立出版 1987年。
- 3 山本雅和・磯部 勝「平安京左京二条三坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- 4 内田好昭・高 正龍・堀内寛昭「平安京左京二条四坊1」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000年。
- 5 3に同じ。
- 6 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広「平安京左京二条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- 7 藤原基隆（1075～1132）は白河・鳥羽上皇の近臣として有名で、春日殿の他にも白河上皇に三条西殿を進上した。また、円勝寺も基隆の成功により建立された。「藤原基隆」『平安時代史辞典』角川書店 1994年、「円勝寺」『国史大辞典』2 吉川弘文館 1980年、「西三条内裏」『国史大辞典』10 吉川弘文館 1989年。
- 8 『百練抄』大治元年十二月二十七日条。
- 9 高橋照彦「出土文物からみた平安時代の儀礼の場の土器とその変化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集 国立歴史民俗博物館 1997年。

- 10 上原真人「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会 1988年。
- 11 『勘仲記』建保二年十二月四日条。
- 12 太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987年。
- 13 高橋康夫『京都中世都市史研究』思文閣出版 1983年、野口 徹『中世京都の町屋』東京大学出版会 1988年。
- 14 『玉葉』文治四年八月四日条。
- 15 この時期に塵芥処理壙が埋め立てられ、一町の中心部に建物が建てられたところもある。山本雅和・鈴木廣司「平安京左京四条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- 16 室町通四条下る西側の調査で類例の報告がある。百瀬正恒・辻 裕司・南 孝雄「平安京左京五条三坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- 17 宇野日出生氏は『五条町前後八町地検新帳』をもとに応仁の乱前後の土地利用の変化を明らかにした。乱後には空閑地が増加する。宇野日出生「中世京都町屋の景観－八坂神社文書を中心に－」『京都市歴史資料館紀要』13 京都市歴史資料館 1996年。
- 18 山科本願寺出土遺物が基準資料である。岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 国立歴史民俗博物館 1985年、永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年。
- 19 木下政雄「京都における町組の地域的発展－上京立売組を中心として」『日本史研究』92 日本史研究会 1967年、脇田晴子『日本中世都市論』東京大学出版会 1981年、高橋康夫『京都中世都市史研究』思文閣出版 1983年。
- 20 高橋康夫『洛中洛外』平凡社 1988年。
- 21 辻 裕司「遺跡からみた室町期京都の構成」『日本史研究』436 日本史研究会 1998年。
- 22 『洛中絵図－寛永後万治前－』臨川書店 1979年。
- 23 京都市編『京都の歴史4 桃山の開花』学芸書林 1969年、足利健亮『中近世都市の歴史地理』地人書房1 1984年。
- 24 蒲生忠知『日本人名大辞典』平凡社 1979年、蒲生忠知『国史大辞典』3 吉川弘文館 1983年。
- 25 6に同じ。
- 26 土山健史「甄列建物について」『関西近世考古学研究』Ⅲ 関西近世考古学研究会 1992年。
- 27 豊田裕章「関西における石積み土壌の諸問題」『関西近世考古学研究』Ⅱ 関西近世考古学研究会 1991年、水野和雄「戦国時代城下町『一乗谷』のトイレ」・前川 要「関西地方における中世から近世への便所遺構」『月刊文化財』350 第一法規出版 1992年。
- 28 6に同じ。
- 29 6に同じ。久世康博「京都・柳馬場通竹屋町出土の柄鏡鑄型資料」『研究紀要』第3号 （財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年、久保智康『日本の美術 394 中世・近世の鏡』至文堂 1999年。

- 30 平安京・中近世京都から出土する土器群についてはすでに多くの研究がある。参照した主要な論考を以下にあげる。
- 宇野隆夫「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告 II - 白河北殿北辺の調査 -』京都大学埋蔵文化財センター 1981年、伊野近富『『かわらけ』考』『京都府埋蔵文化財調査研究センター5周年記念論集』(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年、小森俊寛・上村憲章・平尾政幸「土器・陶磁器の様相」『平安京提要』角川書店 1994年、鋤柄俊夫「平安京出土土器の諸問題」『平安京出土土器の研究』(財) 古代学協会 1994年、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- 31 鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器 - 模倣系土器生産の展開 -」『中近世土器の基礎研究』IV 中世土器研究会 1988年、鋤柄俊夫「各地の瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年。
- 32 中島和彦氏の御教示による。
- 33 藤澤良祐氏の御教示による。
- 34 河野真知郎「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』21 神奈川考古学研究会 1986年、藤原良章「中世の食器・考 - <かわらけ>ノート」『列島の文化史』5 日本エディタースクール出版部 1988年、吉岡康暢「食の文化」『岩波講座日本通史』8 岩波書店 1994年、鋤柄俊夫「平安京出土土器の諸問題」『平安京出土土器の研究』(財) 古代学協会 1994年、『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館 1997年ほか。
- 35 山川 均氏は土師器皿がまとまって出土する遺構の中に、在地での儀礼の結果残されたものがある可能性を示した。山川 均「土器をまとめてすてること」『文化財学論叢』文化財学論叢刊行会 1994年。
- 36 伊野近富「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年。
- 37 平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店 1994年。
- 38 土師器皿にあたる。
- 39 本書の白色系土師器にあたる。
- 40 高橋照彦『『瓷器』『茶椀』『葉皿』『様器』考』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館 1997年。
- 41 37に同じ。具体例としては、平安宮内では内裏内郭回廊跡・内裏 SK25・左兵衛府 SD1・蘭林坊、平安京城では陽成院 SE19・右京二条三坊 SD14、平安京外では一乗寺向畑町遺跡 SK3 があげられる。但しこれらはⅠ期～Ⅲ期の遺構である。
- 42 小森俊寛「土師器・黒色土器・瓦器」『平安京提要』角川書店 1994年。
- 43 高橋照彦「山城における古代窯業生産」『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会 1992年、吉村正親「栗栖野瓦窯跡の調査(その2)」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年。
- 44 平方幸雄「白色土器」『南ノ庄田瓦窯跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年。
- 45 上村和直「都城における埋納遺構」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』森 郁夫先生還暦記念論文集刊行会 1999年。

- 46 森 郁夫「古代における地鎮・鎮壇具の埋納」『古代研究』18号（財）元興寺文化財研究所 1979年。
- 47 高槻市教育委員会編『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要』高槻市文化財調査概要Ⅳ・Ⅴ 高槻市教育委員会 1981年。
- 48 花園大学考古学研究室編『花園大学構内遺跡調査報告』Ⅴ 花園大学 1998年。
- 49 水野正好「鎮井祭の周辺」『奈良大学紀要』第10号 奈良大学 1990年。
- 50 堀内明博・吉崎 伸「平安京右京二条三坊1」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年、平尾政幸「平安京右京二条三坊」『平安京跡発掘調査報告 昭和61年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年。
- 51 佐川正敏「左京二条二坊十四坪の調査」『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報 昭和62年度』奈良国立文化財研究所 1988年。
- 52 奈良国立文化財研究所編『平城京西市跡－右京八条二坊十二坪の発掘調査』奈良国立文化財研究所 1982年。
- 53 岡田荘司「陰陽道祭祀の成立と展開」『陰陽道叢書』1 古代 名著出版 1991年。
- 54 木下密運「中世の地鎮・鎮壇」『古代研究』28・29号（財）元興寺文化財研究所 1984年。
- 55 45に同じ。
- 56 本弥八郎・平田 泰・木下保明「平安京左京一条三坊1」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989年。
- 57 京都市烏丸線内遺跡調査会編「No. 81」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 Ⅲ』1977～1981年度 京都市烏丸線内遺跡調査会 1982年。
- 58 長戸満男「平安京左京四条四坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年。
- 59（財）古代学協会編『平安京左京八条三坊二町』平安京跡研究調査報告第6輯（財）古代学協会 1983年。
- 60 平良泰久・伊野近富「平安京跡（右京一条三坊九・十町）」『埋蔵文化財発掘調査報告』1981 第1分冊 京都府教育委員会 1981年。
- 61 50に同じ。
- 62 花園大学考古学研究室編『花園大学構内遺跡調査報告』Ⅰ 花園大学 1984年。
- 63 48に同じ。
- 64 辻 裕司「平安京右京四条二坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年。
- 65 堀内明博「平安京右京五条二坊」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』（財）京都市埋蔵文化財調査センター 1981年。

付表1 1区溝1765出土土器観察表(図7)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	須恵器	蓋	天井部は平坦で、口縁部は強く屈曲して垂下する。扁平な宝珠つまみが付く。	天井部外面は回転ケズリ。天井部内面・口縁部内外面は回転ナデ。つまみは接合。	3/5片。
2		杯	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は外反する。	底部外面はヘラ切り後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は回転ナデ。	1/2片。

付表2 2区土壙2562出土土器観察表(図7)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	須恵器	杯身	体部は内湾気味に立ち上がり、受部は水平に張り出す。立ち上がり部は短く、端部は欠損。	体部・受部・立ち上がり部は内外面回転ナデ。	1/8片。
4		杯蓋	天井部は平坦で、端部は下方に開く。返り部は外反し端部よりわずかに垂下する。	天井部外面は回転ケズリ。天井部内面・返り部・口縁部内外面は回転ナデ。	1/4片。天井部外面に自然釉。
5~7		杯	口縁部は屈曲して外上方に開く。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	5は1/8片、6・7は1/4片。
8				底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。	1/3片。
9		甕	口縁部は外反して短く開き、端部は玉縁状に肥厚する。	肩部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキ。口縁部内外面は回転ナデ。	口縁部1/5片。

付表3 2区土壙2437出土土器観察表(図7)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
10	土師器	甕	体部は長く、肩がやや張り、底部はすぼまる。	体部外面は縦ハケ、肩部外面は横ナデ。内面は斜ハケ。	体部1/5片。

付表4 2区土壙2558出土土器観察表(図7)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	土師器	高杯	口縁部は体部から屈曲して外上方に開く。脚部は中空で、裾部は外反して開き、端部はわずかに屈曲する。	不明。	1/2片。焼成不良。

付表5 2区土壙2434出土土器観察表(図7)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
12	土師器	鍋	口縁部は体部から屈曲して外上方に開く。端部に面がある。	体部外面は斜ハケ、内面は縦ハケ後斜ハケ。口縁部内外面は横ナデ、内面に横ハケが残る。	1/8片。

付表6 2区土壙1730出土土器観察表(原色図版1・図版20・79)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
13	土師器	椀	体部は底部から緩やかに内湾して開き、口縁端部はわずかに肥厚する。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ。	ほぼ完形。
14			体部は底部から緩やかに内湾して開き、口縁端部はわずかに外反する。	底部・体部外面はケズリ。底部内面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	1/3片。
15・16		杯	体部は底部から緩やかに屈曲して開く。口縁端部はわずかに肥厚する。	底部・体部外面はケズリ。底部内面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	16はほぼ完形、15は1/3片。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
17	土師器	皿	口縁部は底部から緩やかに屈曲して開く。口縁端部はやや外反する。	底部内外面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	ほぼ完形。
18			口縁部は底部から緩やかに屈曲して開く。口縁端部は丸く収まる。	底部外面はケズリ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	2/3片。
19・20			口縁部は底部から緩やかに外反して開く。口縁端部は肥厚する。	底部内外面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	19は1/2、20は2/3片。
21		杯	体部は内湾気味に外上方に開き、口縁部は外反する。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ後ミガキ。貼付高台。	ほぼ完形。
22		甕	体部は球形。口縁部はわずかに屈曲して外反し端部に面がある。小型。	体部外面は粗い平行タタキ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/2片。
23～25	須恵器	杯	体部は底部から強く屈曲して外上方に開く。口縁端部は丸く収まる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、内面は回転ナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	23はほぼ完形、24は1/3、25は1/4片。
26	須恵器	皿	口縁部は底部から強く屈曲して外上方に開く。口縁端部は丸く収まる。	底部外面は回転ヘラ切り、内面は回転ナデ。口縁部内外面は回転ナデ。	1/2片。
27		壺	口縁部は体部から屈曲して外反する。口縁端部は上方に立ち上がる。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。	小破片。

付表7 2区土壌 1965出土土器観察表(図版79)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
28・29	土師器	皿	口縁部は底部から緩やかに屈曲して開く。口縁端部は外反して肥厚する。	口縁部内外面は横ナデ。	いずれも小破片。
30		杯	体部は外上方に開き、口縁端部は肥厚する。	口縁部内外面は横ナデ。	小破片。
31		甕	口縁部は強く屈曲して開き、端部は肥厚する。	肩部内外面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	小破片。
32	須恵器	杯	体部は底部から屈曲して外上方に開く。口縁端部は丸く収まる。	底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、内面は回転ナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。	1/2片。焼成不良。
33		壺	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ後ナデ。体部外面上位は回転ナデ。内面は回転ナデ。貼付高台。	底部1/2片。
34		甕	口縁部は外上方に開き、端部は屈曲して内面に稜がある。	口縁部内外面は回転ナデ。	口縁部1/4片。
35	灰釉陶器	皿	口縁端部はやや外反する。	口縁部内外面は回転ナデ。内面に施釉。	小破片。猿投産。
36		椀	体部は内湾して開く。	底部外面は回転ケズリ後ナデ、内面は回転ナデ。体部内外面は回転ナデ。貼付高台。内外面に刷毛で施釉。	1/5片。猿投産。
37	緑釉陶器	椀	体部は内湾して開く。口縁部中位に台形凸帯が1条あり。	底部外面は回転ケズリ後ナデ、内面は回転ナデ。体部内外面は回転ナデ。凸帯はケズリ。削出高台。内外面に施釉。内面に重ね焼き痕あり。	小破片。京都産。

付表8 2区土壌 2543出土土器観察表(図版79)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
38	土師器	皿	口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反する。端部はやや肥厚する。	底部外面はオサエ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/3片。
39～42		杯	体部は底部から緩やかに屈曲して開く。口縁部はやや外反して、端部は立ち上がる。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ。	39・42は1/3、40は1/2、41は1/5片。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	
43・44	黒色土器	椀	体部は内湾して開く。口縁端部はやや外反する。	底部・体部外面はケズリ、内面は密なミガキで暗紋を施す。口縁部内外面は横ナデ。44は貼付高台。内面のみ黒色化。	43は1/4、44は1/3片。	
45	土器	甕	肩部は丸く、口縁部は屈曲して開く。口縁端部はやや肥厚する。	肩部外面はケズリ、内面は横ハケ。口縁部内外面は横ナデ後内面粗いミガキ。内面のみ黒色化。	1/6片。	
46	須恵器	椀	体部・口縁部は内湾気味に開く。口縁端部は丸く収まる。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。	1/6片。	
47		鉢	体部は内湾して開く。口縁部は外反し端部は肥厚して玉縁状になる。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。	小破片。	
48		壺	壺	体部は内湾して立ち上がる。	底部外面は回転糸切り、内面は回転ナデ。体部内外面は回転ナデ。	底部1/3片。
49					底部外面は回転ケズリ後ナデ、内面はナデ。体部外面は回転ケズリ後回転ナデ、内面は回転ナデ。貼付高台。	底部1/2片。
50～52	灰釉陶器	椀	体部は内湾して開く。口縁部は外反し端部は丸く収まる。	底部外面は回転ケズリ後ナデ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。50・51は内外面、52は内面に刷毛で施釉。	いずれも1/4片。猿投産。	

付表9 1区井戸1421出土土器観察表(原色図版1・図版21・80)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	
53	土師器	椀	体部は底部から緩やかに屈曲して内湾気味に開く。口縁端部はわずかに肥厚する。	底部外面はケズリ、内面はナデ。体部・口縁部外面はケズリ、内面は横ナデ。	完形。底部外面に「在」の墨書あり。	
54～58			体部は底部から緩やかに屈曲して内湾気味に開く。54・56は口縁端部が丸く収まる。他はわずかに肥厚する。	底部内外面・体部外面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	54は完形、55・57・58は1/4、56は1/3片。	
59		杯	体部は底部から屈曲して外上方に開く。口縁端部はわずかに肥厚する。	底部内外面・体部外面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	1/2片。	
60			体部は底部から緩やかに屈曲して内湾気味に開く。口縁端部に面をつくる。		1/4片。	
61		皿	口縁部は底部から緩やかに屈曲して外上方に開く。口縁端部は肥厚する。	底部内外面・口縁部外面下位はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデ。	1/6片。	
62		杯	体部は底部から屈曲して外上方に開く。口縁端部はわずかに肥厚する。低い高台。	底部外面はケズリ、内面はナデ。体部外面はケズリ、体部内面・口縁部内外面は横ナデ。貼付高台。	1/8片。	
63		甌	口縁部はわずかに外反し端部は内側へ立ち上がる。体部中位に三角形の把手あり。	体部内外面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	上部1/8片。	
64		甕	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して外反し端部は肥厚する。	体部外面はケズリ、内面はナデ。肩部外面は縦ハケ、内面は横ハケ後ナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/4片。体部外面に煤付着。
65					肩部外面はケズリ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/5片。
66		黒色土器	杯	体部は底部から屈曲して内湾気味に開く。端部はわずかに肥厚する。	体部・口縁部内外面は横ナデ後外面は粗いミガキ。貼付高台。外面のみ黒色化。	1/6片。
67	土器	甕	体部は球形。口縁部は屈曲して外反し端部は丸く収まる	体部外面はケズリ、肩部外面はケズリ後粗いミガキ。体部・肩部内面は横ハケ後粗いミガキ。口縁部内外面は横ナデ後内面はミガキ。	1/4片。	

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
68~70	須恵器	蓋	天井部は平坦で、口縁部は屈曲し、端部は垂下する。68は宝珠つまみ。	天井部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデ。口縁部内外面は回転ナデ。つまみは接合。69は外面に重ね焼き痕あり。	68は完形、69は1/4、70は1/8片。
71~74		杯	体部は底部から強く屈曲して外上方に開く。口縁端部は丸く収まる。	底部外面はヘラ切り後ナデ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	71・73はほぼ完形、72は1/2、74は1/8片。
75・76			体部は底部から強く屈曲して外上方に開く。口縁端部は丸く収まる。低い高台。	底部外面はヘラ切り後ナデ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。	75は1/5、76は1/3片。
77		鉢	口縁部は外反して開き、端部は立ち上がる。	口縁部・体部内外面は回転ナデ。	1/3片。
78・79		壺	体部は卵形。口縁部は外反して開き、端部は立ち上がる。	底部外面は回転糸切り。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	78は口縁部ほぼ完形、79は下部1/2片。
80・81		甕	口縁部は屈曲して外反する。80は口縁端部が立ち上がる。	肩部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキ。口縁部内外面は回転ナデ。	80は口縁部1/6、81は口縁部1/4片。
82	灰釉陶器	蓋	口縁部は内湾し、端部は丸く収まる。	天井部外面は回転ケズリ。天井部内面・口縁部内外面は回転ナデ。外面に施釉。	1/4片。猿投産。
83		皿	口縁部は内湾気味に開き、端部はやや外反する。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内面に施釉。	3/5片。猿投産。
84		椀	口縁部は外反して開き、端部は丸く収まる。	口縁部内外面は回転ナデ。内外面に施釉。	小破片。猿投産。
85		壺	体部は外上方に立ち上がる。	底部・体部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデ。貼付高台。	底部1/4片。猿投産。
86		緑釉陶器	皿	口縁部は内湾気味に開き、端部は外反する。	口縁部内外面は回転ナデ。内外面に刷毛で施釉。
87		椀	体部は外上方に開き、口縁端部は外反する。		1/8片。京都産。

付表10 2区土壌 2516出土土器観察表(図版81)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
88・89	土師器	椀	体部は緩やかに内湾して開き、口縁部はやや外反する。88は端部が丸く収まり、89は肥厚する。	底部内外面・体部外面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	88は1/3、89は1/2片。
90~93		杯	体部は底部から緩やかに屈曲して開く。口縁部はやや外反し端部は肥厚する。	底部内外面・体部外面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。90・93は内面に横ハケあり。	90・91・92は小破片、93は1/8片。
94			体部はやや内湾して開く。口縁部は水平方向に開き、端部は肥厚する。	体部外面はケズリ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	杯部1/5片。94・95・96は別個体。
95		高杯	柱部は中空で、外面に明瞭な面がある。	外面はケズリ、内面はナデ。	柱部1/2片。
96			裾部は大きく広がり、端部は屈曲する。	内外面は横ナデ。	裾部1/6片。
97		甕	口縁部は屈曲して外反し端部は肥厚する。	肩部外面は横ハケ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ、後内面は横ハケ。	上部1/5片。
98	黒色土器	椀	体部は内湾して開く。口縁部はわずかに外反する。	体部外面はケズリ、内面はミガキ。口縁部内外面は横ナデ。内面黒色化。	1/4片。
99		甕	口縁部は屈曲して外反し端部は丸く収まる。	肩部外面はケズリ、内面は粗いミガキ。口縁部内外面は横ナデ、後内面は粗いミガキ。内面黒色化。	上部1/3片。
100・101	須恵器	蓋	口縁部はわずかに屈曲して開く。つまみなし。	天井部外面は回転ケズリ後ナデ。天井部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	100は1/5、101は2/3片。100は天井部外面に墨書あり、判読不能。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
102	須恵器	杯	体部は底部から明瞭に屈曲して外上方に開く。口縁端部は丸く収まる。	底部外面はへら切り後ナデ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。	1/5 片。
103・104		椀	体部は内湾して開く。口縁部はやや外反し端部は丸く収まる。	底部外面はナデ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ、後内面に粗いミガキ。103は貼付高台。	103は1/3、104は1/8片。104は褐色。
105		鉢	口縁部は屈曲して水平方向に開き、端部は立ち上がる。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。	小破片。
106		壺	体部は卵形。肩はやや張る。	体部外面は回転ケズリ。体部内面・肩部内外面は回転ナデ。	体部1/4片。肩部に自然釉。
107			口縁部は屈曲して立ち上がる。	肩部・口縁部内外面は回転ナデ。口縁部内面にしぼり目あり。	口縁部ほは完存。
108			体部は外上方に立ち上がる。	底部内面・体部内外面は回転ナデ。	底部1/4片。外面に自然釉。
109・110			体部は内湾して立ち上がる。	底部外面は回転ケズリ後ナデ。底部内面・体部内外面は回転ナデ。貼付高台。	109は底部1/6、110は底部1/4片。
111・112		甕	口縁部は強く屈曲して外上方に開く。口縁端部は拡張する。	肩部・口縁部内外面は回転ナデ。111は肩部外面に平行タタキ。	111は口縁部完存、112は口縁部1/4片。
113	灰釉陶器	蓋	天井部は丸みをおびる。口縁部は内湾し端部は垂下する。	天井部・口縁部内面は回転ナデ。外面に施釉。	小破片。猿投産。
114・115		椀	口縁部は内湾気味に開く。	体部外面は回転ケズリ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。114は内面、115は内外面に施釉。	いずれも小破片。猿投産。
116		壺	体部は内湾して立ち上がる。	底部・体部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデ。貼付高台。体部外面に薄く施釉。	底部1/4片。猿投産。
117・118	緑釉陶器	皿	口縁部は内湾気味に開き、端部は外反する。	底部外面はケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ、後外面はミガキ。内外面に施釉。	117は1/2、118は2/3片。118底部外面に「-」のへら記号あり。京都産。
119・120		椀	体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。内外面に刷毛で施釉。	119は極小破片、120は底部1/4片。京都産。

付表 11 2区土壌 2020 出土土器観察表 (図版 82)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
121・122	土師器	杯	体部は底部から緩やかに屈曲して開く。口縁端部はやや外反して肥厚する。	底部内外面はナデ、体部・口縁部内外面は横ナデ。	121は1/3、122は1/8片。
123		釜	体部は球形。口縁部は屈曲して外反し端部はやや肥厚する。体部上位に鏝あり。	底部・体部外面は横ハケ、内面はオサエとナデ。口縁部内外面は横ナデ。	ほぼ完形。
124	須恵器	椀	体部は内湾気味に開き、口縁部はやや外反する。	底部・体部外面はナデ、内面はミガキ。口縁部内外面は横ナデ後ミガキ。貼付高台。	1/8 片。
125	土師器	壺	肩が張る。口縁部は短く立ち上がり、端部は丸く収まる。	肩部・口縁部内外面は回転ナデ。	口縁部1/4片。肩部外面に自然釉。
126	灰釉陶器	蓋	天井部は平坦で、口縁部は強く屈曲して垂下する。	天井部内面・口縁部内外面は回転ナデ。外面に施釉。	1/8 片。猿投産。
127		皿	口縁部内面に段があり、端部は外反する。	口縁部内外面は回転ナデ。内面に施釉。	極小破片。猿投産。
128	高杯	口縁部は内湾気味に開き、端部はやや屈曲して外反する。	底部外面は回転ケズリ後ナデ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内面に薄く施釉。	1/3 片。猿投産。	

付表 12 2区土壌 2471 出土土器観察表 (図版 82)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
129~131	土師器	皿	口縁部は内湾気味に開き、端部は外反して肥厚する。器壁は薄い。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	いずれも極小破片。
132	須恵器	蓋	天井部は平坦。口縁部は緩やかに内湾して開く。	天井部外面は回転ケズリ後ナデ。天井部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	1/8 片。
133	須恵器	壺	体部は卵形でやや肩が張る。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面はナデ。体部外面上位・内面は回転ナデ。貼付高台。	体部 1/2 片。底部外面に「L」のヘラ記号あり。
134	灰釉陶器	壺	体部は円筒形で内湾気味に立ち上がる。	底部外面に木葉圧痕あり。底部内面はナデ。体部内外面は回転ナデ。外面に薄く施釉。	体部 1/2 片。
135	釉陶器	皿	口縁部内面に段があり、端部は直線的に外上方に開く。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内外面に施釉。	1/6 片。猿投産。
136	器	椀	体部は内湾気味に開く。	底部・体部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデ。貼付高台。体部内外面に施釉。内面に重ね焼き痕あり。	底部 1/5 片。底部外面に「伊」の墨書あり。

付表 13 2区土壌 2474 出土土器観察表 (図版 82)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
137・138	土師器	皿	口縁部は内湾気味に開き、端部は屈曲して肥厚する。器壁は薄い。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	137 は極小破片、138 は 1/8 片。138 は外面に煤付着。
139	須恵器	甕	体部はやや扁平。口縁部は強く屈曲して外反し端部は丸く収まる。	体部外面はオサエ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	口縁部 1/8 片。
140	須恵器	椀	体部は直線的に外上方に開く。口縁端部はやや外反する。	底部外面は糸切り、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	1/8 片。
141	須恵器	壺	体部は内湾して立ち上がる。	底部外面は糸切り後ミガキ。底部内面・体部内外面は回転ナデ。	底部完存。
142	灰釉陶器	皿	口縁部は内湾気味に開き、端部はやや屈曲して外反する。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内面に薄く施釉。	1/4 片。硯に転用。猿投産。
143	緑釉陶器	椀	体部は内湾気味に開き、口縁端部を切り欠き輪花を付ける。	体部外面は回転ケズリ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。内外面に刷毛で施釉。	1/4 片。京都産。
144	陶器	香炉	体部は直立する。脚部は外反気味に開き、透かしあり。	底部・体部・脚部内外面は回転ナデ。内外面に刷毛で施釉。	1/4 片。

付表 14 2区井戸 2097 出土土器観察表 (図版 82)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
145	土師器	杯	体部は内湾気味に開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。器壁は薄い。	底部・体部外面はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	1/2 片。
146	土師器	高杯	体部は直線的に開き、口縁部はやや外反し端部は肥厚する。	体部・口縁部内外面は横ナデ。	杯部 1/5 片。
147	灰釉陶器	皿	口縁部は内湾気味に開き、端部はやや屈曲して外反する。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内面に施釉。	1/6 片。猿投産。
148・149	陶器	椀	体部は内湾気味に開く。口縁端部は外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ後ナデ。底部・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。内面に施釉。	148 は小破片、149 は 1/5 片。
150~152	緑釉陶器	椀	体部は内湾気味に開く。	底部・体部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデ。削出高台。内外面に刷毛で施釉。	150 は底部完存、151・152 は底部 1/3 片。

付表 15 1区土壌 1435 出土土器観察表 (図版 82)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
153~155	土師器	皿	口縁部は内湾気味で強く屈曲し端部は立ち上がる。器壁は薄い。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	153 は 3/4、154 は 1/3、155 は小破片。
156	器	甕	肩が張り、口縁部はやや外反し端部は拡張する。	肩部外面はオサエ。肩部内面・口縁部内外面は横ナデ。	口縁部 1/8 片。
157	黒色土器	椀	口縁部は内湾気味に開く。	体部外面はケズリ。体部内面は横ナデ後粗いミガキ。口縁部内外面は横ナデ。内面は黒色化。	極小破片。
158	灰釉陶器	椀	体部は内湾気味に開く。	底部・体部外面は回転ケズリ後ナデ、内面は回転ナデ。貼付高台。体部内外面に施釉。	小破片。猿投産。
159	緑釉陶器	椀	体部は直線的に開く。	底部・体部外面は回転ケズリ後ナデ、内面は回転ナデ。貼付高台。全面に施釉。	小破片。京都産。

付表 16 2区土壌 1840 出土土器観察表 (図版 83)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
160~165	土師器	皿	口縁部は内湾気味で強く屈曲し端部は立ち上がる。小型。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	160 は 1/5、161 は 1/2、162 ・ 163 は 1/4、164 ・ 165 は 1/6 片。
166~169	器		口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は外反する。口縁部外面に段があるものがある。大型。		166 ・ 168 ・ 169 は 1/6、167 は 3/4 片。
170	白色土器	皿	口縁部は直線的に開き、端部は丸く収まる。	底部外面は回転糸切り。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	ほぼ完形。
171	須恵器	鉢	平底。	底部外面はオサエ、内面は回転ナデ。	底部 2/3 片。内面は使用により磨滅。
172	灰釉陶器	椀	体部は内湾気味に開く。	底部外面は回転糸切り後ナデ。底部内面・体部内外面は回転ナデ。貼付高台。内面に薄く施釉。	底部 1/3 片。猿投産。
173	磁器	皿	口縁部は直線的に開き、端部はやや外反する。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部口縁部内面・口縁部外面上位は回転ナデ。削出高台。口縁部内外面に化粧土を掛け、施釉。白磁。	1/4 片。中国産。
174	器	椀	体部は内湾気味に開き、口縁部端部は肥厚して玉縁状となる。	体部外面は回転ケズリ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。内外面に施釉。白磁。	小破片。中国産。

付表 17 2区土壌 1844 出土土器観察表 (図版 83)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
175~180	土師器	皿	口縁部は内湾気味で強く屈曲し、端部は立ち上がる。小型。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	175 ・ 177 は 1/2、176 ・ 180 は 1/6、178 ・ 179 は小破片。
181~183	器		口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は外反する。口縁部外面に段があるものがある。大型。		181 は 1/2、182 ・ 183 は 1/8 片。
184	灰釉陶器	皿	口縁部は内湾気味に開き、端部は外反する。	口縁部外面下位は回転ケズリ。口縁部内面・外面上位は回転ナデ。内外面に施釉。	1/8 片。猿投産。

付表 18 2区土壙 1217 出土土器観察表 (図版 83)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
185~192	土師器	皿	口縁部は内湾気味で強く屈曲し端部は立ち上がる。小型。	底部・口縁部外面下位はオサエ、のちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	185・188 は 1/4、186・190 は 1/2、187・189・192 は 1/3、191 は 3/4 片。
193~196			口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は外反する。口縁部外面に段があるものがある。小型。		193・194 は 1/2、195・196 は 1/4 片。195・196 は胎土は白色。
197~200			口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は外反する。口縁部外面に段があるものがある。大型。		197・198 は 1/2、199・200 は 2/3 片。200 は胎土は白色。
201・202			口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は丸く収まる。口縁部外面に段があるものがある。特大型。		いずれも 1/4 片。202 は胎土は白色。
203	白色土器	椀	体部は屈曲して直線的に開き、端部は丸く収まる。	底部外面は回転糸切り。底部内面、体部・口縁部内外面は回転ナデ。	1/3 片。
204	白色土器	高杯	口縁部は直線的に外上方に開き、端部は丸く収まる。柱部は中空で、杯部との境に段がある。	杯部内外面は回転ナデ。柱部外面はナデ。	杯部 1/5 片。
205	須恵器	鉢	体部は直線的に開き、口縁端部は肥厚してやや玉縁状となる。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。	小破片。東播磨産。
206	灰釉陶器	椀	体部は内湾気味に開き、口縁部はやや外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。体部・口縁部内外面に刷毛で施釉。	1/5 片。猿投産。
207	磁器	椀	体部は内湾気味に開き、口縁端部は肥厚して玉縁状となる。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。底部外面以外に施釉。白磁。	1/4 片。中国産。

付表 19 2区土壙 1553 出土土器観察表 (原色図版 2・図版 22・84)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
208	土師器	椀	体部・口縁部は内湾して開き、口縁端部はやや肥厚する。3箇所に足。	底部・体部外面はナデ。底部体部内面・口縁部内外面は横ナデ。足は貼付。	1/2 片。
209~216			口縁部は内湾気味で強く屈曲し端部は立ち上がる。小型。		209・213 は完形、210・212・214 は 3/4、211 は 1/2、215 は 1/3、216 は 1/4 片。
217~226			口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は外反するものと立ち上がるものがある。口縁部外面に段があるものがある。小型。		217・226 は 3/4、218・225 は完形、219・224 は 2/3、220・223 は 1/3、221 は 1/4、222 はほぼ完形。
227~234			口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は外反するものと立ち上がるものがある。口縁部外面に段があるものがある。大型。		227・232 は 3/4、228・231 は 1/3、229・230 は 1/2、233 は完形、234 はほぼ完形。
235~237			口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は丸く収まる。口縁部外面に段があるものがある。特大型。		235 は 1/4、236・237 は 1/3 片。
238~240			口縁部は内湾気味で強く屈曲し、端部は立ち上がる。小型。		238 は 1/4、239 は完形、240 は 1/3 片。胎土は白色。
241~246			口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は外反する。口縁部外面に段があるものがある。小型。		241・243・246 は完形、242・244・245 は 2/3 片。胎土は白色。
247			口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は外反する。口縁部外面に段がある。大型。		1/3 片。胎土は白色。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
248	白色 土器	皿	口縁部は内湾気味に開き、端部は丸く収まる。	底部外面は糸切り。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。	ほぼ完形。
249・250			体部・口縁部は外上方に直線的に開く。高い高台。		249 は 1/3、250 はほぼ完形。249 は全面に赤橙色塗料を塗る。
251・252		椀	体部は内湾して開き、口縁端部はやや外反する。高い高台。	底部外面はナデ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。252 は貼付高台。	251 は口縁部 1/2、252 は 3/4 片。
253		高杯	柱部は中空で、裾部は屈曲して開く。	柱部外面は縦ケズリ。裾部内面はナデ。	柱部 1/2 片。
254		盤	体部は外上方に直線的に開き、口縁端部は内傾する。	体部・口縁部内外面は回転ナデ、外面は一部回転ケズリ。	1/8 片。
255・256		壺	体部は直線的に立ち上がり、肩はやや張る。口縁部は外反気味で、端部に面がある。	底部外面は糸切り。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。体部内面に粘土紐継ぎ目が目立つ。	255 は 1/2、256 は体部 1/4 片。
257	瓦器	椀	体部・口縁部は内湾して開き、口縁端部は丸く収まる。	体部外面はオサエのち斜めのミガキ、口縁部外面は横ナデのち横ミガキ。体部・口縁部内面は横ナデのち密な横ミガキ。	1/8 片。楠葉型。
258	磁器	合子	体部は内湾し受部は水平に張り出す。立ち上がり部は短い。	体部・受部・立ち上がり部内外面は回転ナデ。受部上面以外に施釉。白磁。	口縁部 1/4 片。中国産。
259		皿	体部は屈曲して内湾気味に開き、口縁端部は外反する。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。内外面に施釉。白磁。	1/2 片。中国産。
260		蓋	天井部は大きく開き、端部は丸く収まる。返り部は内傾する。	天井部・返り部内外面は回転ナデ。外面に施釉。白磁。	口縁部 1/5 片。中国産。
261		椀	体部・口縁部は内湾して開き、口縁端部は肥厚して玉縁状となる。	底部・体部外面は回転ケズリ、底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。底部外面以外に施釉。白磁。	口縁部 1/3 片。中国産。
262			体部は内湾して開く。口縁端部はやや外反する。		口縁部 1/3 片。中国産。
263			体部は内湾して開く。高い高台。		底部完存。中国産。
264			体部・口縁部は内湾して開き、口縁端部は肥厚して玉縁状となる。		1/2 片。中国産。

付表 20 2 区土壌 1990 出土土器観察表 (図版 85)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
265~276	土師器	皿	口縁部は内湾し、端部は立ち上がる。端部外面に面が付くものもある。小型。	底部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。276 は底部外面に板圧痕あり。	265 はほぼ完形、266 は 3/4、267・268・272・275・276 は 1/4、269・270 は 1/2、271・273 は 1/3、274 は小破片。266 は口縁部に煤付着。
277~279			口縁部は内湾気味に開き、端部はやや立ち上がる。端部外面に面が付くものもある。大型。		

付表 21 2 区土壌 1849 出土土器観察表 (原色図版 2・図版 23・85)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
280~287	土師器	皿	口縁部は内湾し、端部は立ち上がる。外面に面が付くものもある。小型。	底部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	280 は 1/4、281・283・286 は 1/3、282 は 1/2、284・287 はほぼ完形、285 は 2/3 片。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
288・289	土師器	皿	口縁部は内湾気味に開き、端部はやや立ち上がる。端部外面に面が付くものもある。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	いずれもほぼ完形。
290	灰釉系陶器	鉢	体部・口縁部は内湾して開き、口縁端部は内傾する。口縁部外面に凹線あり。片口あり。高い高台。	底部・体部外面下位は回転ケズリ後ナデ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。	2/3片。内面・口縁部外面に自然釉。

付表 22 2区土壌 1039 出土土器観察表（原色図版 2・図版 23・85）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
291・292	土師器	皿	口縁部は強く屈曲し内傾する。小型。	底部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	291は3/5、292は1/6片。
293～296			口縁部は内湾し、端部は立ち上がる。小型。	底部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	293～295は1/2、296は1/4片。
297～300			口縁部は内湾気味に開き、端部はやや立ち上がる。底部と口縁部の境の屈曲が強いものがある。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	297はほぼ完形、298は1/2、299は1/5、300は1/3片。
301	白色土器	皿	口縁部は直線的に開き、端部は丸く収まる。	底部外面は糸切り。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	1/2片。
302	土器	高杯	体部は直線的に開く。柱部は中空で、杯部との境に段がある。裾部は屈曲して開く。	体部内外面は回転ナデ。柱部は縦ケズリ。裾部内外面は回転ナデ。	柱部完存。
303・304	瓦器	椀	体部は内湾気味に開き、口縁部はやや外反する。口縁部内側に凹線あり。	底部外面はナデ。体部外面はオサエ後粗いミガキ、内面は密なミガキ。口縁部内外面は横ナデ、後内面はミガキ。底部内面に暗紋を施す。貼付高台。	303は1/5、304は1/2片。大和型。

付表 23 2区土壌 1851 出土土器観察表（図版 85）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
305～308	土師器	皿	口縁部は強く屈曲し、内傾する。端部が尖るものと丸く収まるものがある。小型。	底部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	305は1/3、306～308は1/2片。
309～320			口縁部は内湾し、端部は立ち上がる。316・320はやや深い。小型。	底部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	309・320は1/4、310・311・315は2/3、312～314・316～319は1/3片。
321～323			口縁部は内湾気味に開き、端部はやや立ち上がる。底部と口縁部の境の屈曲が強いものがある。端部に面があるものがある。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	321・323は1/4、322は1/5片。

付表 24 1区土壌 1361 出土土器観察表（図版 24・86）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
324～328	土師器	皿	口縁部はやや内湾し、端部は立ち上がる。小型。	底部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	324・326は1/3、325は5/6、327は1/2、328は完形。

付表 25 2区土壌 1354 出土土器観察表（図版 24・86）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
329	瓦器	壺	体部は扁平で、口縁部は屈曲して内傾する。ひずみが目立つ。	底部・体部外面はオサエ後ナデ、内面はオサエ。口縁部内外面は横ナデ。	完形。

付表 26 2区土壌 1362 出土土器観察表 (図版 24・86)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
330	瓦器	壺	体部は扁平で、口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚する。	底部・体部外面はオサエ後ナデ、内面はオサエ。口縁部内外面は横ナデ。	完形。

付表 27 1区土壌 550 出土土器観察表 (原色図版 3・図版 24・86)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
331	土師器	皿	口縁部は強く屈曲し、内傾する。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	小破片。
332~337		鉢	口縁部はやや内湾し、端部は立ち上がる。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	332・333・336・337は完形、334・335はほぼ完形。
338~343			口縁部は内湾気味に開き、端部はやや立ち上がる。底部と口縁部の境の屈曲が強いものがある。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	338・341は1/4片、339は完形、340・342・343は1/3片。
344		鍋	体部は半球形で、口縁部は大きく外反して開く。	体部外面はオサエ、内面は横ハケ。口縁部内外面は横ナデ。	上部1/3片。外面に煤付着。
345	瓦器	椀	体部・口縁部は内湾して開く。	体部外面はオサエのち粗いミガキ、口縁部外面は横ナデのちミガキ。体部・口縁部内面は横ナデのち粗いミガキ。	極小破片。
346	須恵器	壺	口縁部は緩やかに外反し、端部に面がある。	肩部外面は平行タタキ。肩部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	上部1/4片。
347・348	鉢	鉢	体部は底部から屈曲して直線的に開き、口縁端部に面がある。片口あり。	底部外面は糸切り。底部内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	いずれもほぼ完形。内面は使用により磨滅。東播磨産。
349	灰釉系陶器	鉢	体部は内湾気味に開く。	底部外面は糸切りのちナデ。底部内面・体部内外面は回転ナデ。貼付高台。	底部1/2片。
350	磁器	皿	口縁部は直線的に開き、端部は外反する。内面中位に凹線あり。	口縁部内外面は回転ナデ。内外面に施釉。白磁。	口縁部1/4片。中国産。
351		椀	体部は内湾気味に開く。底部内面に段あり。	底部・体部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデ。削出高台。内外面に施釉。白磁。	底部1/3片。中国産。
352		体部は内湾気味に開く。口縁端部は外反する。口縁端部に輪花あり。体部内面に凹線あり。	体部外面は回転ケズリ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。内外面に施釉。青磁。	口縁部1/4片。中国産。	

付表 28 1区土壌 1477 出土土器観察表 (図版 86)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
353・354	土師器	皿	口縁部は屈曲し、内傾する。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	いずれも1/4片。
355~360			口縁部はやや内湾し、端部は立ち上がる。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	355・357~360は1/4、356は1/3片。
361~366			口縁部は内湾気味に開き、端部はやや立ち上がる。底部と口縁部の境の屈曲が強いものがある。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	361は1/5、362・363・366は1/4、364は1/3、365は1/8片。

付表 29 2区土壌 1994 出土土器観察表 (図版 24・86)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
367・368	土師器	皿	口縁部は屈曲し、内傾する。大型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	いずれも完形。
369~376			口縁部はやや内湾し、端部は立ち上がる。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	369・371・375は1/4、370は1/3、372・376は1/8、373・374は1/6片。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
377～380	瓦器	壺	口縁部は内湾気味に開き、端部はやや立ち上がる。底部と口縁部の境の屈曲が強いものがある。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	377・380 は 1/3、378・379 は 1/8 片。

付表 30 2 区土壌 940 出土土器観察表 (図版 87)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考			
381～385	土師器	皿	口縁部はやや内湾し、端部は外上方に開く。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	381 は 1/2、382・385 は 1/4、383 はほぼ完形、384 は 2/3 片。赤色系土師器。382 は胎土は白色。			
386～390			口縁部は内湾気味に開き、端部は立ち上がる。小型。			底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	386・387 は 1/2、388 は完形、389 は 3/5、390 はほぼ完形。白色系土師器。	
391～394			口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。端部の立ち上がるものがある。屈曲が弱いものもある。大型。					391 は 1/4、392 は 1/3、393 は小破片、394 は 1/6 片。赤色系土師器。
395～398			口縁部は底部から緩やかに屈曲して内湾気味に開き、端部は立ち上がる。大型。					
399・400	瓦器	椀	体部は底部から屈曲して内湾気味に開く。399 は輪花がある。	底部・体部外面はナデ。底部内面はナデ後輪花の暗紋。体部内面・口縁部内外面は横ナデ後体部内面・口縁部外面に粗いミガキ。	いずれもほぼ完形。			
401	瓦器	鍋	口縁部は屈曲して受け口となる。	体部外面はオサエのちナデ、内面は横ハケ。口縁部内外面は横ナデ。	上部 1/8 片。			

付表 31 2 区土壌 2023 出土土器観察表 (図版 87)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考					
402～406	土師器	皿	口縁部はやや内湾し、端部は外上方に開く。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	402・403 は 1/3、404・406 は 1/4、405 は 1/8 片。赤色系土師器。					
407～411			口縁部は内湾気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央が窪むものがある。小型。			底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	407・409・411 は完形、408 は 2/3、410 はほぼ完形。白色系土師器。			
412～415			口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。大型。					412・413 は 3/4、414 は 1/4、415 はほぼ完形。赤色系土師器。		
416			口縁部は強く屈曲し、内傾する。小型。						底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	極小破片。胎土は白色系土師器と同じ。
417～423			口縁部は底部から屈曲して内湾気味に開き、端部は立ち上がる。器壁が薄い。大型。							
424	瓦器	釜	体部は扁平で、口縁部は内傾する。体部中位に鏝あり。3 箇所足あり。小型。	体部外面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	上部ほぼ完存。					
425	灰釉系陶器	椀	体部は直線的に開く。	底部外面は回転糸切り。底部内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。貼付高台。	1/2 片。口縁部内面に自然釉。美濃産。					

付表 32 2区溝 1319 出土土器観察表 (図版 87)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
426~430	土器	皿	口縁部はやや内湾し、端部は外上方に開く。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	426 は 1/4、427 ~ 429 は完形、430 はほぼ完形。赤色系土師器。
431~435			口縁部は内湾気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央が窪むものがある。小型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。438 は底部外面に板圧痕あり。	431 は 3/4、432 は 1/2、433 はほぼ完形、434・435 完形。白色系土師器。
436~439			口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。大型。		436 は 1/4、437 は 3/5、438 は完形、439 は 2/3 片。438 は口縁部に煤付着。赤色系土師器。
440~443			口縁部は底部から屈曲して内湾気味に開き、端部は立ち上がる。大型。		440 は 1/2、441・442 は 1/3、443 は完形。白色系土師器。
444・445	瓦器	椀	体部は底部から屈曲して内湾気味に開く。輪花がある。	底部・体部外面はナデ。底部内面はナデ、のち 444 は輪花・445 は葉脈の暗紋。体部内面・口縁部内外面は横ナデのち内面に粗いミガキ。	444 は 1/3、445 は 1/2 片。
446・447			体部は内湾気味に開き、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く収まる。447 は低い高台。	底部・体部外面はオサエのちナデ。底部内面はナデ、後 447 は暗紋。体部内面・口縁部内外面は横ナデ、後内面に粗いミガキ。貼付高台。	446 は 1/5、447 は完形。446 は和泉型、447 は桶葉型。
448		釜	体部・口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部外面に鏝あり。	体部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	口縁部 1/6 片。体部外面に煤付着。
449	磁器	椀	体部・口縁部は内湾気味に開く。外面に蓮弁あり。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。外面に紋様をケズリ出す。内外面に施釉。青磁。	小破片。中国産。

付表 33 2区土壌 1442 出土土器観察表 (原色図版 3・図版 25・88)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
450~454	土器	皿	口縁部はやや内湾し、端部は外上方に開く。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	450・453 は完形、451 は 4/5、452・454 はほぼ完形。赤色系土師器。
455			耳皿	口縁部両側が屈曲して内傾する。	底部外面はオサエ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。
456		皿	口縁部は屈曲し、内傾する。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/2 片。胎土は赤色系土師器と同じ。
457			口縁部は強く屈曲し、内傾する。小型。		完形。胎土は白色系土師器と同じ。
458~473			口縁部は内湾気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央が窪むものがある。小型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。477・478 は底部外面に板圧痕あり。	458・460・471 は 2/3、459・468・473 は 1/3、461 ~ 467・469・470・472 は完形。459 は内外面に煤付着。白色系土師器。
474~485			口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。大型。		474・475・479・481 ~ 483・485 は完形、476・477 はほぼ完形、478・484 は 4/5、480 は 3/5。赤色系土師器。
486~497			口縁部は底部から屈曲して内湾気味に開き、端部は立ち上がる。大型。496 は 3 箇所低い足あり。		486・488・490・492・493・495 は完形、487・494 は 2/3、489 は 1/2、491 はほぼ完形、496 は 1/4、497 は 1/3 片。白色系土師器。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
498～500	土師	釜	体部は半球形で、口縁部は立ち上がる。口縁部外面に鏝あり。498・499は小型。500は中型。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ。	498は4/5、499は完形、500は1/2片。500は底部外面に煤付着。
501	器	鍋	体部は底部から曲して直線的に開く。口縁端部に面あり。	底部内外面はナデ。体部外面はオサエ、体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	1/5片。
502	磁器	椀	体部は内湾して開き、口縁部はやや外反する。底部内面に段あり。	底部外面はケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。口縁端部・底部外面以外に施釉。白磁。	小破片。中国産。
503			体部・口縁部は内湾気味に開く。外面に蓮弁あり。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。外面に紋様をケズリ出す。内外面に施釉。青磁。	小破片。中国産。
504		椀	体部は内湾気味に開く。低い高台。	底部・体部外面はオサエのちナデ。底部内面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ、後内面に粗いミガキ。貼付高台。	完形。楠葉型。
505	瓦器	釜	体部は扁平で、口縁部は内傾する。体部中位に鏝あり。3箇所足あり。小型。	体部外面はナデ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	体部3/4片。
506		鍋	体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して受け口となる。	体部外面はオサエ、内面は横ハケ。口縁部内外面は横ナデ。	1/5片。外面煤付着。
507		釜	体部は半球形で、口縁部は立ち上がる。口縁部外面に鏝あり。	底部・体部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/4片。底部外面煤付着。
508	須恵器	鉢	体部は直線的に開き、口縁部は肥厚して玉縁状になる。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。	口縁部1/8片。内面は使用により磨滅。東播磨産。

付表 34 2区土壌 1330 出土土器観察表 (図版 89)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
509・510	土師器	皿	底部中央は窪む。口縁部はやや内湾し、端部は外反する。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	509は1/3、510は完形。赤色系土師器。
511・512			口縁部は底部から屈曲してやや内湾気味に開く。512は深い。	底部外面はヘラ切り。底部内面・口縁部内外面は横ナデ。	511はほぼ完形、512は2/3片。瀬戸内産。
513	白色土器	皿	口縁部はやや内湾気味に開く。	底部外面は回転系切り。底部内面・口縁部内外面は横ナデ。	2/3片。
514～533	土師器	皿	底部中央は窪む。口縁部は内湾気味に開き、端部は立ち上がる。小型。		514・516・517・519・520・522・523・526・527・529・530は完形、515・518・521・524・528・533はほぼ完形、525は1/4、531は1/2、532は4/5片。白色系土師器。
534～537			口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。542は外面にヘラ状の庄痕あり。	534は3/4、535は4/5、536は完形、537はほぼ完形。赤色系土師器。534は内外面に煤付着。
538～557			口縁部は底部から屈曲して内湾気味に開き、端部は立ち上がる。大型		538・542・545・547・549・550はほぼ完形、539・544・551・552完形、540・546・548・553は1/2、541・543・554・555は3/4、556・557は1/3片。白色系土師器。
558	白色土器	高杯	杯部は内湾気味に開く。柱部は中空で、杯部との境に段がある。	杯部内外面は回転ナデ、柱部外面はナデ。	柱部完存。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
559・560	瓦器	椀	体部は内湾気味に開き、口縁部はやや外反する。低い高台。	底部・体部外面はオサエ、底部内面はナデのち暗紋。体部内面・口縁部内外面は横ナデ、後内面に粗いミガキ。貼付高台。	いずれも1/4片。楠葉型。
561		鍋	体部は屈曲して内湾気味に開く。片口で、把手あり。	底部・体部外面はオサエのちナデ、底部内面はナデ後粗いミガキ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ、後内面に粗いミガキ。片口は貼付。	1/2片。
562			体部は直線的に開く。口縁端部は肥厚する。	体部外面はオサエ、内面は横ハケ。口縁部内外面は横ナデ。	小破片。外面に煤付着。
563			体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して受け口となる。	体部外面はオサエ、内面は横ハケ。口縁部内外面は横ナデ。	口縁部1/5片。外面に煤付着。
564	緑釉陶器	合子	体部は内湾し、受部は水平に張り出す。立ち上がり部は短い。体部外面に鏝あり。	体部・口縁内外面は回転ナデ。体部外面に鏝をケズリ出す。内面に透明釉、体部外面に化粧土をかけた後緑色釉を施す。	口縁部1/8片。中国産。

付表 35 2区土壌 699 出土土器観察表（図版 90）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	
565	土師器	皿	口縁部はやや内湾し、端部は外上方に開く。小型。	底部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/8片。赤色系土師器。	
566～574			口縁部は内湾気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央が窪むものがある。小型。		566はほぼ完形、567～571は完形、572は2/3、573は1/3、574は1/4片。白色系土師器。	
575～578			口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。端部が立ち上がるものがある。大型。		底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	575～577は1/8、578は1/4片。赤色系土師器。
579～582			口縁部は底部から屈曲して内湾気味に開き、端部は立ち上がる。大型。		579・581は1/4、580は1/2、582は1/8片。白色系土師器。	

付表 36 2区土壌 1975 出土土器観察表（図版 90）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	
583～587	土師器	皿	口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。端部は丸く収まる。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	583は1/3、584は2/3、585・587は1/2、586は1/4片。赤色系土師器。	
588～592			口縁部は内湾気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央が窪むものがある。小型。		588・590～592ほぼ完形、589は3/4片。白色系土師器。	
593			口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。端部は丸く収まる。やや深い。大型。		底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	完形。胎土は赤褐色。大和産。
594～596			口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。端部が立ち上がるものがある。大型。		594は完形、595は3/4、596は2/3片。赤色系土師器。	
597～600			口縁部は底部から屈曲して内湾気味に開き、端部は立ち上がる。大型。		597は2/3、598はほぼ完形、599は1/2、600は1/3片。白色系土師器。	
601	瓦器	鍋	体部は緩やかに屈曲して直線的に開く。口縁端部は内側へ立ち上がる。片口あり。	底部外面はナデ、内面は横ナデ。体部外面はオサエ、内面は横ハケのち横ナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/4片。底部・体部外面に煤付着。	

付表 37 2 区土壌 1870 出土土器観察表 (原色図版 4・図版 26・90)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	
602~604	土 師 器	皿	口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。端部は丸く収まる。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	602は1/4、603・604は1/2片。赤色系土師器。	
605・606			口縁部は内湾気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央は窪むものがある。小型。		605は1/2、606は1/4片。白色系土師器。	
607~614			口縁部は底部から屈曲して外反する。端部が立ち上がるものがある。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	607は完形、608・609・614は2/3、610・611はほぼ完形、612・613は1/4片。赤色系土師器。	
615~618			口縁部は底部から屈曲して内湾気味に開き、端部は立ち上がる。大型。		いずれも完形。白色系土師器。	
619	瓦 器	鍋	体部は屈曲して直線的に開く。口縁部は直立する。片口あり。	底部内外面はナデ。体部外面はオサエ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	1/3片。内外面に煤付着。	
620			釜	口縁部は直立して立ち上がる。端部に面あり。口縁部外面に鏝あり。	体部外面はオサエのちナデ、内面は横ハケ。口縁部内外面は横ナデ。	極小破片。
621			鍋	口縁部は屈曲して受け口となる。	体部外面はオサエ、内面は横ハケ。口縁部内外面は横ナデ。	小破片。
622			火鉢	体部は屈曲して直線的に開く。体部中位に凹線が2条あり。3箇所到低い足あり。	底部外面は離れ砂付着、内面はナデ。体部内外面は横ナデ、後外面に粗いミガキ。足は貼付。	1/5片。大和産。
623	焼締 陶器	甕	口縁部は外反し、端部は肥厚して玉縁となる。	口縁部内外面は回転ナデ。	極小破片。備前産。	
624			口縁部は外反し、端部は上下に拡張する。		極小破片。常滑産。	
625	施釉 陶器	壺	体部は卵型で、肩が張る。口縁部は屈曲して外反し、端部は肥厚して垂下する。肩部と体部に櫛描あり。肩部4箇所耳あり。	体部外面下位は回転ケズリ。体部外面上位・体部内面・口縁部内外面は回転ナデ、肩部内面はオサエ。外面・口縁部内面に灰釉を施す。	ほぼ完形。瀬戸産。	

付表 38 2 区土壌 1176 出土土器観察表 (原色図版 4・図版 27・91)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
626	土 師 器	皿	口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。端部は丸く収まる。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/4片。赤色系土師器。
627・628			口縁部は内湾気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央は窪むものがある。小型。		627は完形、628はほぼ完形。
629~635			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央は窪むものがある。小型。		629・633は3/4、630は完形、631は1/5、632・634は1/2、635は1/3片。白色系土師器。
636~643			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。中型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	636・638は完形、637・640・641はほぼ完形、639は1/2、642は2/3、643は1/3片。白色系土師器。
644~647			口縁部は底部から屈曲して外反する。端部が立ち上がるものがある。大型。		644は1/4、645は1/2、646は完形、647・648は1/6片。赤色系土師器。
648~651			口縁部は底部から屈曲して内湾気味に開き、端部は立ち上がる。中型。		648は1/6、649・650は1/2、651は1/4片。白色系土師器。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
652～660	土師器	皿	口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	652・658・660は3/4、653～655・657・659はほぼ完形、656は1/3片。白色系土師器。

付表 39 2区土壌 1922 出土土器観察表（図版 91）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
661～665	土師器	皿	口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央は窪むものがある。小型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	661・662・664は完形、663は1/2、665はほぼ完形。白色系土師器。
666～677			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。中型。		666・667・676は1/2、668・670・677は3/4、669・673～675は完形、671・672はほぼ完形。白色系土師器。
678～686			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。大型。		678・680・684・685はほぼ完形、679・681は1/3、682・683は4/5、686は2/3片。白色系土師器。

付表 40 2区井戸 2098 出土土器観察表（図版 91）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
687～689	土師器	皿	口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央は窪むものがある。小型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	687・688はほぼ完形、689は完形。白色系土師器。
690・691			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。中型。		いずれもほぼ完形。白色系土師器。
692～694			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。大型。		692・693は1/2、694はほぼ完形。白色系土師器。

付表 41 2区土壌 1148 出土土器観察表（図版 92）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
695～699	土師器	皿	口縁部は底部から屈曲して外反気味に開く。端部は丸く収まる。屈曲が緩やかなものがある。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	695は極小破片、696・699は1/4、697は1/2、698はほぼ完形。赤色系土師器。
700～703			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央は窪むものがある。小型。		700・702は完形、701は1/2、703は3/4片。白色系土師器。
704			口縁部は内湾して開き、上位は外反する。小型。		1/4片。胎土は白色系土師器と同じ。
705～708			口縁部は底部から屈曲して外反する。端部が立ち上がるものがある。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	705・707・708は1/4、706は1/3片。赤色系土師器。
709～714			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。中型。		709・714は1/4、710～712は完形、713は1/2片。白色系土師器。
715			口縁部は緩やかに屈曲して開く。浅い。中型。		1/4片。胎土は白色系土師器と同じ。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
716	土師器	皿	口縁部は屈曲し、直線的に開く。口縁端部は立ち上がる。深い。中型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	1/4片。胎土は白色系土師器と同じ。 717・718は1/4、719は1/3片。白色系土師器。
717～719			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。大型。		

付表 42 2区土壌 136 出土土器観察表 (図版 92)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
720～724	土師器	皿	口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央は窪むものがある。小型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位は横ナデ。	720・722は1/2、721はほぼ完形、723は1/4、724は3/4片。白色系土師器。
725～732			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。中型。		725は1/4、726・727・732は1/3、728は1/2、729は3/4、730・731はほぼ完形。731は口縁端部に煤付着。白色系土師器。
733～735			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。大型。		733は1/3、734・735は1/2片。白色系土師器。

付表 43 2区土壌 1782 出土土器観察表 (原色図版 5・図版 28・92)

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
736～738	土師器	耳皿	口縁部は両側が屈曲して内傾する。器壁が厚い。小型。	底部外面はオサエ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	736は完形、737はほぼ完形、738は3/4片。胎土は白色系土師器と同じ。
739～744		皿	口縁部は屈曲して直立する。器壁が厚い。小型。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	739～742・744は完形、743はほぼ完形。胎土は白色系土師器と同じ。完形。
745・746			口縁部は屈曲し内傾する。器壁が厚い。小型。		いずれも1/2片。胎土は白色系土師器と同じ。
747～750		皿	口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。底部中央は窪むものがある。小型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデ。	747は1/3、748は完形、749は1/2、750は3/4片。白色系土師器。
751～766			口縁部は緩やかに屈曲して内湾気味で、端部やや外反する。端部が立ち上がるものがある。中型。		751・758・763は1/2、752～754・762・765・766は完形、755・760はほぼ完形、756は3/4、757・764は1/5、759・761は1/3片。白色系土師器。
767～775			口縁部は底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部は立ち上がる。大型。		767・768・770・771・773は1/5、769・772・774は1/4、775は1/6片。白色系土師器。

付表 44 1 区土壙 353 出土土器観察表（原色図版 5・図版 29・93・94）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
776～781	土師器	皿	口縁部は緩やかに屈曲して内湾気味に開く。浅い。小型。	底部・口縁部外面はオサエ、内面はナデ。	776・779 はほぼ完形、777 は完形、778 は 2/3、780 は 2/5、781 は 1/2 片。
782～789			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。中型。		782・783・787・788 は完形、784 は 5/6、785 は 1/2、786 はほぼ完形、789 は 3/4 片。
790～801			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。底部から口縁部への屈曲部は窪む。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデ。	790・791・793・795・797 は完形、792 は 5/6、794・796 はほぼ完形、798 は 3/4、799～801 は 1/2 片。791・794 は口縁端部に煤付着。800 は口縁部内面に「二」の墨書、801 は内面に墨描図像あり。
802		鍋	体部は浅い半球形で、口縁部は屈曲して開き、端部は立ち上がる。器壁は薄い。	底部体部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	2/3 片。外面に煤付着。
803	瓦器	灯火具	体部は内湾して開き、受部は水平に開く。立ち上がり部はやや内傾し、端部は丸く収まる。高い高台あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・立ち上がり部内外面は横ナデ、後体部外面はミガキ。貼付高台で接合部に刻み目あり。	体部完存。大和産。
804	焼締陶器	鉢	体部は直線的に開き、口縁端部は屈曲する。播目あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	1/5 片。信楽産。
805			体部は直線的に開き、口縁端部に面がある。口縁部内側に段あり。播目あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部外面はオサエのちナデ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	1/5 片。体部内面は使用により磨減。丹波産。
806		盤	体部はやや内湾して開き、口縁端部は内側へ肥厚する。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	1/4 片。丹波産。
807		壺	体部は内湾して立ち上がり、肩が張る。口縁部は外反し端部は丸く収まる。		1/2 片。底部外面にヘラ記号あり。備前産。
808			体部はやや内湾して立ち上がる。口縁部は直立し肥厚する。肩部に耳あり。	底部外面はナデ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。	上部 1/5 片。備前産。
809			体部は扁平で、肩は張る。口縁部は短く立ち上がり、端部は丸く収まる。		1/4 片。丹波産。
810		体部は強く屈曲して立ち上がり、中位がすぼまる。体部外面に段あり。全体にひずむ。	底部外面はオサエのちナデ。底部内面・体部内外面は回転ナデ、のち外面に強いオサエ。	体部 1/2 片。信楽産。	
811	施釉陶器	椀	体部は緩やかに内湾して開く。小型。	底部外面は回転糸切り。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。内面・口縁部外面に灰釉を施す。	1/2 片。唐津産。
812			体部は内湾して開く。小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。全面に白釉を施す。	2/3 片。瀬戸美濃産。
813			体部は内湾して開く。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面・体部口縁部外面に灰釉を施す。	1/3 片。唐津産。
814			体部は内湾して開き、口縁端部は肥厚して玉縁状になる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面・体部口縁部外面に灰釉を施す。褐釉で施紋。	1/2 片。唐津産。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
815	施釉陶器	椀	体部は外へ張り出し、口縁部は屈曲して立ち上がる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に灰釉を施す。ヘラ描きで施紋。	口縁部 1/3 片。瀬戸美濃産。
816			口縁部は内湾して開き、端部は丸く収まる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面・体部口縁部外面に白釉を施す。	2/3 片。瀬戸美濃産。
817			体部は内湾して開く。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面・体部口縁部外面に褐釉を施し内面に灰釉を掛ける。	1/3 片。瀬戸美濃産。
818・819			体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して端部は外反する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面・体部口縁部外面に 818 は透明釉と緑釉、819 は褐釉を施す。	818 は 1/2、819 は 1/3 片。瀬戸美濃産。
820			体部は内湾気味に開き、口縁端部は外反する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面・体部口縁部外面に透明釉を施し褐釉で施紋。	1/4 片。瀬戸美濃産。
821			体部は外へ張り出し、口縁部は屈曲して立ち上がり、端部は肥厚する。体部はひずむ。	体部外面はケズリ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ後外面から強いオサエ。体部外面にヘラ描きで施紋。内面・体部口縁部外面に黒釉を施す。	1/4 片。瀬戸美濃産。
822			口縁部は内湾気味に開く。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。全面に白釉を施す。外面に胎土目あり。	2/3 片。瀬戸美濃産。
823	皿	口縁部は内湾気味に開く。口縁部内外面に花卉あり。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。口縁部内面は放射状にケズリ、端部はオサエ。削出高台。内面・口縁部外面に灰釉を施す。外面に重ね焼き痕跡あり。	2/3 片。硯に転用。瀬戸美濃産。	
824		口縁部は直線的に開き、上位は水平にのび、端部は立ち上がる。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。全面に褐釉を施す。内外面に目痕あり。	ほぼ完形。瀬戸美濃産。	
825		体部は直線的に開き、口縁端部はやや立ち上がる。内外面中位に段がある。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面・体部口縁部外面に灰釉を施す。外面に胎土目あり。	ほぼ完形。唐津産。	
826	鉢	体部は内湾して開き、口縁部は外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。全面に灰釉を施す。827 は褐釉で施紋。内面に胎土目あり。	ほぼ完形。唐津産。	
827		体部は内湾気味に開き、口縁部外反する。	削出高台。全面に灰釉を施す。827 は褐釉で施紋。内面に胎土目あり。	2/3 片。唐津産。	
828		体部は内湾気味に開く。高い高台。大型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。体部内面に放射状にカキメを施紋。全面に灰釉を施す。	1/3。唐津産。	
829	盤	体部は屈曲して開く。口縁端部に面あり。	底部外面はナデ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。内外面に灰釉を施す。	1/4 片。唐津産。	
830	蓋	天井部は半球形で、口縁端部に面がある。	天井部・口縁部内外面は回転ナデ。内外面に白釉を施す。外面に褐釉で施紋。	1/2 片。瀬戸美濃産。	

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考	
831	施釉陶器	壺	体部は直線的に立ち上がり、肩が張る。口縁部は外反し端部はやや肥厚する。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。体部肩部外面・口縁部内外面に褐釉を施す。	上部1/4片。胎土は精良。瀬戸美濃産。	
832			肩部はなだらかで、頸部は細く、口縁部は外反する。	肩部内面はタタキ、肩部外面・頸部口縁部内外面は回転ナデ。頸部内面にしぼり目あり。全面に灰釉を施す。	頸部完存。	
833			口縁部は内傾し、端部は肥厚する。肩部外面に段あり。	肩部・口縁部内外面は回転ナデ。外面に灰釉を施す。	口縁部1/2片。丹波産。	
834	磁器	皿	口縁部は直線的に開き、端部はやや外反する。内面に凹線あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。全面に施釉。白磁。内外面に胎土目あり。	1/5片。朝鮮産。	
835~837			椀	体部・口縁部は内湾して開く。836は口縁端部が外反し、輪花あり。	体部・口縁部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデ。835は内面に印花で施紋。外面に呉須で施紋のち内外面に透明釉を施す。青花。	835・837は極小破片、836は小破片。中国産。
838・839			皿	口縁部は内湾気味に開く。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内外面に化粧土を施し外面に呉須で施紋、後内外面に透明釉を施す。青花。	838はほぼ完形、839は極小破片。中国産。
840	土師器	焼塩壺蓋	天井部はふくらみ、口縁部はやや外反する。	天井部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	ほぼ完形。	
841		焼塩壺	体部は直立し、口縁部はすぼまる。外面に段あり。	底部・体部外面はナデ、内面はオサエ。口縁部内外面は横ナデ。	ほぼ完形。	

付表 45 1区土壌 768 出土土器観察表（原色図版 6・図版 30・31・95・96）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
842	土師器	椀	体部は浅い半球形で、口縁部は内傾する。	底部・体部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	2/3片。胎土は白色。
843~847		皿	口縁部は緩やかに屈曲して、内湾気味に開く。浅い。小型。	底部・口縁部外面はオサエ、内面はナデ。	843~845・847は完形、846は3/4片。
848~850			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。中型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデ。	848・849は完形、850は1/2片。
851~854			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。底部から口縁部の屈曲部は窪む。大型。	底部内外面はナデ。体部内面はナデ、外面はタタキのちナデ。口縁部内外面は横ナデ。	851・852は完形、853・854は3/4片。
855・856		鍋	体部は浅い半球形で、口縁部は屈曲して開き、端部は立ち上がる。器壁は薄い。856はやや浅い。	底部・体部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	いずれもほぼ完形。外面に煤付着。
857	釜	体部は扁平な球形で、口縁部は大きく屈曲して端部は立ち上がる。体部下位に鏝あり。	底部内外面はナデ。体部内面はナデ、外面はタタキのちナデ。口縁部内外面は横ナデ。	完形。底部外面に煤付着。大和産。	
858	瓦器	釜	体部は扁平な球形で、口縁部は内傾して立ち上がる。体部中位に鏝、肩部に把手あり。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ、のち外面は粗いミガキ。	ほぼ完形。底部外面に煤付着。大和産。
859		火鉢	体部は直線的に立ち上がり、受部は水平に伸び、立ち上がり部は内傾する。体部に円形透かし孔あり。	体部・口縁部内外面は横ナデ、のち体部外面は密なミガキ。	体部1/5片。大和産。
860・861			体部は内湾し口縁部は内傾する。3箇所に低い足あり。	底部外面はオサエ後ナデ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ、後外面は粗いミガキ。861の底部外面に板圧痕あり。足は貼付で、860は接合面に刺突あり。	860は体部1/3、861は2/3片。大和産。
862			灯火具	天井部はふくらみ、体部は直線的に垂下する。天井部中央につまみが付き、上部は皿状になる。体部前後面に透かし孔あり。	天井部・体部外面はミガキ、内面はオサエのちナデ。つまみ内外面は横ナデ。透かしはヘラ切り。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
863	瓦器	灯火具	体部は内湾して開き、受部は水平に開く。立ち上がり部はやや内傾し、端部は丸く収まる。高い高台あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・立ち上がり部内外面は横ナデ、のち体部外面はミガキ。貼付高台。	1/2片。大和産。
864	焼締陶器	鉢	体部は直線的に開き、口縁端部に面がある。播目あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部外面はオサエ後ナデ、体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	1/8片。内面は使用により磨滅。丹波産。
865	陶器	鉢	体部は直線的に開き、口縁部を上方に拡張し、外面に凹線あり。播目あり。片口あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。底部外面に板圧痕あり。	1/2片。内面は使用により磨滅。備前産。
866	土師器	焼塩壺	体部は直立し、口縁部はすぼまる。体部外面は面取状になる。	底部・体部外面はナデ、内面はオサエ後ナデ。口縁部内外面は横ナデ。	ほぼ完形。
867～869	施釉陶器	椀	体部は内湾して開き、口縁端部はわずかに外反する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。871は全面、他は内面・体部口縁部外面に灰釉を施す。	867は1/2、868は1/4、869は3/4片。唐津産。
870・871			体部は屈曲して開き、口縁部は外反する。		870は1/3、871は1/4片。唐津産。
872			体部は内湾気味に開き、口縁部は屈曲して直立し、端部は肥厚する。口縁部外面は窪む。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。口縁部外面をへらでオサエ。内面・体部口縁部外面に灰釉を施す。褐釉で施紋。	底部完存。唐津産。
873			体部は内湾気味に開き、口縁部は屈曲して直立し、端部は肥厚する。口縁部外面は窪む。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。873は内面・体部口縁部外面に緑釉、874・875は全面に白色釉を施す。875は口縁端部を褐釉で施紋。	1/5片。瀬戸美濃産。
874・875			体部は屈曲して開き、口縁部は外反する。		874は2/3、875は1/2片。瀬戸美濃産。
876～879			体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して端部は外反する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・体部口縁部外面に褐釉を施す。	876～878はほぼ完形、879は2/3片。瀬戸美濃産。
880			口縁部は内湾気味に開く。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面・口縁部外面に灰釉を施す。	1/4片。唐津産。
881			口縁部は内湾気味に開く。口縁部内外面に花卉あり。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。口縁部内外面は放射状にケズリ、端部は刻む。削り出し高台。内面・口縁部外面に白釉を施す。内外面に目痕あり。	ほぼ完形。瀬戸美濃産。
882	口縁部は内湾気味に開く。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。全面に白釉を施す。	1/3片。瀬戸美濃産。		
883・884	鉢	体部は直線的に開き、口縁端部はやや立ち上がる。内外面中位に段がある。884は口縁部が3方に開く。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。内面・体部口縁部外面に灰釉を施し、褐釉で施紋。883は内面、884は内外面に胎土目あり。	883は1/3、884は4/5片。唐津産。	
885		体部は内湾し、口縁部は屈曲して内湾気味に開く。口縁部は3方に開く。深い。		1/2片。唐津産。	
886		体部は直線的に開き、口縁端部はやや立ち上がる。内外面中位に段がある。口縁部が8方に開く。		1/2片。唐津産。	
887		体部は緩やかに開き、口縁部は内傾して、端部は立ち上がる。		4/5片。唐津産。	
888		体部は内湾気味に開き、口縁部はやや外反する。大型。		体部・口縁部内外面は回転ナデ。内外面に灰釉を施す。	口縁部1/3片。唐津産。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
889・890	施釉	鉢	体部は屈曲して直線的に立ち上がる。890は口縁端部が内側へ肥厚する。889は体部外面下位に稜あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削出高台。889は全面に白色釉を施し、呉須で施紋。890は内面・体部口縁部外面に白色釉を施す。	889は底部完存、890は1/4片。瀬戸美濃産。
891			体部は内湾気味に開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部外面に稜あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に灰釉を施し緑釉で施紋。外面に目痕あり。	4/5片。瀬戸美濃産。
892	陶器	壺	頸部は細く、口縁部は外反する。	頸部・口縁部内外面は回転ナデ。頸部内面にしぼり目あり。全面に灰釉を施す。	口縁部1/3片。高取産。
893	灯火具		天井部中央につまみが付く。返り部は垂下する。天井部縁辺の2方切り取り。	天井部内面はナデ。天井部外面・かえり部内外面は回転ナデ。外面に灰釉を施す。	ほぼ完形。瀬戸美濃産。
894			杯部は内湾して開く。中央に孔あり。柱部は中空で下方に広がり、裾部は屈曲して外上方に開く。	杯部・柱部内外面・裾部上面は回転ナデ。裾部下面は回転ケズリ。杯部内外面・柱部外面・裾部上面・裾部下面中位まで褐釉を施す。	3/4片。瀬戸美濃産。

付表 46 2区土壌 776 出土土器観察表（原色図版 6・図版 31・32・97・98）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
895～898	土師器	小型壺	体部は内湾し、口縁部は内傾して、端部は尖る。	底部内外面・体部口縁部外面はナデ、体部・口縁部内面は横ナデ。	いずれも完形。胎土は白色。
899～904		皿	口縁部は緩やかに屈曲して、内湾気味に開く。浅い。小型。	底部・口縁部外面はオサエ、内面はナデ。903は内面にカキメを施す。	899～901は完形、902は3/4、903・904は1/2片。
905～908			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。中型。		905は1/2、906・908は2/3、907は完形。905・906は口縁端部・907は内外面に煤付着。
909～916			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。底部から口縁部の屈曲部は窪む。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデ。906は外面にヘラ状の圧痕あり。	909～911・916はほぼ完形、912～915は完形。910は口縁端部全周、912は口縁部内外面に煤付着。
917・918		口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。底部から口縁部の屈曲部は窪む。特大型。		917は4/5、918は1/3片。	
919		鍋	体部は浅い半球形で、口縁部は屈曲して開き、端部は立ち上がる。器壁は薄い。	底部・体部外面はオサエ後ナデ、内面は横ハケ後ナデ。口縁部内外面は横ナデ。	ほぼ完形。外面に煤付着。
920		釜	体部は扁平な球形で、口縁部は大きく屈曲して端部は立ち上がる。体部下位に鏝あり。	底部内外面はナデ。体部外面はナデ、内面はオサエのちナデ。口縁部内外面は横ナデ。	ほぼ完形。底部外面に煤付着。
921	皿	菱形。口縁部は底部から緩やかに開き、やや内湾する。内外面に花卉あり。	内型による成形。口縁部外面はナデのちオサエの布目あり。内面には布目が残る。貼付高台。	1/4片。胎土は白色。	
922	瓦器	蓋	天井部は半球形で、口縁部は直線的に垂下しやや内傾する。端部は肥厚し面がある。	天井部外面はナデ後密なミガキ、内面は粗いミガキ。口縁部内外面は横ナデ。	ほぼ完形。
923		火鉢	体部は直線的に開き、口縁部は外反する。3箇所低い足あり。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ、のち外面は粗いミガキ、口縁部内面はミガキ。体部外面にスタンプによる施紋。	1/2片。
924		灯火具	天井部はふくらみ、体部は直線的に垂下する。天井部中央につまみが付き、上部は皿状になる。体部前後面に透かし孔あり。	天井部・体部外面はミガキ、内面はオサエのちナデ。口縁部内外面は横ナデ。つまみ内外面は横ナデ。透かしはヘラ切り。	2/3片。天井部内面に煤付着。大和産。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
925	瓦器	蓋	天井部は平坦で、口縁部は短く垂下する。	天井部外面はオサエのちナデ。天井部内面・口縁部内外面は横ナデ。	2/3片。大和産。
926		火鉢	体部は内湾し、口縁部は内傾する。3箇所に中空の足あり。	底部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ。後外面は粗いミガキ。底部に足を貼付、後に内側から割り抜く。	1/6片。
927	焼締陶器	鉢	体部は直線的に開き、口縁端部に面がある。口縁部内側に段あり。播目あり。片口あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部外面はオサエ後ナデ、体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	完形。内面は使用により磨滅。丹波産。
928		壺	体部は卵形で内湾して立ち上がり、肩はやや張る。口縁部は外反して、端部は肥厚して玉縁となる。肩部外面2箇所に櫛描あり。	底部外面はナデ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。	2/3片。信楽産。
929・930	土師器	焼塩壺蓋	929の天井部はふくらみ、930は平坦である。口縁部は開く。	天井部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	いずれも完形。
931		焼塩壺	体部は直立し、口縁部はすぼまる。外面に段あり。体部外面は面取状になる。	底部・体部外面はナデ、内面はしぼりのちオサエ。口縁部内外面は横ナデ。	完形。
932			体部は球形で、口縁部はすぼまる。	底部・体部外面はナデ、内面はオサエのちナデ。口縁部内外面は横ナデ。	完形。
933	施釉陶器	椀	体部は内湾して開き、口縁部は外反する。小型。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。	1/3片。瀬戸美濃産。
934・935			体部は内湾して開く。小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・口縁部外面に933は緑釉、934・935は白釉を施す。	934は1/2、935は完形。934は内面に褐色の付着物あり。瀬戸美濃産。
936・937			体部は内湾して開き、口縁部はやや外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。936は全面、937は内面・体部口縁部外面に灰釉を施す。底部内面にスタンプ・体部・口縁部内外面に白化粧土による施紋。936は外面に胎土目あり。	いずれもほぼ完形。唐津産。
938・939			体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して端部は外反する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・体部口縁部外面に940は灰釉、ほかは褐釉を施す。	938は完形、939は4/5片。瀬戸美濃産。
940・941			体部は内湾して開き、口縁端部はわずかに外反する。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・体部口縁部外面に940は灰釉、ほかは褐釉を施す。	940は1/4片、941はほぼ完形。瀬戸美濃産。
942			口縁部は内湾気味に開く。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・口縁部外面に灰釉を施し、褐釉による施紋。内面に目痕あり。	ほぼ完形。唐津産。
943			口縁部は内湾気味に開く。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。全面に白釉を施す。内面に目痕あり。944は口縁部内面にヘラ描きで施紋。	4/5片。瀬戸美濃産。
944			四角形で、口縁部は内湾気味に開き、端部は外反する。4隅に切り込みあり。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。口縁部内外面に放射状にケズリ、端部は刻む。削り出し高台。全面に945は白釉、946は灰釉を施す。945は内面・946は外面に目痕あり。	ほぼ完形。瀬戸美濃産。
945・946			口縁部は内湾気味に開く。口縁部内外面に花卉あり。945は小型、946は大型。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。口縁部内外面に放射状にケズリ、端部は刻む。削り出し高台。全面に945は白釉、946は灰釉を施す。945は内面・946は外面に目痕あり。	945は2/3、946はほぼ完形。瀬戸美濃産。
947			鉢	体部は屈曲して立ち上がる。口縁端部は内側へ肥厚する。3箇所に足あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台で切り取って足にする。体部・口縁部外面に灰釉を施す。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
948	施釉陶器	鉢	体部は直線的に開き、口縁部は外反し端部は立ち上がる。内外面中位に段がある。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	948は3/4片。唐津産。
949・950			体部は内湾して開き、口縁部は外反する。949は片口あり。949は小型、950は大型。	削り出し高台。948は全面、949・950は内面・口縁部外面に灰釉を施す。948は内外面、950は内面に砂目あり。	
951・952			体部は直線的に開き、口縁部は外反し、952の端部は立ち上がる。浅い。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・口縁部外面に951は緑釉、952は灰釉を施す。952の内外面に目痕あり。	951は1/3、952はほぼ完形。唐津産。
953			方形で隅は窪む。体部は屈曲し、わずかに内傾しながら立ち上がる。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面はナデ。削り出し高台。全面に白釉を施し体部外面に褐釉で施紋。内面に目痕あり。	ほぼ完形。瀬戸美濃産。
954			体部は内湾し、口縁部は屈曲して直線的に開く。口縁端部は3方に開く。	底部・体部外面は回転ケズリ、底部内面はナデ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に透明釉を施し褐釉・緑釉で施紋。	2/3片。瀬戸美濃産。
955			壺	体部は内湾する。高い高台。	底部内外面はナデ。体部内外面は回転ナデ。貼り付け高台。全面に透明釉を施し褐釉・緑釉で施紋。
956	磁器	椀	体部は内湾して開き、口縁部は立ち上がる。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	ほぼ完形。肥前産。
957			体部は屈曲して直線的に開き、口縁部は内傾する。	957は体部外面に縦ケズリを施す。削り出し高台。呉須で施紋後全面に透明釉を施す。	
958			体部・口縁部は内湾気味に開く。器壁が厚い。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・口縁部体部外面に施釉。青磁。体部外面にヘラ描きで施紋。	2/3片。中国産。

付表 47 2区土壙 813 出土土器観察表（原色図版 7・図版 33・34・99・100）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
959～964	土師器	皿	口縁部は緩やかに屈曲して、内湾気味に開く。浅い。小型。	底部・口縁部外面はオサエ、内面はナデ。	959～962・964は完形、963はほぼ完形。
965～968			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。中型。		
969～976			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。底部から口縁部の屈曲部は窪む。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデ。	969は1/4、970・973・976は完形、971・972は1/2、974は2/3、975はほぼ完形。970・974・976は口縁端部に煤付着。
977			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。底部から口縁部の屈曲部は窪む。特大型。		1/2片。
978・979			小型壺	体部は内湾し、口縁部は内傾して、端部は尖る。	底部内外面・体部口縁部外面はナデ、体部・口縁部内面は横ナデ。
980・981	鍋	体部は浅い半球形で、口縁部は屈曲して開く。980の端部は立ち上がり、981は肥厚して面がある。器壁は薄い。	底部・体部外面はオサエのちナデ、内面は980は横ハケ、981はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	いずれも1/2片。980は外面に煤付着。	
982	瓦器	鉢	体部は屈曲し立ち上がり、口縁端部は内側へ屈曲する。3箇所足あり。	底部外面はナデ、底部内面・体部口縁部内外面は横ナデ、後体部・口縁部外面はミガキ。足は貼り付けのちケズリ。	1/4片。
983		壺	体部は扁平で、口縁部は短く立ち上がる。	体部内面はナデ、体部外面・口縁部内外面は横ナデ。	体部1/6片。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
984	焼締 陶器	鉢	体部は直線的に開き、口縁端部は屈曲する。播目あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	ほぼ完形。内面は使用により磨滅。底部外面に板圧痕あり。信楽産。
985			体部は直線的に開き、口縁端部に面がある。口縁部内側に段あり。播目あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部外面オサエのちナデ、体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	1/6片。丹波産。
986	磁器	蓋	口縁部は内湾気味に開く。口縁部外面に鑄あり。	天井部・口縁部内外面は回転ナデ。呉須で施紋後口縁端部を除き全面に透明釉を施す。	1/6片。中国産。
987～991		椀	体部は内湾して開く。987～989は口縁端部が外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。呉須で施紋後全面に透明釉を施す。988・989は高台に砂付着。	987・989・991は1/2、988は2/3、990は小破片。中国産。
992		鉢	体部は内湾気味に開く。口縁端部は外反する。		2/3片。中国産。
993	施釉 陶器	椀	体部はやや内湾して開き、口縁部は外反する。小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・体部口縁部外面に灰釉を施す。	1/2片。唐津産。
994			体部は内湾して開く。小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・体部口縁部外面に緑釉を施す。	1/5片。瀬戸美濃産。
995			体部は内湾して開く。小型。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に白釉を施す。	1/2片。瀬戸美濃産。
996・997			体部は内湾して開き、口縁端部は外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に灰釉を施す。	996はほぼ完形、997は1/3片。唐津産。
998～1000			体部は内湾して開き、口縁端部はわずかに外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・体部口縁部外面に褐釉を施し、のち998・999は内外面に灰釉を掛ける。	998はほぼ完形、999は1/2、1000は2/3片。瀬戸美濃産。
1001～1003			体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して端部は外反する。		1001は1/5、1002は1/4、1003は1/3片。瀬戸美濃産。
1004			口縁部は内湾して開く。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に灰釉を施し、口縁部内面に化粧土で施紋。内面に目痕あり。	2/3片。唐津産。
1005	口縁部は内湾気味に開く。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に灰釉を施す。外面に重ね焼き痕跡あり。	完形。瀬戸美濃産。		
1006	口縁部は外反する。		1/4片。瀬戸美濃産。		
1007	皿	口縁部は外反気味に開く。口縁端部は8方に開く。	1007・1009は型による成形。底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。	1007は1/3、1008・1009は1/2片。瀬戸美濃産。	
1008		口縁部は内湾して開く。口縁部内外面に花卉あり。	1008は口縁部内外面放射状にケズリ。1007・1008は端部を刻む。1007は内面・体部と口縁部外面に緑釉を施す。1008は内面に呉須で施紋のち全面に灰釉を施す。1009は全面に白釉を施す。1008は外面に目痕あり。		
1009		口縁部は外反気味に開く。口縁部内外面に花卉あり。			
1010	鉢	体部は直線的に開き、口縁部は外反し端部は立ち上がる。内外面中位に段がある。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・体部口縁部外面に灰釉を施す。1011は褐釉で施紋。1010は内外面、1011は内面に胎土目、1012は内外面に砂目あり。	ほぼ完形。唐津産。	
1011		口縁部は内湾気味に開き、端部は3方に開く。		2/3片。唐津産。	
1012		体部は直線的に開き、内外面中位に段がある。		1/2片。唐津産。	

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1013	施釉陶器	鉢	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。	底部内外面はナデ。体部外面下位は回転ケズリ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。体部外面・口縁部内外面に褐釉を施す。内面に胎土目あり。	1/2片。瀬戸美濃産。
1014			体部は内湾気味に開き、口縁部は直立する。	体部外面は回転ケズリ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。内面・口縁部外面に灰釉を施す。	1/8片。唐津産。
1015			体部は屈曲して開き、口縁端部は立ち上がる。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に白釉を施す。	1/4片。瀬戸美濃産。
1016			体部は内湾気味に開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部外面に稜あり。	体部外面は回転ケズリ。体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。内外面に灰釉を施す。	1/8片。瀬戸美濃産。
1017			体部は内湾して開き、口縁部は外反する。体部外面に段あり。	底部・体部外面下位は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。全面に灰釉を施す。1017は口縁部外面にヘラで施紋。1018は口縁部外面に沈線あり。	1/4片。瀬戸美濃産。
1018			体部は内湾して開く。口縁部は外反し、端部は内側へ屈曲する。体部外面に段あり。		1/5片。瀬戸美濃産。
1019		壺	体部は卵形で、内湾気味に立ち上がる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部内外面は回転ナデ。体部外面に褐釉を施す。	体部1/6片。瀬戸美濃産。
1020			体部は内湾気味に立ち上がり、受部は水平にのび、立ち上がり部は内傾する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部立ち上がり部内外面は回転ナデ。底部外面・受部外面以外に褐釉を施す。	1/4片。瀬戸美濃産。
1021	土師器	焼塩壺蓋	天井部は平坦で、口縁部は開く。	天井部外面はオサエのちナデ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/2片。
1022		焼塩壺	体部は直立し、口縁部はややすぼまる。	底部・体部外面はナデ、内面はしぼりのちオサエ。口縁部内外面は横ナデ。	完形。

付表 48 1区土壌 190出土土器観察表（原色図版7・図版34・101）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1023～1028	土師器	皿	口縁部は緩やかに屈曲して、内湾気味に開く。浅い。小型。	底部・口縁部外面はオサエ、内面はナデ。	いずれも完形。
1029～1032			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。中型。		1029は1/4、1030～1032は1/3片。
1033～1036			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。底部から口縁部の屈曲部に沈線があるものがある。大型。	底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデ。	1033は3/4、1034・1035は1/3、1036は1/5片。1036は底部内外面に煤付着。
1037		鍋	体部は浅い半球形で、口縁部は屈曲して開き、端部は肥厚して面がある。	体部・口縁部外面はナデ、内面は横ナデ。	小破片。
1038			口縁部は内湾気味に直立する。	底部外面はオサエのちナデ、底部内面・口縁部内外面は横ナデ。	1/8片。外面に煤付着。
1039	瓦器	火鉢	体部は屈曲して立ち上がる。口縁端部に面がある。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は横ナデ。足は貼付、接合面に刻み目あり。	ほぼ完形。大和産。
1040・1041	焼締陶器	鉢	体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して上方に伸び、外面に凹線がある。密な拵目あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。内面に重ね焼き痕あり。	1040は小破片、1041は底部1/5片。信楽産。
1042	施釉陶器	椀	体部は内湾して開く。	底部外面・体部下位外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。1042は全面に灰釉を施し化粧土で施紋。1043は全面に透明釉を施す。1044・1045は呉須で施紋のち内面・体部口縁部外面に透明釉を施す。	1/2片。唐津産。
1043			体部は内湾して開き、口縁部は立ち上がる。		1/3片。
1044・1045			体部は内湾して浅く開く。		いずれも1/3片。底部外面に刻印あり。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1046	施釉陶器	皿	口縁部は直線的に開く。口縁部内面に花形突起あり。	底部・口縁部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデ。内面に透明釉を施す。	1/2 片。
1047			口縁部は直線的に開く。口縁部内面中位に立ち上がり部あり。一部に窪みあり。		1/3 片。
1048	鉢	鉢	体部は内湾気味に開く。	底部・体部外面は回転ケズリ、内面は回転ナデ。削出高台。内面に灰釉を施し、化粧土で施紋。内面に砂目あり。	1/2 片。唐津産。
1049			体部は内湾気味に開き、口縁部は2段に屈曲する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。褐釉・呉須で施紋後内面・体部口縁部外面に透明釉を施す。	底部 1/2 片。
1050	高杯	高杯	体部・口縁部は内湾気味に開く。小型。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。呉須で施紋後全面に透明釉を施す。	1/3 片。肥前産。
1051			杯部は内湾して開く。脚部は中実で裾部は緩やかに広がる。	杯部内外面・脚部外面は回転ナデ。脚部下面は回転ケズリ。呉須で施紋後脚部下面以外に透明釉を施す。	2/3 片。肥前産。
1052～1055	磁器	碗	体部は内湾して開く。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。呉須で施紋後全面に透明釉を施す。1052は体部外面にスタンプで施紋、底部に銘あり。	1052・1055は2/3、1053・1054は1/3片。肥前産。
1056			体部は内湾気味に開き、口縁端部は丸く収まる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に施釉。青磁。	1/5 片。肥前産。
1057・1058	皿	皿	体部は内湾気味に開く。	底部外面・口縁部外面下位は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。呉須で施紋後全面に透明釉を施す。	いずれも2/3片。肥前産。
1059			鉢	体部は内湾して開く。口縁端部は丸く収まる。器壁が厚い。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。呉須で施紋後全面に透明釉を施す。

付表 49 その他の出土土器観察表（図版 35・102～105）

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1060	縄紋土器	皿形土器	口縁部は内湾気味に開く。	底部・口縁部内外面はオサエ。口縁部外面に沈線あり。	1/8 片。胎土は燈褐色。2区土壙 1185 出土。
1061		浅鉢	体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は内側に肥厚する。	体部外面はケズリ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ、のち口縁部内面はミガキ。	小破片。2区第4層出土。
1062・1063	深鉢	深鉢	体部は内湾し、口縁部は緩やかに外反して開く。1062は口縁端部が波状である。	体部外面はケズリ。体部内面・口縁部内外面は横ナデ。1064は屈曲部外面に爪形紋、口縁端部に刻目を施す。	いずれも小破片。1062は2区土壙 2423、1063は2区土壙 1959 出土。
1064・1065			1064は口縁部が緩やかに外反して開く。	1066は口縁部が内傾し、1067は外反する。口縁端部外面に突帯あり。	いずれも小破片。1064は2区溝 2061、1065は2区溝 713 出土。
1066・1067			1066は口縁部が内傾し、1067は外反する。口縁端部外面に突帯あり。	口縁部内外面は横ナデ。1066は突帯に刻目を施す。	いずれも小破片。1066は2区土壙 298、1067は2区土壙 2417 出土。
1068・1069	弥生土器	壺	口縁部は大きく外反して開く。1068の端部は拡張する。	口縁部内外面は横ナデ、のち1069は外面に横ミガキ。1068は外面に縦ハケがのこる。口縁端部に凹線あり。	1068は1/5片、1069は小破片。1068は2区第4層、1069は2区土壙 421 出土。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1070	弥生土器・土師器	壺	肩部はなだらかにすぼまる。	外面は横ナデ、内面は不明。外面に櫛描直線紋を施す。	小破片。1区土壙106出土。
1071			口縁部は屈曲して大きく開き、端部を上下に拡張する。頸部外面に突帯あり。	頸部外面は縦ハケ後ヨコナデ、内面は縦ミガキ。口縁部内外面はヨコナデ、のち内面は横ミガキ。突帯に刻み目、端面に櫛描波状紋・竹管円形浮紋を施す。	口縁部1/2片。2区柱穴2305出土。
1072			口縁部は外反気味に立ち上がる。	口縁部内外面は横ナデ。	口縁部1/6片。2区第3層出土。
1073		甕	口縁部は緩やかに外反し、口縁端部に外傾する面あり。1073の口縁端部は波状である。	頸部外面は縦ハケ、内面は横ナデ。口縁部内外面は横ハケ。頸部外面に櫛描直線紋を施す。	小破片。口縁部外面に煤付着。2区柱穴2430出土。
1074			口縁部は外反して開く。	頸部外面は斜ハケ、内面は横ナデ。口縁部内外面は横ナデ、のち外面に横ハケ、内面に櫛描波状紋を施す。	小破片。1区第4層出土。
1075			口縁部は強く屈曲して開き、端部は立ち上がる。	頸部外面は縦ハケ、頸部・口縁部内面は横ハケ、口縁部外面は横ナデ。口縁端部に刻目を施す。	口縁部1/8片。2区土壙249出土。
1076			口縁部は屈曲し、端部は立ち上がり受け口となる。	体部外面は平行タタキ、後肩部に縦ハケ。体部内面は斜ハケ。口縁部内外面は横ナデ。	口縁部1/8片。2区土壙1099出土。
1077～1079			肩は張る。口縁部は強く屈曲し、端部は立ち上がり受け口になる。	肩部外面は斜ハケ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ、後1079は肩部外面ナデ。1078・1079は口縁部外面に刺突紋、肩部外面に櫛描直線紋・刺突紋を施す。	1077は口縁部1/5、1078は1/8、1079は極小破片。1077は1区柱穴1010、1078・1079は1区第4層出土。
1080・1081			口縁部は屈曲して大きく外反する。	肩部外面は縦ハケ後横ハケ、内面はオサエ。口縁部内外面は横ナデ。	いずれも極小破片。1080は2区第4層、1081は2区土壙2492出土。
1082・1083			口縁部は屈曲して大きく外反する。	口縁部内外面は横ナデ後1082は外面縦ミガキ。屈曲部に1082は刻目、1083は櫛描直線紋を施す。	いずれも小破片。1082は2区第4層、1083は1区土壙1225出土。
1084	高杯	柱部は中空で、裾部は屈曲して開く。裾端部に円形透かしあり。	柱部外面は面取り、内面はしぼり目あり。裾部内外面は横ナデ。	柱部完存。1区土壙1719出土。	
1085		柱部は中空で、裾部は外反する。	接合は粘土充填。杯部内外面は放射状ミガキ。柱部裾部外面は縦ミガキ、内面はナデ。柱部外面に櫛描直線紋を施す。	柱部完存。2区第4層出土。	
1086	器台	口縁部は柱部から緩やかに外反して開く。端部は肥厚して垂下する。	柱部外面は縦ハケ、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ、のち内面下位は縦ミガキ。端面に刺突紋を施す。	上部完存。2区土壙2417出土。	
1087・1088	須恵器	杯蓋	天井部は平坦で、口縁部は屈曲して垂下する。1087は端部に面がある。1088は稜があり、内傾する面をもつ。	天井部外面は回転ケズリ、内面はナデ。口縁部内外面は回転ナデ。	1087は1/6、1088は1/3片。1087は2区第2面検出中、1088は1区柱穴690出土。
1089・1090		杯身	体部は扁平で内湾し、受部は水平に張り出す。立ち上がり部は内傾する。1089の端部は丸く収まり、1090は角張る。	底部外面は回転ケズリ、内面はナデ。体部・受部・立ち上がり部の内外面は回転ナデ。	1089は1/5、1090は1/3片。1089は1区第3層、1090は1区土壙1327出土。
1091		高杯	裾部は緩やかに開く。裾端部は立ち上がる。円形・逆三角形の透かしあり。	裾部内外面は回転ナデ。	極小破片。2区溝1324出土。
1092		鉢	底部は厚い円盤状で、体部は直線的に開く。底部中心に穿孔あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部内外面は回転ナデ。	底部1/2片。2区土壙1217出土。
1093		甕	口縁部は外反して開き、端部は垂下する。	口縁部内外面は回転ナデ。口縁部外面にヘラで施紋。	小破片。口縁部内面に自然釉付着。2区第4層出土。
1094・1095			肩部は内湾し、口縁部は屈曲して直線的に開き、端部は肥厚する。	肩部外面は平行タタキ後カキメ、内面は同心円タタキ。口縁部内外面は回転ナデ、のち外面に櫛描波状紋・刺突紋を施す。1095は粘土粒を貼り付け。	1094は小破片、1095は1/3片。1094は2区土壙1463、1095は2区土壙2516出土。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1096	二彩陶器	火舎	多角形の足で、基部はやや太く、中位で細くなり、端部は外反する。	全面にケズリで面取り。緑色地に白色の斑を散らした二彩である。	足部 3/4 片。2 区土壙 1279 出土。
1097	緑釉陶器	香炉	体部は内湾気味に立ち上がり、立ち上がり部は内傾する。脚部は大きく外反する。	体部・立ち上がり部・脚部内外面は回転ナデ。内外面に施釉。	小破片。1 区土壙 345 出土。
1098	陶器	甌	底部は平坦で、体部は屈曲して直線的に開く。底部四方に不定形の穴あり。	底部・体部内外面は回転ナデ。体部外面に施釉。	小破片。2 区土壙 1716 出土。
1099・1100	磁器	壺	体部は屈曲して直線的に開く。1100 は体部下位に蓮弁・段あり。	体部内外面は回転ナデ。1099 は内外面に黒釉を施し、外面を掻き落として施紋のち緑釉を施す。1100 は外面にヘラで施紋のち外面に施釉。青白磁。	いずれも小破片。1099 は 2 次焼成を受ける。いずれも中国産。1099 は 2 区土壙 854、1100 は 2 区土壙 388 出土。
1101	白色土器	蓋	天井部は平坦で、口縁部は内湾気味に垂下する。中央につまみあり。小型。	天井部外面はヘラ切り、内面はナデ。口縁部内外面は横ナデ。	1/2 片。2 区土壙 1124 出土。
1102	土師器	杯	体部は屈曲して外反気味に開く。底中央は窪む。小型。	底部・体部外面オサエのちナデ。底部内面はナデ、体部は内面・口縁部内外面は横ナデ。	2/3 片。胎土は赤色系土師器と同じ。2 区土壙 756 出土。
1103		釜	体部は扁平で、口縁部は内傾する。体部中位に鏝あり。3 箇所足あり。小型。	体部外面はナデ、体部内面・口縁部内外面は横ナデ。	体部はほぼ完形。2 区土壙 1371 出土。
1104	瓦器	椀	体部・口縁部は内湾気味に開く。	底部・体部外面はナデ、内面は横ナデ、後粗いミガキ。貼り付け高台。底部内外面に焼成後ヘラ記号。	体部 1/4 片。和泉型。1 区土壙 161 出土。
1105		火鉢	体部・口縁部は内湾し、端部は面をもつ。	体部・口縁部外面は密なミガキ。体部内面は横ハケ、口縁部内面は横ナデ。外面に赤・黒漆で紋様を施す。	1/8 片。2 区第 1 層出土。
1106	灰釉系陶器	皿	口縁部は短く立ち上がる。小型。	底部外面は回転糸切り。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。	完形。内面に自然釉付着。2 区柱穴 1287 出土。
1107		椀	口縁部は内湾気味に開く。内面に線刻あり。	体部・口縁部内外面は回転ナデ。内面にヘラで施紋。	極小破片。2 区柱穴 1479 出土。
1108		鉢	体部は内湾して開く。口縁部は直線的に開き、端部に面あり。	体部外面下位は回転ケズリ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。貼り付け高台。	1/8 片。内面に自然釉付着。2 区第 3 層出土。
1109		壺	体部は扁平で肩は張り、口縁部は直立する。	底部外面はナデ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデで、体部外面下位は回転ケズリ。内面・口縁部体部外面上位に灰釉を施す。	完形。瀬戸産。2 区土壙 1332 出土。
1110	施釉陶器	椀	体部は直線的に開き、口縁部はやや内湾する。端部は尖る。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・口縁部・体部外面上位に灰釉を施す。内面に目痕あり。	4/5 片。瀬戸産。1 区柱穴 600 出土。
1111		鉢	体部は内湾して開き、口縁部は強く屈曲して立ち上がる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ、のち一部ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。底部内面・体部口縁部内外面に灰釉を刷毛で施釉。	ほぼ完形。瀬戸産。2 区土壙 2094 出土。
1112・1113	土師器		口縁部は緩やかに屈曲して、内湾気味に開く。浅い。小型。	底部・口縁部外面はオサエ。底部内面はナデ。1113 は内面にヘラによる螺旋状のキザミあり。	1112 は完形、1113 は 4/5 片。1112 は底部外面に墨書あり。1112 は 2 区土壙 309、1113 は 2 区土壙 757 出土。
1114		皿	口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。中型。	底部・口縁部外面下位はオサエのちナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデ。1115 は底部内面に墨で施紋、1116 は内面を黒塗りのち金箔を帯状に貼る。	小破片。底部に焼成後の穿孔あり。2 区土壙 1149 出土。
1115・1116			口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は尖る。1115 は底部から口縁部の屈曲部に沈線がある。1115 は大型、1116 は特大型。		1115 は極小破片、1116 は小破片。1115 は 1 区土壙 114、1116 は 1 区土壙 278 出土。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1117	土師器	蓋	つまみは柱状で、天井部は開く。つまみ中位に穿孔あり。	つまみ・天井部は内外面ナデ。	完形。胎土は白色。2区土壙 390 出土。
1118～1120		小型壺	体部は内湾し口縁部は内傾して、端部は尖る。	底部内外面・体部口縁部外面はナデ、体部・口縁部内面は横ナデ。1119・1120 は体部外面に墨で施紋。	いずれも完形。胎土は白色。1118 は2区土壙 390、1119・1120 は2区土壙 1145 出土。
1121		壺	体部は扁平で、内湾し、口縁部はやや内傾する。	底部外面はナデ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデ。体部外面下位は回転ケズリ。	完形。1区掘削中出土。
1122・1123	瓦器	壺	体部は直線的に開き、肩は張る。口縁部は短く立ち上がる。1122 は片口あり。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	1122 は1/2、1123 は3/4 片。1122 は1区土壙 530、1123 は1区土壙 767 出土。
1124		火鉢	体部は直線的に立ち上がり、受部は水平で、立ち上がり部は内傾する。体部に円形透かしあり。	底部内外面はナデ。体部・立ち上がり部内外面は横ナデ、のち体部外面は粗ミガキ。貼付高台。	2/3 片。大和産。2区土壙 1045 出土。
1125		十能	長方形の身の一方に把手あり。	身底部外面はオサエ後一部ケズリ。底部内面・口縁部内外面はナデ。把手はオサエ。	1/3 片。内面に煤付着。2区土壙 298 出土。
1126		甕	体部は屈曲して外反気味に開き、肩はなだらか。口縁部は屈曲して外反する。大型。	底部内外面はナデ。体部内面はオサエのちナデ、体部外面・口縁部内外面は横ナデ。	2/3 片。大和産。2区土壙 264 出土。
1127		壺	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は内側に大きく屈曲する。体部中位に段あり。	底部内外面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	体部 1/2 片。体部内面にヘラ記号あり。体部外面に自然釉付着。信楽産。2区土壙 1317 出土。
1128	焼締陶器	盤	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は内側に強く屈曲する。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	1/3 片。底部内面にヘラ記号あり。信楽産。2区土壙 382 出土。
1129			体部は内湾気味に開き、口縁端部は肥厚する。口縁端部は12方に開く。	底部外面はナデ。底部内面・体部・口縁部内外面は回転ナデで、体部下位は回転ケズリ。	4/5 片。丹波産。1区土壙 605 出土。
1130		壺	体部は内湾し肩が張る。口縁部は屈曲して開き、端部は肥厚する。片口あり。	底部外面はナデ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ、体部外面下位はケズリ。	1/5 片。底部外面にヘラ記号あり。備前産。2区土壙 234 出土。
1131			体部は内湾し、肩は張らないで、頸部は細い。	底部外面はナデ。底部内面・体部・頸部内外面は回転ナデ、体部外面下位はケズリ。	体部完存。底部外面にヘラ記号あり。備前産。2区土壙 658 出土。
1132		鉢	体部は直線的に開き、口縁部は屈曲する。播目あり。	底部外面はオサエ、内面はナデ。体部・口縁部内外面は回転ナデ。	1/2 片。体部内面は使用により磨滅。体部外面に墨書あり。信楽産。2区土壙 914 出土。
1133	甕	体部は内湾気味に開き、肩部はやや張る。口縁部は外反し端部は肥厚して玉縁となる。大型。	底部内外面はナデ。体部内外面はハケ。口縁部内外面は回転ナデ。	1/2 片。肩部外面に自然釉付着。備前産。2区土壙 2094 出土。	
1134	施釉陶器	椀	体部は内湾して開き、口縁端部はわずかに外反する。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に白釉を施す。内外面に目痕あり。	ほぼ完形。瀬戸美濃産。2区土壙 1246 出土。
1135		鉢	体部は大きく屈曲して外反し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面中位に段あり。口縁部は4方に開く。3箇所足あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。足は貼り付け。全面に化粧土を施しのち施紋し、白釉を施す。内外面に目痕あり。	ほぼ完形。瀬戸美濃産。2区土壙 720 出土。
1136			方形。体部は屈曲して、直線的に立ち上がる。体部中位に稜あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。底部外面以外に白釉を施し、体部外面に褐釉で施紋。内面に目痕あり。	完形。瀬戸美濃産。1区土壙 769 出土。

遺物番号	器種	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1137	施釉陶器	鉢	不定形。体部は外反し、口縁部は屈曲して直線的に立ち上がる。3箇所足あり。	型で成形。底部外面は回転ケズリ、体部外面はケズリ。底部・体部内面は布圧痕あり。口縁部内外面はナデ。足は貼り付け。緑釉と褐釉で施紋後底部外面以外に透明釉を施す。内面に目痕あり。	4/5片。瀬戸美濃産。1区土壙633出土。
1138		椀	体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。口縁部外面中位に段あり。口縁部はひずむ。	底部・体部外面はケズリ。底部体部内面・口縁部内外面はナデ。貼り付け高台。内面に褐釉を施し口縁部外面は褐釉で施紋後透明釉を施す。	2/3片。体部外面にヘラ記号あり。瀬戸美濃産。2区土壙910出土。
1139・1140		皿	体部は内湾気味に開き、口縁部はやや屈曲して直線的に開く。1140の端部に切り込みあり。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。貼り付け高台。緑釉・褐釉で施紋のち全面に透明釉を施す。1140はヘラによる施紋あり。内面に重ね焼き痕跡あり。	いずれも1/4片。瀬戸美濃産。1139は2区第1層、1140は2区土壙382出土。
1141		蓋	天井部は平坦で、口縁部は外反し、端部はやや屈曲する。天井中央につまみあり。	天井部外面・口縁部内外面は回転ナデ。天井部内面は回転ケズリ。外面に灰釉を施し、褐釉で施紋。	ほぼ完形。唐津産。2区土壙390出土。
1142		椀	体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。口縁部外面をヘラで押さえる。内面・口縁部外面に灰釉を施し、褐釉で施紋。	1/3片。唐津産。1区土壙1087出土。
1143		鉢	体部は屈曲して立ち上がる。口縁端部は外反する。体部中位に段あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。貼り付け高台。口縁部外面に櫛で施紋。底部外面以外に灰釉を施し、褐釉で施紋。	ほぼ完形。唐津産。2区土壙390出土。
1144		壺	体部は内湾して立ち上がり、肩が張る。口縁部は短く立ち上がる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・口縁部体部外面に灰釉を施す。	3/4片。唐津産。2区土壙385出土。
1145			体部は扁平で、肩が張る。口縁部は短く立ち上がる。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。内面・口縁部体部外面上位に灰釉を施し、褐釉で施紋。	2/3片。唐津産。2区石室235出土。
1146		鉢	体部は内湾気味に開き、口縁端部は屈曲する。体部内面に段あり。	底部・体部外面は回転ケズリ。底部体部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。体部内面にスタンプで施紋。内面・口縁部外面に褐釉を施す。内外面に砂目あり。	ほぼ完形。唐津産。2区井戸23出土。
1147		磁器	壺	体部は卵形で、口縁部は直立する。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。高台に砂付着。呉須で施紋後口縁部内面以外に透明釉を施す。
1148	皿		底部は平坦である。	底部外面は回転ケズリ。底部内面は回転ナデ。削り出し高台。高台に砂付着。銅釉で施紋後全面に透明釉を施す。	極小破片。2区柱穴309出土。
1149			体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。体部内面に段あり。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。全面に施釉。青磁。	ほぼ完形。肥前産。1区柱穴1442出土。
1150	鉢		体部は内湾して開く。	底部外面・体部外面下位は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。底部外面以外に化粧土を施し、呉須で施紋後透明釉を施す。	ほぼ完形。中国産。2区土壙1316出土。
1151・1152	皿		体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。1151は中型、1152は大型。	底部外面は回転ケズリ。底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。削り出し高台。1152は高台に砂付着。呉須で施紋のち全面に透明釉を施す。	1151はほぼ完形、1152は1/6片。中国産。1151は1区土壙329、1152は2区土壙658出土。

付表 50 瓦観察表 (図版 36・37・106・107)

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1153	軒丸瓦	左廻り三巴紋で、尾は短い。周縁は素紋。	瓦当部裏面上部に丸瓦を当てて接合。	1160 は凹面に「X」のヘラ記号あり。1区土壙 1275 出土。
1154		右廻り三巴紋で、尾は長い。周縁は素紋。	瓦当側面は上位縦ナデ、裏面はナデ。	
1155		左廻り三巴紋で、尾は短い。珠紋は密に巡る。周縁は素紋。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当てて接合。瓦当側面上位は縦ナデ、下位は横ナデ、裏面はオサエ。	
1156		右廻り三巴紋で、尾は長く他の尾に接する。周縁は素紋。範傷多い。	瓦当部裏面上端に溝をつくり、丸瓦を挿入して接合。瓦当側面下位は横ナデ、裏面はオサエ。	
1157		右廻り三巴紋で、尾は短く他の尾に接する。珠紋は密に巡る。周縁は素紋。瓦当面は楕円形。範はC型。	瓦当部裏面上部に丸瓦を当て接合。瓦当側面上位は縦ナデ、下位は横ケズリ、裏面はオサエ。	
1158		右廻り三巴紋で、頭は接し尾は短い。珠紋密に巡る。周縁は素紋。範はC型。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当て接合。瓦当側面下位はナデ、裏面はオサエ。	
1159	軒平瓦	中央に右廻り二巴紋、両側に陰刻剣頭紋を配す。	折曲技法。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面は横ナデ、裏面はナデで曲げじわがのこる。平瓦凹面は布目、凸面はオサエ、側面は縦ケズリ。	
1160		陰刻剣頭紋。		
1161	軒丸瓦	鳥紋。周縁は素紋。	瓦当部裏面上端に溝をつくり、丸瓦を挿入して接合。瓦当側面下位は横ナデ、裏面はナデ。瓦当面に金箔を貼る。	1区土壙 768 出土。
1162		五・七桐紋。周縁は素紋。	瓦当部裏面上部に丸瓦を当てて接合。瓦当側面上位はナデ、裏面はナデ。丸瓦凸面は縦ナデ、凹面は布目、側面は縦ケズリ。瓦当面に金箔を貼る。	1区土壙 278 出土。
1163	軒平瓦	中心飾りは花紋で、唐草紋は両側に2回反転する。周縁は素紋。	顎貼付技法。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面・裏面は横ナデ。平瓦凹面は横ナデ、凸面はオサエ、側面は縦ケズリ。瓦当面に金箔を貼る。	1区土壙 362 出土。
1164		中心飾りは花紋で、唐草紋は両側に3回反転する。周縁は素紋。		1区土壙 1321 出土。
1165	軒丸瓦	右廻り三巴紋で、尾は長い。周縁は素紋。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当て接合。丸瓦取り付け角度は鈍角。瓦当側面上位は縦ナデ、下位は横ナデ、裏面はナデ。	2区土壙 1149 出土。
1166	軒平瓦	右廻り三巴紋で、尾は長い。周縁は素紋。	顎貼付技法。平瓦取り付け角度は鈍角。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面・裏面は横ナデ。	2区第1層出土。
1167	軒丸瓦	八弁複弁蓮華紋で蓮弁は互いに接する。凸中房で「+」を配す。珠紋は密に巡る。周縁は素紋。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当てて接合。瓦当側面上位は縦ナデ、下位は横ナデ、裏面はオサエ。丸瓦凸面は縦縄タタキのち横ナデ、凹面は布目、側面は縦ケズリ。玉縁部は横ナデ。	1167 は丸瓦凸面狭端部に「X」のヘラ記号あり。2区土壙 1442 出土。
1168		八弁複弁蓮華紋で蓮弁は互いに接す。凸中房で上面に「*」を配す。珠紋は粗く巡る。周縁は素紋。	瓦当部裏面上端を窪ませ丸瓦を当てて接合。瓦当側面は横ナデ、裏面はオサエ。	
1169		八弁複弁蓮華紋で蓮弁は互いに接す。凸中房で上面に「卍」を配す。珠紋は粗く巡る。周縁は素紋。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当て接合。瓦当側面上位は横ナデ、裏面はオサエ。丸瓦凸面は横ナデ、凹面は布目、側面は縦ケズリ。	
1170		右廻り三巴紋で、尾は長い。周縁は素紋。	瓦当部裏面上端に溝をつくり、丸瓦を挿入して接合。瓦当側面下位は横ナデ、裏面はオサエ。	

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1171	軒丸瓦	右廻り三巴紋で、尾は長い。圏線が廻る。周縁は素紋。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当てて接合。瓦当側面上位は縦ナデ、下位は横ナデ、裏面はナデ。	1172は大覚寺DKM13Bと同範。1172は丸瓦凸面狭端部に「卍」、1176は瓦当面に「//」、1179は凹面に「㊀」のヘラ記号あり。2区土壙1442出土。
1172		右廻り三巴紋で、尾は短い。周縁は素紋。	瓦当部裏面上端に丸瓦を当てて接合。瓦当側面は横ナデ、裏面はオサエ。丸瓦凸面は縦縄タタキ後横ナデ、凹面は布目、側面は縦ケズリ。玉縁部は横ナデ。	
1173			瓦当部裏面上端を窪ませ丸瓦を当てて接合。瓦当側面は横ナデ、裏面はオサエ。	
1174		右廻り三巴紋で、尾は短く他の尾に接する。珠紋は密に巡る。周縁は素紋。	瓦当側面下位は横ナデ、裏面はオサエ。	
1175～1177	軒平瓦	陰刻剣頭紋。	折曲技法。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面は横ナデ、裏面はナデで曲げじわがのこる。1176は布でオサエ。平瓦凹面は布目、凸面はオサエ、側面は縦ケズリ。	
1178		中央と両端に左廻り三巴紋、間に陰刻剣頭紋を配す。	折曲技法。顎部下面は横ナデ、裏面はオサエ。	
1179		陰刻剣頭紋。	折曲技法。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面・裏面は横ナデ。平瓦凹面は布目、凸面はオサエ、側面は縦ケズリ。	
1180	丸瓦	丸瓦広端部。	丸瓦凸面は丁寧な横ナデ、凹面は横板ケズリ、端面はナデ、側面は縦ケズリ後内側を面取り。端部凹面は幅広くケズリで面取り。表面は黒色化する。	いずれも2区建物825出土。
1181	平瓦	平瓦広端部。	平瓦凹面は丁寧な横ナデ、凸面は粗い縦ナデで離れ砂付着、端面はケズリのち横ナデ、側面は縦ケズリ。表面は黒色化する。	

付表 51 土製品観察表（図版 38・39・108・109）

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1182～1185	土錘	円筒形で両端がすぼまる。	芯材に粘土を巻き付けて手捏ね成形。全体にナデ。	1182は2区土壙384、1183は1区土壙1166、1184は1区土壙1209、1185は1区土壙1478出土。
1186～1189	土馬	頸部に三日月形の顔面が付き、両側に目がある。体部は断面馬蹄形で、下方に足が広がる。	手捏ね成形。頸部を粘土板ではさんで顔面を成形し、目は竹管を押す。粘土塊から頸部・足・尾を引き出し折り曲げて成形。	1186は1区井戸1421、1187は1区第4層、1188は2区土壙1109、1189は2区土壙1952出土。
1190	紡錘車	円形で中央に円孔あり。上下面平坦で、側面ふくらむ。	芯材に粘土を巻き付けて手捏ね成形。上下面はナデ、側面は横ナデ。	2区柱穴200出土。
1191・1192		円形で中央に円孔あり。薄い。	土師器皿を打ち欠き円形に加工し、中央に穿孔する。	1191は1区土壙1265、1192は2区第1層出土。
1193～1204	おはじき	円形で薄い。1204は小型。	土師器皿を打ち欠き、円形に加工。1193・1194・1204は側面を削り丸くする。1193は「萬」・「勝」、1194は「大」、1195は「二」、1196～1202は「十」を陰刻。	1193～1203は1区土壙569、1204は2区土壙776出土。
1205			施釉陶器碗を打ち欠き、円形に加工。	2区土壙1264出土。
1206		円形で厚い大型。	平瓦を打ち欠き、円形に加工。側面を削り丸くする。	2区土壙1150出土。

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1207・1208	土鈴	球形の体部で、上部に円孔の付いたつまみあり。下部に鈴口あり。	つまみ外面はナデ。体部内面上部にしぼりあり。一方向から穿孔する。鈴口はヘラ切り。	1207は2箇所「人」形に墨書あり。いずれも2区土壌776出土。
1209		球形。	手捏ね成形。全体にナデ。	土鈴の土玉と推定。2区土壌320出土。
1210	硯	隅丸。上面は窪む。	須恵器甕体部を加工。下面はナデ、上面は同心円タタキのちナデ。側面を削る。	上面は使用により磨減。上面墨付着。2区柱穴1597出土。
1211～1214		風字硯。底部は平坦で、縁部は緩やかに屈曲する。1211は陸部の下面に脚あり。1213は上面に稜あり。	粘土板に縁部を接合して成形。縁部外面はケズリ、底部上下面はナデ。1211・1212は須恵器、1213・1214は灰釉陶器。	内面は使用により磨減。墨付着。1211は1区土壌1139、1212・1213は2区井戸2097、1214は2区第4面検出中出土。
1215・1216	罎	円筒形で先端はすぼまる。	棒を芯にして、手捏ね成形。外面はナデ。	表面はやや赤変する。先端に鉄滓付着。いずれも2区土壌2041出土。
1217～1225	鑄型	鏡の鑄型。馬蹄形で、中央に円孔あり。上下面は平坦で、側面は直立するが、ややふくらみをもつものあり。上下面に斜格子状の沈線がある。1219の沈線は片面のみである。	粘土板で成形。上下面はナデ、側面は横ナデ。円孔は一方向から穿孔し、1219・1220は斜めになる。沈線はヘラで刻む。円形部を上にして先に右上から左下方向に刻み、のちに左上から右下方向に刻む。上下面に真土を薄く塗る。1219・1220・1222・1225は真土が部分的にのこり、1223は銅滓が付着する。	表面は赤変する。1217・1221は2区土壌686、1218・1222は2区土壌753、1219は2区土壌645、1220は2区土壌661、1223は2区井戸1332、1224は2区土壌744、1225は2区土壌689出土。
1226・1227	取瓶	土師器皿を転用。1226は土師器大皿を2枚重ねる。1227は小型皿。	口縁部内外面は横ナデ。	堅く焼き締まり、表面に銅滓が付着。1226は2区土壌214、1227は1区土壌1087出土。
1228	埴埴	底部は平坦で、口縁部は屈曲して直線的に開く。端部は丸く収まる。	内外面共にオサエと推定。	外面に銅滓が付着。内面は剥離し黒く変色。1区土壌350出土。1/2片。

付表 52 石製品観察表（図版 40・41・110・111）

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1229	剥片石器	横長剥片。	打撃による成形。	安山岩。2区第4層出土。
1230	磨製石鏃	刃部は柳葉形で鏃が明瞭。茎部は長方形。	刃部は長軸方向に丁寧研磨。茎部は斜めに研磨。	粘板岩。2区土壌1022出土。
1231	磨製石斧	刃部は蛤形。稜は明瞭ではない。	基部は長軸方向に研磨。刃部は長軸直交方向に研磨。	蛇紋岩か。2区土壌753出土。
1232	紡錘車	円形で、中央に円孔あり。下面は平坦で、上面はややふくらみ、十字に溝あり。側面は直立し、刻み目あり。	全面に研磨する。	滑石。2区土壌1323出土。
1233	勾玉	頭部・尾部ほぼ同大。頭部に円孔あり。	全面に研磨する。一方向から穿孔する。	石材不詳。表面にひび割れあり。2区土壌944出土。
1234	石製銚具	丸柄。表裏は平坦で、側面はやや傾く。潜穴は中央に1箇所あり。やや大型。	全面に研磨し、表面は丁寧、側面・裏面はやや粗雑。	玉石。1区土壌393出土。
1235		巡方。表裏は平坦で、側面は直立。潜穴は隅部に1箇所あり。		蛇紋岩。2区土壌898出土。
1236	石帯残欠	ひずんだ直方体。	3面に擦り切り痕跡が残る。	碧玉。2区土壌1763出土。
1237	印章	方形で、裏面は平坦。表面は中央に4文字を配し、二重の圈線あり。厚さは不均一である。	表面は彫り込む。裏面は剥離。粗いケズリ。	粘板岩。上面一部に朱がのこる。文字不明。2区土壌776出土。

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1238・1239	砥石	1238 は柱状、1239 は板状で、表面は緩やかな凹面になる。	全体に打ち欠いて成形。1238 は使用面片面、1239 は表裏面を使用。	粘板岩。いずれも2区土壌776出土。
1240		四角形で、表裏両面に断面U字形の十字形溝がある。	全体にノミで粗く成形。溝は研磨による。	凝灰岩。1区土壌550出土。
1241・1242	硯残欠	底面は平坦で、側面は直立する。	側面は切れ目を入れたのち割る。側面にゆるやかな円弧を描く加工痕跡あり。	頁岩。1241 は2区土壌418、1242 は2区土壌204出土。
1243	硯	長方形で、3側面は直立し、立ち上がり部と脚部になる。上面は傾斜し、中央部ややふくらむ。	全面を削る。上面は研磨する。1246 は立ち上がり部上面に線刻で施紋。	頁岩。上面中央は使用により磨滅。墨痕跡あり。2区土壌1217出土。
1244		長円形で、底面平坦。側面は傾斜し、低い立ち上がり部となる。上面はややふくらむ。		粘板岩。上面中央は使用により磨滅。墨痕跡あり。1区土壌1209出土。
1245～1248		長方形で、底面平坦。側面は直立し、立ち上がり部となる。1246 は側面傾斜する。1248 は立ち上がり部が側面より内側にある。上面はややふくらみ、海部は窪む。		粘板岩。上面中央は使用により磨滅。墨痕跡あり。1245 は砥石に転用。1245 は1区土壌767、1246 は1区第2層、1247 は2区土壌776、1248 は2区土壌234出土。
1249	石鍋	体部は内湾気味に開き、口縁部やや立ち上がる。口縁部外面に鏝がある。	体部・口縁部内面は丁寧なケズリ、外面は横ケズリ。	滑石。外面に煤付着。内面に使用による傷あり。2区土壌1330出土。
1250	行火	楕円形。底部は平坦で、体部は直立し、口縁部外面は内傾する。口縁部内面長軸側に巾の狭い受部あり。	全面ケズリ。側面下方・底部外面は調整はやや粗い。	凝灰岩。1区土壌442出土。
1251・1252	石臼	上臼。下面は平坦で中心に円孔あり。下面に方向を違えて平行筋目がある。	下面は研磨。	砂岩。下面使用により磨滅。いずれも2区土壌831出土。
1253		下臼。受部は内湾気味に開き、端部は平坦面となる。底部中央部は窪む。	全面ケズリ。受部内面は平滑に仕上げ上げる。	砂岩。1区第1面検出中出土。
1254	石塔	方形。底面・側面は平坦で、上面に蓮弁あり。	全面ケズリ。	花崗岩。1区掘削中出土。
1255		方形で傘形。上面に円形窪みあり。		花崗岩。側面に梵字「𑖀」あり。1区石垣310出土。
1256		擬宝珠形。底部に円形の突起あり。		花崗岩。2区土壌1696出土。

付表 53 銀製品観察表 (図版 42)

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1261	銀銭	楕円形で半球状である。	不明。	重さ5g。緑青付着。2区土壌634出土。

付表 54 銅製品観察表 (原色図版 8・図版 42・43・112・113)

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1257	鏡	背面中央に半球状の紐あり。内区・外区を分ける界線があり段差になる。周縁は巾が狭く直立する。鏡面ややふくらむ。	鑄造品である。内区に鳥紋・花紋、外区に花紋を配し、紋様はやや不明瞭。鏡面は研磨して光沢がのこる。	2区井戸2098出土。
1258	筭	板状で、一方はすぼまり、他方は小さな匙形となる。側面は丸い。	鑄造品。	先端に銅色がのこる。2区井戸2098出土。
1259	耳搔	棒状で、一方は匙形となり、他方は立方体で円孔あり。	鑄造品。	1区土壌572出土。
1260	毛抜	大きく湾曲し、端部は内湾する。基部に外面に円孔の付いたつまみあり。	細長い板を折り曲げ、つまみを溶接する。薄い。	2区土壌1246出土。

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1262～ 1264	銅銭	円形で、中央に方形孔あり。	鋳造品。	1262は3枚重なる。いずれも2区土壌1314出土。
1265・ 1266	煙管雁首	筒部先端は湾曲し、端部に受部が付く。受部に穿孔あり。1265は基部に花紋あり。1266は基部が大きくなる。	筒部は銅板を斜めに巻いて成形。受部は溶接。1566は基部も溶接。	いずれも2区土壌776出土。
1267	煙管吸口	円筒形で、口部の先端はすぼまり、端部に段あり。	銅板を巻いて成形。	2区土壌1246出土。
1265・ 1266		円筒形で、口部はすぼまる。中位に段・刻み目があり、1269は八角形である。		1268は2区土壌776、1269は2区土壌1246出土。
1270	火箸状製品	断面丸い針金で、端部匙状になる。	不明。	2区土壌286出土。
1271	火箸	基部断面は六角形、先端部断面は円形。基部先端と中位に刻み目あり。	不明。	2区土壌287出土。
1272～ 1275		断面円形。基部先端に刻み目あり。		272は2区土壌204、1273・1274は2区土壌254、1275は2区土壌813出土。
1276	灰ならし状製品	板状で、一方が細くなる。	不明。	2区第2面検出中出土。
1277	灰ならし	断面四角形の棒先端に、扇形の板が付く。板中位に段あり。	板に穿孔し棒を孔に挿入し裏から留める。鍍金が部分的にのこる。	2区土壌286出土。
1278	把手	断面は円形で湾曲し、先端曲がる。	不明。	2区土壌1315出土。
1279		ねじった細板を湾曲し、端部に円孔あり。	不明。	2区土壌661出土。
1280	蓋	天井部は平坦で、口縁部は内湾気味に垂下する。両側に割り込みがある。天井部外面中央は盛り上がり、半球状のつまみあり。	天井部中央を穿孔し、つまみを裏から鉋で留める。天井部外面に花紋を線刻し、余白は魚々子で埋める。表面に鍍金。	2区土壌204出土。
1281	椀	体部は屈曲して直線的に開く。口縁部は外反し、端部は外側に肥厚して玉縁となる。	不明。	小破片。底部に鑿による切断痕あり。1区土壌769出土。
1282	皿	口縁部は緩やかに屈曲して直線的に開く。楕円孔のある把手あり。	不明。	内面に炭化物付着。2区土壌1145出土。
1283	燭台	円筒状で基部はふくらみ、3箇所に稜がある。中位両側に把手あり。	鋳造品。中子の砂がのこる。	1区掘削中出土。
1284	錘	半球形の体部。体部外面に鑄あり。つまみは欠損する。	鋳造品。つまみは接合。	約86g。1区土壌531出土。
1285		直方体で、角部に面取りあり。上部に円孔の付いたつまみあり。		約53g。2区土壌1248出土。
1286	不明銅製品	楕円筒形の基部で、先端は広がる。基部に楕円孔あり。	基部は銅板を巻き、先端は叩いてのばす。	2区土壌549出土。
1287	玉	球形。	不明。	1区井戸1003出土。
1288	軸鼻	円筒形で、端面はややふくらむ。	銅板を巻き、端部に円形の板をはめ込む。	2区土壌1217出土。
1289		ややすぼまる円筒形で、端面はややふくらむ。	銅板を巻き、端部に円形の板をはめ込む。釘で外から打ち付ける。	炭化した木質が残存する。2区第2層出土。
1290	鈴	扁平な体部に、円孔の付いたつまみあり。	体部に穿孔して、つまみをはめこみ、内側を折り曲げて固定する。	2区土壌136出土。
1291	針金	断面は円形で細い。一辺約2.5cmの方形の物体をほぼ4周縛っていた。端部は折り曲げて輪をつくる。	不明。	2区土壌1315出土。
1292		断面円形で太い。	不明。	2区土壌298出土。
1293	瓔珞	断面円形の針金をねじる。	不明。	2区土壌940出土。

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1294	瓔珞	長方形の板状で、両端に円孔あり。一方の孔に針金が付く。	片面鍍金。	1区土壙 49 出土。
1295		不整形の板状で、縁部が曲がる。中央部に稜あり。3箇所に円孔あり。	片面鍍金。	1区土壙 809 出土。
1296		半円形の板である。1箇所に円孔あり。	両面鍍金。	1区土壙 49 出土。
1297		三葉形の板である。3箇所に円孔あり。	片面鍍金。	1区土壙 49 出土。
1298	吊金具	断面は円形で、先端部は太くなり、尖る。	不明。	2区柱穴 678 出土。
1299		断面は長方形で、屈曲し先端は尖る。	不明。	2区土壙 298 出土。
1300		断面は円形の鉤形。先端は欠損。	不明。	2区土壙 776 出土。
1301		板状の鉤形。先端は尖る。	不明。	2区土壙 286 出土。
1302		断面は円形の鉤形。先端部は尖る。基部は環となる。	不明。	2区土壙 813 出土。
1303・1304	環金具	基部は環状、先端は尖る。	1303は断面半円形の板を折り曲げて、先端部を合わせる。環部に鍍金。	1303は2区土壙 1249、1304は2区第1層出土。
1305～1307	飾金具	細板状で、端部は宝珠形になる。表面はややふくらむ。釘孔あり。	表面に唐草紋を線刻し、余白は魚々子で埋める。表面に鍍金。	1305・1306は1区土壙 531、1307は1区土壙 1211 出土。
1308～1310	金具	細長い板状。1310は2箇所に円孔あり。	不明。	1308は2区土壙 661、1309は2区土壙 776、1310は2区土壙 1553 出土。
1311		長方形の板状で、端部は肥厚し玉縁状となる。	不明。	1区土壙 49 出土。
1312		方形で、一方は丸くなる。中央部に方形の穴あり。	不明。	裏面に木質が付着。2区土壙 634 出土。
1313		板状で一方は隅丸となる。厚い。	不明。	2区土壙 663 出土。
1314		板状で折れ曲がる。2箇所に円孔あり。	不明。	2区石室 235 出土。
1315		板状で、一辺が玉縁状になる。厚い。	玉縁は折り曲げて加工。	2区土壙 27 出土。
1316	引手金具	長方形の棒状で、周辺部は波形。	不明。	2区土壙 211 出土。
1317・1318	鍬	断面は二等辺三角形で、峰部は尖る。	銅板を曲げて成形。	1317は2区土壙 813、1318は2区土壙 234 出土。
1319・1320	切羽	楕円形の薄板で、中央に二等辺三角形の孔あり。	不明。	1319は1区土壙 572、1320は2区土壙 756 出土。
1321～1323	小柄	断面は二等辺三角形で、一方を平坦面で閉じる。	銅板を折り曲げて成形。底板を接合。1321は片面に鋸歯紋あり。1323は2箇所に凸帯・凹線あり。	1321は表面が磨滅する。1322・1323は先端に鉄錆付着。1321は2区土壙 287、1322は2区土壙 908、1323は2区土壙 380 出土。

付表 55 鉄製品観察表 (図 8)

遺物番号	種類	紋 様 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1324	鎌	曲刃鎌。基部は細くなり、円孔あり。断面は二等辺三角形。	不明。	1区土壙 274 出土。
1325・1326	包丁	先端は刀形で、基部は細くなる。断面は二等辺三角形。	不明。	1325は2区土壙 234、1326は2区土壙 776 出土。
1327	毛拔	大きく湾曲し、端部は内湾する。	細長い板を折り曲げる。	2区石室 235 出土。

遺物番号	種類	紋様の特徴	手法の特徴	備考
1328	環金具	基部は環状、先端は尖る。	断面長方形の板を折り曲げて、先端部を合わせる。	1区土壙 323 出土。
1329	鉄銭	円形で、中央に方形孔あり。	不明。	2区土壙 776 出土。

付表 56 骨角製品観察表 (図9・図版 44)

遺物番号	種類	紋様の特徴	手法の特徴	備考
1330	簪	断面は円形で、基部に凹線あり。先端は尖る。	側面に斜方向の切り込みを入れ、らせん状の凸線をつくる。	1区土壙 594 出土。
1331	櫛	背は半円形で高く盛り上がり、長辺に細かい櫛目あり。表面ややふくらむ。	全体ケズリ。櫛目は鋸で引く。	1区土壙 70 出土。
1332・1333	櫛払	断面は方形で、表面ややふくらむ。先端広がり櫛目あり。基部に円孔あり。	全体ケズリ。櫛目は鋸で引く。穿孔は一方から。	1332は1区土壙 415、1333は1区掘削中出土。
1334・1335	棹秤	断面は円形で、先端は尖る。3方に目盛あり。	全体ケズリ。目盛は縦に溝を付け、小孔を穿つ。	1334は2区土壙 908、1335は2区土壙 757 出土。
1336	さいころ	立方体。各面に目を付ける。	全体ケズリ。各面に小孔を穿つ。	1区土壙 392 出土。

付表 57 動植物遺体観察表 (図版 44)

遺物番号	種類	紋様の特徴	手法の特徴	備考
1337	鳥類	ガンカモ科カモ類。右鳥口骨。	激しいカットマークが遠位関節付近にみられる。	いずれも 2区土壙 1230 出土。
1338		ガンカモ科カモ類。左中手骨。	カットマーク不明。ほぼ完形、一部欠損。	
1339		ガンカモ科カモ類。左上腕骨。	カットマークあり。近位関節～内側に激しい。	
1340		ガンカモ科ガン類。左足根中足骨。	カットマーク不明。	
1341	両生類	カメ。第2又は第3腹甲板。	カットマーク多数あり。	
1342	貝類	アカガイ、フネガイ科の二枚貝。	殻の長さ 12cm、高さ 9cm、膨らみ 7.5cm。	
1343		ハイガイ、フネガイ科の二枚貝。	殻の長さ 5cm、高さ 4cm、膨らみ 3.5cm。	
1344		ハマグリ、マルスダレガイ科の二枚貝。	殻の長さ 8cm、高さ 6.5cm、膨らみ 3.5cm。	
1345		アカニシ、アクキガイ科の大型巻貝。	殻の高さ 20cm、太さ 16cm。	
1346		サザエ、リュウテンサザエ科の巻貝。	殻の高さ 10cm、太さ 8cm。	

付表 58 1区溝 1765 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	杯	32	20.4	70.4
	高杯	2	1.3	
	甕	111	70.7	
	不明	12	7.6	
	小計	157	100.0	
須恵器	杯	14	21.2	29.6
	杯蓋	19	28.8	
	壺・甕	33	50.0	
	小計	66	100.0	
総数		223		100.0

付表 59 2区土壙 2562 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	杯	23	17.7	48.7
	高杯	2	1.5	
	甕	98	75.4	
	不明	7	5.4	
	小計	130	100.0	
須恵器	杯	39	28.5	51.3
	杯蓋	3	2.2	
	杯底部	11	8.0	
	埴瓶	2	1.4	
	壺・甕	76	55.5	
	不明	6	4.4	
	小計	137	100.0	
総数		267		100.0

付表 60 2区土壙 2437 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	甕	61	92.4	100.0
	不明	5	7.6	
	小計	66	100.0	
総数		66		100.0

付表 61 2区土壙 2558 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	高杯	11	73.4	93.7
	甕	2	13.3	
	不明	2	13.3	
	小計	15	100.0	
	須恵器	杯蓋	1	
小計	1	100.0		
総数		16		100.0

付表 62 2区土壙 2434 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	高杯	9	64.3	87.5
	鍋	5	35.7	
	小計	14	100.0	
須恵器	杯	2	100.0	12.5
小計	2	100.0		
総数		16		100.0

付表 63 2区土壙 1730 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	143	82.2	72.5
	高杯	2	1.1	
	甕	29	16.7	
	小計	174	100.0	
須恵器	椀・杯	38	63.3	25.0
	壺・甕	22	36.7	
	小計	60	100.0	
灰釉陶器	皿	1	16.7	2.5
	壺	5	83.3	
	小計	6	100.0	
総数		240		100.0
その他	瓦	3		

付表 64 1区井戸 1421 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	520	63.3	65.6
	蓋	1	0.1	
	高杯	25	3.0	
	甕	202	24.6	
	甌	32	3.9	
	不明	42	5.1	
小計	822	100.0		
黒色土器	椀・杯	7	23.3	2.4
	甕	22	73.4	
	不明	1	3.3	
	小計	30	100.0	
須恵器	椀・杯	123	36.9	26.5
	蓋	11	3.3	
	壺・甕	198	59.5	
	不明	1	0.3	
	小計	333	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	13	54.2	1.9
	蓋	3	12.5	
	壺	8	33.3	
小計	24	100.0		
緑釉陶器	椀・皿	43	95.6	3.6
	火舎	2	4.4	
	小計	45	100.0	
総数		1,254		100.0
その他	瓦	32		
	土馬	1		
	鉄釘	4		
	焼壁	3		
	凝灰岩片	多量		

付表 65 2区土壙 2516 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	423	73.5	55.3
	高杯	35	6.1	
	甕	109	19.0	
	不明	8	1.4	
	小計	575	100.0	
白色土器	不明	7	100.0	0.7
	小計	7	100.0	
黒色土器	椀・杯	26	70.3	3.6
	甕	11	29.7	
	小計	37	100.0	
須恵器	椀・杯	62	22.8	26.1
	蓋	8	2.9	
	鉢	1	0.4	
	壺・甕	194	71.3	
	不明	7	2.6	
	小計	272	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	30	39.0	7.4
	蓋	3	3.9	
	壺	44	57.1	
	小計	77	100.0	
緑釉陶器	椀・皿	72	100.0	6.9
	小計	72	100.0	
総計		1040		100.0
その他	瓦	11		
	土馬	1		
	銅銭	9		
	焼土	3		

付表 66 2 区土壙 1965 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	334	81.1	59.6
	高杯	5	1.2	
	甕	73	17.7	
	小計	412	100.0	
黒色土器	椀・杯	14	87.5	2.3
	甕	2	12.5	
	小計	16	100.0	
須恵器	椀・杯	31	16.4	27.3
	蓋	3	1.6	
	鉢	7	3.7	
	壺・甕	148	78.3	
	小計	189	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	30	62.5	6.9
	壺	18	37.5	
	小計	48	100.0	
緑釉陶器	椀・杯	25	92.6	3.9
	蓋	1	3.7	
	壺	1	3.7	
	小計	27	100.0	
総数		692		100.0
その他	瓦	28		
	炭	1		

付表 67 2 区土壙 2543 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	219	89.0	61.5
	高杯	5	2.1	
	甕	22	8.9	
	小計	246	100.0	
白色土器	椀・皿	9	100.0	2.3
	小計	9	100.0	
黒色土器	椀・杯	27	41.5	16.2
	甕	38	58.5	
	小計	65	100.0	
須恵器	椀・杯	24	46.2	13.0
	蓋	1	1.9	
	鉢	1	1.9	
	壺・甕	25	48.1	
	不明	1	1.9	
	小計	52	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	13	54.2	6.0
	壺・甕	10	41.7	
	不明	1	4.1	
	小計	24	100.0	
緑釉陶器	椀・皿	4	100.0	1.0
	小計	4	10.0	
総計		400		100.0
その他	瓦	10		

付表 68 2 区土壙 2020 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	196	56.3	41.0
	高杯	25	7.2	
	甕・釜	125	35.9	
	不明	2	0.6	
	小計	348	100.0	
白色土器	椀・皿	6	85.7	0.8
	高杯	1	14.3	
	小計	7	100.0	
黒色土器	椀	11	31.4	4.1
	甕	10	28.6	
	不明	14	40.0	
	小計	35	100.0	
須恵器	椀・杯	29	9.0	38.0
	蓋	4	1.2	
	壺・甕	289	89.8	
	小計	322	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	55	67.9	9.6
	蓋	1	1.2	
	壺	25	30.9	
	小計	81	100.0	
緑釉陶器	椀・皿	54	98.2	6.5
	不明	1	1.8	
	小計	55	100.0	
総数		848		100.0
その他	瓦	55		

付表 69 2 区土壙 2471 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	176	68.2	63.7
	高杯	6	2.3	
	甕	72	27.9	
	不明	4	1.6	
	小計	258	100.0	
黒色土器	椀	13	100.0	3.2
	小計	13	100.0	
須恵器	椀・杯	21	20.2	25.7
	蓋	7	6.7	
	壺・甕	76	73.1	
	小計	104	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	16	80.0	4.9
	壺	4	20.0	
	小計	20	100.0	
緑釉陶器	椀・皿	10	100.0	2.5
	小計	10	100.0	
総数		405		100.0
その他	瓦	12		
	鉄製品	1		

付表 70 2 区土壙 2474 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	50	54.9	31.7
	高杯	2	2.2	
	甕	39	42.9	
	小計	91	100.0	
黒色土器	椀	3	60.0	1.8
	甕	2	40.0	
	小計	5	100.0	
須恵器	椀・杯	12	7.1	58.5
	蓋	2	1.2	
	鉢	10	6.0	
	壺・甕	143	85.1	
	不明	1	0.6	
小計	168	100.0		
灰釉陶器	椀・皿	6	54.5	3.8
	壺	5	45.5	
	小計	11	100.0	
緑釉陶器	椀・皿	9	75.0	4.2
	香炉	3	25.0	
	小計	12	100.0	
総数		287		100.0
その他	瓦	5		

付表 71 2 区井戸 2097 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	130	65.3	3.3
	高杯	24	12.1	
	甕	28	14.1	
	不明	17	8.5	
	小計	199	100.0	
白色土器	椀・皿	1	100.0	0.2
	小計	1	100.0	
黒色土器	椀	3	75.0	0.9
	甕	1	25.0	
	小計	4	100.0	
須恵器	椀・杯	26	15.9	35.6
	蓋	1	0.6	
	壺・甕	136	82.9	
	不明	1	0.6	
	小計	164	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	29	65.9	9.6
	壺	15	34.1	
	小計	44	100.0	
緑釉陶器	椀・皿	46	95.8	10.4
	壺	2	4.2	
	小計	48	100.0	
総数		460		100.0
その他	瓦	29		
	陶硯	2		

付表 72 1 区土壙 1435 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	椀・皿	62	79.5	68.4
	甕・釜	15	19.2	
	不明	1	1.3	
	小計	78	100.0	
黒色土器	椀	2	100.0	1.7
	小計	2	100.0	
須恵器	椀・杯	2	8.3	21.1
	壺・甕	22	91.7	
	小計	24	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	4	100.0	3.5
	小計	4	100.0	
緑釉陶器	椀・皿	5	100.0	4.4
	小計	5	100.0	
磁器	青磁椀・皿	1	100.0	0.9
	小計	1	100.0	
総数		114		100.0

付表 73 2 区土壙 1840 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	2	2.5	73.0
	大皿	16	19.8	
	不明口縁	4	4.9	
	屈曲皿	31	38.3	
	皿底部	20	24.7	
	甕	5	6.1	
	不明	3	3.7	
	小計	81	100.0	
白色土器	椀・皿	2	100.0	1.8
	小計	2	100.0	
須恵器	杯	1	10.0	9.0
	鉢	4	40.0	
	壺・甕	5	50.0	
	小計	10	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	3	60.0	4.5
	壺	2	40.0	
	小計	5	100.0	
磁器	白磁器・皿	11	84.6	11.7
	白磁壺	2	15.4	
	小計	13	100.0	
総数		111		100.0
その他	瓦	1		

付表 74 2 区土壙 1844 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	20	6.9	71.0
	大皿	50	17.2	
	不明口縁	7	2.4	
	屈曲皿	54	18.6	
	皿底部	123	42.2	
	高杯	7	2.4	
	甕	30	10.3	
	小計	291	100.0	
白色土器	椀・皿	8	100.0	2.0
	小計	8	100.0	
瓦器	椀	3	100.0	0.7
	小計	3	100.0	
須恵器	杯	6	7.5	19.5
	鉢	4	5.0	
	壺・甕	70	87.5	
	小計	80	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	14	63.6	5.3
	壺	8	36.4	
小計	22	100.0		
磁器	白磁椀・皿	5	83.3	1.5
	青磁椀・皿	1	16.7	
	小計	6	100.0	
総数		410		100.0
その他	瓦	78		
	輪羽口	1		
	砥石	1		

付表 75 2区土壙 1217 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	65	4.5	80.3
	大皿	357	24.9	
	不明口縁	21	1.5	
	屈曲皿	202	14.1	
	皿底部	790	55.0	
	小計	1435	100.0	
白色土器	椀・皿	5	27.8	1.0
	高杯	12	66.7	
	不明	1	5.5	
	小計	18	100.0	
瓦器	椀	5	100.0	0.3
	小計	5	100.0	
須恵器	鉢	19	9.3	11.4
	壺・甕	185	90.7	
	小計	204	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	33	46.5	4.0
	壺	38	53.5	
	小計	71	100.0	
磁器	白磁椀・皿	43	83.3	3.0
	白磁壺	6	11.1	
	青磁椀・皿	4	1.9	
	褐釉壺	2	3.7	
	小計	55	100.0	
総数		1788		100.0
その他	瓦	136		
	滑石鍋	1		
	鉄釘	5		

付表 76 2区土壙 1553 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	659	21.4	91.6
	大皿	475	15.4	
	不明口縁	223	7.2	
	屈曲皿	232	7.6	
	皿底部	1253	40.7	
	白小皿	54	1.8	
	白大皿	51	1.7	
	白不明口縁	10	0.3	
	白屈曲皿	25	0.8	
	白皿底部	77	2.5	
	椀	1	-	
	鉢	5	0.2	
	不明	13	0.4	
	小計	3078	100.0	
白色土器	椀・皿	58	54.2	3.2
	高杯	2	1.9	
	盤	3	2.8	
	壺	44	41.1	
	小計	107	100.0	
瓦器	椀	6	100.0	0.2
	小計	6	100.0	
須恵器	鉢	12	13.5	2.6
	壺・甕	77	86.5	
	小計	89	100.0	
灰釉陶器	椀・皿	10	58.8	0.5
	鉢	3	17.7	
	壺	4	23.5	
	小計	17	100.0	
磁器	白磁椀・皿	60	83.3	1.9
	白磁蓋	1	1.5	
	白磁合子	4	6.1	
	小計	65	90.9	
総数		3362		100.0
その他	瓦	25		
	砥石	3		
	銅金具	1		
	炭	多量		

付表 77 2区土壙 1990 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	157	28.3	96.7
	大皿	92	16.7	
	不明口縁	19	3.4	
	屈曲皿	3	0.5	
	受皿	3	0.5	
	皿底部	272	49.0	
	甕	9	1.6	
	小計	555	100.0	
須恵器	鉢	2	22.2	1.6
	壺・甕	7	77.8	
	小計	9	100.0	
灰釉系陶器	椀	1	25.0	0.7
	壺	3	75.0	
	小計	4	100.0	
磁器	白磁椀・皿	6	100.0	1.0
	小計	6	100.0	
総数		574		100.0
その他	瓦	35		

付表 78 2区土壙 1849 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	90	14.5	89.6
	大皿	50	8.0	
	不明口縁	49	7.9	
	受皿	5	0.8	
	皿底部	378	60.9	
	甕	49	7.9	
	小計	621	100.0	
白色土器	椀・皿	2	66.7	0.4
	高杯	1	33.3	
	小計	3	100.0	
須恵器	壺・甕	35	100.0	5.1
	小計	35	100.0	
灰釉系陶器	椀	3	15.8	2.7
	鉢	16	84.2	
	小計	19	100.0	
磁器	白磁椀・皿	13	86.6	2.2
	青磁椀・皿	1	6.7	
	不明	1	6.7	
	小計	15	100.0	
総数		693		100.0
その他	瓦	233		
	砥石	1		
	焼壁 炭	1 1		

付表 79 2区土壙 1039 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	66	17.0	88.4
	大皿	96	24.7	
	不明口縁	38	9.8	
	受皿	7	1.8	
	皿底部	181	46.5	
	白受皿	1	0.2	
	小計	389	100.0	
白色土器	椀・皿	2	28.6	1.6
	高杯	5	71.4	
	小計	7	100.0	
瓦器	椀	13	100.0	3.0
	小計	13	100.0	
須恵器	鉢	1	4.8	4.8
	甕	20	95.2	
	小計	21	100.0	
灰釉系陶器	椀	5	100.0	1.1
	小計	5	100.0	
磁器	白磁椀・皿	1	20.0	1.1
	青磁椀・皿	2	40.0	
	褐釉壺	2	40.0	
	小計	5	100.0	
総数		440		100.0
その他	瓦	65		
	鉄釘	1		
	焼壁	1		

付表 80 2区土壙 1851 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	白小皿	15	0.1	99.4
	赤小皿	3,770	21.5	
	赤大皿	2,286	13.0	
	赤不明口縁	517	3.0	
	赤受皿	565	3.2	
	赤皿底部	10,326	58.9	
	白小皿	2	-	
	白大皿	1	-	
	甕	29	0.2	
	不明	19	0.1	
	小計	17,530	100.0	
白色土器	椀・皿	9	100.0	-
	小計	9	100.0	
瓦器	椀	8	100.0	-
	小計	8	100.0	
須恵器	鉢	4	6.3	0.4
	壺・甕	59	93.7	
	小計	63	100.0	
灰釉系陶器	椀	12	92.3	0.1
	不明	1	7.7	
	小計	13	100.0	
磁器	白磁椀・皿	14	63.6	0.1
	白磁壺	2	9.1	
	青磁椀・皿	6	27.3	
	小計	22	100.0	
総数		17,645		100.0
その他	瓦	687		
	砥石	1		
	鉄釘 炭	2 2		

付表 81 1区土壙 1361 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	66	100.0	100.0
	小計	66	100.0	
総数		66		100.0

付表 82 2区土壙 1354 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	55	94.8	98.3
	不明	3	5.2	
	小計	58	100.0	
瓦器	壺	1	100.0	1.7
	小計	1	100.0	
総数		59		100.0
その他	瓦	6		
	銅銭	1		

付表 83 2区土壙 1362 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	3	100.0	50.0
	小計	3	100.0	
瓦器	壺	3	100.0	50.0
	小計	3	100.0	
総数		6		100.0

付表 84 1区土壙 550 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	310	19.0	95.3
	大皿	299	18.3	
	不明口縁	115	7.1	
	受皿	14	0.9	
	底部	845	51.8	
	甕	40	2.5	
	不明	7	0.4	
小計	1,630	100.0		
白色土器	椀・皿	4	66.7	0.4
	高杯	2	33.3	
	小計	6	100.0	
瓦器	椀	5	62.5	0.5
	鍋・釜	3	37.5	
	小計	8	100.0	
須恵器	鉢	28	70.0	2.3
	甕	12	30.0	
	小計	40	100.0	
焼締陶器	甕	3	100.0	0.2
	小計	3	100.0	
灰釉系陶器	椀	2	100.0	0.1
	小計	2	100.0	
磁器	白磁椀・皿	16	76.2	1.2
	青磁椀・皿	3	14.3	
	青白磁壺	1	9.5	
	小計	20	100.0	
総数		1,709		100.0
その他	瓦	59		
	鉄釘	1		
	焼壁	1		
	炭	11		

付表 85 1 区土壌 1477 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	691	16.9	99.6
	大皿	733	17.9	
	不明口縁	229	5.6	
	受皿	87	2.1	
	皿底部	2350	57.3	
	不明	9	0.2	
	小計	4099	100.0	
白色土器	椀・皿	1	50.0	-
	高杯	1	50.0	
	小計	2	100.0	
瓦器	鍋・釜	6	100.0	0.2
	小計	6	100.0	
須恵器	甕	4	100.0	0.1
	小計	4	100.0	
磁器	白磁椀・皿	4	100.0	0.1
	小計	4	100.0	
総数		4,115		100.0
その他	瓦	21		
	鉄釘	2		

付表 86 2 区土壌 1994 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	103	27.2	91.6
	赤大皿	85	22.4	
	赤不明口縁	3	0.8	
	赤受皿	17	4.5	
	赤皿底部	156	41.1	
	白小皿	4	1.1	
	白大皿	2	0.5	
	白皿底部	5	1.3	
	不明	4	1.1	
	小計	379	100.0	
白色土器	椀・皿	2	100.0	0.5
	小計	2	100.0	
瓦器	椀	2	40.0	1.2
	火鉢	3	60.0	
	小計	5	100.0	
須恵器	甕	21	100.0	5.0
	小計	21	100.0	
灰釉系陶器	椀	1	83.3	0.5
	鉢	1	16.7	
	小計	2	100.0	
磁器	白磁椀・皿	5	100.0	1.2
	小計	5	100.0	
総数		414		100.0
その他	瓦	54		

付表 87 2 区土壌 940 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	42	3.4	92.4
	赤大皿	143	11.6	
	赤不明口縁	43	3.5	
	赤皿底部	250	20.2	
	白小皿	103	8.3	
	白大皿	294	23.8	
	白不明口縁	15	1.2	
	白受皿	1	0.1	
	白皿底部	344	27.9	
	小計	1,235	100.0	
白色土器	椀・皿	2	100.0	0.1
	小計	2	100.0	
瓦器	椀	34	69.4	3.7
	鍋・釜	12	24.5	
	火鉢	3	6.1	
	小計	49	100.0	
須恵器	鉢	6	28.6	1.6
	甕	15	71.4	
	小計	21	100.0	
焼締陶器	甕	13	100.0	1.0
	小計	13	100.0	
磁器	白磁椀・皿	9	52.9	1.2
	青磁椀・皿	6	35.3	
	青磁壺	1	5.9	
	褐釉壺	1	5.9	
	小計	17	100.0	
総数		1,337		100.0
その他	瓦	65		
	磚	1		
	鉄滓	10		

付表 88 2 区土壌 2023 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	60	1.5	98.7
	赤大皿	597	14.5	
	赤不明口縁	127	3.1	
	赤皿底部	807	19.6	
	白小皿	408	9.9	
	白大皿	482	11.7	
	白不明口縁	208	5.0	
	白受皿	6	0.1	
	白皿底部	1415	34.4	
	釜	3	0.1	
	不明	5	0.1	
	小計	4,118	100.0	
	白色土器	椀・皿	1	
蓋		1	50.0	
小計		2	100.0	
瓦器	椀	4	14.3	0.7
	鍋・釜	13	46.4	
	火鉢	11	39.3	
	小計	28	100.0	
須恵器	甕	1	100.0	-
	小計	1	100.0	
焼締陶器	甕	2	100.0	-
	小計	2	100.0	
灰釉系陶器	椀	14	100.0	0.4
	小計	14	100.0	
磁器	白磁椀・皿	4	57.1	0.2
	青磁椀・皿	2	28.6	
	青白磁椀	1	14.3	
	小計	7	100.0	
総数		4,172		100.0
その他	瓦	16		
	滑石破片	1		
	鉄釘	9		
	焼土	1		
	炭	1		

付表 89 2区溝 1319 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	239	2.3	98.4
	赤大皿	509	5.0	
	赤不明口縁	194	1.9	
	赤皿底部	1,363	13.3	
	白小皿	721	7.0	
	白大皿	2,811	27.4	
	白不明口縁	46	0.4	
	白受皿	3	-	
	白皿底部	4,356	42.4	
	甕	9	0.1	
	不明	15	0.2	
	小計	10,266	100.0	
白色土器	椀・皿	1	11.1	0.1
	高杯	6	66.7	
	不明	2	22.2	
	小計	9	100.0	
瓦器	椀	38	48.1	0.8
	鍋・釜	36	45.6	
	火鉢	5	6.3	
	小計	79	100.0	
須恵器	鉢	6	17.1	0.3
	甕	29	82.9	
	小計	35	100.0	
焼締陶器	甕	7	100.0	0.1
	小計	7	100.0	
灰釉系陶器	椀	11	100.0	0.1
	小計	11	100.0	
磁器	白磁椀・皿	19	79.1	0.2
	青磁椀・皿	3	12.5	
	青白磁椀	1	4.2	
	褐釉壺	1	4.2	
	小計	24	100.0	
総数		10,431		100.0
その他	瓦	124		
	砥石	1		
	銅製品	1		
	鉄釘	5		
	鉄製品	3		
	炭	7		

付表 90 2区土壙 1442 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)		
土師器	赤小皿	170	2.6	97.0	
	赤大皿	1,406	20.9		
	赤皿底部	769	11.5		
	白小皿	619	9.2		
	白大皿	2,252	33.5		
	白受皿	8	0.1		
	白耳皿	1	-		
	白皿底部	1,467	21.8		
	釜	15	0.2		
	不明	13	0.2		
	小計	6,720	100.0		
	白色土器	椀・皿	6		42.9
高杯		8	57.1		
小計		14	100.0		
瓦器	椀	20	22.7	1.3	
	鍋・釜	45	51.2		
	火鉢	23	26.1		
	小計	88	100.0		
須恵器	鉢	9	20.5	0.6	
	甕	35	79.5		
	小計	44	100.0		
焼締陶器	甕	32	100.0	0.5	
	小計	32	100.0		
灰釉系陶器	椀	6	60.0	0.1	
	鉢	4	40.0		
	小計	10	100.0		
磁器	白磁椀・皿	6	26.1	0.3	
	青磁椀・皿	10	43.5		
	青磁壺	2	8.8		
	青白磁皿	1	4.3		
	青白磁合子	1	4.3		
	褐釉壺	3	13.0		
	小計	23	100.0		
総数		6,931		100.0	
その他	瓦	278			
	磚	1			
	砥石	9			
	石鍋	2			
	鉄製品	39			
	焼壁	多数			
	炭	多数			

付表 91 2 区土壙 1330 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	79	2.2	97.7
	赤大皿	212	6.0	
	赤不明口縁	35	1.0	
	赤皿底部	283	8.0	
	白小皿	521	14.7	
	白大皿	1,127	31.8	
	白不明口縁	251	7.1	
	白受皿	3	0.1	
	白皿底部	1,029	29.1	
	小計	3,540	100.0	
白色土器	椀・皿	7	63.6	0.3
	高杯	4	36.4	
	小計	11	100.0	
瓦器	椀	12	31.6	1.0
	鍋・釜	16	42.1	
	火鉢	10	26.3	
	小計	38	100.0	
須恵器	鉢	7	46.7	0.4
	甕	8	53.3	
	小計	15	100.0	
焼締陶器	甕	5	100.0	0.1
	小計	5	100.0	
灰釉系陶器	椀	2	66.7	0.1
	鉢	1	33.3	
	小計	3	100.0	
磁器	白磁椀・皿	5	38.4	0.4
	青磁椀・皿	2	15.4	
	青磁壺	1	7.7	
	青白磁壺	2	15.4	
	緑釉合子	3	23.1	
	小計	13	100.0	
総数		3,625		100.0
その他	瓦	395		
	石鍋	2		
	砥石	1		
	鉄釘	3		
	焼壁	1		

付表 92 2 区土壙 699 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	51	0.8	99.0
	赤大皿	254	4.3	
	赤不明口縁	211	3.6	
	赤皿底部	566	9.6	
	白小皿	643	10.9	
	白大皿	1,355	22.9	
	白不明口縁	325	5.5	
	白皿底部	2,499	42.3	
	不明	9	0.1	
	小計	5913	100.0	
	瓦器	椀	7	
鍋・釜		26	70.3	
火鉢		4	10.8	
小計		37	100.0	
須恵器	甕	5	100.0	0.1
	小計	5	100.0	
焼締陶器	甕	15	100.0	0.2
	小計	15	100.0	
磁器	白磁椀・皿	5	83.3	0.1
	青磁椀・皿	1	16.7	
	小計	6	100.0	
総数		5,976		100.0
その他	瓦	44		
	砥石	1		
	鉄釘	7		
	炭	多量		

付表 93 2 区土壙 1975 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	110	3.7	96.2
	赤大皿	651	21.5	
	赤不明口縁	78	2.6	
	赤皿底部	668	22.1	
	白小皿	125	4.1	
	白大皿	709	23.5	
	白皿底部	675	22.3	
	不明	7	0.2	
	小計	3,023	100.0	
	瓦器	鍋・釜	16	
火鉢		11	31.4	
甕		8	22.9	
須恵器	鉢	5	45.5	0.4
	甕	6	54.5	
	小計	11	100.0	
	焼締陶器	甕	54	
不明	6	10.0		
小計	60	100.0		
灰釉系陶器	椀	4	80.0	0.1
	鉢	1	20.0	
	小計	5	100.0	
施釉陶器	鉢	1	33.3	0.1
	不明	2	66.7	
	小計	3	100.0	
磁器	白磁椀・皿	1	14.3	0.2
	青磁椀・皿	4	57.1	
	青磁壺	1	14.3	
	青白磁合子	1	14.3	
	小計	7	100.0	
総数		3,144		100.0
その他	瓦	169		
	砥石	2		
	鉄釘	1		

付表 94 2 区土壙 1870 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	26	2.4	90.1
	赤大皿	244	22.5	
	赤不明口縁	45	4.1	
	赤皿底部	116	10.7	
	白小皿	59	5.5	
	白大皿	173	16.0	
	白不明口縁	13	1.2	
	白皿底部	171	15.8	
	皿不明底部	236	21.8	
	小計	1,083	100.0	
瓦器	鍋・釜	32	88.9	3.0
	火鉢	4	11.1	
	小計	36	100.0	
須恵器	鉢	3	30.0	0.8
	甕	7	70.0	
	小計	10	100.0	
焼締陶器	甕	21	100.0	1.8
	小計	21	100.0	
施釉陶器	椀・皿	1	2.1	4.0
	壺	47	97.9	
	小計	48	100.0	
磁器	青磁椀・皿	2	50.0	0.3
	青白磁壺	2	50.0	
	小計	4	100.0	
総数		1,202		100.0
その他	瓦	79		

付表 95 2区土壙 1176 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	4	0.6	94.1
	赤大皿	34	5.2	
	赤不明口縁	15	2.3	
	白小皿	36	5.5	
	白中皿	114	17.4	
	白大皿	174	26.6	
	白不明口縁	56	8.5	
	白血底部	222	33.9	
	小計	655	100.0	
瓦器	鍋・釜	1	33.3	0.5
	火鉢	1	33.3	
	甕	1	33.3	
	小計	3	99.9	
焼締陶器	甕	30	100.0	4.3
	小計	30	100.0	
施釉陶器	椀・皿	7	100.0	1.0
	小計	7	100.0	
磁器	青磁壺	1	100.0	0.1
	小計	1	100.0	
総数		696		100.0
その他	瓦	28		

付表 96 2区土壙 1922 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤大皿	1	0.1	99.6
	赤皿底部	1	0.1	
	白小皿	82	9.2	
	白中皿	177	19.8	
	白大皿	224	25.0	
	白不明口縁	52	5.8	
	白血底部	358	40.0	
	小計	895	100.0	
瓦器	鍋・釜	2	50.0	0.4
	火鉢	2	50.0	
	小計	4	100.0	
総数		899		100.0
その他	瓦	9		
	銅銭	2		

付表 97 2区井戸 2098 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤大皿	1	0.3	97.0
	赤皿底部	3	0.8	
	白小皿	36	10.2	
	白中皿	45	12.7	
	白大皿	69	19.5	
	白不明口縁	38	10.7	
	白血底部	162	45.8	
	小計	354	100.0	
瓦器	不明	1	100.0	0.3
	小計	1	100.0	
須恵器	鉢	2	100.0	0.5
	小計	2	100.0	
焼締陶器	甕	5	100.0	1.4
	小計	5	100.0	
施釉陶器	壺	1	100.0	0.3
	小計	1	100.0	
磁器	青磁椀・皿	2	100.0	0.5
	小計	2	100.0	
総数		365		100.0
その他	瓦	14		
	銅鏡	2		
	筭	1		
	鉄釘	14		
	木片	5		

付表 98 2区土壙 1148 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤小皿	9	0.3	96.5
	赤大皿	69	2.6	
	赤皿底部	25	0.9	
	白小皿	190	7.3	
	白中皿	358	13.7	
	白大皿	620	23.7	
	白不明口縁	131	5.0	
	白受皿	5	0.2	
	白血底部	1,214	46.3	
	小計	2,621	100.0	
瓦器	鍋・釜	23	65.7	1.3
	火鉢	8	22.9	
	不明	4	11.4	
	小計	35	100.0	
須恵器	鉢	3	23.1	0.5
	甕	10	76.9	
	小計	13	100.0	
焼締陶器	甕	30	100.0	1.1
	小計	30	100.0	
施釉陶器	椀・皿	4	33.3	0.4
	壺	8	66.7	
	小計	12	100.0	
磁器	青磁椀・皿	3	75.0	0.2
	青花椀	1	25.0	
	小計	4	100.0	
総計		2,715		100.0
その他	瓦	91		
	磚	1		
	砥石	2		
	鉄釘	1		
	焼壁	2		

付表 99 2区土壙 136 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	赤大皿	9	0.6	98.2
	白小皿	168	11.2	
	白中皿	396	26.3	
	白大皿	394	26.2	
	白不明口縁	18	1.2	
	白血底部	518	34.5	
	小計	1,503	100.0	
瓦器	鍋・釜	1	5.9	1.1
	火鉢	16	94.1	
	小計	17	100.0	
焼締陶器	甕	2	100.0	0.1
	小計	2	100.0	
施釉陶器	椀・皿	6	85.7	0.5
	鉢	1	14.3	
磁器	褐釉盤	1	100.0	0.1
	小計	1	100.0	
総数		1,530		100.0
その他	瓦	25		
	砥石	1		
	銅鈴	1		
	鉄釘	5		

付表 100 2区土壌 1782 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	赤小皿	117	1.2	99.5
	赤大皿	150	1.5	
	赤不明口縁	62	0.6	
	赤皿底部	257	2.5	
	白小皿	306	3.0	
	白中皿	2,012	19.8	
	白大皿	1,392	13.7	
	白不明口縁	244	2.4	
	白受皿	25	0.3	
	白耳皿	7	-	
	白皿底部	5,582	55.0	
	小計	10,154	100.0	
瓦器	銅・釜	30	65.2	0.5
	火鉢	15	32.6	
	甕	1	2.2	
	小計	46	100.0	
施釉陶器	椀・皿	1	50.0	-
	不明	1	50.0	
	小計	2	100.0	
磁器	白磁椀・皿	3	42.8	-
	青磁椀・皿	2	28.6	
	褐釉盤	1	14.3	
	褐釉壺	1	14.3	
小計	7	100.0		
総数		10,209		100.0
その他	瓦	45		
	磚	3		
	銅銭	1		
	鉄釘	多量		
	炭	2		

付表 101 1区土壌 353 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)		
土師器	小皿	341	11.4	78.3	
	中皿	646	21.7		
	大皿	679	22.8		
	不明口縁	371	12.5		
	皿底部	776	26.1		
	鍋・釜	144	4.8		
	小型壺	2	0.1		
	焼塩壺	18	0.6		
	小計	2,977	100.0		
	瓦器	鉢	3		4.7
火鉢		26	40.6		
蓋		8	12.5		
灯火具		22	34.4		
甕		5	7.8		
小計	64	100.0			
焼締陶器	鉢	133	59.1	5.9	
	盤	4	1.8		
	壺	41	18.2		
	甕	39	17.3		
	不明	8	3.6		
小計	225	100.0			
施釉陶器	椀	259	55.0	12.4	
	皿	87	18.5		
	鉢	98	20.8		
	蓋	1	0.2		
	壺	26	5.5		
	小計	471	100.0		
磁器	青花椀	50	76.9	1.7	
	青花皿	14	21.6		
	盤	1	1.5		
	小計	65	100.0		
総数		3,802		100.0	
その他	瓦	162			
	磚	1			
	土鈴	1			
	硯	2			
	砥石	17			
	銅銭	2			
	煙管	1			
	鉄釘	多量			
	貝殻	1			
	焼壁	4			

付表 102 1 区土壙 768 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	200	8.7	74.3
	中皿	308	13.5	
	大皿	749	32.7	
	不明口縁	95	4.1	
	皿底部	643	28.1	
	椀	4	0.2	
	鍋・釜	255	11.2	
	小型壺	6	0.3	
	焼塩壺	28	1.2	
	小計	2,288	100.0	
瓦器	釜	22	13.3	5.4
	火鉢	111	66.9	
	灯火具	17	10.2	
	壺	16	9.6	
小計	166	100.0		
焼締陶器	鉢	82	64.6	4.1
	盤	7	5.5	
	壺	25	19.7	
	甕	13	10.2	
小計	127	100.0		
施釉陶器	椀	279	60.8	14.9
	皿	49	10.7	
	鉢	109	23.7	
	灯火具	3	0.7	
	壺	17	3.7	
	把手	1	0.2	
	人形	1	0.2	
小計	459	100.0		
磁器	青花椀	38	92.7	1.3
	青花皿	3	7.3	
	小計	41	100.0	
総数		3,081		100.0
その他	瓦	443		
	取瓶	3		
	砥石	18		
	煙管	3		
	鉄釘	18		
	鉄滓	8		
	焼壁	10		
	炭	27		

付表 103 2 区土壙 776 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	
土師器	小皿	80	5.7	61.2
	中皿	189	13.4	
	大皿	515	36.5	
	特大皿	17	1.2	
	不明口縁	100	7.1	
	皿底部	275	19.5	
	鍋・釜	189	13.3	
	型皿	1	0.1	
	小型壺	20	1.4	
	焼塩壺	26	1.8	
小計	1,412	100.0		
瓦器	火鉢	91	40.8	9.7
	十能	2	0.9	
	蓋	25	11.2	
	灯火具	19	8.5	
	甕	7	3.2	
	不明	79	35.4	
小計	223	100.0		
焼締陶器	鉢	105	50.7	9.0
	盤	2	1.0	
	壺	60	29.0	
	甕	40	19.3	
小計	207	100.0		
施釉陶器	椀	175	48.2	15.7
	皿	80	22.0	
	鉢	87	24.0	
	壺	21	5.8	
	小計	363	100.0	
磁器	伊万里椀	21	20.8	4.4
	伊万里皿	2	2.0	
	青磁椀	1	1.0	
	青花椀	62	61.4	
	青花皿	15	14.8	
	小計	101	100.0	
総数		2,306		100.0
その他	瓦	67		
	おはじき	2		
	土鈴	4		
	埴埴	2		
	石製印章	1		
	硯	3		
	砥石	16		
	銅銭	19		
	煙管	11		
	切羽	1		
	銅金具	13		
	包丁	1		
	鉄銭	1		
	鉄鍋	1		
	鉄釘	29		
	不明鉄製品	27		
	貝殻	少量		
	漆器椀	少量		
	焼壁	2		
	炭	少量		

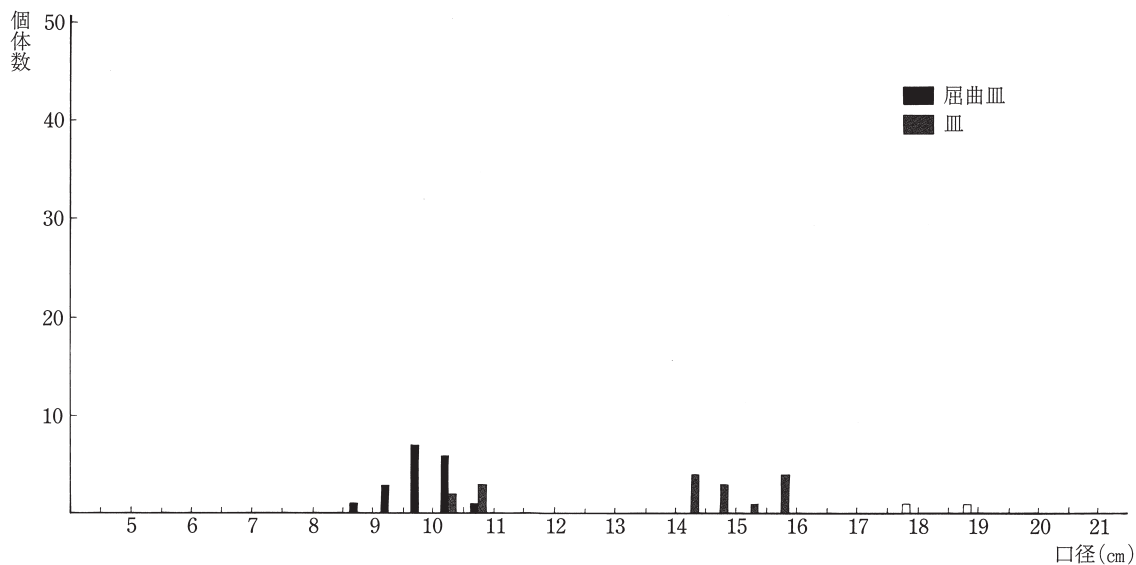
付表 104 2区土壙 813 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	小皿	278	8.6	82.3
	中皿	362	11.2	
	大皿	1,175	36.3	
	不明口縁	871	26.9	
	皿底部	146	4.5	
	椀	19	0.6	
	鍋・釜	276	8.5	
	小型壺	9	0.3	
	焼塩壺	79	2.5	
	不明	18	0.6	
	小計	3,233	100.0	
瓦器	鉢	2	2.2	2.3
	火鉢	4	4.3	
	灯火具	51	54.8	
	壺	36	38.7	
小計	93	100.0		
焼締陶器	鉢	87	69.6	3.2
	盤	4	3.2	
	壺	14	11.2	
	甕	15	12.0	
	不明	5	4.0	
小計	125	100.0		
施釉陶器	椀	151	50.7	7.6
	皿	47	15.8	
	鉢	82	27.5	
	壺	18	6.0	
小計	298	100.0		
磁器	伊万里椀	44	24.5	4.6
	伊万里盤	1	0.6	
	伊万里壺	4	2.2	
	青花椀	114	63.3	
	青花皿	6	3.3	
	青花鉢	7	3.9	
	青花蓋	4	2.2	
小計	180	100.0		
総計		3,929		100.0
その他	瓦	101		
	磚	1		
	埴埴	2		
	鞆羽口	25		
	硯	4		
	砥石	8		
	銅銭	3		
	煙管	5		
	銅金具	2		
	銅針金	5		
	鉄釘	66		
	不明鉄製品	7		
	鉄滓	60		
	馬歯	9		
	貝殻	多量		
	焼壁	27		
炭	多量			

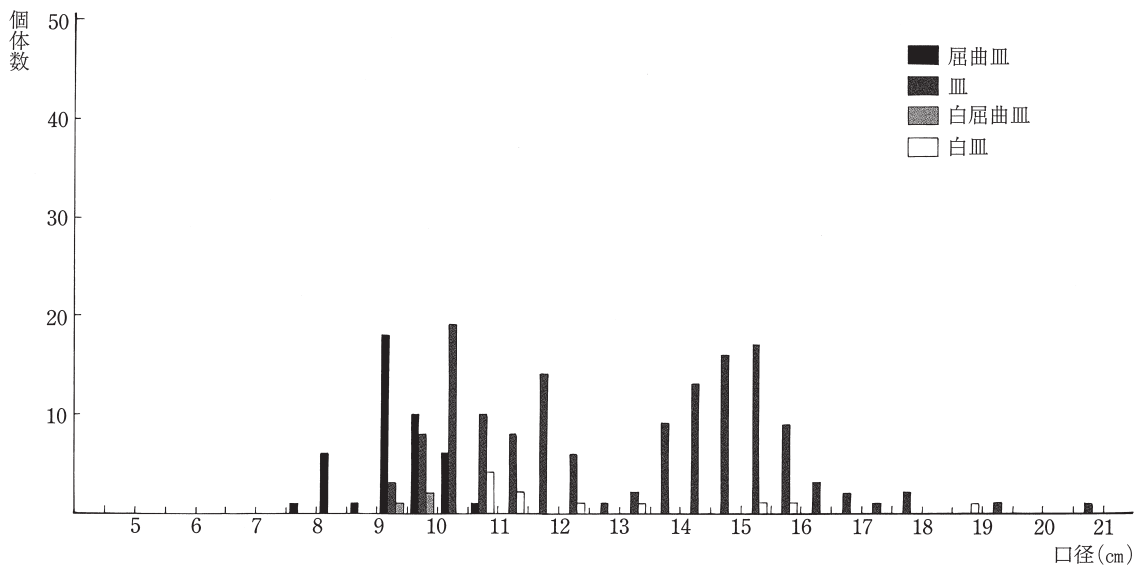
付表 105 1区土壙 190 出土遺物破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)	
土師器	小皿	167	28.1	54.7
	中皿	31	5.2	
	大皿	228	38.4	
	不明口縁	15	2.5	
	皿底部	77	13.0	
	椀	8	1.3	
	鍋	42	7.1	
	小型壺	2	0.3	
	壺	23	3.9	
	焼塩壺	1	0.2	
	小計	594	100.0	
瓦器	火鉢	13	41.9	2.8
	灯火具	18	58.1	
	小計	31	100.0	
焼締陶器	鉢	80	67.8	10.9
	壺	15	12.7	
	甕	23	19.5	
小計	118	100.0		
施釉陶器	椀	66	47.2	12.9
	皿	7	5.0	
	鉢	31	22.1	
	壺	36	25.7	
小計	140	100.0		
磁器	伊万里椀	139	68.5	18.7
	伊万里皿	22	10.8	
	伊万里高杯	2	1.0	
	伊万里鉢	24	11.8	
	伊万里壺	7	3.4	
	伊万里蓋	5	2.5	
	青花椀	4	2.0	
小計	203	100.0		
総計		1,086		100.0
その他	土人形	3		
	砥石	3		
	鉄釘	4		
	不明鉄製品	2		
	骨	1		
貝殻	1			

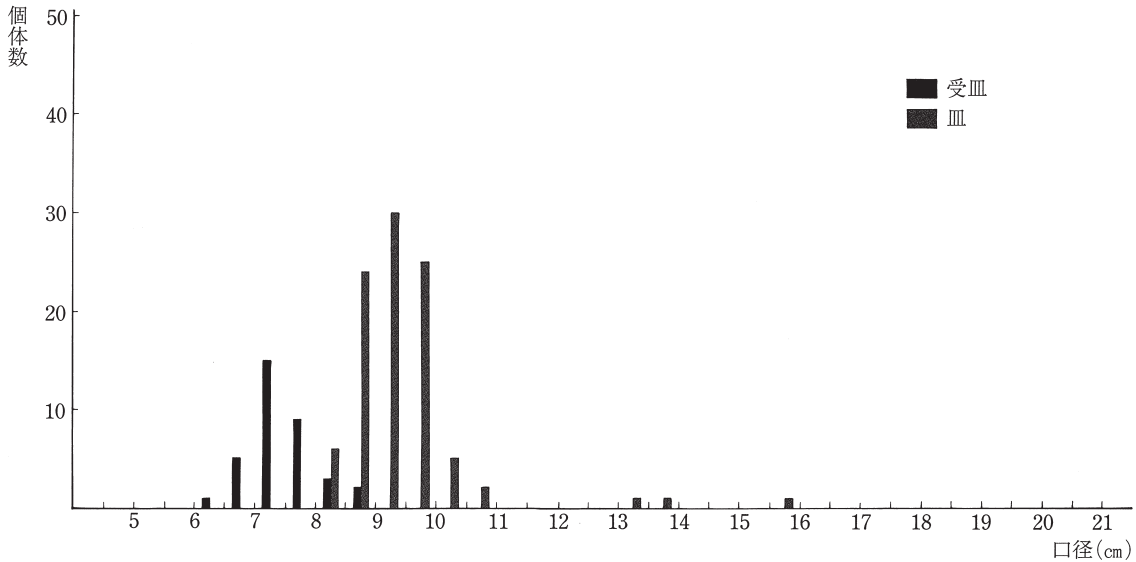
付表 106 2区土壌 1217 土師器類口径分布表



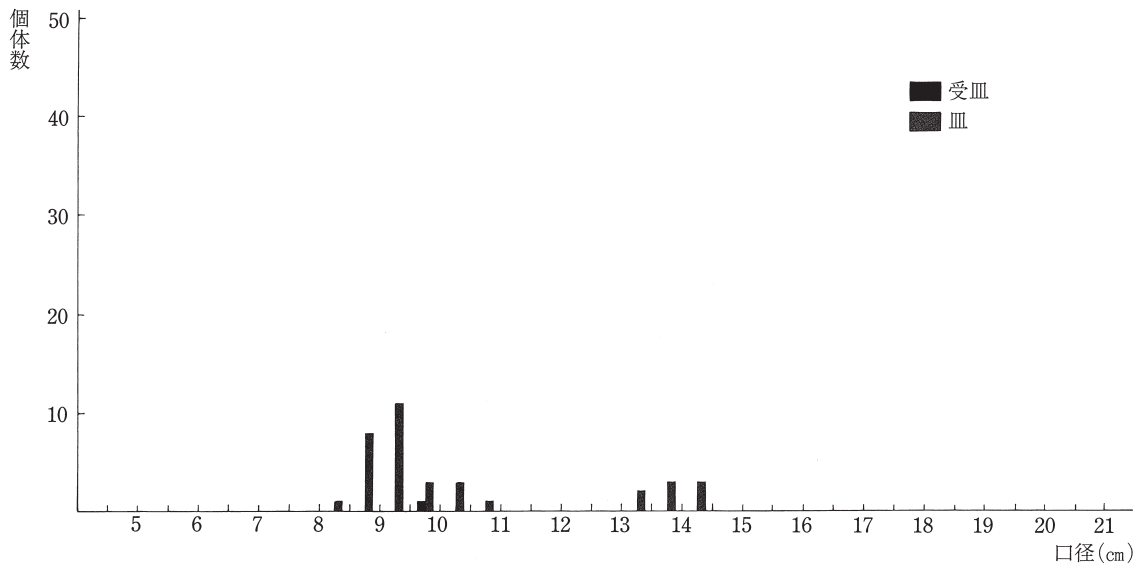
付表 107 2区土壌 1553 土師器類口径分布表



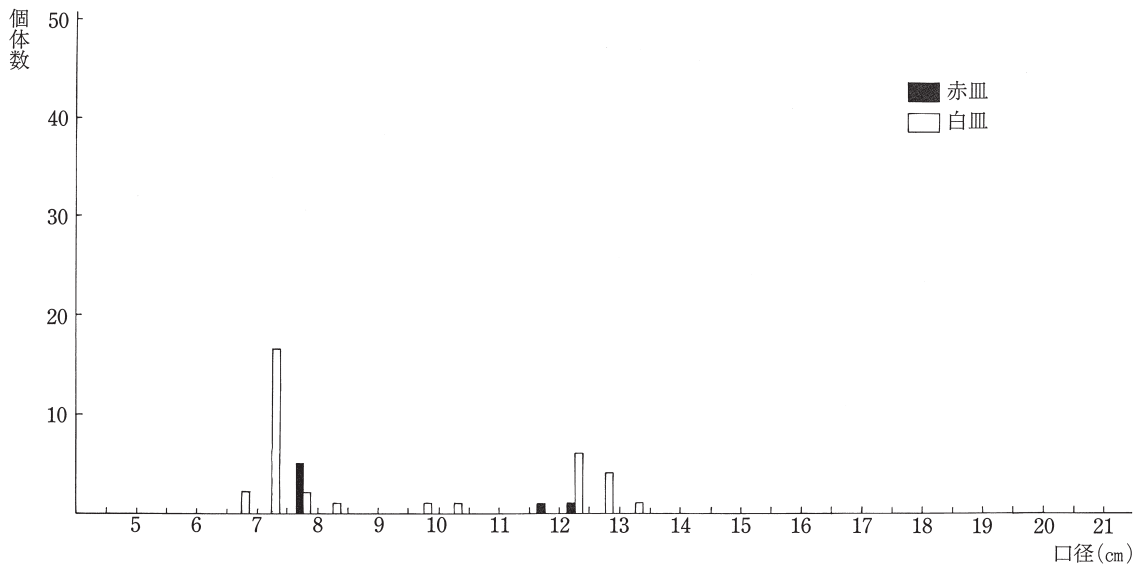
付表 108 2区土壌 1851 土師器類口径分布表



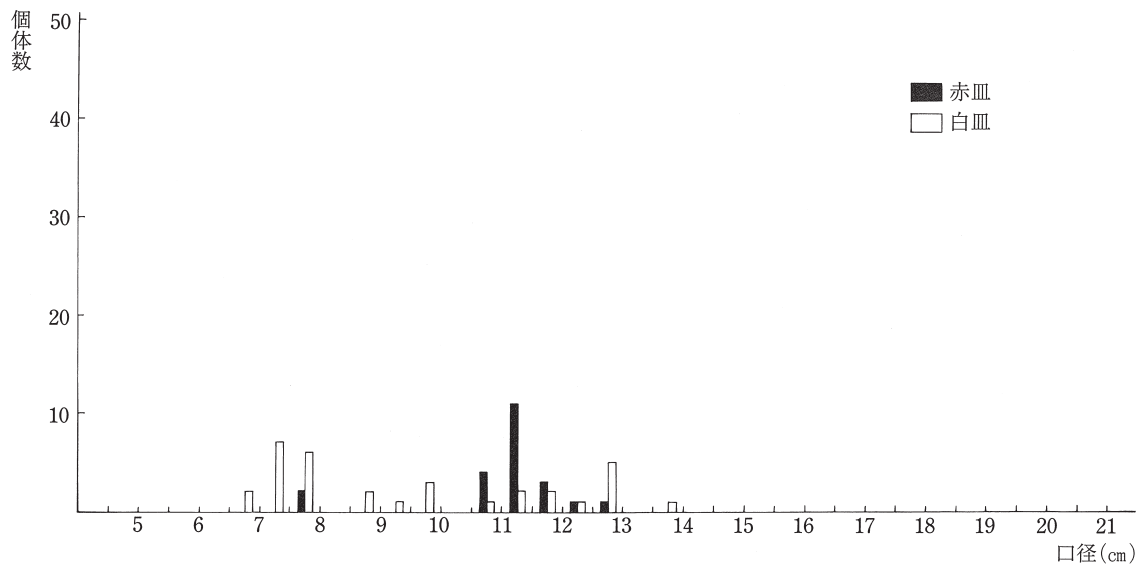
付表 109 1区土壙 550 土師器類口径分布表



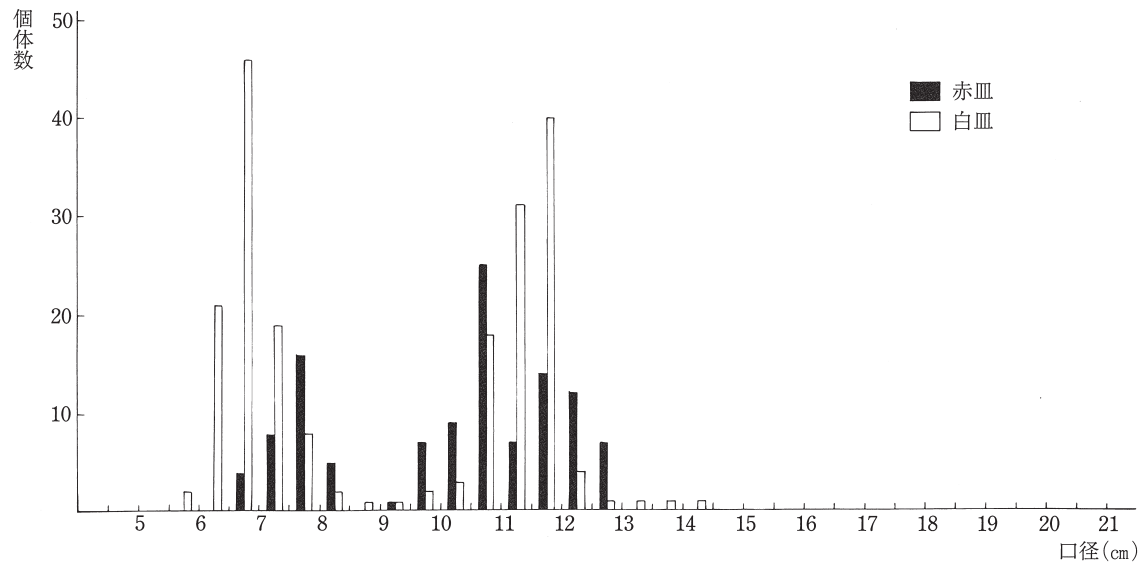
付表 110 2区土壙 940 土師器類口径分布表



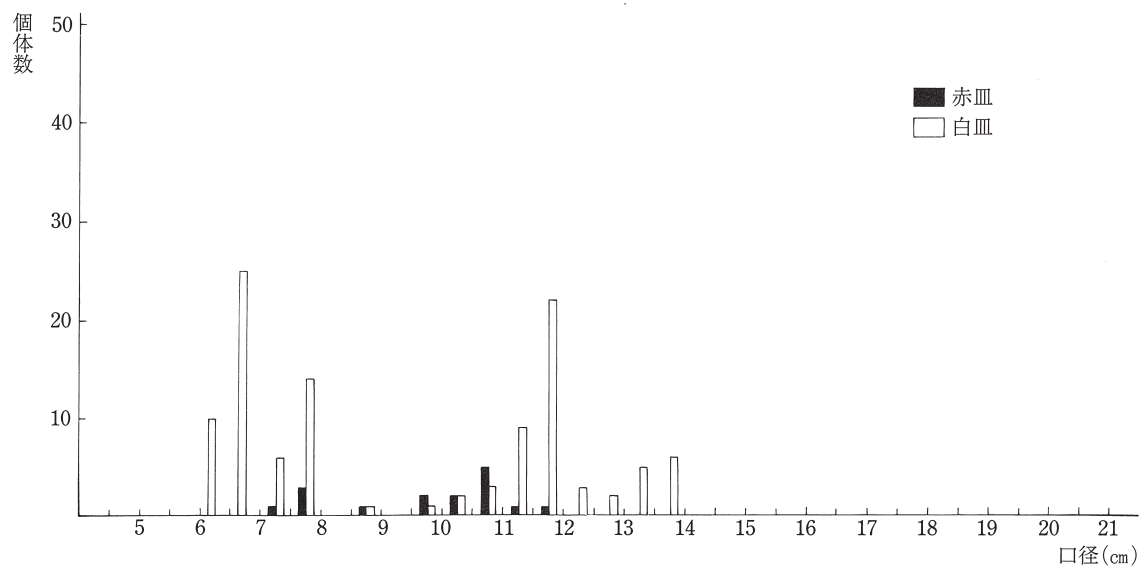
付表 111 2区土壙 2023 土師器類口径分布表



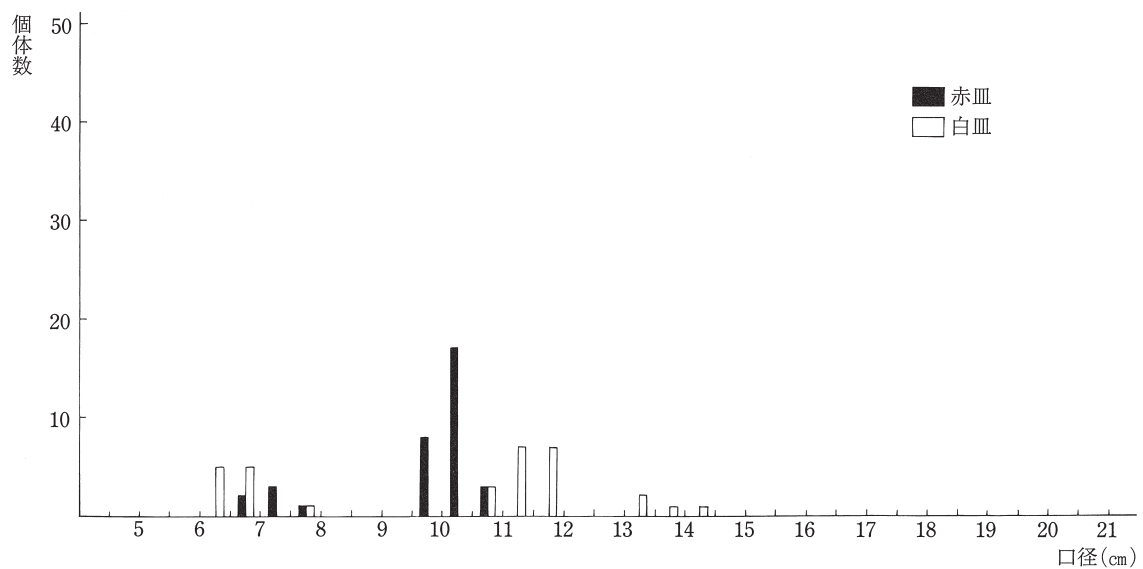
付表 112 2区土壙 1442 土師器類口径分布表



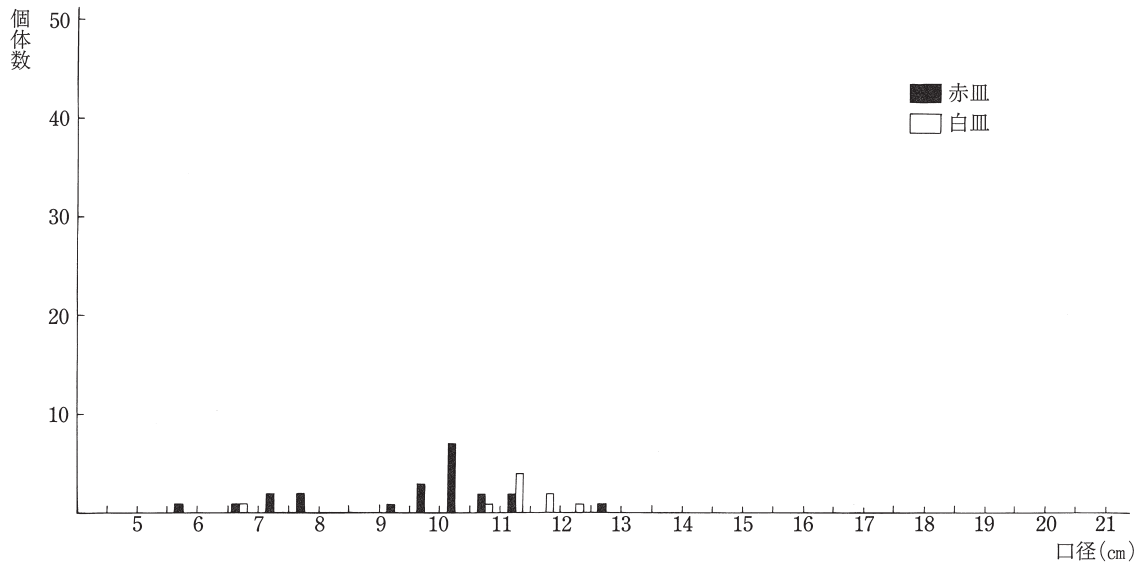
付表 113 2区土壙 1330 土師器類口径分布表



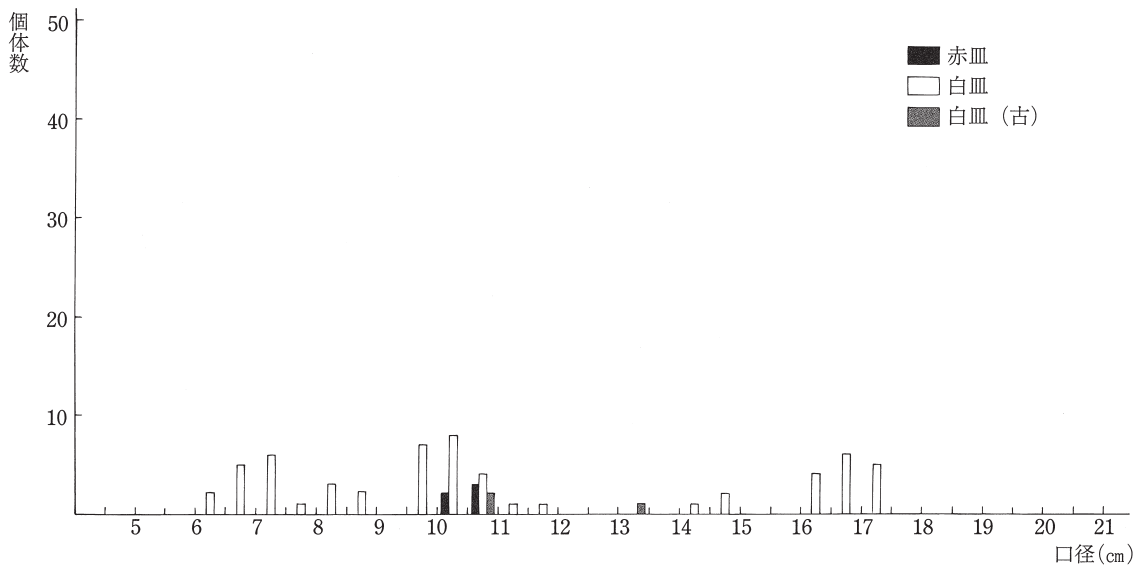
付表 114 2区土壙 1975 土師器類口径分布表



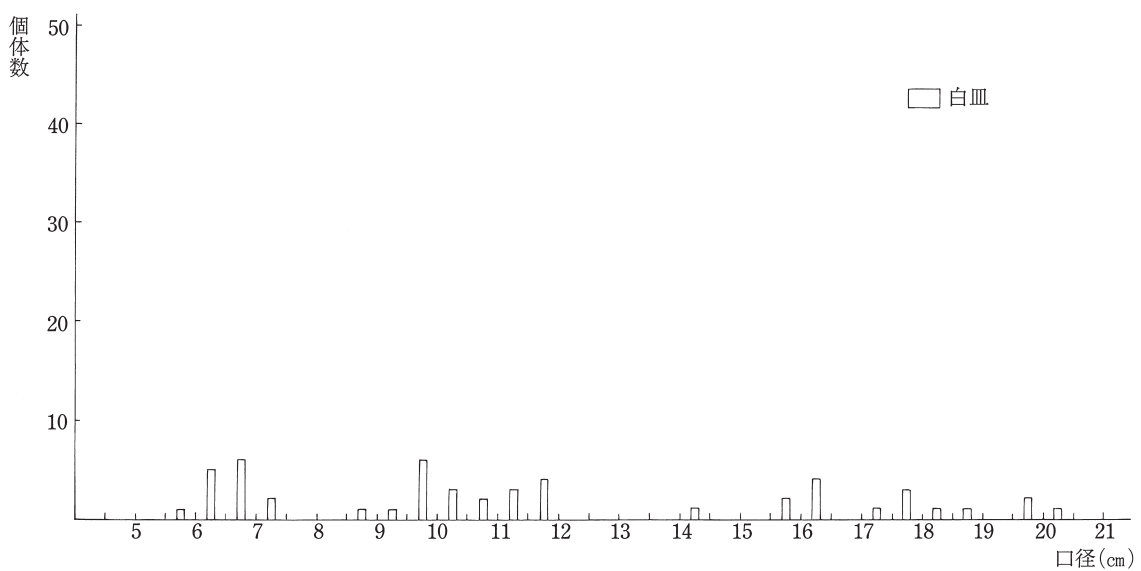
付表 115 2区土壙 1870 土師器類口径分布表



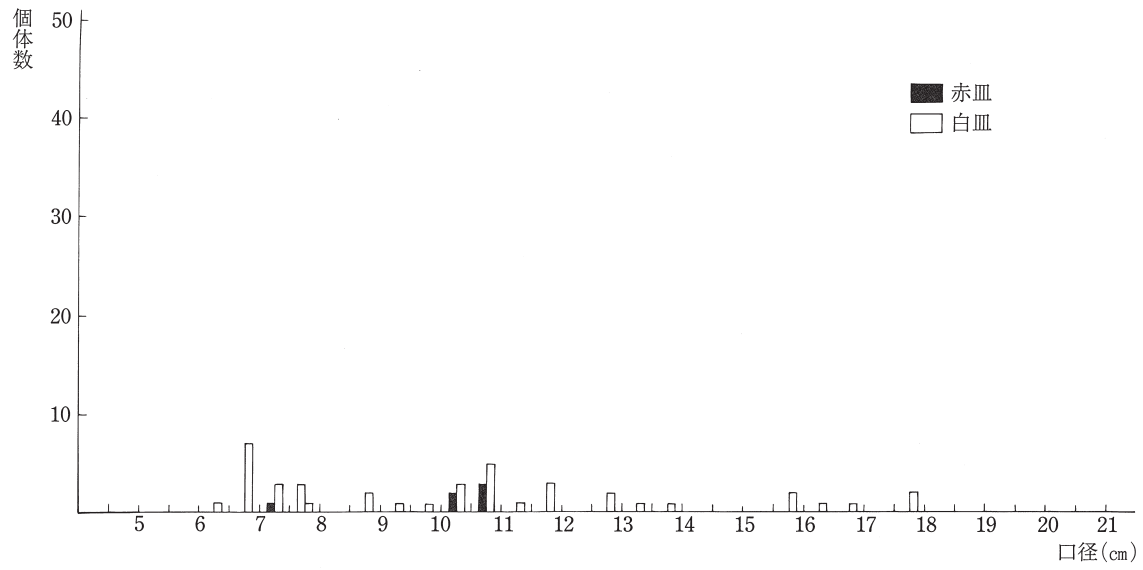
付表 116 2区土壙 1176 土師器類口径分布表



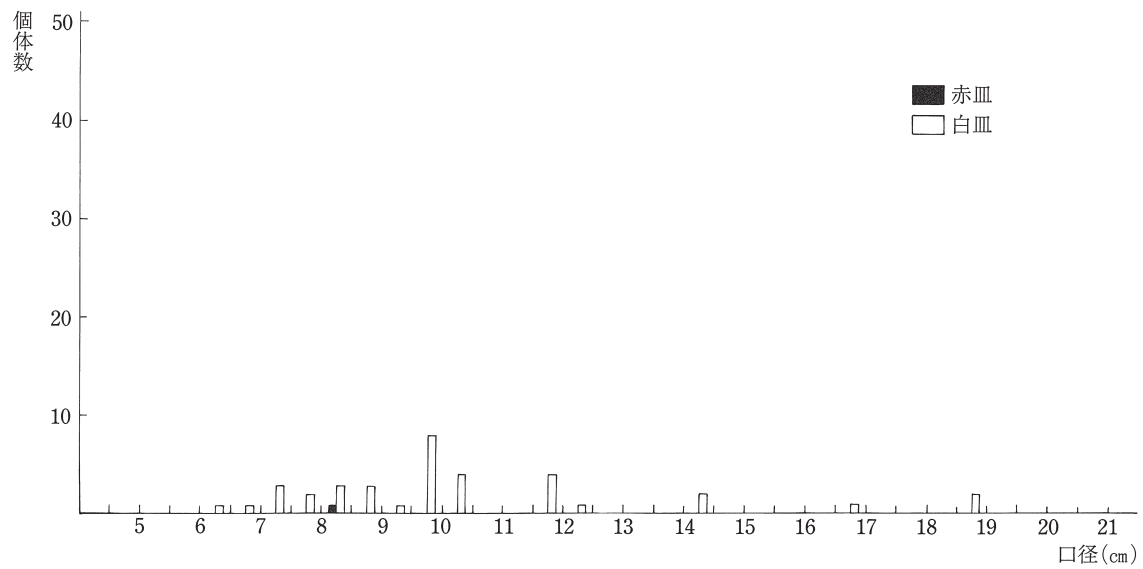
付表 117 2区土壙 1922 土師器類口径分布表



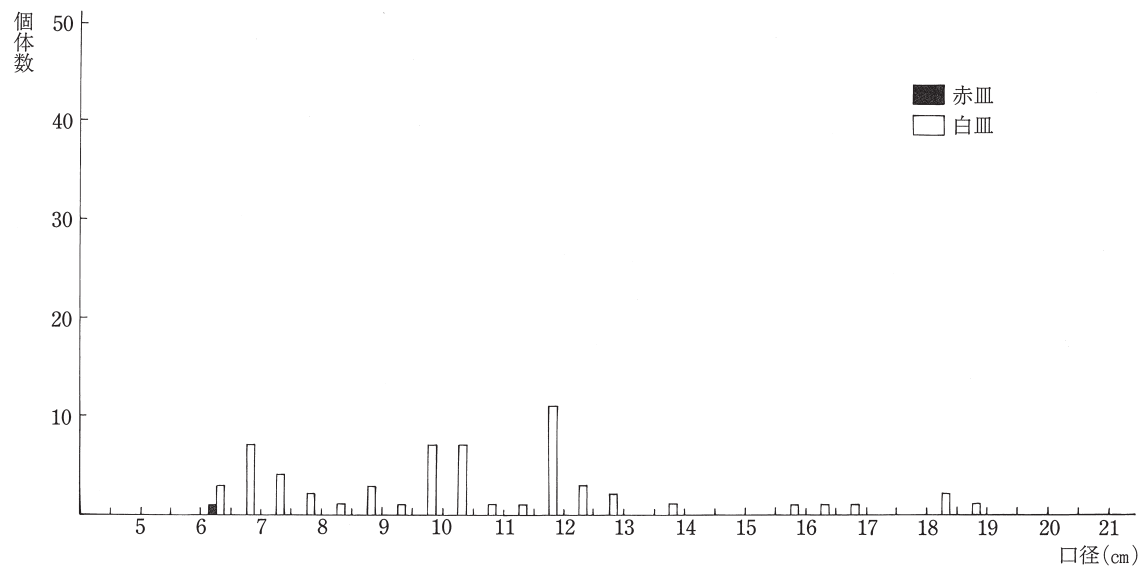
付表 118 2区土壙 1148 土師器類口径分布表



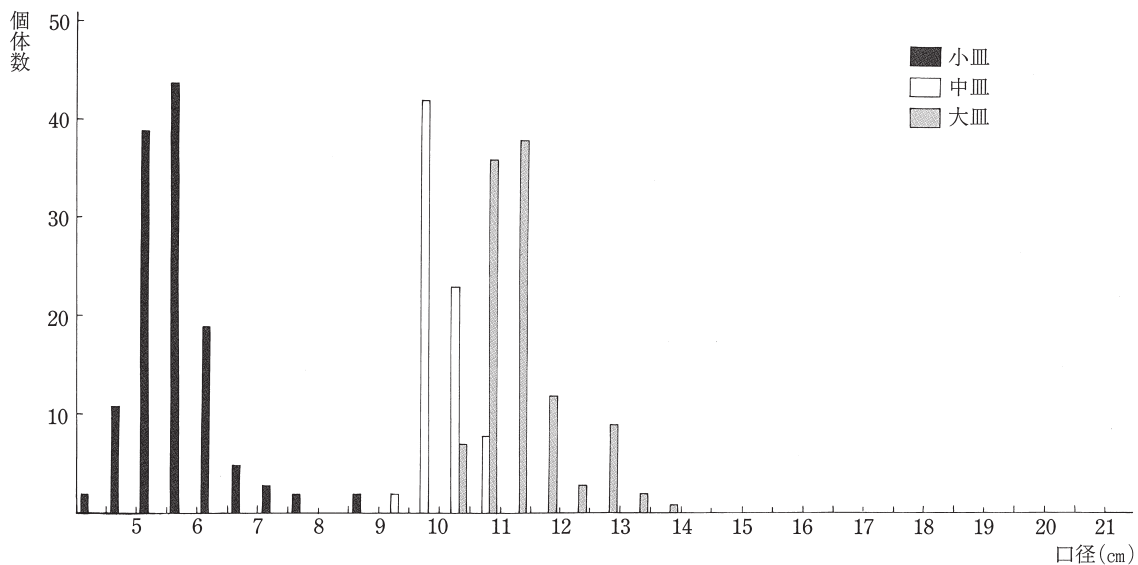
付表 119 2区土壙 136 土師器類口径分布表



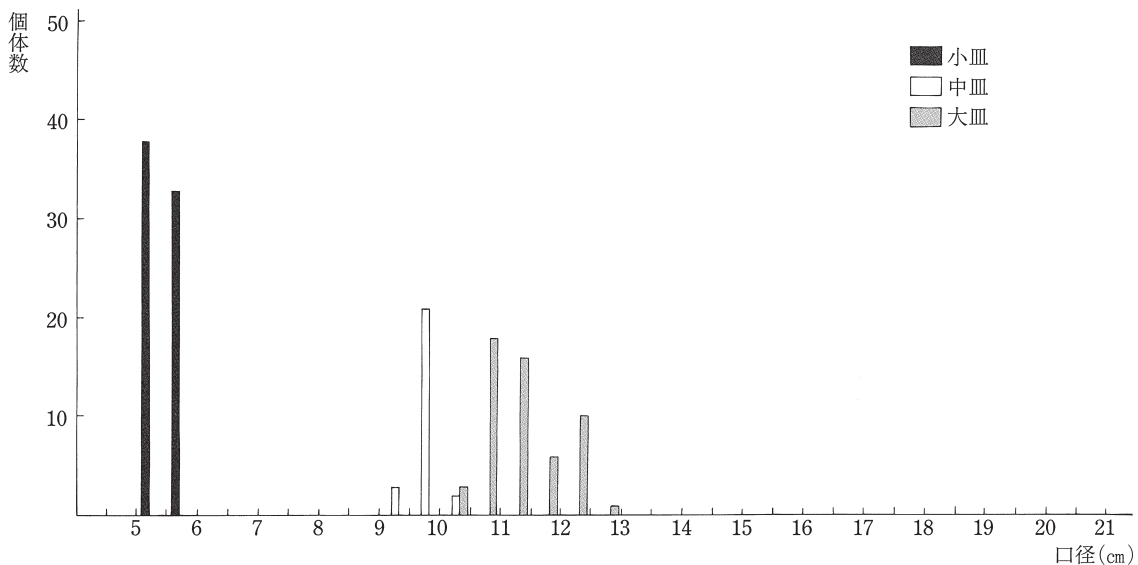
付表 120 2区土壙 1782 土師器類口径分布表



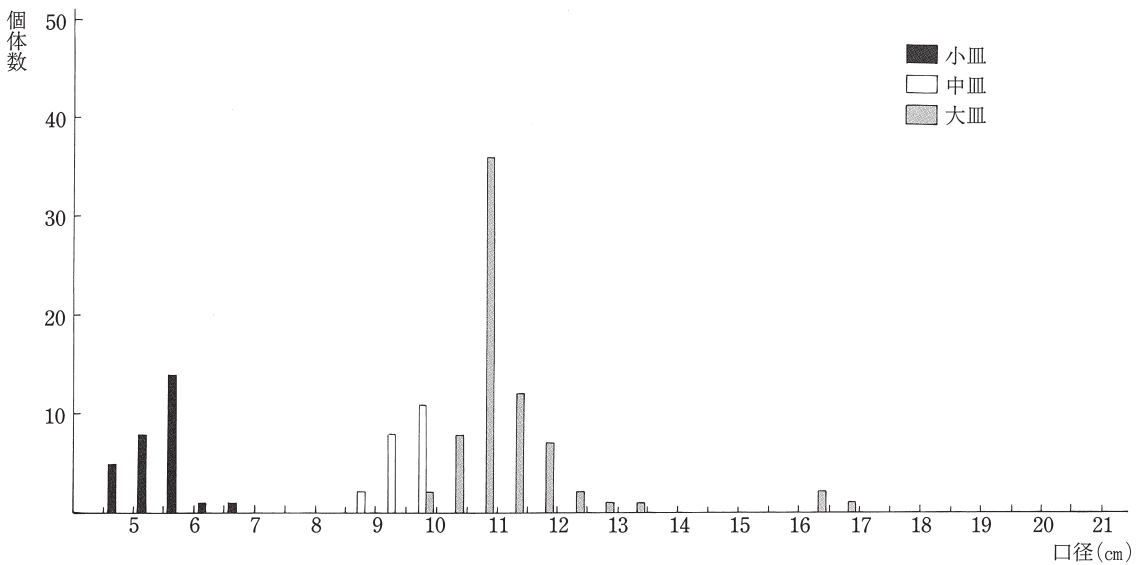
付表 121 1区土壌 353 土師器類口径分布表



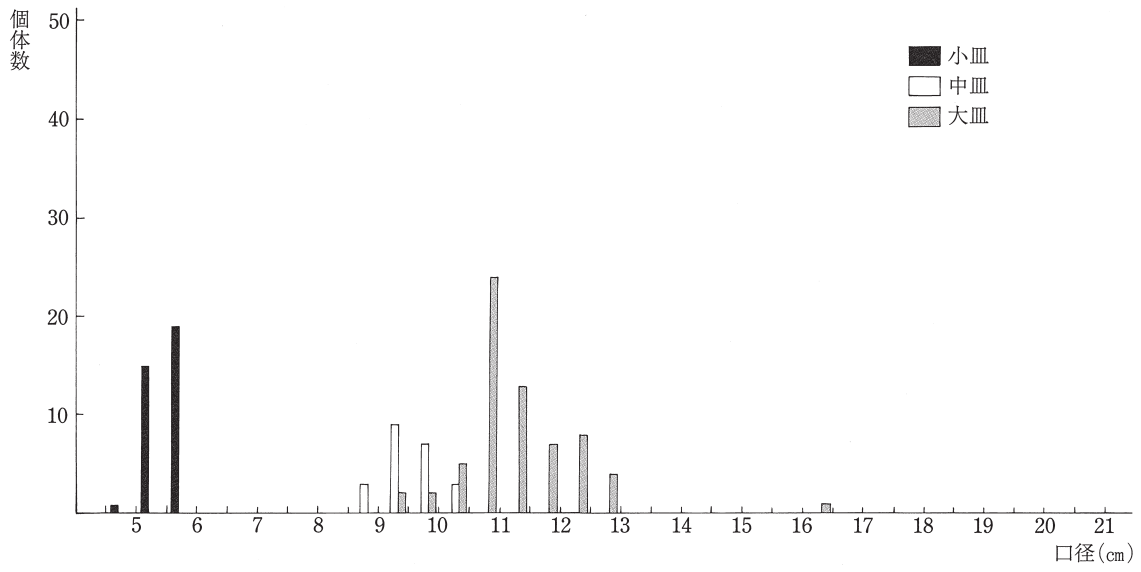
付表 122 1区土壌 768 土師器類口径分布表



付表 123 2区土壌 776 土師器類口径分布表



付表 124 2区土壌 813 土師器類口径分布表



付表 125 1区土壌 190 土師器類口径分布表

